
新選組～武士たち～

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新選組〜武士たち〜

【Nコード】

N47950

【作者名】

春桜

【あらすじ】

文久三年八月二十八日。その十日前におきた政変により壬生浪士組はその活躍をかわれ新選組と名を改める。その時、局長は芹沢鴨。副長、新見錦。近藤派の土方歳三たちは芹沢暗殺を計画する。新章開始。新時代を生きる沖田一家の物語。番外編を追加しました。偽りの政府を沖田はどう見ていたのか。沖田の初恋の物語。

1・ 誠を掲げよ（前書き）

黎明録はまだ発売されておりませんのでどのような内容かわかりませんがウィキペリアを見ながら話を進めていきます。

注意

グロイ（シリアスすぎになると思います暗い）

総司が主人公です。総司中心です。ほかの人が出番少ないかもしれません。

沖千をめざし、15禁なこともさせるつもりです。

更新が遅いかもれません。

歴史が変になってしまっても見逃してください。（ご意見はどうぞ感想を）

以下、肝に銘じて読んでいただければ幸いです。

1．誠を掲げよ

それは壬生浪士組が新選組になった頃の話である。

沖田総司はその日、夕刻時にも関わらず、壬生寺で子供たちと遊んでいた。子供たちの嬉しそうな声があたりに響く。沖田は嬉しそうに笑って子供たちを抱き上げる。そんなとき、一つの黒い影が現れた。

「総司！」

「あれ？土方さん？」

現れた男は土方歳三。のちに新選組副長にして鬼の副長として隊士たちに恐れられた男だ。

「迎えに来るなんてどうしたんです？」

「てめーが遅せえからだろ！ほら、てめーらも早く帰れ。」

土方が子供たちを睨んで言う子供たちは怯えはじめた。沖田は子供たちをなでて帰らせると土方を睨んだ。

「で。なんなんです。土方さんが迎えに来るなんて気味が悪いです。」

「うるせえ。大事な話がある。酒屋によるぞ。」

「・・・いいんですか？芹沢や新見にどやされるんじゃないですか？」

二人の人物の名に土方は目を細めた。

「心配ねえ。あいつらは出払ってる。」

沖田は土方の反応にまさかとおつばやいた。

「まさか・・・。消すんですか。」

土方は何も言わず頷いた。沖田は薄く笑ってそれきり何も言わなか

った。

日が暮れたころ。二人は京のある酒屋に入った。こじんまりした店の中に沖田のよく知る人物が座っていた。沖田はいつものように笑って挨拶した。

「こんばんは。左之さん。山南さん。」

「おう。総司！」

「こんばんは。沖田君。」

二人もいつものように沖田にあいさつした。いつもと違うのは土方だった。いつもより機嫌が悪い土方はいつもより目を細め、表情が硬い。

「こんなところじゃ筒抜けじゃないですか？」

「心配するな。今日は客が多い。俺たちの小声の声なんて聞こえねえし。屯所では芹沢派がごろごろいるしな。尾行も問題ない。」

土方は酒を飲みほし言った。

「近藤さんは同意してるんですか？」

「ああ。俺が言い出したことだが近藤さんも我慢の限界なんだろうな。・・・実行は俺たちがする。」

「わかりました・・・でもどうするんです？僕たちが殺ったことがバレたらまずいでしょう。局長法度なんてこつちが作つたのに破るのは問題ですよね。」

「ああ。あいつはよく島原に入り浸ってる。酒癖も悪い。そこをつく。」

沖田は土方を見る。

「女をつかって・・・酒に酔ったところを狙う。殺つたのは長州の連中だということにする。」

「なるほど。わかりました。で、いつですか？」

「わからねえが時が来たらだ。覚悟しとけ。」
三人はうなずいてそれから他と変わらぬように酒を楽しんだ。

もともと浪士組は試衛館派、近藤派と水戸藩、芹沢派とで分かれていた。大半は芹沢派で、現在の局長は芹沢。新見というのは副長にあたっている。浪士組から新選組となった今では近藤の力はないといえる。しかし、芹沢は酒乱で女癖も悪かったため数々の問題を起こしていた。

沖田は当然試衛館派、近藤派だったので今回の暗殺について覚悟を決めていた。

芹沢や新見のことは嫌いだった沖田は日頃殺してきた殺意を湧きたせる。

縁側で星を見ていた沖田は独りニヤリと笑った。

「やつと近藤さんが・・・。」

局長になれる。そうつぶやいた。

芹沢暗殺までもう一月もなかった。

2・序章（前書き）

また注意

薄桜鬼本編はできるだけカットしていくかもしれませんが。時期がばらばらになったりといいかげんなことになるかもです。

私は誤字が多いので申し訳ございませんがご理解いただくようお願いします。

2・序章

新見錦。^{にいみにしき}近藤、芹沢と共に浪士組の頭。芹沢が力をのばしてからは副長に降格する。水戸藩出身で芹沢と仲がいいのだろうが近藤、芹沢にも手がおえない人間だったそうだ。

それは九月に入ったころ。その時がきた。

「沖田。」

沖田は朝、目覚め、朝食を食べるべく広間に向かっていたところ、芹沢に声をかけられた。

「おはようございます。芹沢さん。」

沖田はいつもと変わらない笑みを浮かべあいさつした。

（酒臭い・・・。）

内心では鼻が気色悪くなったが。

「沖田、今夜、島原に行くのだがお前も来ないか。」

沖田はすぐに答えた。

「残念ですが遠慮します。土方さんに仕事を頼まれていますので。（誰が貴様などに行くか。猿野郎。）」

心の声は沖田の脳内に響く。芹沢は妙な顔もせずそうかと呟いた。

「土方も人使いが荒い。その上、付き合っても悪いと見える。あれだけの顔をもっていながら。何かあればわしに言え。沖田。」

「はい。ありがとうございます。」

沖田は軽く頭を下げると芹沢の横を通りすぎた。

「総司。」

「斎藤君。」

斎藤一。昔から試衛館道場に入りし、浪士組結成時に入隊。なじみの顔とあつて近藤は斎藤を歓迎した。

斎藤は難しい顔をしながら沖田に近づき耳打ちした。

「あの話は本当か。」

「あの話って？ああ。あれのこと。本当だよ。」

斎藤の顔を見ながら沖田は芹沢暗殺のことだと察する。

「土方さんは俺には頼まなかった。」

「そうなの。じゃ君は余計な首をつっこまないほうがいいよ。大人しくしてなよ。」

斎藤は目をそらし残念そうな顔をする。

「失敗したときは……。」

「大丈夫だつて。斎藤君。」

「総司……。」

「僕が絶対成功させる。」

沖田は自信に満ちた顔で言い切った。

九月十二日。夜。

芹沢と新見は通いつめている島原の吉田屋で妓女が肌をさらさなかつたことから芹沢が立腹し、吉田屋の店主に店をつぶすと脅し、お鹿という芸妓と店主に暴行を加えるという事件を起こした。

「芹沢が暴行だと?」

土方は酔いつぶれてかえってきた新見と芹沢を見て吐き捨てるように言った。

「みたいです。ねえ?左之さん。」

「ああ。土方さんが頼んで俺たちに吉田屋まで迎えに行かせただろ。そしたら吉田屋の店主と芸妓がボコボコだよ……。聞いたら芹沢にやられたとかで。」

原田は悔しそうに言った。原田は女性にはどんなことがあっても手をあげなかった。それに聞けば芹沢がすべて悪いのだ。許せるはずがない。

「六月の力士の件といい、角屋の件といい……。滅茶苦茶ですね。」

沖田はふつと笑みを漏らした。

「笑いごとじゃねえよ……。近藤さんどこ行くぞ。」

土方は足早に去っていく。原田と沖田は目を厳しくして土方の後をついて行った。

近藤の部屋にはすでに山南が同席し暗い表情をして座っていた。

「遅かったですね。皆さん。」

山南は微笑んで言った。

「山南さん……。あんたもう知っていたのか。」

土方が座りながら言った。

「ええ。だいたい見当はつきますからね。あの二人の酒癖の悪さは以上ですし。」

「トシ。芹沢が吉田屋に暴行を加えたのは本当なんだな。」

近藤が土方に聞いた。

「ああ。」

横の沖田と原田に目を向けながら土方は頷く。二人もそれに頷いた。
「考えたんだが新見を消すにはいいと思うんだが。」

「どういことですか？」

沖田は芹沢と一緒に新見を殺すと思っていたので近藤に聞いた。

「吉田屋の看板芸妓を傷つけたとあればあちらも黙ってしまい。この件が公になればせっかくの新選組も浪士組に戻るだろう。となれば吉田屋に謝罪し、それなりの落とし前はつけなければならぬだろう。」

「なるほど新見の切腹ですか。それはいいや。」

あははと沖田は笑いだした。

「俺もいい案だと思うぜ。芹沢が死なねえのは気に入らねえがな。」

原田は怒りをこめて言った。

「わかった。明日、新見に問いたです。もし芹沢がこちらの要求に反対しても俺が言葉で丸め込んでやる。いいな。」

土方の声にその場の全員が頷いた。

翌日。土方たちは昨晚の暴行の件を新見に問いただし、芹沢が反対するも土方の脅し文句で芹沢は頷く。

そして九月十三日。島原の吉田屋にて新見錦は切腹をよぎなくされたのであった。

2・序章（後書き）

切腹の説にはいろいろあるので確かなものかはわかりませんw

3・成功

「なあんだ。幕府の方々がら直々に密令受けるなんて。これじゃ暗殺じゃないじゃないですか。」

「何大声で言っただこの馬鹿！密令の意味もわかんねえのか！てめーは！」

沖田のとぼけた言動に土方は鬼の形相になる。というのも今日、九月十四日。会津藩の者に土方と近藤が呼ばれ、芹沢の暴行事件により芹沢の逮捕令状が出されたのだ。そこで二人の命じられたのは芹沢の処罰。密令とは公にせず始末することだ。

「で。トシ。いつ決行する？早いほうがいいと思うのだが……。」
近藤は顎に指をやった。

「俺もそう思うよ。あいつはな。危機感がねえんだ。最近は酒を毎日いれてるからな。新見が切腹したことに何も感じてねえみてえだよ。仲間だつてえのによ……。だからいつでもいい。」

「うむ……。」

近藤は難しい顔をする。

「俺が考えてんのは宴会を開こうと思う。俺も同席する。ほろ酔い気分のあいつを屯所に持ち帰って……。斬る。」

その場にいた山南、原田は頷いた。

「それが一番いいと思うぜ。あいつなら簡単に引つかかるだろうよ。」

「そうですね……。明後日でいいんじゃないですか。明日は……。」

「新八さんには話さないんですか。」

沖田の冷めた声にびくりと皆が反応した。

土方は少し息を吐いて言った。

「あいつは同門ってことでわりと芹沢と仲が良かったからな……明日話すか。」

「まあこれから消すのに反対されても迷惑ですけどね。」

「あいつはそんなことしねえよ。わかってるだろうさ。」

土方の厳しい声にこの場はお開きになった。

翌日。実行隊と永倉新八は近藤の部屋に集まった。

「何だよ。土方さん。こんな改まってよ。」

永倉は親友の重い表情や土方の機嫌が悪い表情を見ながら首をかしげた。土方は永倉を見つめ、言った。

「実はな。昨日、会津藩から芹沢の処罰を命じられた。」

「……マジか？」

永倉は少し驚いた様子で横にいる原田を見た。原田はゆっくりとうなずく。

「そうか……いやわかってたよ。いずれこうなるってことはな。」

「永倉君……。」

「俺は近藤さんについていくからよ。だから俺のことは心配しねえでくれ。」

永倉は少しだけ悲しそうだったがふっと笑って部屋から出て行った。

「新八さんの考えてること……僕にはわかりません。」

沖田は上を見ながら呟いた。

その場の誰も沖田の言葉に反応できなかった。確かに芹沢のことは皆よく思っていない。けれど新選組と名乗ることができることになったのも芹沢のおかげだった。あの政変で芹沢が笑って進み出なければ新選組の手柄となることはなかった。永倉にしてみれば同志を同志が斬ることになるのだ。それほど悲しいことはない。

そして九月十六日。島原の角屋で妓女総揚げの宴会が開かれた。芹沢をはじめ、土方と、平間、平山という隊士が同席し、芹沢は三人と共に早めに八木邸に戻ると角屋の妓女お梅と平間の馴染みの男と共に宴会を再開する。

やがて夜中になり酒に酔った芹沢が眠ると土方はふすまから様子をつかがった。

「どうですか？眠ってます？」

後ろから沖田と原田、山南が刀を持ち構えていた。

「ああ。あれだけ酒を飲めばな。いいか。部屋にいるものは残らず殺せ。一人も逃すなよ。」

「ひ、土方さん・・・じゃあお梅も・・・。」

「ああ。あの女は芹沢の手中だ。媚を売るいやらしい女だった・・・。
。原田。わかつてるな。」

女であるお梅を斬ることにためらう原田に土方はしっかりと言う。
部屋では平間とお梅、芹沢が眠っていた。

「平山はどうします？別室ですが・・・。」

山南が土方に聞いた。

「はむかうようなら斬れ。とりあえず部屋にいる奴は片づけることだけ考える。いいな。」

三人は頷く。やがて土方はふすまを開けた。

「いくぞ。」

三人は勢いよく部屋に襲撃した。沖田は起き上がった平間が悲鳴を上げる前に平間の首と胴体を切断した。血が溢れ悲鳴は届かなかった。

「きゃーーーーー！どうかおた・・・。」

お梅は大声で叫んだ。沖田は舌打ちしお梅の元にかけたが土方が首を突き刺したため息絶えた。

芹沢は刀をとろうとしたがかなわず、隣の八木夫婦の眠る部屋に入り込んだが原田と山南によって裸のまま殺された。

八木夫婦は悲鳴をあげたが原田と山南は何も言わず土方の元へかけた。

「殺ったぜ・・・土方さん。」

「ああ。総司。」

「だめですね。逃げられちゃいました。追いかけますか？」

「いや。いい。町で斬っても問題になる。明日、盛大に葬式しねえとな・・・。」

土方は部屋に転がる死体を見ながらため息をついたという。

この事件は長州藩がやったということであく収められた。

九月二十日。平間と芹沢の葬式は神聖に盛大に執り行われた。
芹沢の墓は壬生寺にある……。

「ありがとうございました。芹沢さん。」

沖田は悪魔のような微笑みをして芹沢の墓参りをし、二度と同じことをすることはなかったという。

3・成功（後書き）

暗殺の日は16日説と18日説があるそうです・・・。
次回くらいに千鶴ちゃんが・・・。

4・恐怖（前書き）

ごめんなさい！千鶴ちゃんはまだ・・・。

4・恐怖

十一月末。沖田総司はその日、夜の巡察から帰宅し、すぐに床につき、眠りにおちた。その頃新選組は芹沢が死んだことによって落ち着いていた。理由は近藤と土方が刃向う者を粛清したからだ。沖田はそのやり方に同意していた。土方の性格や近藤のためになると確信していたからだ。

沖田は目をパチリと開いた。部屋には誰もいずほのかに明かりがともっていた。沖田はふっと息をはくと襖をあけ、外を見た。外はまだ少し暗い。いつもより起床時間が早かった。

（昔は・・・こんな早く起きるなんてことなかったな。）

沖田は昔を思い出し苦笑した。試衛館に居た頃は雑用係をしていてこんな夜中に近い時間に起きることはまずない、理由は毎日働いて疲れ眠れない訳がないからだ。

沖田は今日、こんなに早く起きた理由をわかっていた。

「はぁ・・・。」

沖田はため息をついて外をでた。明りを持っていかなかったが夜の巡察や暗殺が多かった沖田は非常に暗闇の中の目が鋭かった。人の気配にも敏感な沖田は一様刀を持って行った。

酒をもち部屋に戻るとき意外な人物に声をかけられた。

「総司・・・？」

薄い明りで彼の顔がよく見えない。だが声で誰かわかった。

「平助・・・。」

藤堂平助。新選組、最年少幹部。その人のよさか左之助や新八に弟のようにかわいがられている彼。沖田は笑顔で酒瓶をあげた。

「一緒に飲む？」

平助は近づいて沖田の顔を見て妙な顔をした。

「どうしたんだ？総司？こんな早く起きるなんて。いつも遅刻したりして土方さんに怒られてんのに。」

「・・・うるさいなあ。別にいいでしょ。で。飲むの。飲まないの？」

「別に付き合うけど・・・。」

沖田と平助は沖田の部屋に向かった。

沖田は盃をあげぐくりと飲んだ。

「朝から飲みすぎじゃね？」

平助は少し飲んでいった。

「今日は僕、非番だからいいんだよ。早く眠りたいし・・・。」

「は？寝てたんだろ？」

「・・・。」

無言になった沖田を平助は不思議そうな目で見た。

「どうしたんだ？総司。変だぜ？」

「・・・平助くんはさ。」

「ん？」

「人を斬ったときどう思った？」

「・・・！そりゃ・・・。」

「僕はね。怖いとも思わなかった。これが正しくて僕が生きる上でたどらなきゃいけないんだって思った。今も変わらない。ただ・・・。」

「ただ？」

「仲間に斬られることは恐ろしいよ。仲間を斬ることに・・・多分僕はできるはず。けれど斬られるのは嫌なんだ。」

「・・・総司・・・。」

「芹沢を襲撃してから・・・僕は誰かに殺されるのではと思うようになったよ。遅いことだと思うけど・・・。たまらなく怖くなる。斬ることもやめるつもりもない。だけどこの不安は消えない。」

「・・・俺も総司とおんなじだよ。みんなそうだと思う。けど俺たちは総司を裏切ったりしねえよ。俺たちは仲間だろ？」

平助の純粹な笑顔に沖田は笑顔になった。

「うん・・・。ありがとう。」

そう言うとき沖田は天井に張り上げた声で声をかける。

「出ておいで！山崎く〜ん。」

すると天井から山崎烝が現れて部屋に着地する。山崎はこの間入隊した監察だった。沖田は彼とは初めて会った時から相對しないことを知っていた。

「ほんと。君って趣味悪いよね。信じらんない。」

「沖田さんが一人でフラフラ出ていくからです。俺が見張ってないと誰が見張るんですか。」

「見張りもいらないし、僕がフラフラ出て行っただって君には迷惑からないだろ？」

「あなたの意見は聞きません。そんな刀を持って出て行かれては安心して眠れません。」

「天井で寝ているくせに何が眠れないだ。」

沖田と山崎は永遠に言い合いをしていて平助は何がなんなのかわか

らずただ口を開けるだけだった。

「だいたい君、土方さんに上を通る許可貰っているのか知らないけどねいつもいつもちょっと動きまわるのやめてくれない？僕が眠れないだろ。」

「そんなのわかってるのは沖田さんだけです。無視してくれればいいんです。」

「……君……ああいえばこういうよね。新米のくせに。」

「こういう性格なもので。局長や副長には褒めてもらっていますから問題はないかと。」

「それも気に入らないんだよね。土方さんはひねくれてるからわかるけど……なんで近藤さんが……こんなクソ真面目な監察を気に入るのかわからないね。」

「あなただけには副長もひねくれていると言われたくないでしょう。それにクソとはなんですか。クソとは。」

「だああ。もう疲れるなあ。もう寝るから出て行って。」

「負けですね。沖田さん。」

「本当に山崎くん。斬ってあげるよ？（怒）」

「結構です。」

山崎はさつさと去って行った。

「藤堂組長もお部屋にお戻りください。」

「え？え……ああ。うん。わかった……。」

山崎と沖田がこんなに仲が悪いとは知らなかった平助はただ口を開けるしかなかった。

5・ 出会い（前書き）

千鶴ちゃん登場。けど沖田と絡んでばっか。もう少ししたらハードなこともやれるんだろうけど……。すいません。本編はカットします。

5・出会い

その日、僕は君と出会った。

文久三年、十二月某日。その日、ある隊士が屯所から抜け出した。その隊士は血に狂った羅刹というものだった。

「ちつ。あいつら・・・いねえ。追いかけるぞ。総司、斎藤。」

土方は不機嫌に言った。沖田は微笑んで羽織を着ながら言った。

「土方さんに言われなくても行きますよ。今日は僕らが夜の巡察だし。ねえ？斎藤君。」

「・・・俺は副長の命令に従う。総司、あまりはしゃぐな。行きましょう。土方さん。」

斎藤はいつもの調子で言った。

そしてその夜。彼らは不思議な出会いをした。過酷な運命を背負っている少女。そして沖田総司を変えた少女と。

彼女を屯所に運んでおろすと彼女は苦しそうには眠っていなかった。すやすやという寝息が沖田の耳に聞こえる。

「一樣縛っておけ。抜け出されたら困るからな。」

土方はそう言つて部屋から去つて行つた。残された沖田は彼女の顔をのぞきこんだ。

「・・・・・・・・。」

眠つた顔を見るとやはり女の子だった。何故男装をしているのか。

「気になるなあ。」

沖田はニコリと微笑む。

「沖田君。」

「あ。源さん。」

井上源三郎。試衛館の頃からの付き合いの長い人のいい人物だ。

「トシさんから報告をつけた。その子があれを見たんだね。」

「ええ。土方さんは心配性だから。別に縛ることないのに。」

「でも抜け出されて逃げられたりしたら大変だ。」

井上は少し笑いながら少女を縛っていく。

「大丈夫ですよ。僕が逃すはずありません。」

沖田の笑顔をやや苦笑しながら井上は見たのだった。

そして翌日。彼女は雪村千鶴と言った。なんでもあの羅刹の薬を作った雪村綱道の娘だという。これは運命的なのだろうか。彼女の縛られているものは……。僕が思っているよりずっと悲しいものだろう。ともあれ彼女はしばらく屯所におくことになった。綱道さんは行方不明になっていたからだ。彼女は男装しなければならなくて大変な暮らしが始まった。その時の僕は彼女のことなど……。彼女の気持ちなど何も考えなかった。ただ……。楽しんだだけだった。

君との時間を。

「千鶴ちゃん。」

「お、沖田さん！」

千鶴は部屋の中でじっとしていた。彼女がきて十日目の朝。彼女の朝飯を彼女の部屋に持っていた。

「おはよう。」

「お、おはようございます！」

何故か元気な彼女に沖田は微笑んだ。そしてからかう。

「何？その元気。まさか何か変なこと思いついたとか？あははは。駄目だよ。僕に隠れて・・・。」

「何も企んでません！やめてください！」

彼女は涙目になって訴える。

「冗談だよ。冗談。でも妙なことしたら殺すから。」

「・・・・・・。」

彼女は何も言えなくなるが沖田は気にせず部屋に入り込み座り込んだ。

「はい。食べてね。」

「あ、ありがとうございます・・・でも・・・。」

「ああ。今日はみんな出払ってね、幹部は集まらないんだ。みんな仕事で。」

「そ、そうなんですか・・・。」

彼女は少し残念そうな顔をする。

「大丈夫だよ。千鶴ちゃん。僕が君の食べ終わるまで見ていてあげるから。」

「え！？」

「当たり前じゃない。君が全部食べないと僕が怒られるのさ。」

彼女は信じられないような顔をし口をパクパクさせている。

「早く食べないと冷めちゃうよ？」

「は、はい！い、いただきます！！」

彼女はテンパったようで一気にご飯を食べてむせだした。

「あははは！！」

沖田は涙目になりながら笑った。

「そ、そんなに・・・笑うことないじゃないですか！」

「ごめんごめん。あんまり君が可愛くて。」

「え？」

「でも君はここでは男の子。頑張って男らしくしないとね。」

沖田は千鶴の頭をなでてやる。千鶴は少し笑った。

「全部食べれたねー。えらいえらい。」

沖田は小さな女の子をあやすように言う。

「お、沖田さんがいたから食べにくかったです・・・。」

「えー？そんなあ。ひどいなあ。」

沖田は悲しそうなそぶりをする。

「ご、ごめんなさい・・・。」

千鶴は頭を下げて謝った。沖田は笑顔でいいよと言う。

「千鶴ちゃんは本当に礼儀正しいな。この屯所に千鶴ちゃんほどいい子はいないよ。」

「そんな・・・。」

「じゃ。また後で。」

沖田は襖を閉めた。そう、彼女はまた誰とも話さない日々を送る。孤独の日々を。

それは四月の中旬のこと。

「はあ・・・。」

千鶴は何もできない屯所で空虚な日々を送っていた。食事は幹部の

人たちと食べていたがそれ以外は部屋で過ごした。廁に行くにもほかの隊士の目があったりでストレスが溜まりっぱなしだ。幹部も仕事で忙しく滅多に部屋に訪れないが彼は意外な日に来たりする。平助や永倉、原田などはよく話してくれたり励ましてくれたりしてくれた。斎藤はあまり話さなかったが真面目な人などだとわかっていたから千鶴はよく思っていた。土方は副長ということで大変なのだろうか食事の席にもあまり見えない。

そして彼だけは彼は楽しそうに千鶴と話す。

「千鶴ちゃん。」

「沖田さん。どうしたんですか？」

千鶴の顔は明るくなる。

「これ。あげる。」

「これは……。」

「折り紙。子供たちと一緒に折っていたんだけど余っちゃって。だから暇つぶしに。」

十枚くらいの折り紙を千鶴は大切そうに胸にあてた。

「沖田さん……ありがとうございます。」

千鶴は笑顔で礼を言った。

「どういたしまして。そうだ。千鶴ちゃん。せっかくだから一緒に折ろうよ。夕飯まで。」

「え？いいんですか？」

「うん。僕の昼の巡察は終わったしね。ほかの仕事は優秀な隊士がやってくれるだろうし。稽古は新八さんと斎藤君が見てくれるしね。」

千鶴は笑顔になって折り紙を沖田に渡した。

「へへ。」

「嬉しそうだね。千鶴ちゃん。」

「うれしいです。ありがとうございます。沖田さん！」
沖田は一瞬真顔になりふっと笑みをもらした。

6・発覚（前書き）

沖田さん！沖田さん。ばっか。千鶴ちゃん視点書きたいよ。
無理ですが。

黎明録ほしい！ほしい！

6・発覚

「おい。総司〜！」

永倉新八は縁側で退屈している沖田に叫んだ。

「何ですか。新八さん。朝から・・・。」

沖田は少し不機嫌に答える。

「いやよ。今日、左之と平助と島原に行くんだがお前も来ないか？」

「・・・どうして僕があなたたちと行かなくちゃならないんです？」

「なんでつてよ。お前、正月に飲みに行ったつきり行ってねえだろ？お前は女に興味ねえのか？」

「別に興味を持つ必要がないだけです。島原の花魁に恋してる新八さんと違うんですよ。」

「な、なんだとー！てめーそんなだと男色家だとか噂たっちまうぞ！」

「笑えないこと言わないでください。僕は女の子のほうが好きです。さつ。さつさに行かないと土方さんに斬られますよ。」

「そ、そうだな！ほんとにいいんだな？」

「いいですつて。いつてらっしやい。」

沖田は手を振り、立ち上がったところから去って行った。

五月に入ったが今年は以上に暑かった。そのせいで腹を壊している隊士が多くいた。

（ホントに、よくあんな元気があるね・・・。）

沖田は関心するような呆れるような溜息をだした。

「斎藤君。」

「何だ。」

部屋にいた斎藤に沖田は声をかけた。彼は刀を手入れしていた。

「あのだ。千鶴ちゃんの外出許可出るかな？」

「・・・あんたがそんなことを気にするとはな。」

斎藤は内心驚いていた。そんなに彼女に興味があつたのだろうか。

「別に暇なんだよ。新八さんたちみたいに島原に行く気にもなれないし。彼女のほうが面白い。」

「・・・。」

斎藤は押し黙った。

「土方さんはホントやることが遅いんだから。めっちゃくちゃ気にしているくせにね。」

「副長はお忙しい方だ。長州の動きが目立つ今、それに隊士も弱対している今、彼女を簡単に外に出せん。」

「そんなこと言つて、斎藤君が土方さんに進言したくせに。」

「・・・暇だったただけだ。」

（素直じゃないなあ。）

沖田はやや苦笑し部屋を出た。

「沖田さん！」

目を輝かせる千鶴は沖田を見るとかけてきた。

「千鶴ちゃん・・・ここ、廊下だから。騒がないで。」

「す、すみません！あのこれ・・・。」

「ん？金平糖？」

「はい。近藤さんにいただいたんです。そうしたら沖田さんと一緒に食べなさいって。」

「近藤さんが、君に？」

沖田は心底驚いた。近藤が千鶴にそんなことを言うとは・・・。沖田は顎を掴み、深く考え込んだ。

「沖田さん？」

「ん？いや。なんでもない。さ、食べようか。」

（僕の体調を気にしてくれたのか・・・。）

近藤はいつもそうだ。沖田が暇そうにしているときや、落ち込んでいるとき、体調が悪いとき、そんなときに優しく手を差し伸べてくれる。今度は千鶴をつかって。

「ん！おいしい！」

二人は縁側でお茶を飲みながら食べることにした。

千鶴は金平糖を口に運んだ瞬間に言った。

「こんなおいしい金平糖はじめてです。」

「そう。よかったね。」

「はい！」

千鶴はルンルンしながら食べていた。そんな彼女を沖田はずっと見つめていた。そんな彼の視線が気になって沖田に目を向ける。

「どうしたんですか・・・？沖田さん。」

「千鶴ちゃんを見ていたら面白くてね。ついつい。」

「え？」

「君は面白い子だと思う。出会って数か月。なのに目が離せないん

だ。」

千鶴は目を点にする。

「だけど、近藤さんの邪魔になったら殺す。新選組の敵になったら殺す。それは変わらないんだ。」

「……はい。わたしもそれはわかってます。けど沖田さんがわたしに気さくに話しかけてくださってわたしはとても助かってます。ありがとうございます。」

千鶴は頭を下げる。沖田は優しく微笑む。

「早く、お父さんを探しに行きたいね。」

「はい……。」

そして……。六月五日。千鶴が枡屋の古高俊太郎と遭遇し、沖田たちが捕縛した。

その夜、長州の会合に新選組は御用改めることになった。

この事件は池田屋事件と呼ばれ、新選組を有名にし、さらにこの事件がなかったら明治維新はなかったと言われている……。――。

この事件の夜に、沖田総司は血を吐いた。これが彼の労咳の発症だ

と言われている。

6・発覚（後書き）

沖田さんの発症にはいろいろな説があります。

7・恋と愛（前書き）

史実では沖田さんは一人の妓女をかつてます。噂では寺のお姉ちゃんと呼び合ってたとか……。それはわからないですけど事実が知りたいですね。

7・恋と愛

七月の上旬。千鶴は夕方、巡察から帰ってきた。あの池田屋で千鶴の働きが土方に認められたのだ。沖田と平助は負傷。永倉も左手を怪我し、二人の隊士が重傷。一人は亡くなった。

「はい。お茶。どうぞ。」

千鶴は夕飯の後に幹部にお茶を渡した。

「ああ。ありがとな。千鶴。」

「いえ。お口にあうかわからないですけど・・・。」

原田に言われた千鶴は微笑んでいた。

「ん。おいしいよ！冷たいし。」

平助はごくりと飲み干した。

「平助！お前、飲みすぎて腹壊すなよ。仮にも新選組幹部なんだからな。」

永倉は意地悪に笑った。

「わかってるよ！ていうか毎日酒ばっか飲んでる新八つつあんに言われたくないね。」

「なんだとー！」

新選組の馬鹿トリオは置いておく。千鶴は斎藤に目をむける。

「どうですか？斎藤さん。」

斎藤はお茶をゆっくりと飲んでから静かに言った。

「この場にいる誰よりもあんたはお茶がいれるのがうまい。」

「ありがとうございます。」

斎藤の言葉に千鶴はうれしくなった。

「沖田さん？」

いつもなら気さくに話しかけてくれる沖田が静かだ。千鶴は沖田に声をかける。

「お口にあいませんでしたか？」

「……ん？ああ、いやそんなことないよ。うん。おいしい。」

「そう……ですか。」

少し元気がない沖田に千鶴は心配する。

「千鶴ちゃん。僕、いっぱい食べて眠くなっちゃったから先に失礼するね。」

「は、はい。おやすみなさい！」

千鶴は沖田の背中をいつまでも見送っていた。

布団についても千鶴はあまり寝つけなかった。沖田の元氣のない顔が浮かぶ。

（池田屋のことを……気にしているのかな。）

あの男性に逃げられたことを沖田は悔しがっていた。あの男に沖田はおされていた。新選組最強と言われる剣士だ。これはあの男の強さを示している……。

（沖田さん……体大丈夫かな？）

あの時血を吐いた沖田。内臓がやられていなくてよかったが明らかに彼は無理をしていると思う。

千鶴は目をゆつくりと開けた。そしてまた閉じる。ここで千鶴が心配していても沖田にとって何も特にならない。そう思うことが悲し

くて千鶴はほんの少しの涙を流した。

沖田は自分の体に変化していることに気が付いていた。もちろん悪い意味で。しかし彼は気にしている暇などなかった。毎日、隊士たちの稽古、巡察……。彼には彼の仕事がある。そしてそれは近藤のために。

「ほらほら。もたもたしてると斬られちゃうよ。」

「はい！」

沖田はその日、隊士たちの稽古を見ていた。沖田は簡単に隊士たちを子供のように扱うことができる。彼といい勝負ができるのは幹部の一部の人間だけだ。

「すごい・・・あんな大人数なのに・・・。」

五人の隊士に囲まれているにも関わらず稽古とはいえここまで軽々と剣をふるえるとは。

「あれが総司の実力だ。」

千鶴は稽古の見学が許されていて斎藤は千鶴の言葉に反応してくれた。

「総司の三段突きは速くそう簡単に見切ることはできん。普通の剣客には絶対無理だ。」

「……………」

改めて彼の實力を実感する。前に見た時よりも強くなっている気がした。

「俺も行って来る。雪村。総司の元に行ってやれ。」

「え？」

「頼んだぞ。」

斎藤は少し微笑んで前に進み出た。

千鶴は沖田を探した。ふらりと出て行ってしまったのだ。

「どこに行ったのかな……。」

千鶴は廊下を歩く。すると前から人が歩いてきた。その人物は千鶴が知る人物だった。

「山崎さん！」

「雪村君。どうした？そんなに汗をかいて。」

「い、いえ。あの沖田さんを探しているんですけど山崎さん知りませんか？」

「沖田さんを？」

「はい……。」

「何故、君が？」

「いえ、その……斎藤さんに言われたのもありますけど……沖田さん少し元気がないので心配なんです。」

山崎は少し驚いた顔をした。

「山崎さん？」

「いや。なんでもない。沖田さんは部屋に向かったようだ。先ほど見かけた。」

「そうですか！ありがとうございます！山崎さん。では失礼します！」

そう言うと千鶴は山崎の横を通り抜けた。山崎は彼女の背中をそっ

と見送った。

「沖田さん！」

「千鶴ちゃん？」

「入ってもいいでしょうか？」

襖の向こうで千鶴は声をかける。沖田はいいよと優しく言った。彼女は部屋に入ると襖をしめ、沖田を見つめた。

「何？そんなに見つめられちゃうとどきどきしちゃうな。」

「す、すみません！！」

千鶴は顔を赤くし腰を抜かす。

「あはは。で。どうしたの？千鶴ちゃん。」

「いえ……。あの稽古見てました。沖田さんはやっぱりすごいんですね。」

「君にそう言ってもらえるとなんだか照れるね。」

「え？」

「いや。単純に嬉しかったただだよ。ありがとう。」

綺麗な顔で沖田に見つめられると千鶴はますます赤くなる。

「どうしたの？可愛いね。」

沖田はじりじりと千鶴に近づく。

「お、沖田さん？？なんで近づいてくるんですか！？」

「君の顔がよく見たいから。」

その言葉に千鶴は耳まで真っ赤にした。

「……………っ！」

「で。早く言いなよ。本当はもつとあるんでしょ？」

「・・・沖田さんが心配なんです！」

千鶴は思いきり叫んだ。

「昨日もなかなか眠れませんでした！沖田さんが元気がないから！それで・・・わたし・・・」

沖田は目を見開いていた。千鶴はなぜか目を涙目にしていた。

「千鶴ちゃん。」

「へ？」

引き寄せられたかと思うと沖田の唇が千鶴のそれと重なっていた。

沖田はじりじりと口づけを強くし、口に舌を入れる。

「んっ・・・あっ・・・。」

甘い声が千鶴の口からもれる。すると沖田は畳に千鶴を押さえつけそれでもなお、口づけをやめない。甘く深い口づけは千鶴にとってものすごく長く感じた。

「沖田・・・さん・・・。」

「ごめんね。びっくりしたでしょ？でも千鶴ちゃんがいけないんだよ。そんな可愛いことを言うから。」

沖田はニヤリと笑った。

「今日はこの辺で勘弁してあげるけど・・・またしようね。」

「えええ！？」

千鶴は真っ赤で倒れそうだった。

そして沖田総司と千鶴の甘い恋がはじまったのだ。

8・願い（前書き）

黎明録マジで欲しいです・・・。

8・願い

千鶴はその日全く眠ることができなかった。男性にあんなことされたのはもちろん初めてだったし、ましてや沖田だ。千鶴は確かに沖田のことは嫌いではない。最近をよくしてくれる。最初は殺すとか脅すことを度々言われていたが。

布団に入ってからあの時を思い出すと顔が赤くなった。そしてその日、結局眠れなかった。

「おはようございます・・・。」

「どうした？元氣ねえな？」

広間で声をかけたのは土方だった。千鶴はうつむいた顔をあげ土方を見て腰をぬかした。

「ひ、ひ、土方さん!!」

「そんなにびつくりすることねえだろ。」

土方は薄く笑った。千鶴は最近には土方が忙しくあまり見ていないかだったので驚き、さらにこんな役者のような顔で言われたら腰も抜かす。

「何やってるんですか。土方さん。」

（こ、この声は・・・。）

一番会いたくなかった男。その名も沖田総司。

沖田は土方に笑顔で言った。だがその声は怒りが込められていた。
「僕の千鶴ちゃんに何いじめてるんですか。土方さん。早くどこか
いってください。邪魔です。」

「て、てめー朝から・・・。」

土方は眉をピクピクさせ沖田を睨んだ。そんな沖田は気にもせず千鶴に手を差し伸べる。

「はい。千鶴ちゃん。もう大丈夫だよ。悪魔は消えてくれるから。
ていうか僕が消すから。」

「誰が悪魔だ！誰が！」

土方の怒声が千鶴の耳にきんきん響く。

沖田は千鶴を起き上がらせると手をひっぱる。

「お、沖田さん！？」

「千鶴ちゃん、僕は僕のそばで食べるの。」

結局、千鶴は沖田の横で朝食をとった。ほかの幹部は沖田のいつもと違う笑みに何もつつこめなかったという。

千鶴はその日、洗濯をしていた。雑用をすることを土方に許され、

最近はこのいうことをして時間をつぶしている。部屋にいるよりも

千鶴は晴れ晴れした気分になった。

「楽しそうだね。」

「お、・・・。」

沖田さんと言おうとしてやめた。沖田は縁側で千鶴を見つめている。

「ねえ。昨日のこと怒ってる？」

「お、怒ってるって・・・。」

物がいたことに。

これからしばらくして禁門の変がおきる。沖田は不参加だったこの変。長州が朝敵と幕府にいわれることとなる。そして新選組をさらに有名にした事件だった。

禁門の変が終わりはらくした頃。沖田は土方に呼ばれていた。

「土方さん。失礼しますよ。」

沖田が声をかけ土方の部屋に入る。土方はいつものように厳しい表情だった。

「何なんですか。こんなかしこまっちゃって。うわゝそんな怖い顔しちやって。」

沖田は面白そうに笑って距離をとって座った。

「総司。ここに座れ。」

土方は前に座れと指をさす。

「嫌です。なんか説教なんですか？」

「いいから座れ！」

「……………」

沖田はやや舌打ちし土方の前に向かい合う形で座った。

「何ですか？僕、悪いことしてないですよ。」

「心あたりねえのか。総司。」

「ないですね。最近は大人しかったです。」

土方は目を伏せ息をふつと吸っていった。

「お前……。雪村千鶴と逢引してただろ。」

「ふ……。あはははは！……。誰から聞いたんです？」

沖田は笑ってから真顔になった。

「山崎が知らせてくれた。本当なのか？」

（あの野郎……………）

沖田は山崎を後でボコボコにしようと誓ったがもうバレては仕方がない。正直に言うことにした。

「接吻しました。それが何か？」

「せ、接吻だと……。本当なのか？」

「山崎君から聞いたんでしょ？」

「お前……。わかってんのか……。千鶴は……。」

「わかってますよ。けど好きになっちゃったんだから仕方ないですよ。」

土方は渋い顔をする。

「まさかお前が恋なんかするとはな……。」

土方は心底驚いたようだった。

「僕もそう……。びつくりしてます。でも……。」

「だが副長として認めるわけにはいかねえ。今後そんなことはするな。わかったな。」

「無理ですよ。」

「なんだと？」

「好きなんだから無理です。結婚も彼女がいいならしたいですよ。けどどうせ屯所にはいられないし……。だから……。」

沖田がこんなに必死になっているのを見て土方はまた驚いた。こんなにも彼女が好きだというのか。

「……………」

「お願いです。土方さん。今のままで……。」

頭はさげなかったが沖田は頼んだ。

「わかった。だが俺たちも前でちゃらちゃらしたりほかの隊士に見られたらわかってるな。」

「はい。わかってます。」

沖田はものすごい笑顔でそこから去って行った。

8・ 願 い（後書き）

字間違いを修正しました。
（土下座）

9・確信（前書き）

えろいよ・・・。沖千ばつかだよ・・・。

9・確信

「おはようございます。土方さん。」

「おお・・・おう。」

土方は笑顔で挨拶した千鶴を見た。何か知らないが妙な声がでてしまった。

「どうかしましたか？」

千鶴が土方の顔を覗き込む。

「何でもねえ。」

土方は冷静に言った。焦ってはいないが気になる。あの沖田総司が惚れた女。あの総司が。

確かに剣や殺人については新選組一だが性格に難あり。何度土方がやつに屈辱を思い知らせたか。

あいつを止められるのは近藤だけで土方は何もできない頑固さというか・・・。

姉も姉で口喧嘩で勝てるわけもなしで・・・。

「お前も大変だな。」

「え？」

土方は思わずつぶやいていた。あの総司に気に入らたのではそう簡単に逃げられないだろう。もしかしたらここに来たことより大変になる。

（どうしたもんか・・・。）

近藤に相談すればもしかしたら総司は千鶴を諦めるかもしれない。だが総司が近藤でも無理だったなら彼はここにいれなくなるかもしれない。隊士の数が増えていつてはいるが総司のような天才は新選

組には必要だ。

「そんなところで何してんだ？二人とも。」

不意に声がかかる。

「平助君！おはよう。」

千鶴は明るく挨拶する。

「うん。おはよー。土方さん・・・そこ邪魔だつて。」

「あ？うるせえな。」

土方は舌打ちしながら広間に入っていく。

「・・・朝から鬼だな。」

平助は苦い顔をして言う。千鶴は少し苦笑した。

土方は食事の時も考えていた。総司は千鶴が好きだ。だが彼女はど
う思っているのだろうか。

もし彼女が思っていたなら二人の関係は恋人ということになる。

（まあ。あんなしつかりした女があいつを好きになるなんてことは
ない。）

土方は確信していた。千鶴が来てあと数か月で一年。彼女は弱音も
吐かないし、池田屋ではよく働いてくれた。最近では食事やお茶も
入れてくれるし役に立っている。まあ新選組のためなら殺すが。
総司の女になってしまったらそう簡単なもんじゃない。

（よし。決めた。）

土方は千鶴に聞きに行くことにした。

その頃。

「山崎君へ出ておいで。」

沖田は明るい声で屯所を歩きながら叫んだ。

「何をしている。」

横の部屋から斎藤の静かな声が聞こえた。

「あ。一君。ねえ。山崎君知らない？」

「知らぬが・・何の用だ。」

「うん。ちよつとね。」

沖田の異常なほどの笑顔に斎藤は眉を寄せた。

「総司・・・。あんた最近稽古をさぼっているそうだな。」

「体調が悪いから禁門の変に行くと言ったのはどこの誰？」

「・・・副長・・だが。皆、あんたの稽古を受けたがっているぞ。」

「うそだあ。そんなの新隊士だけでしょ？ 僕に泣かされた子が何人いると思ってるの？」

「稽古で泣くような阿呆は新選組には必要がない。そういう輩をふるいにかけるのも我らの仕事だ。」

「・・・・斎藤君ってほんつとクソ真面目だよな。」

「あんたが不真面目なだけだろう。」

「それはそうかも。」

少し沈黙が流れる。斎藤は刀の手入れが終わったらしく立ち上がる。

「どこに行くの？」

「あんたがやらない稽古だ。」

斎藤の少し嫌味な言い方に沖田はおかしくて笑った。

「本当にどこにいるのさ。今日に限って出かけてたり？」

沖田はぶつぶつ文句を言いながら歩く。そしてついに見つけた。

「山崎君！」

襖の隙間から見えた山崎に叫ぶ、勢いよく襖を開けると……。

「あれ？沖田さん？」

かわいらしい千鶴の声。何故、山崎の部屋に山崎と共にいる？

沖田は笑顔を黒いオーラに変えた。

「何してるの……千鶴ちゃん……。」

「や、山崎さんに医療の勉強を見てもらってたんですけど……沖田さん？」

沖田のいつもと違う雰囲気、千鶴は恐る恐る言う。

「山崎君……君はどこまで僕を怒らせたら気が済むのかな？」

怒りオーラばりばりの言葉に山崎は何もないように言う。

「俺は雪村君に勉強を教えていただけですが……それで沖田さんが怒る理由がわかりかねます。」

「君……しらばづくれる気？」

「ああ。あれのことですか。俺は新選組と沖田さんのことを考え報告したまでです。」

「それ以上言ったら殺すよ。」

「??」

千鶴は訳がわからず沖田と山崎を交互に見る。

「君が余計なこととして僕がここにいられなくなったらどうするの？」

「そんなことにはなりません。あれは単なる報告であって決めるのは副長と局長ですから。」

「いちいち腹が立つ言い方だね。」

千鶴は感じた。この空気が痛い。

しばらくこの空気が続くと沖田は千鶴の手をぐいつと引つ張り連れ去った。

「沖田さん！待ってください！い、痛い！」

千鶴の叫びも聞かずかかと沖田は手を握り千鶴を連れ去る。やがてついた場所は千鶴に与えられた部屋だった。

沖田は千鶴を押し倒し、千鶴を泣きそうな顔で見た。

千鶴はその顔を見て自分は間違ったことをしたと思った。

「僕がいなくてあんな危険な男といたらだめだよ。僕、もう待てなくなっちゃうよ。」

そういつて沖田は千鶴の胸元にそつと触れ、首筋に舐めるような口付けを落とした。

「ん！！沖田さん……。ごめんなさい！」

千鶴が謝ったのを見て沖田は微笑む。そして唇に口づけを落とす。

「あ……。つつ……。んん……。」

角度を変えて息ができなくなる口づけに千鶴は気を失いそうだった。

「これ以上しても許されるよね？」

「へ？」

沖田の荒い息遣いが聞こえる。

そして沖田は少し乱暴に千鶴の着物を器用に脱がしていく。

「沖田さん！ダメです！」

千鶴の胸をサラシをほどいていく沖田に千鶴は叫んだ。

「じゃあ。もう二度と山崎君と二人きりにならないって誓う？」

こくりと頷く。

「ほかの男も絶対だめだよ。わかった？」

こくり。

「君は僕のものになるんだよ。覚悟してね。今日は残念だけどこまで。」

沖田に解放され、油断して目を閉じると再び深い口づけをあびさせられる。

千鶴はしばらく身動きできずやはりその日眠れなかったという。そしてひそかに襖から見ていた土方も衝撃すぎて眠れなかった。

10・ 記憶（前書き）

うーん。進行が遅い！

最初は本当に遊びのつもりだった。口づけたのも・・・。
なのに。今はそんなことも考えられない。

彼女を殺すことは僕にはできないのだろうか。
いつから僕は狂ったんだろう・・・。

まさか。まさかこんなにことが進んでいるなんて・・・。土方は衝
撃で飯も食えなかった。

総司が無理やりだったとはいえ、あんなことをされて何故平気でい
られる？ふつつ無理だ。

彼女の性格から考えて、顔に出てとくにみんなにバレているだろ
う。

しかし千鶴は平然といつもと同じように過ごし、いつもと同じよう
に人と接し・・・。普通だ。

もし本当に嫌ならば相談している。そう考えると土方はますます胃
が痛くなった。

「どうしたんだ？土方さん。めちゃくちゃ顔色悪いじゃん。」

あの場面を見てしばらくしたある日、いつまでも元気がない土方を遠目に平助が言った。

「本当だぜ。あんな土方さん見たことねえ。」

原田が同意する。

「仕事でが忙しいのはわかるけどよ……。あれは異常だよな。」

永倉も同意する。平隊士も副長が元気がないと噂になっている。三人は近づくのもなぜか怖かった。しかしあの男は平気だ。

「あれ？土方さん。そんな縮こまって。どうしたんですかー？」

ものすごい笑顔の男。沖田総司。今の土方に話しかけるなんて沖田だけだろう。

（何やってんだ！総司！）

（今の土方さんに近付いたら斬られるぞ！マジで！）

（やべえ！お前ら止めるぞ！）

彼らはテレパシーで会話できていた。三人は近付いたが土方が近付くオーラを出していたので一歩が進まない。

その時、土方が総司を睨みまわってつぶやいた。

「てめえ……。俺がどんな気持ちかもしれないで……。」

（ヘラヘラと……）

「何ですか？言いたいことあったらはっきり言えばいいじゃないですか。僕はいつも通りだけです。あ。それと今日は休みます。」

「はあ！？何言ってるやがる！駄目に決まってる！！ふざけんな！！」

「ふざけてないです！。近藤さんに頼まれたことがあって。」

「近藤さんが？」

「はい。ま。どっかの誰かさんがそんな毎日毎日不機嫌なもんだから気つかってるんですよ。」

ものすごい嫌味な言い方で沖田は言った。

「あ？どういう意味だ。」

「自分で気づいてんじゃないですか。」

「・・・・・・・・。」

沈黙が流れる。永倉、原田、平助の三人は二人を交互に見るしかなかった。

「ちつ。わーったよ。だがこれから休みなしだぞ。いいな！」

「もう。なんでそんな態度なんですか。」

（悪く思わないでくださいよ。土方さん。近藤さんに頼まれたってあなたを励ますなんて死んでもごめんです。）

沖田は一瞬舌打ちをしてからくるとまわり、土方の俳句集を盗んで燃やそうと思った。そして間抜け面三人が目止まった。

「なーにしてんですか？」

「え。」

三人は思考が止まった。

「ぼーっとしてたら土方さんに斬られますよ。」

（それはおまえだろ！！！）

と心の中で叫ぶ三人だった。そしてそこにしばらくいた三人は土方の怒声をあびることになった。

「ふゝ撒いた撒いた。」

「楽しそうですね。沖田さん。」

「相変わらずムカツク顔してるね。山崎君。」

昼間から二人は火花を散らす。

「副長からお聞きしました。今日は非番をとったらしいですね。」

「それが何か？土方さんにはちゃんと許可とったよ？」

「それは問題ありませんが……。今日は……。」

山崎はそつと耳打ちした。沖田は黙って聞く。

「わかった。山崎君も来るの。」

「はい。回収しなければならいので。局長が沖田さんだけに伝えろと。副長も知りません。」

沖田は黙って頷いた。ああ。今日もあの人のために人を斬るのだ。血を浴びないように。

彼女に臭いと思われては嫌だ。

そう沖田はそつと思った。

その日、さぼった訳は土方が元気がないので何かしてやってくれと近藤に頼まれたからではなく。ただ彼女を見たかったから。触れることはできずとも彼女を見ていたかった。全く飽きない彼女は季節が変わるごとに大人になっていく。そして自分も老いていく。それが何となく素晴らしく感じた。誰かをそんな風に思えるのが嬉しかった。

その夜、沖田は山崎と共にある人物を殺しにいった。全く知らない人物で名も知らない、声も知らない。そんな人間を斬ることになにも感じなかった。

「お見事です。沖田さん。」

「君に褒められてもうれしくない。」

全く、このクソ監察はこんな時にそんなことを言わなくてもいいだろう。沖田はついてしまった血を見た。頬に少し、羽織に少し。

「どうしょー。羽織についたんじゃ・・・。」

「私服でよかったですね。雪村君に洗濯してもらえないですか。」

「君・・・本当に性格悪いね。」

「沖田さんだけには言われたくないですね。」

そう言いながら死体を綺麗に処理する山崎。正直すごい。

沖田は何も言わず闇夜から屯所に戻るべく帰路についた。

これを彼女に渡すのは嫌だ。

彼女は僕を嫌いになるかもしれない。

ま。今更のことか。

沖田は桶で布を濡らし頬を吹いた。血は綺麗に落ち、不意に桶の水に染み渡った。

真つ 赤な血は沖田を挑発するよう広がる。
目を伏せると昔のことが思い出された。

11・ 暁の花（前書き）

史実では残っていないので、私の妄想で進めます。沖田さんが人を初めて斬ったのは壬生浪士組ができた当初、つまり文久三年、三月頃とします。

実際彼は優しい人物だったので人を斬ったときどう感じたのでしょうか……。

11・ 暁の花

その日は春なのにひどく暑かった気がした。暁の空は沖田総司から見て、血の色に見える。そう。沖田は人を斬ったのだ。もちろん、後悔はしていない。これも壬生浪士組が大きくなるためだし、近藤のためだ。そう言い聞かせていた。

屯所に戻ると、新見と芹沢の顔が見えた。ニヤニヤと笑っている。何に喜んだのだろうか。沖田はそんなことをふと思った。体に血がべっとりついていて誰にも会いたくなかった沖田はすぐに屯所の庭に行き、井戸から桶に水を汲んだ。懷に持っていた布を水にひたし、顔をふいた。それでもなぜか足りなくて沖田は顔を桶につっこんだ。どうしてか体が動かず、息がなくなるまでずっと水の中でいた。そして感じた。誰かが自分を殺そうとしているのではないかと・・・。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

荒い息を吹き、腕で顔をふくと次は刀を洗うことにする。もっていた布で刀をふいたとき、後ろから声がした。

「馬鹿か。てめーは。そんなしぼってもねえ布きれで刀をふいたら刀が錆びるだろう。」

その声はいつもと同じで沖田はいつもより腹が立ってその怒りを抑えるのに必死ですぐに反応できなかった。

「うるさいんですよ・・・。土方さんは。」

冷静に言ったはずなのにその声はいつもと全く違った。何かに取りつかれたような怖い声。自分でも信じられなかった。

それに土方は溜息をついた。

「総司。お前、びびってんのか？」

挑発のような口調に沖田は勢いよく振り返って仏頂面の土方を睨んだ。

「殺してきたんだろ？その刀で。知りもしねえ相手を斬り殺したんだろ。」

沖田は何も言わず土方を見据えた。

「俺もやったぜ。だがお前のようにびびってなかったけどな。」

呟くように土方は言った。それに沖田は感じたことのない怒りに見舞われた。こいつを殺してやりたいと強く願う。だけど殺せない。この男は近藤が必要としているのだ。もし土方を殺せば近藤が自分を殺す。それがわかつているからこんなに彼が憎いのかもしれない。沈黙がしばらく流れ、沖田は力がぬけていった。空を仰げば暁の空は暗く沈んでいく。

「総司……。」

土方は不意に沖田に近付いた。沖田は逃げられなかった。沖田は動揺していた。いつもなら笑って終わるのに今日は無理だ。

土方は沖田の額に人差し指を立てまっすぐに向かせた。土方のくぐもった目が沖田の碧眼に映る。

「俺たちは人殺しだ。」

土方は吐き捨てるように言い、続けた。

「俺たちはもう逃げられない。落ちるとこまで落ち、人を斬って生きる。憎まれ、憎まれて憎まれて殺されるさ。だが俺はとことん憎しみと闘ってあの人のためと俺の理想のためにやるぜ。」

土方は薄く笑って沖田の頭をなではじめた。

「お前は見失わないようにするんだな。お前の大事なものを。」
「……！！」

沖田は不覚にも涙を隠せなかった。だが流してはいなかった。ので土

方にはばれていない。

そして土方は去っていく。沖田は彼の背中を忘れることはなかった。
(何かっこつけてるんだ・・・よ。)

沖田は剣を振るう。

大事なもののために。

近藤のために。

いくら憎まれようと血を浴びても。

仲間を殺すことになっても。

ただ、もがき続け、生き続け・・・。

その先を夢に見て。

(なーに。昔のことを思い出してんだろ。)

沖田は独り笑ってしまった。もう、夜中で皆寝ているだろう。

今日も殺した。知らない人を。家族は自分を憎む。殺しに来るかもしれない。それでもいい。斬るだけだ。斬って斬って大切なもののために。

「処理終わりました。沖田さんも報告にお付き合ってください。」

クソ真面目な監察、山崎はこの夜中なのに報告に行こうと言う。

「はあ？何言ってるの。近藤さんはとくに寝てるよ。明日でいいじゃない。」

何故こんな夜中に暗殺成功の報告をしなければならないのだろう・・。
・。近藤は殺すたびに沖田を優しく見る。それがなぜか悲しい。

「駄目です。局長はお休みになっていますが副長は起きていらっしやいます。行きましょう。」

「やだ。」

「・・・・雪村君とのことを幹部の皆さんに言ってもいいのでしょうか？」

「あのね・・・。それが僕の弱みになると思ってるの？だいたいね。土方さんに言ったことではれてるに等しいから。土方さんはああいうことに疎いからね。それと君は性格悪すぎ。」

言いたいことを全部言っちゃった。彼も同じように言いかえしてくる。

「あなたに性格のことを言われたくないですよ。無駄なことを言わずに行きましょう。」

半ば無理やりに沖田は山崎に連れ去られた。

土方と山崎が話していたとき、沖田は何も言わなかった。

そしてそつと目を伏せ、薄く笑った。

殺したことで、斬ったことで、
喜ぶ人間がいるとは。
なんて矛盾した世界だ。

12・夢千（前書き）

訳が分からんです。早くゲームしたいんです。

12・夢千

いつの間にか。楽しくて仕方がなかった。

人を斬った時に刀から伝わる震え。

近藤のためになっっているという快感。

血を浴びる。血の感じと匂い。

楽しくて楽しくて……。

もう自分は人間ではない。

あの彼らを見るまでは。

彼らは羅刹。

血に狂い、覚醒する人間ではない。

彼らのようなものを人とは呼べないだろう。

だから自分はまだ人間だ。

「おはよう。千鶴ちゃん。」

「あ。おはようございます！沖田さん！」

沖田は朝、千鶴を朝食に呼びに行くのに部屋に訪れた。彼女はいつもと変わらなかった。

「朝ごはんだよ。」

「はい！ありがとうございます！」

千鶴は沖田にかけてくる。沖田は一步、二歩下がってしまう。無意識に。

「沖田さん？」

千鶴は首をかしげて聞いた。

「ごめん……。」

沖田はなんとなくわかっていた。彼女に嫌われたくないのだ。殺すことは斬ることは好きになっていた。だが彼女も好きになっていたのだ。彼女は……。こんな人殺しを好きにはならないと知っているのに。

「大丈夫ですか？沖田さん？」

彼女は沖田の顔をのぞきこむ。沖田は彼女の瞳を見つめた。なんてきれいなんだろう。

「大丈夫……。だよ。」

沖田は最後まで切なさうに悲しそうに言ったこんな沖田ははじめてだったので千鶴は何も言えなかった。それより此間の行為はなんだったのだろう。何故か恥ずかしいのにすがすがしかった。

千鶴は先に行った沖田の背中を見つめた。

土方はもう我慢ができなかった。沖田と千鶴があんなことやこんなことを隠れてやっているなど許せない。確かに沖田は組長だ。切腹する範囲ではないことではわかっているがこの頭に残るイライラはどこに持っていけばいい。

「千鶴。」

「は、はい！」

千鶴は土方に睨まれ、少しびびった。

「後で俺の部屋に来い。総司。お前もだ。」

千鶴は沖田の顔を見た。沖田はどこか遠くを見ている顔をしていた。
「総司！」

「お、沖田さん・・・。」

沖田は目を見開き、横に千鶴を見た。そして土方を。沖田は微笑んでいつもと同じように返した。

「ええー。なんですか。」

「馬鹿野郎！心あたりがあんだろ！！」

朝から土方の鬼の表情を見て、斎藤でさえ怖かったという。

「沖田さん！」

食事が終わり、土方は先に行ったので沖田はふらりと広間から出た。そこに千鶴はかけた。

「ごめんね。」

沖田は振り返って優しく言った。そして告白した。

「僕は君が好きなんだ。だけど君が僕を嫌いならそれでいいよ。土方さんにちゃんといいなよ。」

沖田は先に行った。千鶴は自分の思いをわかった。彼への気持ちを。

「そこに座れ。」

千鶴が沖田の次に入ると土方は座るようにきつく言った。

「もう土方さん。朝から機嫌が悪いですねえ。大丈夫ですか？」

「うるせえ！お前な！また俺の句集盗んだろ！！どこへやった！」

「ああ。昨日、寒かったんで燃やしてあつたまりました。」

「な、なんだと！？」

「いらなideしょ？あんなラクガキ集。」

「てめえ！ぶつた斬る！！」

いつもと同じように喧嘩している土方と沖田を見て千鶴は苦笑した。喧嘩するほど仲がいい。

「うつふん。単刀直入に言う。てめえら。」

土方は咳をしてから二人を睨んだ。

「付き合ってるのか？」

千鶴は血の気のひいた気がした。しかし沖田は。

「あはははは！！何を今更。此間言っただじゃないですか。」

「え？此間？」

千鶴は沖田に言ったが軽く無視した。

「俺が言ってるのは！お前が無理やりやってたのかと思ったがその・
・千鶴はどう思っているのか聞きたいんだ！」

土方の顔が少し赤いのは気のせいか。

「はあ？僕が無理やり。どうなの？千鶴ちゃん。」

沖田の表情を見て、千鶴は理解した。これで千鶴は逃げられる。千鶴が嫌だと拒絶すれば沖田はもう何もしてこないだろう。今までと同じようになる。だが千鶴はもう決めていた。

「わ、私も沖田さんが好きです！」

「！？」

「沖田さんが無理やりしていたわけではありません！私も沖田さんが好きで・・だから・・。」

二人は信じられないというような顔をした。そして沖田はそつと微笑む。

「え？いや。千鶴。本当に違うのか？総司に無理やりされたんじゃない？お前も許していたと？」

「はい。私も同意してました。」

千鶴の意思は固いようだった。

「わかった・・・。お前ら。俺以外にばらすなよ。俺の前でちやらちやらもなし！それは変わってねえからな！総司。」

「はい。」

沖田は笑んだ。

「それと。近藤さんにはお前から言え。千鶴。もう逃げられねえぞ？」

「はい！わかっています。」
そして二人は一緒に出て行った。

「本当なの？千鶴ちゃん。」

「はい？」

沖田は目を少しそらし言った。

「僕が・・・好きだって・・・。」

照れているのか。顔が赤い。

「はい。私沖田さんが好きになつたみたいです。構いませんか？」

沖田は千鶴を抱きしめた。

「君は僕を好きになつたのか。」

「？」

「嬉しいなあ。」

たとえ彼女が新選組の敵になっても彼女を守り抜くことを覚悟しなければ。

血に狂った殺人鬼の恋

13・覚悟（前書き）

黎明録のお梅さんめちゃくちゃ可愛いじゃないですか！なんか小説では汚い女みたいな感じに書いてちゃったけど・・。プレイしてないけど！プレイしたら書き直すのでご理解いただくようお願いします。

13・覚悟

元治元年、10月。参謀、伊東甲子太郎入隊。

彼は尊王攘夷派。新選組は佐幕攘夷派。

藤堂平助の仲立ちで新選組に入隊するが、のちに油小路の事件をおこしてしまう。

彼が新選組を変える礎となったのは言うまでもない。

「あらゝ近藤さんも冗談がうまいかたですわねえ。」

「あはは。伊東さんには敵いせんなあ。」

近藤と伊東は酒を飲みながら仲良く雑談している。それを土方は目をふせて聞いていた。

襖の外から聞いていた沖田は溜息をつく。

彼のことは嫌いだ。斎藤や平助はともかく永倉も原田も好きではないと言っている。

全くその通りだ。彼は嫌な目をし、近藤と本当にわかりあおうていないだろう。

近藤は人がいいからすぐに人を信用してしまう。

（土方さん……。本当に何もしてくれないのかな。）

沖田はいらだちながら思った。あの鬼の副長が今度は何もしないとはどういうことだ。

考えていても仕方がないので沖田は庭に出た。きれいな菊の花が咲いているところがある。

沖田は花が好きだった。いい香りはするし千鶴に似合いそうだからだ。

沖田は月の光に照らされている菊を見、微笑んだ。その時――。

「あなた隊士ではありませんわよね？」

「え？」

千鶴の声がする。そしてあの男の声が。

沖田は刀で菊の花を刀の上に乗せ、伊東の喉元につきつける。

「男所帯で華がありませんから。」

「まあ。頂いておくわ。」

伊東は不敵に微笑んで去って行った。

「総司。やりすぎだ。」

「ただの座興ですよ。」

土方が部屋から出てきたので沖田は笑って見せた。土方は千鶴に平助からの言伝を言い、そこから立ち去った。

「沖田さん。あの……。ありがとうございます。」

千鶴は頭を下げる。

「うっん。僕はね。あの人が嫌いだから。千鶴ちゃんは好きだから助けたんだ。」

「はい・・・。」

千鶴は苦笑まぎれに笑った。

「千鶴ちゃん。困ったことがあれば言いなよ。僕が斬ってあげるから。」

千鶴は可愛く頷いた。

「可愛いね。君は。」

沖田は彼女を優しくなでた。

ああ。彼女の悲鳴が聞こえる。

恐怖している声。聞きたくない。

仲間が彼女を傷つけてもたとえ仲間でも僕が斬ってしまうだろう。

彼女には泣かないで欲しい。彼女は弱いから。

僕が守ってあげないと。

「何してるんですか？山南さん。彼女怖がってますよ。」
彼女の悲鳴を聞いて駆けつけてみれば山南が薬を飲んでいて。沖田は決めていた。彼が狂うなら自分が閉ざしてやろうと。

彼女はやはり泣いてしまった。山南が倒れたから？怖かったからか？何もわからなかった。

沖田は彼女が寝ている部屋に夜中、こっそり入り込んだ。暗殺を何
度も経験している沖田は夜でも目がよく見える。

彼女に近付くと彼女はすやすやと眠っている。

可愛くて。沖田はふっと笑った。

そして耳元でそっと囁く。

「頑張ったね・・・。」

彼女はいつでも頑張っている。

見習わないと。

この潜む病魔と闘わないと。

ここにはいられない。

闘えない。

護れない。

そうだろうか？

「千鶴。」

沖田は千鶴の頬に口づけて部屋から去って行った。

13・覚悟（後書き）

あれって菊なのかな？

14・決意（前書き）

グッズちゃんと買わなきゃな・・・。

十二月某日。

「土方さん。お茶が入りました。」

千鶴は土方の小姓が板についてきた。夕飯の後、千鶴は土方の部屋へ熱いお茶を入れた。

「おう。入れ。」

土方は書き物をしていた。そう。土方の俳句だ。千鶴には距離的に見えないだろうから大丈夫だ。

千鶴はいつもと変わらないように土方に見えた。後に後悔するのだが。

千鶴はニコリと微笑んで土方にお茶を渡した。

「どうですか？」

「ああ。うまい。ありがとうな。」

千鶴は首を振りいいえと笑った。不意に土方は此間のことを思い出す。最近忙しくて気にしている暇もなかったが。

「どうなんだ？総司の奴とは。」

此間、二人は土方の前で恋人宣言をしたのだ。どうやら近藤さんには言っていないらしい。そう考えると沖田は本気ではないのかもしれない。奴なら真っ先に近藤に言うはずだ。と土方は思う。

千鶴は赤い顔をしながらも淡々と言った。

「普通ですよ？あの別にやましいことしてませんから！」

「ふうん……。まああいつは色恋沙汰とか興味ねえからな。お前に無茶を言わねえと思うが……。くっついたらとことんくっついてくるぞ。」

「わかってます。でも今はそうですね……。沖田さんが私に会いたいとか抱きしめたいとかおっしゃってくれるなら私も答えます。けれど私からは求めません。私は……。」

千鶴は目を伏せて言った。土方は首をかしげた。

「どういうことだ？お前も総司が好きなんだろう？」
千鶴は真剣な目をしていた。

「はい。もちろんです。でも私は皆さんのお役にたたい。皆さんが好きなんです。今は父様を探すことや……。自分がしないといけないことに一生懸命で。私は生きるために生きています。だから私は求めないんです。」

彼女は生きるために生きる。彼女はまっすぐに生きている。たしかに土方は沖田の女とはいえ、新選組の邪魔になるようなら肅清するつもりだ。沖田も近藤もそう思っているはずだ。

だが今、彼女は懸命に、必死に父を探し、自分を自分であるために生きている。

彼女が無欲なのはこのためか。

「……千鶴。」

「はい……。」

土方は千鶴に呼びかけるが千鶴の様子がおかしかった。

「どうした？千鶴！？」

あまりに千鶴はおかしかったので土方は声を張り上げる。顔が赤く、汗がどくどくと流れている。そして千鶴は倒れた。

「千鶴！？……くそっ！山崎！山崎はいるか！」

土方は叫んだ。

「風邪ですね……。二、三日安静にしていれば問題ないと思います。」

「ああ。悪いな。山崎。」

山崎はすぐに駆けつけ彼女を布団に寝かせ体を見てくれた。千鶴は荒い呼吸をして眠っている。

山崎は細い目で千鶴を見つめた。

「彼女は随分疲れていたようです。無理もありません……。毎日巡察に同行していたようです。雑用もかなりやってくれていましたし……。」

「……。そうだな。こいつに無理させちまった……。」「

彼女は居候だ。親類も誰もいない。他人しかない。しかも男ばかり。精神的に無理するところは幾つもあった。そのうえに毎日巡察に同行し、父親を探していれば疲れもたまる。

（もう少し巡察は控えるよう言うべきだったな……。）

土方は内心後悔していた。そしてまだあった。千鶴が疲れる理由が。「千鶴ちゃん。いるー？」

そう。この男。沖田総司。沖田は土方が山崎を呼んだことも千鶴が倒れたことも全く知らず、おまけに夜に酒を持って千鶴の部屋に訪れたのだ。

「あれ？どうして土方さんと山崎君が……。って千鶴ちゃん！？」

沖田は千鶴にかけた。千鶴は苦しそうに眠っている。

「どういうことです！？土方さん！」

沖田は土方を睨んだが土方は睨み返した。

「ただの風邪だ。心配ねえ。それより……総司！てめえこの夜更けに女の部屋に訪れるとはどういうことだ！」

土方の怒声が部屋に響く。

「副長。あまり大きな声を出すと彼女が目覚めてしまいます……。」

「すまねえ……。」

沖田は駄々をこねるように座り込んだ。

「……土方さんには関係ないじゃないですか。それになんで山崎君まで……。」

「山崎は千鶴を看てくれたんだ。それに比べてお前は酒か？ああ？」

沖田は嫌な顔をして土方を見たが山崎を睨み言った。

「山崎君はずっとここにいろつもり？」

山崎は押し黙ってから土方を見た。

「いい。山崎。総司に看させる。休んでくれ。」

「わかりました。では副長。沖田さん。失礼します。」

山崎はさっさと去っていった。

「……で。なんでいきなり倒れたんです？昼間はあんなに元気だったのに。」

「毎日巡察に同行して……雑用までして……おまけにお前みてえなどうしようもねえ奴に好かれれば疲れて倒れんだろ。」

「失礼な。千鶴ちゃんも僕のことが好きって言ってくれたんですよ……それに僕が来てなかったら何をされるか。猛獣が二匹いたんじゃない。」

「誰が猛獣だ！俺が餓鬼に手え出すか！馬鹿野郎。」

「はあ。もういいです。土方さんと話してたら彼女が安眠できません。さっさと出てってください。」

沖田は土方をきつと睨む。土方は溜息をついて立ち上がった。

「総司……。お前。千鶴をちゃんと守れるのか？」

「はい？」

沖田は言っている意味がわからなかった。

「お前は何も見えてない。女に惚れて守ることはそう簡単じゃねえんだよ。」

「……土方さん？」

土方は舌打ちして去って行った。

沖田は意味がよくわからなかった。彼女を守る自信はある。剣については自信があるからだ。だが・土方は何が言いたくて何を心配しているのか。でも女に関してはあの人に聞くのが一番だ。

沖田は小さい彼女の手を握った。

「お……きた……さん……。」

「！」

彼女は沖田の名を苦しそうに呟いた。彼女が何とも苦しそうで。辛い。

「ここいるよ。千鶴ちゃん。」

千鶴は目を閉じていたが微笑んで。そして荒い息がすやすやという吐息に変わった。

沖田は微笑んで彼女の頭をなでた。

「僕は君を守るよ……。守ってみせるから……。安心して。」

彼女は答えなかった。

でも沖田には頷いているように見えた。

彼女はとことん運がない。こんな殺人鬼の男に好かれてしまつて。沖田は知っている。彼女が刀を嫌っていることぐらい。だが沖田は今の沖田には刀がないといけない。なぜなら敵を斬れないから。斬れないと何もできないから。

彼女は優しい。だが自分は殺すことができる。
沖田は自分の性格がわかっていたから余計彼女が可哀そうだった。
だが離してやる訳にはいかない。
沖田は寝ころんだ。彼女の隣で。そしてそつと頬に口づけてやると
眠りに落ちた。

翌日。

「ん．．．．。」

千鶴は全く覚えていなかった。何故布団についているのか。何故、
目の前に沖田の寝顔があるのか。

「え？」

千鶴は理解し始めた。ああ。今の状況は．．．．。

沖田が千鶴の布団で寝ている。

沖田が千鶴を抱きしめている。

一晩一緒だったと．．．．。思われる。

「ぎゃーーーー！！！」

千鶴の悲鳴は屯所内に響いたという。

14・決意（後書き）

千鶴ちゃんが倒れるわけもわかるよ・・。

15・ 予感（前書き）

山南さんが羅刹になった時期が本編と違うのには理由があります。本編では元治二年二月なんですが、史実では脱走するんですよね。ということで山南脱走編はじまりです！どういうことになるか未定です。更新遅くなります。すみません！3つも書いてたら更新遅れるわよね・・・。

15・予感

元治二年、慶応元年二月。

「あはは。それ絶対嫌がられるじゃないですか。」

沖田は笑った。土方が言った屯所移転の話。彼は長州が出入りをしている西本願寺に移すというのだ。今、新選組は隊士の数が増え、雑魚寝している人がたくさんいる。幹部はもちろん部屋をもらえているが、構成や、稽古指南も大変だ。

山南は怒りの声を上げていた。羅刹となってから山南は実に機嫌が悪。土方よりも怖い。

沖田は山南を見つめた。山南は外見は変わっていないがもう生きてはいない。沖田はひそかに悲しみを持っていた。山南は試衛館時代から、どうかの誰かさんとは違ってよく自分を可愛がってくれた。今は会話も少ないが昔はよく話したものだ。

沖田は不機嫌に去った山南の背中を目を細めて見つめていた。

沖田は嫌な予感がしていた。羅刹になった当初、山南は特に不機嫌ではなかった。山南は基本的に弱みを見せたりしない。沖田も他人に見せるのは大嫌いだから気持ちわかる。怪我をしたときから彼の運命は人生は変わってしまった。沖田は知っている。山南が苦しんでいることを一番気にしている人物を。彼は他人のことを気遣ったり人を思いやることを知っている。鬼の副長と恐れられ、隊士をどんどん肅清して、敵を斬り殺して……。

「沖田さん？」

沖田が庭で佇んでいると千鶴の顔が見えた。千鶴は洗濯物を干すように桶にたくさん洗濯物が入っている。

「千鶴ちゃん……。」

沖田は気にすることが多くていつものように反応できなかった。今は何か……。

「大丈夫ですか？元気がないです。」

千鶴はものすごく心配している。彼女は嘘をつけない。彼女の純粋な心は沖田が好いているものの一つ。彼女は大人になったように思う。彼女が屯所に来て一年。子供だと思っていたが沖田のせいか沖田の目がおかしいのか彼女は大人だと思ってしまう。

沖田は目を閉じ彼女に笑みを向けた。彼女の顔が赤くなる。

「どうしたの？洗濯？」

「は、はい！だからあの……。」

「ん？」

「どいていただかないと……。」

彼女は沖田が近付いたことに不服らしい。

「わかった。手伝うよ。」

「え？」

「手伝うつて。これ貸して？」

沖田は桶をとって庭の物干しに洗濯ものをかけ始めた。隊士が見たらどんな顔をするか。

「お、沖田さん！！そんなしないでいいですよ！！」

「何で？僕、こういうの得意なんだよ？」

確かに千鶴は力も背もないからものすごく疲れる作業を話している間に淡々とこなす沖田。干し方も綺麗だ。

「昔は死ぬほどやったからね。」

面白そうに沖田は言う。

「え？そうなんですか？」

「うん。昔……。試衛館に引き取られたときは何もないう子供だったからね。別に剣も最初からできたわけじゃないしね。こうやって雑用しながら稽古をもらってたんだよ。」

「へー。意外です。」

「何が？」

「だって。沖田さんが……。いえ！すみません！！」

「あはは。今はこんなふざけてるのに昔は真面目だったみたいない言方だったから？失礼だね。君は。」

「すみません……。」

「いいよ。本当のことだから。」

沖田は愉快に笑った。

「はい。終わり。けど千鶴ちゃん。毎日こんな洗濯してるの？」

「あ。はい。自分でしてくださる隊士さんもいるんですけど……。」

私もやることがないのでお手伝いを。」

（自分の禪くらい自分で洗えばいいのに。気に入らないなあ。）

沖田は横に目を逸らす。

「ねえ。千鶴ちゃんは屯所移転の話どう思う？」

「どうって……。そうですね。慣れた屯所を離れるのは抵抗がありますけど私が反対しても……。」

「ま。言い出した人があれだからね。」

「あれって……。」

千鶴は苦笑いする。

「じゃ。僕はいくね。」

沖田は去って行った。なんとなく……。本当に気分が悪い。

「ぐああ!!」

沖田は稽古で隊士を打ち負かした。息もきらずに。沖田は男を見下すように冷たい目で見た。それを永倉と斎藤、原田は静かに見ていた。

今日の沖田はいつもと違う。いつものように剣のきれがないし、手加減しすぎだ。隊士は先月入隊したばかりの新米。沖田ならもっと綺麗に負けさせられただろうに。

「おい。大丈夫か？総司。」

「何がです？」

永倉の声に沖田は冷たく反応した。

「総司。調子が悪いのなら稽古に出るな。邪魔だ。」

斎藤の冷たい視線に沖田は頬を膨らませる。

「うるさいなあ！斎藤君は。」

沖田の睨んだ顔に斎藤は立ち上がった。

「出る。邪魔だ。」

「嫌だね。」

「なら力尽くで追い出す。」

斎藤は木刀の先を沖田に向けた。

「おい！斎藤。総司……。何やってんだよ……。」

原田は呆れた。

「諦める左之。止めるのは怪我しそうになったらでいいだろ。それに面白そうじゃねえか。あの初対面以来じゃねえか？」

永倉は面白そうに言う。

「始めようか？」

斎藤は腰を抜かしている隊士を睨む。すると隊士は隅っこに駆けた。
「思い出すなあ。君が初めて道場に来た時のことをさ。」

沖田はニヤリと笑んだ。そう。斎藤が初めて道場にやってきたとき手合わせをしたのは沖田だ。あの時は止めが入ったが楽しい勝負だった。

二人はにらみ合うと太刀をあげた。木刀の迫力は語れるものではない。隊士たちも永倉たちも啞然とし、本気の斬りあいを見ていると思った。斎藤の剣は左。居合の達人。今は居合もしていない。沖田の三段突きもしていないのに武士同士の稽古。

これほど真剣で楽しそうな稽古は滅多にないだろう。

その時木刀の先が斎藤の頬に触れ、頬がかすれた。斎藤の木刀は沖田の腹をめがけるが入りが浅い。

「へっ。」

沖田は楽しそうに息をきらし笑う。斎藤も強気に微笑んでいた。だがその時。

「やめんか！二人とも。」

「！！」

「近藤さん！」

現れたのは局長近藤勇。近藤はあまりいい顔をしていない。

「やめなさい。総司。斎藤君。」

近藤の声に沖田は申し訳ない顔をした。

「ほら。稽古は終わりだ。みんな戻りなさい。」

近藤の言葉にここはお開きになった。

「近藤さん。すみません。」

沖田は近藤の横に座り謝った。

「いや。どうしたんだ？総司。今日はおかしかったと皆に聞かされたぞ。雪村君にもな。」

「千鶴ちゃんに？」

「ああ。随分お前のことを心配していた。話してごらん。」

近藤の優しい言葉に沖田は安心する。

「何か嫌な予感がするんです。僕の予感はあるんですよ？」

微笑んだ沖田に近藤は苦笑した。

「その予感がなんなのかわからんが何もなければいいなあ。」
「そうですね・・・。」

それが切なる願いだった。

その日。新選組総長、山南敬助は屯所を脱走した。

15・予感（後書き）

山南さんファンの方すみません（土下座）

16・追求（前書き）

さてさて脱走編！暗くなるはず・・・。

気付いたのはやはり沖田だった。嫌な予感は的中だった。

夕食後、日が暮れるころに山南は姿を消していた。沖田は山南の姿を見たわけではない。

屯所から消えたというのは勘違いであってほしい。だがそれは事実だったのだ。

「広間に皆を集めてくれる？山崎君。」

沖田は廊下を歩きまわっていて所を山崎に掴まれ、優しく言っただけでいつもと違う態度に山崎は心底驚いた。

「大丈夫ですか・・・。沖田さん。」

「何がだよ。早くしてよ。」

山崎は最後まで沖田を見ながら屯所内に消えた。

「んだよ。総司。幹部集めて。」

土方は不機嫌に言った。

ほかの幹部も広間に集まった。千鶴のことは沖田が迎えに行き、千鶴は大人しくついてきた。

原田がきよきよとまわりを見渡した。

「まだ全員揃ってねえな？」

「ああ。山南さんがまだだ。」

永倉がうんと言う。平助は江戸に行っているので元々いない。

「みんな落ち着いて聞いてくださいね。」

沖田は悲しそうに笑い、近藤を見た。

そして座り込むと深く息をする。

「山南さんが脱走した。」

その言葉に皆が驚く。

「どういうことだ。総司。」

土方が落ち着いて言っているように見えたがそんな冷静ではなかった。

「今日、屯所を抜け出した・・・と言ったんです。」

「いったいなんで！脱走なんてしたら・・・。」

永倉が立ち上がったて叫ぶ。

「切腹・・・。」

斎藤が呟く。それに千鶴ははっと息をのんだ。

「くそっ！山南さんが・・・。」

土方は悔しそうに言う。それから誰も何も言えない状況になった。沖田はあえて何も言わなかった。こういう重い時は沖田が発言することです。柔らかなるものだが今日は違う。もう日が暮れた。山南はどこに行ったのだろう。

千鶴に目を向けると千鶴は今にも泣きそうな顔をしていた。切腹と聞いて千鶴は悲しんだのだろうか。

「千鶴ちゃん。」

「沖田さん・・・。」

千鶴は沖田を見た。沖田は優しく微笑んだ。

そして沖田は土方に向き直った。

「土方さん。」

「……………」

「今こそあなたの出番でしょ。情に流されない鬼の副長。」

土方は押し黙る。土方は新選組の鬼の副長。敵にも味方にも厳しく規則を破る隊士はすぐに切腹。そう言い出したのは土方であった。だが山南は別だ。土方と山南は仲が良かった。山南を殺したくなかった。山南を守れなくて……。山南が羅刹になったのも全部自分のせい……。そう土方は思っていた。

「山南さんは羅刹です。羅刹は外でばらしていいようなものじゃない。でしょ。」

沖田はこの空気の中笑っていた。いつもと変わらずに。

土方は沖田を見つめた。沖田はこういふときすごい。沖田は何も考えない。情の深いほうの人間だと思っていた。沖田は誰にでも優しくいわけではないが、愛想がいい。土方はそういうことができないから沖田のことは単純にすごい奴であり馬鹿な奴だと思った。沖田は殺す相手にまで優しくするのではないかと思ったからだ。だが今の彼の表情は違う。彼は新選組の敵には優しくはない。土方はそれを浪士組になってから理解した。だが山南はどうだ。仲間ではないか。一緒に酒を飲み、話し、戦い……。共に新選組を築き上げた仲間ではないか。

土方は奥歯を噛んで沖田を睨むように目を細くし、声を張り上げる。

「お前に頼めるか。総司……………」

「もちろん。」

「必ず連れ帰って戻ってこい。いいな。」

沖田は立ち上がる。不安げな幹部と千鶴を残しいつもと変わらぬ足取りで去って行った。

「沖田さん……。」

屯所の玄関でわらじを履いている沖田を呼びかける。

沖田は振り返らずわらじのひもを結ぶ。沖田は何も答えないが千鶴はそれでも呼びかけた。

「本当に山南さんは……。」

「山南さんが何？」

沖田は立ち上がって千鶴に振り返った。

「脱走したこと？切腹すること？それとも君は僕が山南さんを斬ると思ってるの？」

「そんなこと……。」

正直な千鶴に沖田は苦笑した。

「そうだね……。なるべく連れ帰るけど彼は羅刹だからね。どうしても時は……。仕方がないね。土方さんにも近藤さんにも連れ帰れって言われたけどね。」

「わ、私も……。山南さんを連れ帰って欲しいです！お願いします！」

千鶴は頭を下げたが沖田は触らず、慰めもしなかった。

「帰っても死ぬただけだね．．．．千鶴ちゃん。」

「はい．．．。」

「泣かないで。待っていなよ。」

千鶴はついに我慢ができなくなった。沖田に抱き着く。

「殺さないで．．．．沖田さん．．．．死なないで．．．．」

（この子は僕が死ぬと思っているのか。ま。まんざらハズレでもないけどね。）

「大丈夫だよ。僕が山南さんを止めてみせるよ。千鶴ちゃんはみんなと一緒にいて。近藤さんのそばに特に。」

「近藤さん．．．？」

「ついでに土方さんも。まあ斎藤君とか左之さんとかは結構神経図太いから大丈夫だと思うから。」

沖田は千鶴をなでてやる。

「僕は帰ってくるから。君は待っていなよ。」

千鶴は頷くとつま先を立てた。沖田は不思議そうな顔をしたがふつと笑って口付けをした。いつものように深いものじゃなくても千鶴は恥ずかしかった。けど初めて自分から望んだ。

「いってらっしゃい．．．．。」

「いってきます。」

沖田は山南を搜索に屯所から出て行った。

16・追求（後書き）

すみません。タイトル忘れてましたw

17・ 搜索（前書き）

頑張ります。黎明録のネタバレは一切ないので大丈夫です（^^）

千鶴は山南の部屋に訪れた。何か手がかりはないか。そう思ったのだ。

すると机の上に紙が置いてあった。

「これは……。」

千鶴がその紙を見ると紙には山南の独特の字で江戸に行つてきますと書かれてあった。

千鶴はすぐに部屋を飛び出し、広間に向かった。

「土方さん！」

土方はいつも以上に恐い。千鶴は土方に少し恐怖していた。土方はその紙を千鶴から取り上げると乱暴に紙をぐちゃぐちゃにした。

「江戸に行くつて……どういうことだ！」

「トシ……。」

近藤が土方をいさなめるように見る。

「お、沖田さんなら必ず山南さんを連れ帰ってくれます！」

千鶴は強く言った。

「そつだぜ。土方さん。千鶴ちゃんの言うとおり！」

「もし江戸に行つても平助に連絡すればいいんじゃないかねえか？」

永倉と原田が土方に話す。

「平助に文を出す……。」

土方は去って行った。

「土方さんは相当動揺している……。総司が早く帰ったらいいな。」

斎藤はいつもと変わらぬ口調で言った。

「はい……。」

千鶴は沖田と山南のことを思うことしかできなかった。

二月も中旬に入ったころ。沖田は北に向かった。とにかく人に聞きまくった。

ある程度情報も集まった。いやそれ以上に。

最近辻斬りの噂が絶えない。それをたどっていけばおのずと山南に結び付いた。

「お兄さん。お団子はいかが？」

茶屋のおばちゃんが沖田に話しかけてくれた。

「ああ。もらおうかな。」

沖田は椅子に座り、お茶と団子をもらった。

「お兄さん。お侍さんかい？それとも浪士？」

「うーん。そうだね。どっちもかな。」

沖田は笑っていいのける。

「旅をしているとか？」

「うん。そうだね……。人探しかな。」

沖田は団子をほおばった。うまい。

「おいしい！おばちゃん。おいしいよ。」

「本当かい？嬉しいねえ。」

初老のおばさんがうふと嬉しそうに笑う。

「さ。もう行かなきゃ。ありがとう。おばちゃん。」

「いやいや。それでお兄さん。どこに向かうんだい？」

沖田は追手が来ていることに気が付いた。

（僕の顔も有名になったんだなあ。）

そう思いながら追手のほうを睨むと沖田はつぶやくように言った。

「早く殺さないと……。」

その声はかすれておばさんには聞こえなかった。

「ぎゃああああ!!」

沖田は追手の男の腕を斬った。

「何で僕の後をつけたの？」

「お前……。沖田……。総司……。」

「わかっててつけたんだろう？」

「貴様が憎い！！俺の・・・！兄を殺した貴様が！！」

沖田は首をかしげて笑った。

「ごめん。全然覚えてないや。でも僕は死ぬわけにはいかないし。こんなところで道草くつてる場合じゃなかったんだ。」

沖田は問答無用に殺した。

山南は辻斬りを派手にやりすぎだ。こんなものではすぐにばれる。

脱走にしてもうまくしてほしい。

（まあこっちは楽だけど。）

彼は羅刹だ。羅刹は血がなければならぬ。血を求めるようになる。だから彼が辻斬りを行っていることはわかるがこんな無差別に殺しては幕府のためにも近藤のためにもならない。

沖田は足が速いのであつという間につく。目的地は山南の所だが。

また噂がたつていた。辻斬りが近江国（おうみのくに。今の滋賀県）であつたと・・・。

沖田はそれを詳しく聞くと目撃者によれば白髪の方がやっただけ。これは間違いない。山南だ。

沖田は近江国を目指した。

「探しましたよ。山南さん。」

「沖田君……。」

夜の橋の上に山南は独りでたっていた。沖田はもう逃がさないと鞘から刀を抜いた。

18・前日（前書き）

最近某動画サイトで沖田さんのMADを見えます。それを参考に書いていこうかなって思っています。

「沖田君……。」

笑みを消して山南に近付く沖田。その顔は新選組組長のもの。

「帰りますよ。山南さん。」

「私は帰りません。」

山南は沖田を睨み刀に手をあてる。

「聞いていいですか？何故、辻斬りをしたんです？」

おかしい。山南は頭がいいからこんなことをすればすぐ見つかると思われるだろう。

「私は血が欲しいのですよ。羅刹ではない沖田君にはわからないでしょうが。」

「なら、何故屯所から出て行ったんです？新選組には今、あなたと同じ羅刹がはびこってるんですよ。」

沖田は後半強く言い切った。

「それは……。」

山南はうつむき、そして顔をあげ、空を見上げた。綺麗な満月が見えている。

「私は……。伊東さんが入ったことで新選組での居場所がありません。それに土方君が言っていた屯所移転の話……。私はどうしても納得がいきませんでした。」

「それで抜け出したと？」

山南は頷いたように顔をこちらに向けた。

「私は疲れたんでしょうね。殺すことを好きになりすぎてしまった。羅刹になってから血を吸う快感。人間には絶対にはない感覚が私に襲ってくるのです。私は気が付いていました。こんなことはなんにもならない。いいことなんて一つもない。そして自分の体がしぼんでいく。」

「……。！」

沖田は山南の顔にびっくりした。山南は静かに涙を流していたのだ。

「私は屯所に戻る気はありません。沖田君どうか見逃してください。」

「

沖田は押し黙ったが山南に殺気をぶつけた。

「駄目です。僕の仕事はあなたを連れ帰る事です。あなたは知らないんだ。あなたが抜け出してどんなに悲しんでる人がいるか！口で駄目なら力尽くでも……。！」

沖田は唇を噛んで山南に向かった。山南の腕は半端ない。沖田は山南を兄のように慕っていた。近藤と山南。二人とも優しくて沖田を可愛がってくれた。あの男は別だが。

「くっ……。！」

沖田は思い切り斬りかかった。山南はなんとか沖田の斬撃を受け止める。

「山南さん……。僕は……。」

沖田はくっつつまる。言葉が出ない。

それでも沖田の剣は強かった。山南の腕ではもう勝てはしない。

そして山南の刀が川に沈んでいった。

パリンッ。その音が何も無いこの地に響いていた。

沖田は山南に刃を向けた。山南の喉元に。

「君は私を殺すのですか。」

沖田は答えなかった。ただ刀を山南に目掛けて前に進ませる。

山南は覚悟を決めた。近藤に絶対の信頼を置いている沖田。それを裏切ったのだから沖田は自分を許さないはずだ。山南は抵抗しなかった。

死ぬことに恐怖などない。沖田の刀の刃が喉元に触れ、先から血が少しあふれた。

と次の瞬間。

目に見えぬ速さで山南は床に押し倒されていた。目をゆっくりと開けると沖田の見たことがない悲しそうな顔が見えた。山南はあまりに驚いて何も言えなかった。

そして沖田は言った。消えそうな声で。

「僕はっ……！あなたを殺したくはない！お願いです……。」

山南さん……帰ってください。」

たとえ自ら命をたたなければならぬとしても。

沖田には山南を斬ることはできなかった。

できると思っていた。だが過去が思い出がそれを邪魔をする。

山南はふっと笑って大人しく頷いたのだった。

二月二十二日。

昼が少し過ぎたころだった。千鶴は屯所の玄関を黙々と掃除していた。

屯所は今、重苦しい空気に満ちている。

土方はあまり食事でも話さないし。永倉や原田も会話をひかえているところがある。

斎藤はいつもと変わらないように見えながらきつと心配しているのだろう。

平助は江戸に行っていていないので千鶴はそれもさびしかった。連絡で千鶴の家に寄ったが何も手がかりが掴めなかったと聞かされた。それで元気はでない。

何よりも、もう二週間ぐらいたった。沖田からの連絡はない。

彼のことだから必ずうまくやってくれる。それは信じているがやはり心配だった。

「ただいま。千鶴ちゃん。」

愛しい声が聞こえた。知っている声。千鶴は顔をあげあと数歩いけば触れられる位置にいる沖田と山南を見た。沖田は前と変わらず微笑んでいて、山南は元気がないというより人間らしい顔だった。

「お、沖田さん！！山南さん！！」

千鶴はすぐに駆けていきたかったがそれはやめた。山南のことがある。誰よりも先にあの人たちに伝えなければ。それを沖田も察してくれたようで沖田は優しく声をかけた。

「千鶴ちゃん。近藤さんと土方さんに僕たちが帰ったって伝えてくれる？」

「は、はい！今すぐ！」

千鶴は屯所内に駆けて行つた。

沖田は山南に目を向ける。

「行きましよう。山南さん。」

「ええ。」

昔と変わらない声色で山南は言った。

広間にはすぐに幹部が集まった。一番遅かったのが土方。

「さ、山南さん・・・！」

土方は息をきらし、目を見開いて山南を見た。

「申し訳ありませんでした。」

山南は近藤に頭を下げた。

「山南君・・・。」

近藤は辛そうに何も言えなかった。ほかの幹部もあえて何も言わない。

「私は腹をきらせてもらえるでしょうか？」

「！！！」

一番驚いたのは千鶴で声をあげそうになったが必死に口元を手で押さえた。

近藤は静かに頷いた。規則に例外はない。幹部たちはそれをつねに自覚しているはずだ。

土方は悲しそうに目をふせ、言葉を振り絞った。

「明日、明朝……。でいいか？」

「はい。わかりました。」

そう言つと山南は笑った。その顔は悲しいのか嬉しいのか誰にもわからなかった。

その夜、山南と最後の食事をとった。皆、どうしたらいいのかわからなかった。

「山南さん。久しぶりに飲みませんか？」

「いいですね。これが最後ですから。」

「いいお酒をもってきたんですよ。あはは。」

沖田はこんな時にもいつもと変わらずあははと笑っていた。みなが沖田のすごさを改めて知った。

「そ、そうだな。飲もうぜ。」

「お、おう。」

永倉と原田もそれに乗り、みんなで酒を飲みあつた。

斎藤も静かに飲んでいた。

ただ別れができない平助を千鶴は思った。

彼と山南は同門と聞いた。平助はどう思うだろう。
千鶴は悲しみを隠せなかった。

千鶴は我慢ができなかった。沖田が帰った。無傷で。そして山南を連れて帰ってくれた。

千鶴は夜、沖田の部屋の外に立ち止った。

すると襖が開いた。目の前に笑みのない沖田の顔が。でも怖くなかった。

「入りなよ。」

千鶴は今にも泣きそうな顔をしていた。沖田は自分の胸に千鶴を抱きしめる。

抱きしめられると涙があふれた。今まで隠していた涙。

沖田が無事で嬉しかった安心した。そして山南が切腹する涙。

千鶴は涙は優しいものだった。泣きじゃくったものでも弱いものでもない。

でも千鶴は明日のことを思うと何も考えられなかった。

沖田は千鶴に強引に口づけた。沖田の舌が入ってくる。

千鶴は沖田の腕をしっかりとつかみ、息をせず抵抗もしなかった。

「ん……」

やがて唇が離れると、沖田が布団に千鶴を持ち上げて運んだ。

これにはさすがに驚いたが声がでない。

前と同じ状況になった。

目の前に沖田の顔があつた。

なんて悲しい顔なんだろう。

同じことを二人とも思い、同時に口づけた。

その夜、沖田の布団で千鶴は眠った。

体の関係はない。ただ横で寝ただけで。

それだけで千鶴は不安をまぎらわすことができた。

自分でも驚いている。自分が沖田がいないとこんなにもボロボロになってしまうことを。

そして沖田のことをこんなに好きになってしまうなんて。

「沖田さん？」

千鶴は朝、目覚めた。そうだ。一緒に眠っていた沖田がいない。今、冷静に考えたらなんて恥ずかしいことをしたのか。沖田は別に着物を脱がしたりしなかったら安心したが。

「千鶴ちゃん。」

襖を開いたら朝の光が部屋に差し込む。そして沖田が襖をあけ、立っていた。

「お、」

おはようございますと言おうとしたが口が動かない。

「君は部屋にいたほうがいいんじゃない？」

今日は。山南が切腹する日。

「いや……です。」

千鶴は首を振った。

「山南さんを……見届けたいんです。」

千鶴の闘うような表情に沖田は微笑んだ。

「じゃ。外で待っているから。はい。着物。」

沖田は千鶴の着物を部屋からとってきて渡してくれた。

「ありがとうございます。」

千鶴はそれを受け取り、沖田が出て行ったあと、着替えた。

沖田は部屋の外で千鶴を待っていてくれた。
二人は見つめあったが何も言わず、皆の元へ向かった。

18・前日（後書き）

長くなりましたね・・・。

19・別れ（前書き）

15日に更新するつもりがデリートキーを押しちゃって全部消えてしまいました。

運のない私を呪ってください（笑）

19・別れ

土方はひそかに手紙を書いていた。彼女は山南の幼馴染だった。島原で芸妓をしていて足を洗ってからは壬生に暮らしていた。彼女に手紙が届くのはすぐだった。彼女は手紙を読み、ぐしゃぐしゃに捨てて家から飛び出していった。

永倉新八は山南の見張り役だった。朝、山南は食事をとることは許されない。理由はとる必要がないから。山南は目覚めるとけだるいように襖を仰ぎ見るが少し嬉しそうに永倉を見据えた。

「これに着替えればいいんですね？」

永倉を見つめ、用意されていた綺麗な白い着物を手に取った。

永倉は頷くこともできなかった。

山南は着替えるために脱ぎ始めたが永倉が山南の腕を掴んだ。

「山南さん！あんたはこんなところで死んじゃだめだ！もう一度ここから逃げろ！」

永倉は叫んだ。山南は優しい人だ。死ぬ必要などない。何もしていない。こんなところで命をおとす人間ではないのだ。ここで切腹するより逃げおおせてほしい。永倉は願った。

しかし山南は嬉しそうに微笑んだ。

「それはできません。私は腹を切ります。」

「なんで・・・だよ・・・なんでだよ山南さんっ！！」

「私は羅刹なのです。私は人ではない。化け物だ。しかし私は武士らしく、人らしく死ぬことができる。これほど幸せで嬉しいことはありません。だからあなたたちは私をどうか見届けてください。最後の瞬間まで。」

なんて嬉しそうなんだろうか。永倉は涙が隠せなかった。

沖田と千鶴が来たあと、山南と永倉は現れた。千鶴は山南の綺麗な

着物姿に驚いた。そして山南は朝なのにとっても機嫌がよさそうで、本当に羅刹なのかわからない。

「介錯は僕が務めます。」

沖田は山南に優しく微笑みながら言った。山南も嬉しそうに微笑み返す。ほかの幹部は全くだいい顔をしていなかった。近藤と土方は沖田の言葉になんとか頷いただけだった。

「私はいつでもいいですが……。」

山南の声が殺風景な広間に響いた。皆は目を見開くように反応した。「待ってくれ。もうすぐ来る。」

「何が来るのです……？」

土方の言葉の意味が山南にはわからなかった。

「敬助さん!! 敬助さん!!」

屯所の外に、かすかに女性の声が聞こえた。山南は目を見開いて、勢いよく広間の襖をあけた。すると外に一人の女性が立っていた。

「敬助さん!!」

「明里……。」

明里は山南に走り、抱き着いた。そして泣き叫んだ。

千鶴は明里と山南が話しているのを遠巻きに見ていた。なんて悲しそうな表情をしているんだろう。山南も明里も。もう二度と会えないのだ。

自分は違う。父は生きている。でも山南は今日死ぬ。

今、彼女の抱えている悲しみは千鶴の想像以上だろう。

「僕は隣にはいないよ。」

沖田が後ろから抱きしめてきても千鶴は驚かなかった。頭がぼーっとしていて反応ができない。沖田の言葉の意味が千鶴にはわかった。「はい……。私は大丈夫です。」

彼は介錯を務める。介錯とは切腹するのを補助する人間のことだ。切腹は腹をきる。昔は内臓を抉り出していたらしいが今はそんなことしない。それでも腹をきっても相当の痛みを伴い、すぐには死なない。山南はさらに羅刹なのでなかなか死なないだろう。だから介錯人がいるのだ。介錯は刀で首を斬り落とす。これは斬首とは全く違う武士の切腹だ。

「泣いてもほかの人に抱き着いて泣いちゃだめだよ。」

沖田はからかうように言った。

「わかってます。」

沖田に抱きしめられているとなぜか安心した。沖田はすつと離れ、後ろを振り返った。案の定、予測していた通りだ。

「千鶴！総司！」

「へ、平助君？」

平助が江戸から帰ってきたのだ。土方の文を受け、急いで平助は帰ってきた。

「山南さん……。。」

平助は山南の名をかすける声で呟いた。そしてそれだけで平助はふらりと去って行った。

しばらく、山南と明里が話していると明里の家族と思われる男が明里を迎えに来た。しかし明里は山南にくっついて離れなかった。

「嫌！離れたくない！敬助さん……。」

「帰ってください。明里。」

「嫌……。嫌です……。。」

明里は泣きじゃくっていた。

「あなたは武家の妻でしょう。あなたがしつかりしないといけません。」

明里は山南を見つめた。山南は優しく微笑んだ。

「私は武人として死ぬるのです。あなたは喜んでくれますね？」

「そんなこと……っ！」

できるわけがない。明里は山南を涙で溢れる目で見つめ、腕を離れた。

明里はずっと見つめていた。幼馴染の優しい男。自分が島原に行ってもよく顔を見せては自分とよく話してくれた。

「ありがとう……。」

最後に交わした言葉はさよならじゃなかった。

山南は微笑みながら一筋の涙を流したという。

屯所の庭には静寂に満ちていた。幹部は全員揃い、山南を囲んだ。山南は地面に膝をついて後ろに腕をやっていた。近藤と土方は山南の前方に。沖田は山南の後ろに刀を持ち立っていた。すすり泣く声が聞こえる。誰が泣いているのか誰も気に留めなかった。

「何か言い残す言葉は……。」
土方は辛そうに言葉を振り絞った。

「そうですね……。近藤さん……。あなたは局長になって大きな組織を作り上げました。どうかこれからもこの国のため……。
闘ってください。」

近藤は頷いた。とても静かに。

「土方君……。あなたとの思い出は私の中に一生根付くでしょう。本当に楽しかった。ありがとう。」
土方は顔を変えなかった。

「永倉君、原田君。あなたがたは強い。局長や副長が困っていると
き・・・その性格で励まして・・・助けてあげてくださいね。」

「山南さん・・・」

永倉も原田も声を殺して泣いていた。声を上げていなかったが平助
は大粒の涙をすでに流していた。それを弟のように思う山南は愛し
く見つめた。

「平助君。君はもつともつと強くなります。私なんか超えてしまっ
てしょう。頑張ってくださいね。」

平助はしゃくりあげそうになる声を殺した。

「斎藤君・・・左利きのあなたはずっと煙たがられていたでしょ
う。その強さを妬まれていたでしょう。でも違う。ここはあなたに
とって闘える場所のほずです。信じる力が強い君だ。最後までよろ
しく願います。」

斎藤は小さく頭を下げた。

「源さん。あなたは私にいろいろなことを教えてくれました・・・
本当にありがとうございます。」

「こちらこそ・・・」

井上は涙を流した。

「そして・・・雪村君。」

千鶴は自分の名に驚いた。

「君は総司のことよろしく願います。この子は死んでも心配な
んですよ。頼めますね？」

流すことが許されない涙が溢れて流れた。もう止めることはできな

い。土方を盗み見ると彼は口を押え泣いていた。

そして沖田の刀を持つ手がかすかに震えていた。千鶴は静かに頷いて沖田と山南を見つめた。山南は微笑んで最後の言葉を口にした。

「総司。あなたが私を楽しんでください。あなたが介錯で私は幸せです。ありがとう。」

最後に沖田はかすかに微笑んだ。そして。山南は腹を切った。

沖田は自分の務めを果たした。

山南の首が飛んだ瞬間。世界は変わった。千鶴の意識は無意識になった。

涙を止めようにも声を止めようにも理性というものが消えうせた。

そして沖田に抱き着いた。

「うつ……さん……なんさんっ！！！！うわあああああ
！！！！」

千鶴の叫びは響き渡った。沖田は苦笑して千鶴をしつかり抱きしめた。声を殺すように口を沖田の体で押さえる。そんな姿を皆、悲しんだ。

「ありがとう。」

沖田は山南に呟いた。それは、誰にも聞こえなかった。

二月二十三日。

女性から、子供から、隊士からも好かれた新選組総長山南敬助はこの日、武士として人として誇り高くこの世を去った。

あの土方さんでさえ、山南さんの最期を泣いていたのに。

沖田さんは最後まで決して泣かなかった。

そして三月十日。新選組は西本願寺に屯所を移した。

19・別れ（後書き）

山南さん！沖田のことは弟だと思ってたのです！

沖田は最後まで泣かなかったと思う。

本当なら可愛がっていた隊士とかの名前も言っただけでは？

伊東さんはカット。

切腹はあつてゐるかわかりません。間違つてたらごめんなさい。

明里さんとは悲恋だったのかも・・・。

20・血と瞳（前書き）

昨日更新できませんでした！二十話目！本編は適当に流していきま
す。ゲーム見ながらだと完璧なネタバレです。本編のところに
ない会話をいれてます。多少変になってもお気になさらずに。

20・血と瞳

慶応元年 閏五月

山南が切腹し、西本願寺に屯所を移した新選組は今まで通りの生活を送っていた。千鶴は最初は違う屯所になって気がきでなかったが落ち着いてきた。それでも山南がいなくなった痛みはそう簡単にとれない。今でも彼の顔を思うと胸が締め付けられた。

西本願寺は大きく、隊士たちも十分休めるようでも何も文句はなかった。それでも山南が出て行った原因にあたる可能性がある移転の話には気が引けた。

沖田は何も言わなかった。山南がどうして出て行ったのかと土方に聞かれたことがあったが何も言わない。

千鶴は自分がよそ者だと自覚していた。だから彼の死を悲しむだけで追求はしなかった。
教えてあげればいいのは明里にだろう。明里はまだ山南の死に納得がいっていないだろうから。
人は欲深い。死ぬべき人間でさえ恋しく思ってしまう。
何故、こんなにも矛盾しているのだろう……。
千鶴はそう一人思った。

ある日、その日は平助と共に巡察に来ていた。彼は元気がない。千鶴の父の手がかりがつかめなかったことをすまなさそうに言った。
京の町を歩いていると、浪士が目についたり、どきつい商売をしていたり……。新選組の前でも堂々とガンを飛ばして来たり……。巡察も気が抜けない。
それと同じに、綺麗な女物の着物や、簪など千鶴の年頃なら誰もが身に着けているものが目に見えた。
「千鶴？」
ぼーっとしていたらしく平助が心配そうに顔を覗き込んできた。

「え？あつ。はい！」

千鶴はすぐに顔を上げると赤くなりながら平助を見た。言葉は出ない。

平助は首をかしげながら、大声で叫んだ。

「おい。総司く！そつちはどうだった？」

沖田総司。今、千鶴の思い人。二人は隙を見ては一緒にいた。まだ口付けで終わっているが沖田との会話は楽しかった。けれど彼はあまり元気ではないように見えた。それは幹部のほとんどがそうなので（永倉と原田は酒を飲みに行っているが。）

「千鶴ちゃん？」

沖田は意地悪な笑みを浮かべていた。

「これが欲しいの？」

千鶴の近くにあった簪。それを沖田は指差した。

「そ、そんなことは・・・！」

「ふーん。」

沖田はまだ意地悪に笑っている。

その時、沖田は咳をした。それはそう簡単に止まるものではなかった。

今思えば、その時もつと沖田を心配すればよかった。沖田は人の前では決して弱みをみせないから、皆はうまいこと騙されてしまう。

彼は千鶴に心配をしてほしくないのか。あるいは・・・。

そうして咳が止まったころ・・・。三人の浪士が一人の女を取り囲んでいた。それを沖田は颯爽と助けた。

これが南雲薫との出会いだった。千鶴の宿命ともいうべき出会いだった・・・。

「本当のこといいなよ。欲しかったんでしょ。」

「だから別にいらないですって!」

沖田は昼間の簪のことをうるさいほどしつこく聞いてきた。千鶴は少し気が悪かった。沖田の顔はいいことを考えているようには全然みえない。

「怒ってる?」

千鶴は唇をとがらせて少しふくれた。そんな千鶴を沖田は抱きしめた。

「可愛い。千鶴ちゃん可愛い。」

「お、沖田さん!」

ぎゅっと抱きしめられ、千鶴は息ができなかった。

その時、また沖田はほんの少しの咳をした後、沖田は目を変えて千鶴を見据えた。

「さ。千鶴ちゃん。もうすぐ出かけるんだから準備しなくちゃ。」

今夜、新選組は將軍が上洛するので二条城の警備を任されていた。これは大変名誉なことだった。

そして沖田と平助は参加しない。沖田は土方が過保護だと言っていたが諦めていた。

「はい。あの、いつてきます!」

千鶴は首に横を振って周りを何度も見まわした。そしてゆっくりと沖田の肩を掴むと背伸びをした。

沖田は何をされるのかわかったようで嬉しそうに待っていた。そして。

「えー?口じゃないの?」

「そ、そんな恥ずかしくてできませんよ!」

口にされると思っていた沖田はふてくされたように言った。そして沖田は千鶴の唇に一瞬の口づけをすると。

「いつてらっしゃい。」

そう笑って去って行った。

その夜、二条城の前は警備で固められていた。誰も入ることは不可能だろう。そう思ったのが間違いだった。

風間千景率いる鬼たち。

彼らは異質な雰囲気を漂わせ、千鶴に笑む。

千鶴は自分の境遇を知る。

彼らは千鶴を同胞と言った。確かに、昔から怪我が速く治ったり・
・。普通の子供とは違った。

土方たち、幹部は千鶴を守ってくれた。

千鶴は嬉しかった。しかし自分は無力だった。

自分は守られる存在でしかない。それが情けなくて・。悔しかった。

山崎に連れられ、沖田のところへ行ったとき、彼は悔しそうに唇を噛んでいた。

そして彼は言った。

「君は大丈夫。僕が絶対に守ってみせるよ。」

彼の笑顔に千鶴は救われた。彼は自分を好いてくれている。それが嬉しかった。

「私は戦いたいんです。私は・。。」

沖田は千鶴の頭に手をポンとのせる。

「君は強いよ。だから心配しないで。」

昔の沖田との会話でこんな言葉は耳にすることはなかった。最初から千鶴に気さくに話しかけ、笑みはたやさなかった彼だが今は千鶴にだけ特別な笑みを与えてくれる。

千鶴が安心したその時。

「ゴホツ・。・ゴホツ・。・。。」

沖田の咳が響く。

「沖田さん!!」

千鶴が背中をさすると彼はうつとうしそくに千鶴を見た。それにゾクリときた。

「大丈夫・・・だから・・・。」

「で、でも！平助君を呼んで・・・。」

「駄目だよ！そんなことしたら斬っちゃうから・・・。」

彼は千鶴を好きと言いながら斬るというのか。千鶴には何もわからなかった。彼が好きなのに彼の思いがわからない。彼は内に何か隠している。彼が打ち明けてくれる日はくるのだろうか。

沖田はやるせないような顔をしている。最近の彼は・・・。

どこかに行ってしまうそうで。
恐かった。

「新選組・・・。あれが千鶴のお守り役か。」

風間千景。西の鬼頭領。その血は誇り高き鬼。身体能力も頭脳も人間とは違う。

風間は面白そうに笑った。

「新選組は浪士の集まり。そう簡単に彼女を受け渡すでしょうか。」
天霧が横から口をはさんだ。

「心配ない。あんな田舎侍の集まり、すぐに潰れる。」

風間が言ったことは間違いはない。けれどそう簡単に人は決まらない。

鬼といえど運命は絶対に決めることなどではない。

20・血と瞳（後書き）

グダグダ
WWW

21・鼓舞（前書き）

本編は会話ほとんど違います。ご注意ください。

その日、松本良順という医者が新選組の屯所へやってきた。彼は近藤と意気投合したらしく、屯所まで訪れ、健康診断をしてくれた。千鶴は父から何かあったら頼れと言われていたので京に来た唯一の希望だった。

結局、家に訪ねてもいなかったなので今にいたるわけだが。

彼は腕のいい医師だ。だから歴史に名を遺したわけだろう。

新選組の今の状況はよくないらしい。そうかもしれない。風邪は多いし、稽古も厳しい。

千鶴はこの時よくない予感がしていた。なにか勘みたいなものか。案の定。それはあたっていた。

沖田が労咳。

労咳とは有名な死病。

その苦しさは口では言えない。

千鶴がそれを聞いたとき、思った。

きつと彼は千鶴には打ち明けないだろう。彼はそういう人なのだ。千鶴は彼に聞けない。それも彼はわかっているのだろう。

「千鶴ちゃん。」

物陰に隠れていた千鶴はドキリとした。

「出ておいで。」

そう彼の優しい声が千鶴の胸に激しく波をうつた。

声に、言葉にならない感情が溢れては消えた。

そうして意識はなく沖田に抱き着いていた。

「どうしたの？」

沖田は子供をなだめるような言い方だった。

「泣いて……ませんか！」

千鶴は顔を上げた。その顔は目をはらし、涙をためていた。それでも彼女は泣いていないという。

「ふふ。君はどうしてそう頑固なの？」

「そんなことありません！！沖田さんこそ……。」

「何？」

「病気のこと私には隠さないでほしかったです。それは……。」

私はよそ者ですけど……。」

「違うよ。」

沖田の目は優しくかった。

「僕は君がよそ者だから言わなかったわけじゃない。隊士には絶対言えない。それはわかるよね？」

千鶴は頷いた。

「僕は心配かけさせたくなかった。特に君には。隊士たちに言えないなら言う必要はないよね？」

「でも・・・隠されるほうが嫌です。私、沖田さんのこと何も知らない。わかってます。私はまだまだ子供だって。沖田さんは私が邪魔なら斬る人です。それが事実で・・・悲しくて。」

千鶴は涙を拭いた。彼の前で見せたくない。

「沖田さんはずるいんです。私がさみしい時や悲しい時には手を差し伸べてくれるのに自分が辛い時は遠ざける。」

よくここまで自分を理解しているものだ。沖田は感嘆した。

「そうだね。でも僕は君と痛みを共有なんてしたくない。君は幸せになるんだから。」

「どうして！？どうして自分が幸せになることを考えないんですか？私っ！知ってます！沖田さんがよく暗殺に出かけてることだって・・・。」

沖田は真顔になる。

「辛いなら私を頼ってください・・・お願い・・・。」

沖田を掴む手の力が次第に抜けていく。

「ありがとう。千鶴ちゃん。」

沖田は千鶴の頬に触れる。

「君は僕の奥さんみたいだね。」

「えええ！？奥さん！！？？」

「何、驚いてるの？君がずっと僕のこと好きならいずれそうなるんじゃない？」

「そうかも・・・しれないですけど・・・。」

さっきまで泣き顔を隠していたのに今は恥ずかしがっている。

「あは、あははは！！！」

沖田は笑った。こんなことなら労咳は消えるのではないか。ふと思ってしまう。

「言っておくけど、僕は君に嫌われても永遠に君のことが好きだから。簡単に逃がさないよ。」

千鶴は全身赤くなったのではないかと思われた。口をパクパク開けて何も言えなくなってしまう。

その表情に沖田はまた笑った。

「もう沖田さん！真面目な話なんですよ……。」

「ごめん。でも君は覚悟ができてる？僕からは逃げられないってね。」

「そんなの。沖田さんと一緒にいたら嫌でもわかります。私は逃げません。あなたのことが好きですから。」

千鶴は恥ずかしいことを言ったのに今の瞬間は何も恥ずかしくなかった。どうしてだろう。ああ。そうか。素直な気持ちだからだ。

沖田は何を思ったのか千鶴を抱きしめると口づける。誰かに見られたりとかそんなのどうでもいい。少しでも彼女といたかった。ただそれだけで。

千鶴も沖田との口づけを拒むことなく受け止める。

永遠に続くと思っていた日々は時が進むごとに消えていく……。

松本先生に屯所の掃除を頼まれて、千鶴は沖田としばらく別れずみずみまで綺麗にしていた。屯所は広いので大変だったが中は隊士たちが手伝ってくれたし。（土方が命令した。）だいたい大丈夫だろう。

外には雑草や、葉っぱが落ちていたので箒ではいていた。

外は気持ちがいい気がした。けれど沖田のことを考えると落ち着かない。

そんな時。

「お前は雑用をやらされているのか。」

この声。顔を上げると彼がいた。風間千景。自分と新選組の前に立つ鬼と名乗る男。

「何しにきたんです？」

千鶴の強気な反応に風間はほくそ笑んだ。

「そう睨むな。今日はお前を連れ去るつもりはない。」

「あなたは意味がわかりません。本当に私を連れ去るために新選組を襲ったのですか？」

「何？」

「あなたは楽しんでいるだけです。私はただの口実。そうでしょう？」

以外だった。この娘は風間のことをよくわかっている。池田屋と此間の二条城で会ったときり会話もろくにしていないのに。

「あなたは鬼でなぜか私を同胞と呼んだ。私には信じられない。あなたは自分の思うとおり生きいるのでしょうか。だけど私はそんなこと関係ないんです。私は……。」

風間は目を見開いている。彼女は予想していた女ではない。弱い女ではない。守られているだけの女ではない。彼女は自分なりに風間に抵抗している。闘おうとしている。敵わないと彼女も知っているだろうに。

風間は微笑んだ。その表情はいつの間にか優しく。

「お前は良い女だな。やはり我妻にふさわしい。」

「は？」

風間是不敵に笑んだ後、今日の要件を話し出した。

千鶴の父、綱道。千鶴との関係。風間は綱道がこちら側と言った。訳が分からない。

土方たちが助けに駆けつけてくれたので彼は去って行った。

風間はこの時、彼女の惚れたのかもしれない。鬼というだけではない。彼女は怯えていなかった。ただ千鶴の瞳が風間にとって初めて

美しく思えた。それがいつまでも忘れない感情だった。

22・打倒沖田総司大作戦（前書き）

かなりの空白の時間が存在します。本編ではもうちー様が来た後、慶応二年になります。今は元年の五月。すごい空白。なのでちよこちよこネタを入れていきます。相変わらず伊東さんは出ないかな・・・。山崎君が大好きなのでいれるかも。だいたいは総司中心。あれだ。平助とか元気ない感じだったけど元気いっぱいです。多分。うちながら考えるとグダグダになります・・・。

22・打倒沖田総司大作戦

慶応元年八月。

「あつつゝ土方さん暑いよ。」

「俺に言うな。馬鹿野郎。」

平助が縁側でくつろいでいると横に珍しく座っている土方が苦い顔で言う。実は土方は暑すぎて書き物ができないので縁側で涼んでいるというわけだ。

「なんでこんなに暑いのかねえ。土方さん。」

「知らねえよ。お天道様にでも聞け。」

土方もおー暑いと言いながら汗をかく。平助はまだ着物は涼しい。土方はきっちり着ているので絶対暑い。でもまた土方に着物のことを言ったら怒られそうだから言わない。

庭を眺めていると誰かが現れた。あれは。

（千鶴だ。）

あえて声はかけずこちらに気付くのを待つ。彼女は洗濯ものを干していた。なぜか干している彼女はキラキラ光って見えた。

「ま、眩し……。」

「ああ？何がだよ。」

「いや。別に……。」

土方はもはや面倒くさそうだった。ここにいること自体が。二人が黙って千鶴を眺めているともう一人が現れる。

あれは。誰が見てもすぐにわかる。

その人物は千鶴を後ろから抱きしめ、千鶴は困った顔をしている。

「こらあああああ！！総司いいいい！！」

平助も叫ぼうとしたが土方の怒声でそんな気失せてしまった。

「なんですか。土方さん。こんな暑い昼間からよくそんな大声で叫べますね。」

くすくす笑う沖田は平助から見ればかなりの勇者だ。平助にはそんなマネ絶対にできない。土方は千鶴を解放し近付いてきた沖田を睨みつける。

「本当によくそんな体力ありますよね。さすが鬼の副長。」
「せーの。」

平助が土方の息を吸うところを見ると自然とそんな掛け声が浮かんだ。

「てめえこそ昼間っから何してやがんだあああ！！！！だいたいお、俺の前でちやらちやらすんなって言っただろうがあああ！！千鶴の迷惑になってんだよ。こんな暑いってのにくつつきやがって……。」

「土方は思っ存分吐き出すとはああと息をつく。沖田は顔色をかえず振り返って。」

「千鶴ちゃん。迷惑だった？」

「えっ。あの……。」

土方は千鶴を睨みつける。

（ひいひいひい……。）

その眼は怖すぎて言葉にならない。千鶴はためらって。自分の命を優先した。

「迷惑で……す。」

強く言おうと思ったのに消えそうなくらいな小さな声になってしまった。

「可愛い……。本当に千鶴ちゃんは素直だね。」

沖田は千鶴に抱き着く。

土方は声もでなかった。平助も今の状況がよくわからない。

「じゃ。そういうことで土方さん。千鶴ちゃんは迷惑だった。僕はごめんと謝った。それでいいでしょ。あゝ暑い。千鶴ちゃん。早く入らないと真っ黒になっちゃう。行こう？」

千鶴は最後まで二人の顔をみながら沖田に連れ去られた。

「ひ、土方さん……？」

「あの野郎。今度いう今度は許さねえ。」

最終手段だと言って土方は悪魔の笑みを浮かべる。平助は独り置いてけぼりにされたが今気づく。

（あつ。体、すごい涼しい……。。）

今日は特別、千鶴と沖田はくっついていて。今まで意識していなかったが、食事するときは千鶴は沖田の隣だし。見かけると沖田がくっついていて気がする。

平助は横にいる大人の男。その名も原田左之助に聞いた。

「なあ。左之さん。総司と千鶴って・・・その・・・できてる？」

「ああ？お前今まで気づかなかったのか？」

「はあ？左之。ちょっと待て。」

小声で言ったのに新八は大声で叫ぶ。

「総司と千鶴が付き合ってる？???」

左之助は何も呆れて何も言えない。平助は衝撃だった。さっきよりも。

「あはは。ついにばれちゃった。」

「お、沖田さん!!」

沖田は面白そうに笑う。千鶴は顔を赤くしながら沖田の腕を掴む。

その顔は必死。

「本当なのか。千鶴・・・。」

平助は震える声で聞く。沖田が一人で言っているだけかもしれない。千鶴は沖田の顔を見たがその顔はいつもと変わらず微笑んでいた。けだった。

「うん。」

「!!」

平助と新八は腰を抜かす。いや。もう座っているが。

「へへ。総司と雪村君がねえ。」

井上はまるで青春だね〜とでも言うような口ぶりだ。

「ねえ。何、チラチラ見てるの。斎藤君。」

沖田が意地悪く斎藤に言くと斎藤は。

「別に見ていない・・・。」

（い、いつもの一君じゃない!!）

斎藤は尋常じゃなくビクビクしていたであろう。彼もまた衝撃だっ

た。

「てめえら。つべこべ言つてねえで早く食え。斎藤。お前は夜の巡察だろうが。」

「は、はい！副長！」

斎藤は焦って飯を食べる。そうして沈黙が流れこの場はお開きになる。

「おい。てめえら……。」

土方は食事が終わり、あの悪魔が出て行ったと同時にトリオに近付く。

三人は気づいた。いいことを考えていない。この人は。

「俺の部屋で楽しい話をしようぜ……。」

三人は硬直し何も動かなかったが、首だけは縦にふれていた。

こうして打倒沖田総司、千鶴を奪い返す作戦がはじまるのだった。

22・打倒沖田総司大作戦（後書き）

千鶴はみんなのアイドルです。沖田だけ独り占めは許さん。みたいな。

一君もちろん参加するはず。

23・ 作戦開始（前書き）

なんかタラタラいきそうなんですが・・・。40部くらいになったら読むのも大変ですよ。薫を出すか迷ってます。羅刹って史実にないんで大変ですね。EDは二つ作るつもりです。

23・ 作戦開始

その夜、土方の部屋に平助と新八、左之助が集まっていた。

土方はくははと笑いながら明りのせいかな幽霊のように笑みを浮かべる。

「いいか。総司に痛い目あわせてやる……。」

「ひ、土方さん。それはやめたほうが……。」

「ああ？」

平助は止める言葉をかける。

「土方さんも、付き合い一番長いんだから総司の性格知ってるだろ？」

土方は平助の言葉に口を固く結ぶ。そして悪魔のような沖田の顔を思い浮かべる。昔から生意気でいたずらが大好き。土方の俳句集はすぐに盗まれるし、仕事はさぼるわ、稽古も教えるのが下手だわ……。

「だがあいつのことはいずれこうしなくちゃなんねえんだ！千鶴も可哀そうだ。あんなどうしようもねえ奴に好かれて……。」

沈黙が落ちる。平助は千鶴のことが好きだ。いつの間にか恋愛感情が入っていたのかも……。沖田と千鶴が一緒にちやらちやらしているところなど見たくはない。けれど……。

「でさ。どんな作戦なんだ？」

左之助が面白そうに聞く。

「ああ。まだ全員そろってねえからな。それから……。」

「副長。」

その時、襖が開くとともに声が聞こえる。現れたのは山崎と斎藤。二人は無言で座ると、土方が淡い笑みを浮かべる。

「やっとそろったな……。」

「あの……。副長？」

何故よばれたのかわらない山崎は聞く。

「よし。では言うぞ。まずはお前からだ。平助。」

「えええ！？？俺！？」

「いいか。山崎、斎藤もよく聞け。千鶴と総司が付き合ってるのは知ってるな？」

「・！」

「これは総司にこれ以上華をとらせねえ作戦だ。お前ならわかるだろ。新八。」

「え？なんで俺にふるの？」

新八の言葉も土方は無視。

「もてねえお前なら（左之助は除く）総司みてえな奴にあってんできた女がいること自体間違ってると思わねえか？それに総司に痛い目見せられたやつは俺だけじゃねえだろ？」

土方の言葉はつつこむところも多いが頷くところも多い。左之助は一人、関係ないという顔をしていたがほかの四人は深刻だ。

「あんなひねくれ者に千鶴は惑わされているだけだ。さっさと覚ましてあの悪魔から救ってやろう。」

土方の笑いが入った言葉に気付いたのは左之助だけでほかの四人は。わかった！土方さん！俺、やる！」

「俺もやるぜ！！」

平助と新八が立ち上がる。

「確かに沖田さんはいい加減すぎますからね。これを期に少しでも真面目に仕事をしてくれれば……。雪村君を救うためにもなるなら俺は協力します。」

山崎は協力するらしい。あとは斎藤だ。

「お、俺は……。」

たしかにあの千鶴が沖田などというあんなふざけている男と付き合っているとは信じられない。斎藤も土方と同じく、沖田の悪魔の笑みが脳裏に浮かんだ。

「や、やります・・・。」

こんな柄ではないのだがここはやるしかないだろう。

「よしっ！では作戦その一だ！」

こうして沖田に痛い目にあわせるべく作戦会議は真夜中までおよんだ。

翌日。相変わらず暑い。まずは平助から。平助が命じられたことはとにかく千鶴という。沖田を近づけさせるな。

（もう・・・。土方さんも無茶苦茶言うんだから・・・。）

沖田を近づけさせないなど至難の業だ。というより千鶴が好きなら独占欲が強い沖田のことだ。沖田が平助を許すはずがない。剣では勝てないことを知っている平助は溜息がでるばかりだ。

「あいつ・・・俺のこと殺しそうだし・・・。」

「平助君？何か言った？」

「ち、千鶴！??」

いつの間にかの独り言と千鶴が横に座っていたのが驚いた。否、さつき自分で近付いたのだった。

「どうかしたの？ 具合でも悪い？」

「！！」

首をかしげて聞く千鶴は男装していても可愛い。彼女は屯所に来たときよりも成長し、綺麗になったと思う。

平助が赤くなっていると足音が。

「やだな！。平助とくつついて何してるの？千鶴ちゃん？」

「沖田さん！」

元気そうな沖田の顔に千鶴は喜ぶ。沖田は平助と千鶴が腕がふれていたので平助を睨む。

[illegible]

もう、目で殺すと言っている沖田。なのに千鶴は。

「沖田さん。おはようございます。今日は巡察よろしくお願いします。」

微笑んで頭を下げている千鶴。反応している沖田の顔を見れば赤く染まっただけ嬉しそうだ。平助はこんな顔めつたに見られない。否、見たことがないので驚いた。

「うん。で……平助？」

「はい！」

沖田のどすくろい声に平助の声は震える。

「何？千鶴ちゃん何してるの？ねえ？」

平助は迷った。ここで逃げては……土方に怒られる。沖田にか
ければ殺される。

普通なら命を選ぶだろうが……ここは男だ。

「べ、別に千鶴は総司のもんでもないだろ？」

目をそらし言つと、感じる殺気。

「へえ……。へーい度胸してんね。平助。」

沖田は微笑むと、千鶴の手を握り連れ去る。

「じゃ。あとでね。平助。」

不敵な微笑みをして去る。この後、千鶴が沖田に恥ずかしめられ、さらに平助が沖田にひどい目にあわされることは言っまでもない。

「チツ。何やってんだ。あの野郎・・・。」

暇な副長と同じく暇な二番組組長永倉新八は庭の陰から平助を見守っていたのだ。

「土方さん。平助はダメだ。千鶴ちゃんにデレデレしすぎだ。俺は大丈夫だ。もっと胸のあるほうが・・・。」

「何の話だ。何の。」

「明日は俺がやるぜ!」

新八は拳をならし、やる気満々だった。

「もう駄目でしょ。ほかの男と二人きりになっちゃダメだって。」

「す、すいません……。あの沖田さん……。顔近いです……。」
沖田の部屋に連れてこられ壁に押さえつけられる。

「君が悪いんじゃない。僕、体調悪くなっちゃうよ。」

「それはダメです!」

千鶴のころころ変わる表情に嬉しそうに沖田は笑う。

「ふふ。千鶴ちゃん。目を閉じて。」

「え?」

「早くしないと、もつといやらしいことするよ……?」

甘い声で囁かれると同時に頬を舌でなめられたあと深い深い口づけに襲われる。

「あつ……。ん……。。」

「千鶴ちゃん。可愛い声でるようになったね。この後のことも期待してる?」

「そ、そんなこ……。ん……。。」

続けられる口づけに千鶴は息ができない。

「愛してるよ。千鶴。」

沖田が呼び捨てにした。千鶴はその意味がなんとなくわかる。

「はい。私もです。総司……さん。」

総司さん。その呼び方に沖田は嬉しく、ついに我慢ができなくなつた。でも理性が止める。

（駄目だ……。夜までは……。）

「総司……さん?」

顔の赤い可愛い千鶴を見れば離せなくなる。

（今はこれだけで・・・。）

その日、我慢できなくなった沖田は千鶴を抱いた。何故ならその日は夏なのに大雨だったから。

好きじゃない雨に感謝しよう。雨の音に千鶴の声は消えるから。

23・ 作戦開始（後書き）

あの抱いてるシーンはだめですよ。18禁です。

簡単に言つと土方さんたちは邪魔してるはずなのにどんどん二人の愛がたかまるっていう・・・。このままだと子供ができるぞ・・・？

24・切望（前書き）

アニメでいつも涙腺崩壊です。

本当、これ沖千好きじゃないと読めないと思います。

斎藤さんとか好きなのに出版少ないし、いや今回左之さんのほうが・・。

そっぴいや近藤さん出てきてないね・・。

24・切望

「沖田さん・・・？」

千鶴は少しだるい体を起こすと彼の名を呼ぶ。彼は起き上がっていったけれど着替えず、ただ前を睨んで真剣な顔をしていた。

「もうこんなことしないから。嫌いにならないでね。」

「えっ・・・。」

沖田は千鶴を見つめた。その瞳はなんて悲しそうなんだろう。千鶴はしがみつくように彼の腕を掴んだ。

「どうしたんですか！？沖田さん？」

昨日の行為は愛情がこもってたのではないのか。男の欲を満たすだけだったのか千鶴にはわからない。沖田が大好きだった。いじめられたりしたけれど彼は優しい。好きならばああされて嫌なはずがないではないか。

「僕は・・・もう健康じゃないから。君に病をうつしたら大変ですよ。」

千鶴は声がでなかった。彼はそんなことを気にしているのか。彼は労咳。病は人につづるかもしれない。千鶴も少しは知識があるので彼の言っていることはわかる。

「どうして・・・？そんな寂しいこと言っんですか！」

千鶴は悲しいを通り越して怒っていた。

「私は沖田さんの病なら喜んでうつります。ええできるなら代わってあげたい。私はあなたに何もできないから・・・。あなたが望むなら私は何でもしますから・・・。そんな寂しいこと言わないで・

「。。。」

千鶴は泣いていない。けれど沖田には彼女が泣いているように見えて仕方がなかった。

「千鶴ちゃん。。。」

沖田は優しく彼女を抱きしめる。昨日は彼女を抱いてしまった。彼女に病がつるかもしれないと怯えながら。けれど彼女が可愛くて、彼女と二人の世界になってしまった。

こんなことになるなんて平助のおかげだな。

彼女と平助がいたとき、殺意が溢れて仕方がなかったから。

「僕は君をもう離せないから。。。。君も僕を離さないでほしい。」

「はい。。。。沖田さん。。。。。」

二人はもう離れることができない。

結ばれる、こんなにも固い鎖で。

恋とは恐ろしい。

ほとんど沖田は思ったものだった。

昨日は雨が降って、今日は涼しいかと思ったのに変わらず暑い。否、

余計暑くなつた気がする。

沖田は朝から巡察だった。夕方まで帰つてこないらしい。

千鶴は土方に呼ばれていたので土方の部屋に赴いた。

（まさか・・・昨日のことがバレたとか・・・？）

初めてでどうしていいかわからず思いっきり叫んでしまった。雨の音で掻き消えていると思うのだが。

「土方さん。千鶴です。」

「おう。入れ。」

千鶴が部屋に入ると。

「千鶴ちゃん。」

「な、永倉さん。」

永倉新八がこの部屋で座っていた。いったい何が始まるのだろうか。千鶴は座り込むと恐る恐る土方を見た。

「あの・・・土方さん・・・何でしょうか？」

「ああ。お前、暑いだろう。」

「えっ？それは・・・みなさんも同じではないかと・・・。」

「そうだな。俺も暑い。皆、暑い。けどお前は女だ。」

「！」

「お前はいい働きをしてくれてる。あの・・・風間のことは気になるが今日くらい休んでいい。」

「そんな・・・私、迷惑かけるばかりで・・・。」

土方は淡く笑う。

「そんなことねえよ。現にあの総司が最近丸くなりやがった。機嫌の悪いときは前より機嫌が悪いがな。お前の存在があいつにとって良くなってるんだろうな。」

千鶴はぽつと赤くなつてから新八を見た。

「あはは。大丈夫だって。千鶴ちゃん。言いふらしたりしねえよ。」

「は・・・い・・・。」

「でだ。休むといつてもこんなに暑いんじゃ、ゆっくりできねえだろう。今から新八と一緒に氷を食ってこい。」

「氷!？」

「今、京ではやってるらしくてな。氷を細かくしたやつの上に甘い蜜がかかってるんだと。俺も食いてえが今は手が離せねえからな。行つて来い。」

「ええ?土方さん・・・本当ですか?」

「ああ。」

千鶴は嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます!!」

頭を下げて顔を上げると満面の笑み。二人はその顔に癒される。

「じゃ、行こうか。千鶴ちゃん。」

「はい!では行ってまいります!!」

「ああ。気をつけてな。」

こうして作戦の其の二が始まったのだった。

土方の作戦はこうだ。まず二人でかける。巡察の時に偶然沖田と会えば二人でいるところを見れば奴はどう思うだろうか。仮に会わなくとも、屯所に帰れば千鶴が沖田に話すだろう。

沖田の面白い顔が浮かぶ。

新八は知らない。沖田がどれだけ千鶴を愛しているか。新八には彼が近藤か、剣術以外興味のない人間だと思っっているからそんな彼の

愛情もわからないのだった。

「きーんとします。おいしいですけど。」

千鶴は新八の横でおしそくに氷を食べる。新八も氷の量とこの冷たさに舌の感覚と頭の痛さに辛くなる。

「味はうまいな。ていうか体温すげえ下がった。」
本当に寒いくらい体温が下がる。

「でよ。千鶴ちゃん。総司のこと迷惑ならふっちゃったほうがいいぞ。あいつしつこいけど女の言葉なら弱いつて。もし怒って斬られそうになったら俺に言えよ？あはは。」

新八は冗談半分で言った。沖田に彼女、しかもこんな境遇の彼女などいないだろう。それに彼女も幸せにはなれないだろうし。

「沖田さんに斬られるなんて・・・！そんなこと言わないでください・・・。」

「千鶴ちゃん？」

「わかってます。沖田さんが人を殺めることくらい。私だって例外ではないでしょう。けれど私は信じてるんです。お願いします。永倉さんは沖田さんの仲間です。だから・・・。」

千鶴は泣かなかったがしょんぼりした声でかすれて聞き取りにくかった。

「ごめん・・・。」

冗談半分でも言うもんじゃなかった。もてない新八は沖田に彼女ができたことに腹が立ったのか否、妬んでいたのかもしれない。あまり重要じゃないがうらやましかったのは確かだ。平助も皆、千鶴の

ことをよく思っているから。

「永倉さん。お願いです。沖田さんを助けてあげてください。彼はきつと戦い続けるから……。」

この言葉の意味を知るのはもう少し先のことだった。

もっと笑っていたい。

彼と一緒に。

千鶴の思いは空に浮かんで、氷のように溶けていった。

（あーあ。土方さん。俺は無理だったよ。）
確かに沖田のいい加減さには呆れるけれど、でも彼は仲間だから。
仲間の幸福と一緒に祝うものだろう。
でも千鶴と話したかったから（話したい連中のためにも）
今は何も言わないでおく。

泣かないで。
少女は泣いているのだろうか。
今もこの胸で。
いつも泣いているのは辛くないだろうか？
でも必死に笑うほうがきつと・・・。
辛いだろう・・・。

24・切望（後書き）

字間違い多い。本当に自分でも嫌になります。

25・交錯（前書き）

もう意味がわかりません。ちゃらちゃらっていうのはイチヤイチヤの意味です。

文章いつもよりグダグダかも・・・。

千鶴ちゃんって鈍感ってイメージだけどアタックしててもいいですよね！

25・交錯

二人は氷を食べ終わると、歩いて帰って行った。歩くと。

「暑い……。千鶴ちゃん。大丈夫か？」

「大丈夫です……。」

横にいる少女を見れば汗だく。無理もない。この夏は暑いから。汗かきな新八は彼女の辛さがわかる。

それにしてもあの沖田が惚れた女。どんな変わり者かと思えば、頑固で真つ直ぐな可憐な少女。

土方が沖田になにか闘志のようなものを燃やしているのか知らないが、沖田のことはもういい。

もうこんなことはごめんだ。平助はかわいそうだ。平助は最初から彼女にひかれていたのだろうから。

叶わない恋だな。相手が悪い。

沖田はそう簡単に千鶴を離さないだろうから。

土方のことは放っておいて、自分は元の生活に戻ろうと思う。

「何やってんですか？」

声がかかった。新八は考え事をしていたので反応が遅れた。だが一瞬で誰かわかっていた。

「総司……。」

巡察中の沖田総司。たしかに会ってもおかしくはない。計画には千鶴とちやらちやらしているところを見せつけられればいいと。単純な新八だったが考えてみれば。

（こいつに勝てるわけがない……。）

もてない新八がこの執着が強い最悪な男に勝てるはずがない。そう

今この男の殺気を感じ思った。

沖田は執着が強すぎる。それだけで人間を殺せる。そう仲間でさえ、
そういう男なのだ。

「沖田さん！」

助け舟は千鶴だった。千鶴に微笑まれた沖田はどこか嬉しそうに
していた。が、それも続かず。

「どうして君が新八さんというの？」

低い声で言われた千鶴は沖田の冷たい目を見て、感じて彼の気持ち
がわかる。

「ひ、土方さんがな・・・千鶴ちゃんを連れて・・・氷を食いに
いけてな・・・」

「土方さんが？本当なの？」

千鶴はうなずいてから、沖田の肩を優しくたたき、耳に口を近付け
ると、囁く。

「心配しないでください。私は沖田さんが大好きですから。」

その声は沖田にしか聞こえず、柄にもなく、沖田は赤面してしまっ
た。

彼女の声が綺麗で。可愛くて。嬉しくて。

恋とは本当にすごいものでこんなことで幸せになってしまう。

千鶴はすぐに離れ、笑ってから。

「沖田さん。巡察頑張ってください。」

「うん。」

（す、すごい・・・。）

一瞬で沖田の機嫌が直った。沖田はだいたい機嫌が悪いときは嫌味
を散々言ってきたりするので（土方にとくに。）こんなに彼の機嫌
が直るのは見たことがなかった。

「永倉さん。私たちは帰りましょう。」

「お、おう・・・。」

千鶴に腕を掴まれ、去っていくが沖田はきつと睨みつけていただろ
う・・・と新八は思う。

そして後で散々嫌味を言われたのは言うまでもないだろう。

「沖田さん……。なんでそんなに怒っているんですか。」

「君が新八さんと二人で出かけたからに決まってるじゃないか。」

沖田は帰ってからまた機嫌が悪く、部屋にこもったきりだった。仕方がないので千鶴が食事をもっていった。

二人はより添って部屋の壁に腰かけていた。

「仕方ないじゃないですか。土方さんが私に休みをくれたんです。

御好意には甘えたほうがいいでしょう？」

「君はわかってないんだよ……。」

「？」

（土方さんは僕に千鶴ちゃんと別れさせたいのか……。）

千鶴は幹部たちにとって癒しだから。土方は沖田をこらしめるつもりもかねて千鶴をとりあげるつもりなのだ。

「君はちゃんと危機感もったほうがいいと思う。君は女の子だから。」

「・・・・・・・・」

彼女はよくわからないという顔をして答えなかった。

「私は・・・・・・・・。沖田さんが心配なんですよ。」

「え？」

「でも私は知ってます。沖田さんは心配されたくない。そして私は心配することしかできない。」

「千鶴ちゃん。」

「父様を探しに来て……。新選組に居候してからもう一年以上たってます。いろいろなことがありました。そして今……。沖田さんをこうして思えるのも、このぬくもりも……。」

千鶴は手を握る。その手はひどく冷たい。どうしてだろう。

「私は……。あなたの役には立たない。思うだけでは何もできない。わかってます。知ってます。それでも私は思い続けてます。一秒でも沖田さんのこと……。忘れない。」

沖田は声がでなかった。口を小さく開けて千鶴を見つめる。また泣いた。

「私を殺してもいい。いらなら切り捨てて……。けれど私はあなたを裏切らない。あなたから離れない。」

千鶴は涙が自然にでる。けれどその涙はいつもより辛くない。

沖田は抱きしめる。無意識だった。

「君にこれ以上かつこいいこと言わせられないな。……。僕も君を同じ気持ちだよ。でも僕は誓う。君を……。殺したりしない。……。」

千鶴は信じられない。だって……。でも今は信じられる。

「私は沖田さんが好きだから。だから心配しないでくださいね。」

（心配するのは私の役目だから……。）

その言葉は口付けによって言うことができない。

守りたい。
守りたい。
こんな血に染まった手でも
それが……。今の願い。

愛してる。
愛してる。

もう僕の命が消えていくのは知っている。
けれどこの言葉は伝えなきゃ。

死んだらもう君に逢えない。
君を悲しませる。

そんなの嫌だ。
僕は願う。

生きて生きて彼女に触れたいと。
彼女を傷つける全てのものから守りたいと。
どうしてこんなにも胸が熱いんだろう。

ああ。そうか。
もう……。
わかってるんだ……。

「土方さん。」

沖田は土方の部屋の前で土方の名を呼ぶ。

「入れ。」

土方は入ってきた沖田を見ると顔色を変えず座れという。沖田は座ると土方に向き合う。

そして頭を下げる。

「もう嫌がらせはやめてください。」

土方は心底驚く。彼はまた謝った。真剣だ。真面目な顔をしている。沖田は重く、子供じゃない。武士そのもの。

「嫌がらせ？俺が何かしたか？」

「とぼけないでください。千鶴ちゃんのことです。」

「ああ？」

「千鶴ちゃんは今日、新八さんと出かけました。僕の気持ちはわかりますよね？僕は今彼女が好きすぎておかしいんです。だから仲間でも斬るかもしれません。」

「私闘は……。」

「わかってます。だからやめてくださいとお願いしているんです。」
土方は押し黙った。

「僕はもう沖田総司であって沖田総司ではないと思うんです。」

「どういうことだ？」

沖田は切ない顔をして話し始める。

「以前の僕は近藤さんのため……新選組のために剣を振るってきました。ええ。殺しまくって戦闘狂と呼ばれるくらいね。でも今はそれだけじゃだめなんです。」

土方は真っ直ぐ沖田を見据えるだけで何も言わない。

「近藤さんのためだけじゃもう剣が振るえない。おかしいですよ。この僕が。」

沖田はおかしそうに苦笑する。

「千鶴ちゃんを守りたいと思うんです。そして血に染まったこの手で抱きしめたくないと思う。矛盾してて……。おかしい。でも近藤さんのためなら彼女を殺せてしまっんです。」

「それは……。」

「そして……このままじゃ千鶴ちゃんのために全て殺せる気がする……。」

「！」

「あはは。もう自分でも怖くて不安なんですよ。あれ……。おかしいなあ。なんであなたに話してるのかな。体が勝手に動いちゃって……。」

沖田は立ち上がる。

「近藤さんに話しました。千鶴ちゃんのこと。そしたらすごい喜んでくれて。天然理心流は安心だって。笑って言うんですよ？」

「……。」

「嬉しいです。嬉しかった。けれどももう戻れないんだ。背負うものは増えるんだ。僕はそんなに器用な人間じゃないんですよ。」

「お前は……そうだな。めちゃくちゃやってたな。今もだが。そう簡単に変わらねえよ。お前はお前の意思がちゃんとある。今、考えてもな。答えなんか見つからない。答えは自然に見つかるんだ。だからそんな泣きそうな顔すんな。」

「してませんよ。失礼な。」

「でだ。お前の気持ちはわかったよ。俺の計画はお前らがあんまりちゃらちやらしてるからだな……。」

「はっ。そんなことで……。とても吉原でもてもの土方さんの言葉とは思えませんね。そんなことでこんなことしたんですか？皆暇ですね。」

「ふん。まあ思ったよりお前が早く来たんでな。平助と新八だけで終わるかよ。」

「あの二人には僕がいいこととしてあげますから土方さんは気にしないでくださいね。」

絶対良いことじゃない。土方は平助と新八に心の中で謝った。

土方は薄く笑うと沖田を見直す。

餓鬼の頃から生意気でどうしようもなくて……。けど今の言葉は大人になっただろう。

彼の口からこんな真剣な言葉がでると思わなかった。

土方は嬉しかった。

「あーあ。一瞬で終わったが……。いいか。俺の前でちゃらちらすんなよ。」

「えー。せつかく面白いのになあ。仕方がない。二人でこっそり愛を育むことにします。」

沖田はくすくす笑うと襖をあける。

「じゃ。おやすみなさい……。」

最後に変な咳がでてしまった。だが土方には聞こえなかった。

時は残酷・・・だな。

そう沖田は目を伏せて思っていた。

25・交錯（後書き）

おまけです^^

「ふ、副長！もうよろしいのですか・・・。」

「ああ。斎藤。山崎。もう総司のことは気にするな。あいつは俺の予想以上に厄介だとわかった。」

斎藤と山崎は下をむく。

（沖田さんに隊務を改めてもらえるいい機会だと思ったのに・・・。）

（お、俺は別に・・・。千鶴と話したかっただけ・・・。いや・・・。）

二人はそれぞれ思いながらも結局出番はなかった。

ごめん二人とも！今度は出てね！！

26・必要（前書き）

嫉妬な千鶴ちゃんが書きたかったはずなんだ・・・。

慶応二年一月

その日、幹部隊士は皆出かけていた。隊士たちも今日だけは休暇をもらえて、実家に帰ることができた。これは異例だ。きつと近藤局長の御厚意だろう。今、新選組は勢力が安定し、昔のように貧乏でもない。

幹部隊士たちは新年ということで島原で酒を飲む。それは毎年で千鶴はそういえば去年もそうだったと思う。千鶴が来たときは千鶴がいたからかで屯所で酒を飲むだけだったが。

千鶴はついていくことができなかった。それはいい。だが今の千鶴の心境は違うのだ。

沖田総司。一度肌を寄せ合い、これまで何回か彼と共に夜を過ごし

た。

今感じているのは嫉妬かもしれない。女と酒を飲むこと。島原の妓女が美しいのは百も承知。だから彼の気があちらに移っても文句は言えない。

それが何か悲しくて千鶴は落ち込む。

こんなにも自分は驕っている。男が女で遊ぶのは当たり前前の行為だ。自分と彼は他人なのだから千鶴に言う筋合いはない。

けれどやはり気は晴れない。

沖田の愛のささやきを疑うわけではない。彼のことは大好きだし彼も自分を好いてくれるのがわかるから。

（沖田さんは・・・私が独占してもいい人ではないんだよね・・・）
一人うわの空で千鶴は曇っている夜空を見ながら考える。

「雪村君。何をしているんだ？もう冷えるから寝たほうがいいぞ。」

「や、山崎さん！？皆さんで島原に行っただんじゃ・・・。」

声をかけたのは山崎丞だった。彼は確か実家には帰らず近藤から島原に來いと誘われたはずだ。

「沖田さんがものすごく嫌な顔をするのでやめたんだ。あの人は苛立っているから。」

「沖田さんが苛立ってる？」

山崎は薄く笑いながら千鶴の横に腰かける。

「君がいないことに腹が立っているんだろうな。今日は新選組にとつて休みだから君はどうしても連れていけないし、君は男が女と寝るところを見たいわけじゃないだろう？」

真顔で言う山崎の顔はかつこよくて千鶴は話の恥ずかしさと彼の顔

で一氣に赤くなってしまった。

「な、何を言うんですかつ！」

「沖田さんは近藤局長に信賴を置いているから断れないし嫌ではないんだろ？が君がいないことが嫌なんだ。」

千鶴は改めて話を戻されて目を見開く。

「沖田さんが・・そんな風に思ってるなんて・・。」

「不思議なものだな。俺もあの人がそんな感情を持つなんて思わなかった。しかも女性に。」

「・・・・山崎さん・・。」

「色々お互い大変だと思うが沖田さんのことを頼む。君の存在はあの人にとって大きいようだから。」

「はい。」

千鶴は笑顔になった。山崎は微笑み返すともう寝なさいと言って去って行った。

千鶴は床につくと天井を見上げた。色々な考えが浮かんだり見たことを思い浮かべたがそれは消えていくばかりではつきりした答えが見つかからない。何を自分が思ったりしているのかもわからない。そういうことはたまにある。

今はドキドキしているのかもしれない。恋愛経験がなかった千鶴はこんなことを思うのだと感じる。今、同じ年頃の娘は早ければ嫁に行っている。恋愛をして・・。千鶴は今男装しているのでこんな女のような体感ができるとは思いましなかった。

千鶴は寝返りを打つと閉じていた瞼をゆっくりと開ける。

「千鶴ちゃん。」

よく知っている声が聞こえた。

「沖田さん……。」

沖田は暗闇でも目がきくので千鶴のそばへ腰を下ろすと頭をなでた。
「君のことが心配だね。早く帰ってきたんだよ？僕が近藤さんの誘いを断つてさ。近藤さんったら僕が千鶴ちゃんが好きなこと忘れて島原に泊まれているんだもん。」

千鶴は見えなかったが沖田が苦笑していると思った。

「それで……帰ってきてくださったんですか……。」

「うん。確かに君をより綺麗な女はいるけど……。」

千鶴は顔をしかめる。

「最後まで聞いてよ。怒らないで。」

「怒ってません。」

沖田はくすつと笑って続ける。

「でも君のほうがずっと可愛くて綺麗な。ね。そうでしょ？」

「何で聞くんですか……。」

沖田は千鶴の頬に手を移す。

「僕は千鶴ちゃんが大好きだからね。だからそんな嫉妬しないで。」

「嫉妬ですか……。確かにしてました。なんでわかったんですか。」

「

「わかるよ。君のことだもん。でも僕は嬉しいよ。知ってる？人がさ一番つらいのは必要とされないことだって。」

「！」

「僕はいつでもそれにおびえて……だから強くなろうと努力した。近藤さんに要らないって言われたくなかったから。でもあの人は僕を切り捨てたかったんだろうな。だって歳が離れすぎだもん。」

あの人は土方のことだろうか。

「千鶴ちゃんも怖くない？だって君は殺されるんだよ？最初からそうだった。綱道さんのことがなきゃ君は死んでたかもしれない。」

千鶴は頷く。

「君は・・・人は必要とされなければいつでも死ねるんだよ。でもね。人と人が信頼し合ったり愛し合ったり・・・それだけでいてもいい存在になれるんだ。」

どうして彼がこんなにさびしいことを言うのだろうか。

「僕は君が必要だから長生きしてね。」

千鶴は起き上がって手を伸ばして頑張って目を開けて沖田の頬を掴むと自分から口づけた。彼はきつと目を見開いていただろう。

「千鶴・・・ちゃん？」

「あなたはきつと・・・恐れているからそんなこというんです・・・。」

「え？」

それきり千鶴は声を出さなかった。ただ沖田はそれがわかったようでも聞かなかった。

「そうか・・・君は想像以上だね。」

それでも千鶴は声を出さない。

「今まではそう思ってた。君の想像の通りに。けど今は違うから。」

千鶴はうつむいていた顔をあげ沖田を見た。彼はもう消えていた。

だつて彼は……。

病気に侵されて体がいうことをきかなくなっても必要とされるために闘うと言つのでしょう？

そんなにも大切な思いなのだろうか。

今まで私は必要とされてきた。父様の愛情があつたから。

でも今は？確かに父様のことがなければ私はいない。

要らないから人は私を殺すのでしょうか？

なんて残酷な世界なの……。

私は今まで考えたこともなかった。

ただ自分は生きていただけで……。

彼はそんな世界に足を立て生きていたのだ。

人を殺すことも全て生きるために。

自分が必要とされるために……。

この世に神がいるらどうか彼を……。

もっと優しさが溢れる世界で生かしてあげて……。

それが私の願い……。

「こほっ・・・こほっ・・・。」

咳をすると血が出ていた。

そろそろやばいかもしれない。

でも闘い続ける。

それだけが生きることができる理由だから。

彼女を守るためにも・・・闘わなければ。

彼女が悲しんだとしても。

26・必要（後書き）

沖田さんはなんか必要とされなければ自分は死ぬべきだとか思ってそう。近藤さんのために・・・って言ってるから。

でもミツさんも近藤さんがいらないって言っただって総司のことは愛しているから必要なんだろうけど総司はそれがわからない。

ミツさんはもう結婚しているから沖田家は大丈夫だから。

総司が体を引きずってまで闘うのは必要としてくれた近藤さんのためなんだろうな・・・。

自分の解釈です（^^;）

27・弱肉強食（前書き）

t u n e t h e r a i n b o w っ て 曲 を 聴 い て い る と 生 き る 勇
気 っ て い っ か ・ ・ 辛 い こ と が あ っ て も 前 を 向 こ う と か 思 い ま し た w

27・弱肉強食

慶応二年二月

「総司。いったい何を苛立つてる？」

斎藤が張りつめた声で言ったのは今、この瞬間。道場で木刀を構えあっていると言った状態。

「僕が？苛立つてる？どこがさ。いつもと変わらないでしょ？」

沖田はいつものように笑うがその顔はどこかいつもと違う。どうしてこんなことになったのか。

その日。沖田総司はいつもよりも調子が悪かった。自分の病が大きいことはわかっているが昨日までとは全然違う。今月は忙しい。いや。新選組自体は忙しくないが幹部にとっては山南の一周忌なのだ。普通、切腹した隊士をこんな形でまだ弔うのはない。芹沢も新見も大幹部だったがそんなことしたことがない。（近藤たちはやっていたかもしれないが。）

何より山南の人の良さが表れている。沖田は千鶴もこの時期元気がないのを知っているのだからとなく疲れた。

寒い時期というのもあるので風邪で寝込む隊士も跡が立たない。沖田もそれと同じなのか。或いは。

（悪化したとか？ちよつと早いな。）

鉛色の空を沖田は見上げながらのんきに考えていた。

「総司？」

「左之さん。」

声をかけてきたのは年上の女にもてての原田左之助。沖田は振り向くと原田に聞く。

「何か？」

「何か？じゃねえよ。この時間は幹部は道場だろうが。お前……。大丈夫か？最近妙な咳するし……。近藤さんに言って休ませて

「例えば……。」

「左之さん。お気遣いは嬉しいですけど僕の性格わかってるはずですよね？」

沖田は嬉しそうに微笑む。原田は頷く。沖田総司とは、近藤に迷惑をかけることや心配させるようなことはしない。だから体がどうか愚痴とかは言わない。確かに伊東の愚痴は皆言ってるので同意してくれるが。

「すぐ行きますから。先行っててください。」

「お、おう……。」

原田が去って行ったあと。沖田は縁側から見える庭を見据えた。

（今日はおかしいなあ。）

だってこんなに雲の切れ間から光が差し込んで唯一の菊の花にあたっていて美しく見えるのだから。暗い今日だから余計に綺麗で。ずっと見ていたくなかった。

（なんでこんなに……。）

もう死んでもいいくらいに神秘的で涙がでそうになったのを覚えてる。

沖田が道場に入ると皆の視線を感じるが沖田は気にしない。

「遅せえぞ。総司。」

「あれ？なんで土方さんが？」

土方がいつもの仏頂面で座っていたので沖田は首をかしげた。

「いや悪いのかよ。」

「そうですねゝ悪くはないですけど鬱陶しいですね。」

「てめえ……。」

土方は眉をピクピクしながら沖田を睨む。沖田のほうは面白そうに笑っている。隊士たちも幹部たちも土方がこちらに八つ当たりをしてくるだろうと予想しているので皆恐れた。

（なんで沖田組長はこんな土方副長に反抗的なんだ……。）

（ある意味で沖田さんは新選組いや日本一鬼に強いお方だな。）

（沖田組長ほど剣が強ければ俺もあんな態度できるのかな……。）

いやいや性格の問題だろう。隊士たちはこんなことを思いながら二人を見ていた。つつこみも聞かず。

「おめえら！！何休んでんだ！！素振りしとけ！！馬鹿野郎！！！」

「は、はいい……！」

土方の怒声が飛び、隊士たちはいつせいに立ち上がり素振りを始める。

「土方さんが休んどけって言ったんだけどな……。」

「総司が来てからだな。いつものことだろう。」

永倉と斎藤は隅のほうで言った。

「ねえ。僕こなくてもよかつたんじゃない？皆素振りしているだけだし。ねえ。土方さん。試合したいです。試合。」

「ああ？てめえ何言つてやがる。俺が素振りしろつたんだ。しばらくは素振りだ。」

「そんなの初歩なんだから朝から死ぬほどしてるでしょ？皆。」

「ああ。てめえだけしてねえな。お前やれ。」

沖田は微笑んだだけで土方に何も言わなかった代わりに。

「誰かさゝ素振りやめて僕と勝負しない？大丈夫。手加減してあげるから。」

沖田の声に皆の動きが止まった。

「お？皆相手してくれるのかな？」

沖田はクスクスと苦笑する。

「いいよ。誰から？」

誰も手はあげない。

「じゃあ・・・君。」

「えっ！？僕ですか!？」

沖田は仕方ないので指名した。その男は顔が可愛い男で新隊士だった。先月入隊していた気がする・・・。

「嫌？勝てば君、幹部になれる確率上がるよ？ねえ。土方さん？」

「ああ。お前に勝てればな。」

男はごくりとつばをのんだ。勝てば出世できる。出世を何より望んでいた男は嬉しさがこみ上げる。しかし相手は噂の沖田総司。その剣はもう次元が違うとも聞いた。

「お、お願いします・・・。」

沖田は微笑んだ。そして皆は道場の隅によった。

「ごめんな。千鶴。買い物に付き合わせちゃって。俺、今日は非番だから頼まれて……。」

平助と千鶴は屯所へ帰っていた。平助はすまなそうな顔をして千鶴を見ている。

「ううん。私もお付き合いしたかったし……。だって山南さんのためだから……。」

一周忌はただお祈りや墓参り。親戚などが集まるが新選組はもう墓参りをした後山南さんのことを語り合いながら酒を飲もうということになった。思い出話をしながら酒を飲む。近藤も許可してくれて貨幣をもらい、平助が酒を買うことになったのだ。今日。千鶴についてきてもらったというわけだ。

屯所に入るとなぜか静けさがいつもに増している気がする。

「なんだ？」

「静かだね……。何かあったのかな？」

「この時間。いつも稽古だから……。道場のほうに皆集まっているのか？」

二人は荷物を置くとせわしく道場に向かった。

そこで見た光景とは。
ほんの少しさかのぼる。

「さあ。始めようか。」

沖田は木刀を構え、相手を見据える。

なんでこんなにも仲間に対して殺気を放てるのか隊士たちにはわからなかった。わかるのは幹部だけ。沖田の性格がわかっていいるからだ。

「はあああ!!」

男は一直線に向かう。

だがひらりとかわされ、沖田は腹にけりをくらわす。

相手は一瞬でふつとびもう立ち上がることはできなかった。

「何泣いてるの？立って。」

沖田は無理やり立たせると悪魔のように微笑む。

「そんなんだから闘えないんだ……。負ける。死ぬ。守れない。そんなの武士じゃない。ここで死ぬ？死んだほうがいいよ。君はここに必要ないんだ。」

その声は男にしか聞こえなかった。男は泣きながら離れてもう一度剣をふった。

「はああああ!!」

また一直線。沖田にかわせないはずがない。

沖田は一瞬ははっと笑うと木刀を蹴ったところに命中させる。その瞬間、ぼきっとした音と、男が吐いた異物が床に広がった。そのまゝ男は倒れた。

「あーあ。面白くないな」皆こんなのだったら全員死んだほうがいいよ?」

「沖田さん……。」

沖田が隊士に木刀を腹にくらわせた瞬間。二人は道場に訪れた。その時千鶴は何も言えなかった。思考が飛んでは消えて。

この人が怖い。恐ろしくてたまらない。狂ってる……。

沖田を中絶する言葉しか浮かばない。

こんな沖田を見たのははじめてだった。いつもの顔とは違う人を殺しそうな目とその笑顔は言葉にできない。どんなものより異端で恐ろしい。そして何よりこんなに辛そうで……嬉しそうなのか。

「千鶴ちゃん。」

「総司……何……新米隊士だぞ!? そんなにして何の意味があるんだよ!」

平助の言葉に沖田の顔は一遍。笑顔はない。

「ああ。平助の隊だったっけ? ごめんね。あんまり弱いんで手加減したつもりだったんだけどなあ。」

平助は勘がふれたらしく、飛びかかろうとするが現れた左之助が止める。

「左之さん……。」

左之助は沖田を睨んだまま何も言わなかった。

「総司。いったい何を苛立つてるんだ？」

「僕が？ 苛立つてる？ どこがさ。いつもと変わらないでしょ？」

斎藤の言葉にも沖田はごまかすのだ。黙っていた土方が立ち上がった。

「もういい。稽古はこれまでだ。平助。そいつを連れてけ。命に別状はねえだろうがろっ骨が折れてる。」

「う、うん！」

平助は男に駆け寄った。

「総司。お前は最近変だ。もうしばらく出てくるな。隊務も真面目にやらねえなら屯所からださねえぞ。」

沖田は土方を睨む。そして千鶴に視線を変えると微笑むのだ。優しく。

沖田は本来こんな人ではない。もっと人当たりが良くて……。意地悪なのは変わらないが。

「千鶴ちゃん。」

沖田はほかに構わず千鶴によって来る。それがとてつもなく辛かった。もう思考は思いつかなかった。腕を掴まれた瞬間。千鶴は沖田の頬を平手で打っていた。

沖田は信じられないという顔をして千鶴を見た。

千鶴はもう泣きそうな顔をして去って行った。

誰もがこの場から逃げたいと思ったほどだった。

27・弱肉強食（後書き）

病んでる沖田さんが書きたかつたんだ・・。ちよつと続くよ。

28・映る鬼（前書き）

なんか若干キャラ崩壊してます・・・前からかな？

何故殴られたんだろう？僕は何かしたか？見当がつかない。

彼女の表情。あれは僕を恐れているような瞳だった。

いつもは口を曲げては笑う彼女が今日見せたのは僕のことを否定しているかのような・・・。

今、こんなにも胸が痛いのは彼女のせいだ。病じゃない。

ああ。胸糞が悪い。いつそ彼女の部屋に行って襲ってしまおうかと思った。

そうすればこの気持ちも和らぐと・・・。

でも和らぐはずもなかった。

殴られたのがショックすぎたのかもしれない。今自分がどんな顔をしているのかわからない。

たまらなく彼女に会うのが怖くなった。

「総司。」

「平助・・・。」

あの稽古の後。屯所はまだ静かで沖田はただ縁側で庭と空を眺めていた。平助は新米隊士の手当てが終わったらしく普段と変わらぬ表情で沖田の横に座る。沈黙が少し流れた後、平助は口を開く。

「頬、腫れてるぜ？」

沖田は平助を目を見開き見ると自分の頬を触る。ああ。じんじん痛い。

「放っておいてよ。」

「そういうわけにはいかねえよ。千鶴があんなことするなんて俺には信じられないからな。」

沖田は下を向いて黙った。

「何で……。新米の隊士にあんなになるまでしたのか話してくれないか？嫌ならいいぜ。けどな。俺は組長としてこのままにいる訳にはいかないんだ。」

平助の真剣な顔に沖田は唾をのんだ。この年下の組長は自分なりに落とし前をつけようとしているのだ。

「僕の……。八つ当たりだったかもしれない。それは認めるよ。でも理由は言えないんだ。ごめんね。」

平助は沖田の顔をじつと見つめると安心したように頬を緩める。

「そっか。わかったよ。その気になったらあいつの顔を見に行ってくれ。ま。期待はしてないけど。」

平助は少し笑うとどこかへ行ってしまった。

夕食には会話は全くなかったかもしれない。平助や永倉、原田はなんとか話を盛り上げようとするが……。いかんせん続かない。土方も早く食べ終えて部屋に戻って行ってしまいうし、斎藤も普段から口を聞かない。

千鶴は沖田の横にも来ようとせず、この部屋にすら現れなかった。恋人としてここは彼女の元へ行くべきだろうか。けれどそうすることとてもできなかった。

ただ何かを恐れていた。

何も食べる気にならなかった。むしろ吐いてしまいたいくらいだった。誰もこの部屋には来ない。

屯所に初めて来た時よりも今は孤独を感じる。

父様が恋しい。あの優しい微笑みも。私を抱きしめてくれた腕も。帰りたい。江戸の町に。会いたい。近所の人や、先生や、友達に。けれどできない。

悲しいわけがない。今は沖田さんがいるから。

今日是最悪だ。私は無意識に彼を殴っていた。

私は何に怒りを感じたのか、それとも私は悲しかったのか。

今はその思いが明確にならない。

気持ちが悪い。いっそもうこの世から消えてしまいたいほどの絶望

感が漂う。

大げさかもしれない。けど私には彼が・・・。

実際彼が人を殺すさまなど見たことがあるはずだった。

時々大量の血を浴びて帰ってくるがあった。

彼の部屋に血の匂いがたち込めていることがある。

わかっていたはずだ。彼は刀なのだ。近藤さんという素晴らしい方に使われる・・・。そう沖田さんが言っていた。

どこまで自分は強欲なんだ。

彼の全てが欲しいなどと。私だけを見てほしいなどと。もう人を殺さないでと。仲間を傷つけないでと。そんなこと私に言えるはずがないのに・・・。

夢を見た。

背景は夜の京の町。目の前には数えんばかりの死体と一人の男が立っている。

浅葱色の羽織を着て、近藤さんと同じように髪を上げている。背が高く細い彼は背を向けている。

右手には血のべつとりをついた刀。

その足元には顔も見ることがない男の首。

見ているだけで吐きそうになる。けれど夢だからそんなことにはならない。

あれ。おかしい。震えている。私は長い刀を沖田さんに向けた。

彼は振り返ると目が赤いような気がした。それは一瞬だった。

彼はいつもの笑みとはまた違う笑みをたたえた。

その瞳には何が刻まれているのか。私には嬉しそうな気持ちにしか見えない。

彼はゆっくりと表情を変えることなく近付く。

そして私の前で立ち止まると、私は彼に斬りかかる。

それを彼は刀で受け止め、私の刀を振り払う。

私の刀は飛んで落ちる。

そのまま意識は消えた。

また違う夢だ。これは屯所の私の部屋……。

御化粧台もないのにそこには鏡があった。だから夢なんだろう。

その鏡の前に座っている女の子。

可愛い着物だと思えば鼠色の、あまり裕福さを表さない貧相な着物だった。

髪をおろし、じっと鏡を見つめている。

私は彼女に近付いた。すると彼女の顔は。

「あ……。」

夢の中で私は声を上げた。彼女の顔は傷だらけで頬には青い痣。額には刀で切られただらう傷。見ていて可哀そうになるその顔。可愛いなんて言えないのに綺麗だった。

驚くほど目を引く顔をして、その瞳には不幸とか辛いとかそんな言葉全て否定する力を持っていた。

鏡の前の少女は着物を脱いだ。

胸のさらしをほどく。

私から見えるのは彼女の背中についた拷問の傷。痛々しいのに彼女はそれを気にすることもなく鼻歌を歌いながらまた別の着物に着替えていった。

今度は芸妓が着るような恰好だった。

けれど本物の方ではないらしく化粧も薄く早くしただけだった。

彼女は笑っていた。でも表情がひきつってうまく笑えていない。けれど愛らしくて小動物を見ているような気分になった。彼女は私に振り返っていきなり私の腕を掴む。

「これがあなたがなりたかったんでしょ？なんでそんなこと思ったの？」

私は目を見開いていた。彼女は挑発的に私を見つめ続けた。

「あなたは私になりたいの？私の傷を見た？毎日男に殴られて、抱かれて。そんなものになりたいの？」

「違う……。」

私の目から涙が溢れた。私は叫んだ。

「違う……。私は沖田さんやみんなの役に立ちただけだけ……！」

「うん。私は闘っているからね。けどあなたは気が付いてないんだ。今、あなたは役に立ってないと思う？」

本当に夢か疑いたくなった。なんでこんな風に聞くのだろう。私は彼女にすがりついた。

「私……闘いたい。刀を持って……みんなと同じように人を……ころ……。」

「駄目だよ。」

彼女は静止する。

「あなたは人を殺めてはいけない。あなたは絶対に死ぬ。そんなことしたら自分で死にたくなるよ。」

「そんなこと……ない！」

「じゃあ。あなたは自分が人を殺したら沖田さんに必要とされると思っているの？」

「え……。」

「彼は自分と同じ思いをあなたにさせたくないんだよ。私は夢だけどあなたの望んだ私の姿なの。見たでしょ？私は生きていることが辛くなっただよ。」

「夢なのに……？」

「そう。夢なのに。」

彼女は優しく笑った。

「きつとあなたには私は強い女に映っているのだろうけど……。」

私はあなただから。」

「え？」

「私はあなたで、あなたは私。だって私は夢だから。ねえ。千鶴。彼女は私を抱きしめた。」

「どこかで……生まれが違っていたらあなたはこんな風になった。私はあなたがうらやましいんだ。」

「わけが……わからない……。」

「そうだよ。でもね。これだけは聞いておくよ。意味がわからなくてもね。だからあなたが私を目覚めさせたんだから。」

「あなたは沖田さんが怖い？憎い？殺したい？」

私は被りを振った。

「じゃあ。好き？全部捨てても大好き？」

「うん。」

「それならもう大丈夫。あなたはきつと向き合えるよ。彼の病気……彼の気持ち。すれ違ったとしてももう大丈夫だから。」

そこで私は目覚めた。

朝の冷えた空気が隙間から流れ込んでくる。起きるのが辛い。千鶴は起きる。

なんだか清々しい気持ちになった。昨日までの気持ち悪さはない。彼と向き合うことが私は怖かったんだ。そして彼もまた……。彼の恐怖と私の恐怖は同じだった…….と思いたい。

彼は明日死ぬかもしれない。人に殺されるか、あるいは自分で命を絶つか……。また、病で死ぬか。

不安だらけな人だ。けど私が望んだのはそんな彼なんだ。

私は弱いなら全て受け止めたいと願う。

私は独り笑った。

夢の中の私は辛いのに笑っていた。

そんな強さが私にもあると思いたい。

私はここで生きていく。彼と共に生きたい。

彼が望むのならなんでもしよう。

私はそれだけしかできないから。

千鶴は土方の部屋に向かった。部屋の前で声をかける。

「千鶴です。お時間よろしいでしょうか？」

「・・・入れ。」

千鶴は部屋に入りお辞儀をして座り込んだ。

「お願いがあつて参りました・・・。」

「何だ？」

千鶴は話し始めた。

29・死闘の末に（前書き）

昨日必死に書いてたのに全部消えました・・・。
溜息が出ました。

29・死闘の末に

「今日一日お暇を頂きたいのです。」

千鶴は深々と頭を下げた。土方はこの真剣な娘を不審に思い、見つめた。

「理由はなんだ。」

「山南さんのお墓参りに行きたいのです。一人で。」

「はあ？何言ってるんだ。そんなことできるわけ……。」

ないと言おうと思ったが千鶴の目を見ればそんな気失せてしまった。黒い瞳には土方の顔をがくつきり映り、土方の胸は何故かざわついた。

「我儘を言っているのは重々承知しています。それに私が巡察に行けるのも土方さんのご厚意があるからです。」

「なら……。」

「しかし、私には覚悟を決めなくてはならないのです。」

「覚悟？」

「私がこれから生きていく覚悟です。」

千鶴の瞳には迷いなどなかった。

「昨日……。総司をぶつたことと関係があるのか？」

千鶴は少しふつと笑った。

「ないと言えは嘘になります。」

「何故……。ぶつた？」

「怖かったんです。私の我儘なんですけど。」

「？」

千鶴は続けた。

「沖田さんが・・・孤独になるのは耐えられないんです。これ以上・・・憎しみを背負うことです。」

「・・・！」

土方は目を見開いて聞いた。

「もしあそこで隊士の方を殺していれば、家族の方が沖田さんを殺しに来るでしょう。その繰り返しです。仲間なのにこれ以上そんなことを増やしても意味がありません。」

新選組のような組織で内部戦争などあつてはならない。土方もできるかぎり対処してきた。法度に逆らう者は即座に切腹・・・。そんな厳しい掟を作つて。この娘はもう見破っているのか。

正直いつまでも子供で、屯所に来たときは怯えきつていてどこにもいる普通の娘だったはずだ。・・・やはりあの沖田が惚れた娘だ。「そうか・・・。あれには俺もびっくりしたぞ。あいつをぶてる女なんて姉くらいだと思つてたからな。」

土方は淡く笑つた。

「私もどうしてできたのかわからないですが・・・。後悔はしてないです。たとえ彼を傷つけても私は守りたいと思います。」

土方は胡坐をかいて頭を？き始めた。

「お前は自分のことを過信しすぎじゃねえか？お前は女なんだぞ？女は守られるもんだろ？」

「そうかもしれない。けれど闘うことを放棄している私には守られる価値もないんです。」

何故この娘は悲しいことを言つのだろうか。

「そこまで総司を守りたいのか？力も何もないお前が。」

千鶴は頷いた。その仕草はかすかに色気があるような気がして土方は少し自分が赤くなるのを感じた。

「知つてました？土方さん。」

「ああ？」

「山南さんが切腹なさったとき・・・沖田さんだけは一度も泣いてないんです。」

「・・・！」

土方でさえ泣いたあの切腹。誰もが辛かったはずだ。なのにあの男は泣いてない。

「沖田さんはすごく我慢するお人なんです。ここにいる方はそういう方が多いですけど。」

千鶴は少し苦笑すると頭を下げた。

「どうかお願いします。私は・・・逃げもしません。必ず帰ることを誓います。私は山南さんの前で言いたいことがあるんです！」

千鶴の気迫に土方は圧倒され、何も言えなくなる。反対する言葉、叱る言葉。脳裏には浮かぶのに何故か声が出ない。

さすが沖田総司が惚れた女とでもいうべきか。

土方は机に向かうと筆を持ち何やら書き始めた。

「これから雪村千鶴に命じる。」

「は、はい！」

「山南敬助の墓参りに今から行け。花もちゃんと買え。夕刻までに戻らなければ切腹だ。いいか。絶対帰ってこい！」

「はい！雪村千鶴。土方副長の小姓として必ずこの務め、果たして見せます！！」

土方が紙を渡すと千鶴は嬉しそうに微笑む。またこの娘は大人になったのかもしれない。

今、あの風間とかいうやつが千鶴を狙っている。易々この娘を出すわけにはいかなかった。しかも一人で。

「この紙を門番に見せればいかせてくれるだろう・・・。」

「はい！本当にありがとうございます！！」

千鶴は頭を下げた後、襖をあけ出て行こうとした。

「千鶴。」

「は、はい？」

「昼間でも今は冷えるから・・・温かくして行け。」

「はい！わかっています。」

千鶴はもう一度頭を下げ出て行った。どんと足音が遠ざかると土方は溜息をつく。

あんなにも沖田のことを考えているのか。あの娘は。

「覚悟か……。」

死ぬことも怖くない。

どこまでも近藤と共に新選組を大きく導くことを決めている。

女が腹をくくるには時間が必要だ。

沖田の体調がよくない。それは薄々感じていた。土方だって心配している。

けれど千鶴のほうがかもつと心配している。それだけの話だ。

「はあ……。山崎。ちゃんについていけよ。」

土方は襖の陰に潜んでいる山崎に声をかけた。

「了解しました……。」

小声で山崎は言うつと消えて行った。

沖田は昼近く目覚めた。昨日の気持ち悪いのは消えた気がする。とりあえず着替えて広間に行くとぬけの殻でけれどその隅には斎藤の姿があった。

「遅い起床だな。非番だからといって稽古をさぼっていいわけではないぞ。」

「うるさいなあ。昨日あんなこととして稽古に行けるわけないでしょ。」

沖田は内心舌打ちした。いや苦笑したのかもしれない。

「・・・あんたがそんなこと思うなんてな。驚いたな。」

斎藤は少し笑う。そうだ。以前の自分なら気にしなかった。隊士をばこぼこにしたことなんていつでもあつたし、誰も気に留めなかった。なのに今は。

「千鶴にぶたれたことが相当堪えたのだな。」

沖田は口をとがらせ何も言わなかった。

昨日、千鶴に殴られたことはかなりショックで食欲もわからない。

「そついえば今日は千鶴を見かけないな。」

「えっ？なんで？」

「さあな。」

斎藤は立ち上がると沖田の横を通り過ぎる。

「稽古には来なくてもいいぞ。俺たちがやっておく。お前はするところがあるだろう？」

斎藤の微笑みはどこか優しかった。

「うん。」

沖田は頷いた。

沖田は千鶴がいける範囲を知っている。土方がここは出入り禁止などなど千鶴に言っていたことを思い出した。

正直千鶴に会うのは少し抵抗があるが以前の自分ならまずそんなこととは思わなかったのだから大丈夫なはずだ。

「あれ？いない・・・。」

どこを探してもいない。何故だろう。

沖田は襖から土方の姿を見つけたので聞くことにする。

「土方さん。」

土方は机に向かったままで振り向かなかったが声でわかったので入

れと言った。

沖田は入り込んで座ると聞いた。

「土方さん。千鶴ちゃん。知りませんか？」

「……知っているが言わねえ。」

「どういうことですか？」

土方は振り返って沖田を睨んだ。

「教えてくださいよあ……。もう土方さんの大事な大事な句集、盗みませんからあ。」

「てめえ……。まだ懲りずに盗もうと思ってたのか……。」

沖田は満面の笑みをたたえる。

「はい。土方さん。僕が盗むたびにまた別のところに隠してくれるから探すの楽しいですよ。」

「て、てめえ……。正座しろ!!」

沖田は土方が怒っているので仕方なく正座した。

「いいか……。お前は……。」

土方は説教し始めた。それは本当に止まることを知らない。沖田はよくこんな大声でしかもこんな早口で言葉が出せるなと思った。沖田は目を逸らして聞いていた。

「お前はなあ……。。」

「もういいですよ。自分で探しますから。」

沖田は立ち上がろうとしたが……。

「うつ……。。」

「お、おい!？」

沖田は仰向けになって倒れ込んだ。そうかいっつ。

「足が痺れたのか……。。」

「う、うるさいです……。こんなの……。違う……。。」

沖田は起き上がろうとするが明らかに痛そうな顔をする。土方は大笑いする。

「あははは!!お前……。本当に日本人か!?あははは。」

土方の笑いに沖田は殺意を覚え、いつか絶対殺してやると心に誓っ

た。

「手えかしてやるうか？」

「え、遠慮します。」

沖田はなんとか腕の力で襖までたどり着く。そして起き上がろうとするがまだ足が痺れている。

土方はふつと笑って廊下でもがいている沖田の背中を右足で踏む。

「ぎっ！？」

沖田は痺れた足の何とも言えぬ感じに意識をとられた。

「お前が・・・隊務を真面目にこなして、稽古もしっかりやって、俺にちよつかいかけねえなら千鶴の居場所教えてやってもいいぞ。」

沖田はなんとかもがいて土方の足をのけた。

そして土方を睨むと仕方なく頭を下げた。

「教えてください・・・。」

土方は不敵に笑った。

千鶴は山南の墓のある光緑寺に向かった。壬生寺と距離はあるのだが新選組ともゆかりの深い寺だった。帰りに壬生寺によりたいとも

思ったが西本願寺と距離があるためその考えは消したほうがいいだろう。

千鶴は菊の花を買って山南の墓の前まで来た。墓は綺麗にされている。誰か毎日掃除してくれているのだろうか。空は晴れていて二月にしてはまだ温かい感じがする。

そつと花を添えて千鶴は語り始めた。

「山南さん……。あれから色々なことがありました。今、西本願寺に屯所を移しました。山南さんの言ったこと……。土方さんに聞き入れてもらえなかったけど新選組はもっと大きくなりました。私は今、不安に襲われています。沖田さんの病気……。それはとても重いものです。私は彼がまだ闘うというので本当の本当は……。すごく嫌です。けど私には止めることができない。私は力がない。だけど一緒に戦いたいと思うんです。駄目でしょうか……。？」

沖田は馬で寺に来ていた。本当に同じ時刻について、物陰に隠れ千鶴の言葉を聞いた。

「永遠に彼といれたらと思います。でも知っています。そんなことはありえないと……。命はいつか消えるから。始まるものには終わりが……。わかってるから……。」

千鶴は泣いているのだろうか。肩が震えている。その背中もさびしそうで。

「彼はきつと……。闘って死ぬことが本望だと思っているでしょう……。そうなんです。侍ってお方は……。けれど女つていうのは愛する人が誰かに殺されて死ぬなんて……。望んでないんですよ。」

「……！」

沖田の心がざわつく。

「おじいさんになるまで……。おばあさんになるまで生きたい。ずっと愛した人になりたい……。そう思うことがいけないんでしょうか……。私は弱いからこんなことを思うんでしょうか……。」

その声はもう震えが止まらなかった。

「山南さん。どうか私に勇気を与えてほしいんです。もう役立たずじゃない。新選組の・・沖田さんの役に立つためにこれから生きていくつもりです。羅刹というあの薬も。風間さんという鬼と名乗る方も・・・。全部。受け止めて抗って・・・。もし逃げそうになったらどうか止めてほしいのです。」

千鶴は手を合せながらそう言った。

沖田は咳が出そうになり口をふさぐ。必死にこらえると手のひらに少しの血がついていた。沖田は手ぬぐいでそれを拭うと。目を閉じて思った。

（僕の病が・・僕以上に彼女を苦しめているのかもね・・・。）
最初は遊びのつもりだった少女が今では本気で自分のことを考え、弱い女でもありながら恐怖を殺して闘おうとしている。そんな力、ないはずなのに。

（本当に僕も覚悟を決めなくちゃいけないんだな。）

決めていた。彼女を守ることなど。好きになった時から。けどそれはもう薄れていっていた。

自分の病が浸食すること、近藤に必要なと言われる恐怖で、千鶴のことなど見てやれなかった。

彼女はいつでも見ていてくれたのに。

彼女だつて必要なければ死ぬ運命なのに。あの晩助かったのは本当に運がよかったからだ。

本当に・・・。なんていえばいいのか。この胸がこみ上げる感情つてすごい。

「愛してる・・・。」

千鶴を後ろから抱きしめると千鶴は声も出ないようでただ泣いているばかりだった。

「何で・・・一人で抱え込むのさ。僕たち契も交わしたのにね。」

千鶴は耳が真っ赤になっていたので沖田はくすくす笑う。

「君は本当に強い。けど君は気が付かないんだ。」

「そんなこと・・・。」

「あのねえ。僕は君に死んで欲しくないと思うよ。君には生きてほしい。だから僕と同じ思いを背負おうとしなくていいんだよ。」

「嫌・・・だって・・・何もしないなんて・・・。」

「僕はさ。君が笑って僕の帰りを待っててくれるならいいんだよ。君が闘ってボロボロになるよりマシだよ。」

千鶴は押し黙る。

「約束するよ。僕は君のために何でもしよう。具体的には言えないけれど愛する人のために闘うなんてかつこいいよね。」

沖田は笑う。千鶴は少し笑う。

「私だって・・・沖田さんのためなら何でもします・・・。愛する人のためなら。」

沖田は抱きしめる力を強くする。

「君には本当に敵わない。」

（この娘が最大の敵だ。）

近藤や、新選組の前に立ち向かうのなら殺さなくてはならない。でも今は到底無理だろう。

自分がこんな風になるのはどこかおかしくて嬉しいことだ。

「夕刻までに帰らないと土方さんに切腹させられます。」

沖田と千鶴は向き合うと沖田は呆れた顔をする。

「あの人の言うことに何でも従ってたら駄目だよ。」

「沖田さんは・・・。なんでそんな反抗的なんですか。」

「それはあそこに隠れている誰かさんに聞いてよ。」

「へっ?」

沖田は関係なく千鶴の手を握り連れ去った。

物陰に隠れていた山崎はどきりとしてがすぐに二人の後を追った。

「あの・・・ぶっってしまったてすみませんでした。」

「いいよ。すごいショックだったけど。」

彼は笑っただけで理由は聞かなかった。

私は彼を好きになって覚悟を決めた。

闘う覚悟。戦には出してもらえなくても私にはできることがある。
そうでしょう？

愛する人のためになら私は修羅になるのです。

29・死闘の末に（後書き）

ゲームとアニメの千鶴ちゃんのギャップがすごいんですけど・・・。
私の小説ではなんか強い千鶴ちゃんを目指しております。

30・不可能（前書き）

三十話目。進んでない話。

「沖田さん。」

「ん？」

「あの・・・手を・・・。」

沖田と千鶴は歩いて京の町を巡った。沖田の馬は山崎が持つて帰ってくれたように留めた馬はいなかった。千鶴は手のひらが汗ばむのを感じて冷や冷やしていた。

だって沖田の温かい手が自分の手をがっちり握っているのだから。

「手が何？」

「そろそろ・・・離してくれませんか。私・・・一樣男なんですけど・・・。」

沖田はくすくす笑い始めた。

「うん・・・。そうだね。君は男の子・・・だったね。」

「なんで笑ってるんですか？」

沖田の横顔を見るとその表情は楽しそうで。

「だって僕には初めから君が女の子に見えるからさ。」

千鶴は何も言えなくなってしまう。この恰好は普通の娘はしない。

沖田は自分を初めから女を見てくれていた。それがなんとなく嬉しくて。でも。

「でも私は男性の恰好をしているんです。このままでは沖田さんが男色家だと言われてしまいます・・・。」

「何？君そんなこと気にしてるの？」

沖田は益々おかしく笑う。

千鶴は口をとがらせ何も言わない。

「大丈夫だよ。人から見れば君は僕の弟にでも見えるって。」

（そんなことないでしょう・・・。）

千鶴はつつこもつとしたがそれは叶わず。沖田が手を離してくれるわけもなかった。

沖田は千鶴を無理やりひっぱるとずんずん進んでいった。

もう夕暮れ。足も疲れてきた。でも早く帰れねば。

「沖田さん。早く行きましょう。そんなとこ見てないで！」

沖田はずつと飯屋と居酒屋の通りを見ている。

「ねえ。おなかすかない？こんなに歩いたしさ。たまにはいい酒も飲まないかね。」

「お、沖田さん！お体のことを心配してください！！それに土方さんに怒られます！！」

道の真ん中で沖田と千鶴は手をひっぱりあっていて、はたから見たら何処の馬鹿カップルだ。

「何やってるんだい？二人とも。」

「！！」

振り返れば見知った顔があった。

「源さん！！」

「い、井上さん！！」

井上は優しく微笑んでこちらに近付いてくる。

「もう、夕食の時間だよ。二人とも。全く寒いんだから早く帰ろう。」

「井上にそう言われたので二人は力を抜いた。けれど沖田はあきらめなかった。」

「いい酒が飲みたいんですよ。」

沖田が子供のように言うので井上は苦笑した。

「なんだい。原田君たちと最近飲みに行つてないのかい？」

「行つてませんよ。だって新八さんとかはお前泊つて行け。経験少ないんだから……とか言うから。僕は早く帰りたいのに。まあ。」

いいですけどね。山南さんの命日には幹部で酒を飲むらしいですから。」

沖田は仕方なさそうに腕を組む。

千鶴には意味がよくわからなかったので首をかしげた。

「仕方がない子だねえ。雪村君。くれぐれも頼むよ。」

「は、はい……。」

「源さん……。僕をそんな子ども扱いしないでくださいよ。」

沖田はケラケラ笑うと咳をする。それは本当に少しで井上は気にしなかった。

だが千鶴は立ち止まつて沖田の背中を見つめた。

二人はおいて行つて歩いていく。だけど沖田と目があった。

この瞬間、私はこの人との未来を描くようになったのかもしれない。私は不安しかなかったけど、彼はいつでも優しいから。

屯所に戻ると土方が広間をじんどつていた・・・ように見えた。千鶴は話さなければならなかった。だってあれほどかしこまって土方に暇をもらったのだから。

「土方さん。今日はお暇をいただいてありがとうございました。」
千鶴は土方に近付き頭を下げる。すると周囲の視線が気になった。
「おう。俺はてつきり総司と寄り道するとも思っただがな。」
すると沖田は笑った。

「僕もそう思っただけですけどねえ。千鶴ちゃんは強情だし、源さんにも見つかっちゃたから。」

「ふん。」

土方は鼻で笑うと飯を食べ始める。千鶴もそれにならって沖田の横で食べ始める。

「なあ。何？千鶴どこ行ってたの？」

平助が千鶴に目を向けて聞いた。

千鶴は少し黙ってから笑った。

「内緒だよ。」

「おい。千鶴。俺にもか？」

原田が微笑んでいる。

千鶴は迷いながら頷く。

「気になるなあ。」

永倉も言うが知っている人物は笑うだけで聞かれても決して言わなかった。

食事が終わると千鶴は土方の部屋に行った。

「土方さん。千鶴です。」

「入れ。」

いつものように入るとそこにはいい香りがたつ土方の姿があった。

（お風呂上りなんだ……。）

土方は髪をおろしている。なんて綺麗な髪なのか。土方が島原でもてるのも本当にわかる。

「どうだった？今日は。」

「はい。ちゃんと山南さんに聞いてもらいました。壬生寺にも行きたかったんですけどね。」

「ああ？なんでだ？」

「新選組に関わる方のお墓があるそうですから……。」

土方は眉を寄せ苦い顔をする。

「土方さん？」

「いや、なんでもねえ。」

話を続けると土方は言う。

「私は……。どこまでいっても私なのかもしれません。人が変わるのって本当にすごく大変なことだと思うんです。」

土方は相槌をうつ。

「でも時代も変わっていくし……時代が変われば人も変わる。けど心の奥はかわらない。私は自分の心と向き合っただんです。今まで不安で潰れていた心。私は前を向いて歩いていきたい。皆さんと一緒に。」

「ふん……。まあ俺たちはオマケだろうがな。」

「そ、そんなこと・・・ありません！皆さんのことも・・・。」

「気をつかうな。」

土方は千鶴に近付いて頭をなでる。

「お前はお前らしくいればいいんじゃないか？あいつが惚れたお前
だろう？」

土方の目に吸い込まれるように千鶴は頷いた。

千鶴が出て行ったあと、土方は襖の向こうの人物に声をかける。

「寒いだろうが。この馬鹿。」

「あはは。土方さんが僕を気遣うなんてどんな風の吹き回しです？」

沖田は愉快に笑いながら土方の部屋に入る。

「うるせえ。てめえのためじゃねえよ。それにな。今日はお前をふ
んずけられて清々してんだからな。」

「覚えていてくださいよ・・・土方さん。」

沖田は土方を睨みながら座った。

「土方さん。そんな恰好で彼女を入れたんですか？」

冬なのに少し薄着で色気溢れる体。沖田はちつとも興味も何もない
が土方はもてる。

「千鶴ちゃんが欲情しちゃったらどうするんです？」

「はっ。あいつがそんなことするならお前は惚れてねえだろ？」

「それはそうですけど。まあ。僕に欲情してくれるなら大歓迎なん
ですけど。」

「馬鹿が。ま。俺にそんな感情持つんなら俺が優しく相手してやる
かな。」

土方は面白そうに笑う。沖田は土方の笑う顔を久しぶりに見た気がする。

「で、彼女の思いがわかりましたよ。」

「・・・・・・・・。」

「人間は欲が多い生き物ですからね。僕にはなんとなく彼女の言うなんかこう・・・自分の弱さとかがわかるんですよ。僕もそんな時期あったりしましたし。」

「そうだな。」

「僕には斬ることしかできないけど、彼女の言うように何もできないと思い込むほうがよほど辛いんでしょうね。彼女のすごいところは人を思いやれる心です。僕はそんな風にはなれない。僕にはないものを彼女はたくさん持っていて・・・。」

沖田は黙り込むと立ち上がった。

「僕は僕であり続ける。彼女のためにも。」

どんなに体が変わっていても。
人が変わっていても。

「余計な心配しなくても僕は僕でやりますから。心配、しないでくださいね。」

沖田はそれだけ言うと去っていく。

沖田はかすかに未来を描くことをやめた。

彼女のために刀を捨てることは自分であるために決してできない。

31・生きる嘔（前書き）

長州征伐。ものすごい難しいです・・・。ですから間違っているかもしれません。まあいつものことなんですけど。

31・生きる嘔

慶応二年六月。

幕府は第二次長州征伐を開始する。

六月七日。幕府艦隊の周防大島への砲撃が始まり、十三日には芸州口、小瀬川口、十六日には石州口、十七日には小倉口でそれぞれ戦闘が開始される。

戦いは長期化し、各地で一揆や、打ちこわしが行われるようになる。俗にいう世直し一揆。

九月二日、宮島で行われた会談により戦いは休戦。

しかし結果的には幕府の大敗退となった。

そして大阪にて齡二十である、徳川家茂公が亡くなった。

数々の犠牲を伴いながら代々徳川家が治めている江戸幕府が軋み始める。

かの勝海舟も家茂公の死によって江戸幕府は滅んだと嘆息したと伝えられる。

千鶴はその日、不思議な少女に出会った。

どこか強気に満ちた高貴な女性だった。自分と歳も変わらないだろうが千鶴にはとても自分と同じ娘には見えなかった。

名はお千。千の名を持つ意味を知るのはまたまだ先のことであった。

その三日後。九月十二日。

三条制札事件が発生。京都の治安維持を守る新選組が、三条大橋にたてられている制札を引き抜こうとした土佐藩士八名を襲撃、捕縛した事件。

その捕縛に成功した原田は会津藩から恩賞を頂く。

これは池田屋事件に次ぐ、大捕り物と言われている。

「千鶴。本当に外に出てないのか？」

酒を飲みながらも厳しい原田の目に千鶴は目を泳がす。

「もういいでしょ。左之さん。僕と千鶴ちゃんは一緒にいたから。」

大丈夫。その子は……。」

沖田が口をはさむが最後の言葉は言わなかった。

原田の話よれば千鶴に似た女に捕縛の際、邪魔をされたいらしい。

千鶴は申し訳なく思つてこの華やかな酒の席でもうつむいたままだった。

今は原田の勲章金で島原の角屋にて貸切をとつていた。

千鶴はこんなところ初めてなので心底驚いた。男の人はこんなところに出入りしているのか。

ここに来るまでにいくらか女性を見たがそれは皆綺麗な女ばかりだった。

千鶴は自分の顔が嫌いではないが少し落ち込む。けれど沖田はこんな自分を可愛いと囁いてくれる。だからそんなに落ち込むことはない。今日くらいは沖田にいい思い出を作ってもらいたい。

「すみません……。原田さん。私……。」

「いや……。違うならいいんだ。」

「そんなに疑うならこの子に娘姿をさせればわかるんじゃないですか？」

千鶴は振り返つた。沖田は嬉しそうに微笑んでいる。

（絶対……。！よくないこと考えてる……。……。）

「あら」。それはえらいいい考えどすなあ。」

土方の横で酒をつぐ、芸妓の君菊は千鶴に微笑むと。

「ほな。行きましょか？みなさんよろしいで？」

「おお。千鶴の娘姿ていうか芸妓姿みたあい。」

「俺も！」

平助と永倉は酔いが回っているようだ。

そのまま千鶴はさつさと連れられる。

千鶴は襖の前で立っている。恥ずかしくてなかなか入れない。皆の反応と彼がどう思っているのかが気になって仕方がない。

「大丈夫ですよ。綺麗やわあ。」

「あ、ありがとうございます。」

君菊にそういわれて千鶴はお辞儀する。すると君菊が襖をあける。

「千鶴、可愛い。」

「本当。やっぱり年頃の娘だよなあ。」

平助と永倉はいつもの調子で言ってくれる。少し酔いがさめたのはつきりと千鶴を見ている。

「で。左之さん。どうなんですか？」

「うーん。どうって言われてもなあ……。」

斎藤も土方も千鶴を見据えているが土方は顔が少し赤い気がした。

千鶴は顔を赤くしながら畳を見つめていた。

「千鶴ちゃん。ここにきて、酌してよ。」

「は、はい。」

千鶴は沖田の横によって酒を注いだ。

沖田は千鶴を横で見ながら小さな声で。

「綺麗だよ。」

思わず顔が赤くなって手が震える。その手を沖田は握りしめてくる。二人が見つめ合っていると。

「うわゝ熱いねえ。」

「総司！そこ離れるよあ。千鶴俺にも。」

「平助君！顔真っ赤だよ？」

千鶴は恥ずかしくて沖田から離れると平助に駆け寄る。

「そんなの気にしないでいいよ。千鶴ちゃん。」

沖田の機嫌の悪い声が聞こえた。

仕方なく沖田の横に戻ると千鶴は斎藤に目を向ける。

斎藤は静かに酒を飲み続けるがもう顔が赤い。

土方に目を向ければ君菊と楽しそうに話している。本当に絵になる二人だ。

「このままどこかに出かけてしまいたいね。」

沖田はいたずらにそんなことを言う。

「駄目ですよ。こんな夜だし。お体にも悪いですし。」

「また。君は体のことばかり。」

「そんなの仕方ないです。沖田さんのためですから。」

沖田は苦笑して呟く。

「君に悲しい思いをさせるのは僕だね……。」

「え？」

「いや。さ。そろそろ皆帰ったほうがいいんじゃない？朝まで飲む人は別だけど。どうする？一君は帰る？」

「ああ。」

「平助は？」

「うん。俺も帰る。左之さんたちは残るんだろ？」

「あ？ああ？そうするかなあ。」

「土方さんも行きますよ。酒に弱いんだし。」

「弱くねえよ。好きじゃないだけだ。てめえはいつの間にかバカバカ飲みやがって……。」

沖田を幼いころから知っている土方にとって内心あんまりよく思わない。自分より飲んでいる沖田が。酒が悪いとは言わないが。

「千鶴ちゃん。早く着替えておいで。そんな恰好で帰ったら狼たちに襲われるから。」

「はい……。そうですね。」

「あ、あははは。そこは否定するところじゃない？」

沖田が笑いだす。

「え？そうですか。あのすみません。私が驕っているからですよね。」

「ううん。そんなことない。事実だもん。」

千鶴は益々なんか酔ったような気分になって部屋から出て行った。

本当にいろいろな人間がいる。

ここで華やかに着飾る女たち。ここで地獄を送る人たち。

今頃、父が行方不明にならなければ自分はどうしていただんだろうか。

でも最近はこう思う。

運命がきつと自分を彼らとひきつけた。

京にこなければ彼らと出会わなかった。

不思議でたまに悲しくなるけど運命とはこういうものなのだろうか。

31・生きる嘔（後書き）

随想録未プレイWWW

32・ 真実（前書き）

前書き 此間、DVD屋さんでクレヨンしんちゃんの昔の映画、ヘンダーランドを借りました。その中のすごいちよい役で三木さんが出ていました。セリフ一言。そんな時代もやはり人気声優さんでもあったんだな〜って思いました。

32・ 真実

慶応二年十二月。

一橋慶喜公が將軍に就任してから、僅か二十日後、天子様が崩御した。

後を注ぐ親王様はまだ、僅か十五歳の少年。

長州藩の動向も見えないまま日本という国が急速に変化していった・
・・。

「寒いですね。」

「そうだな。」

千鶴は斎藤と一緒に巡察に赴いていた。最近では浪士たちの動きが活発でこちらを睨んでくる。きつとさきの戦闘に勝利したことで長州藩が大きくなっているからだろう。

「斎藤さん。」

「何だ。」

斎藤はいつもの調子で答える。

「沖田さん。此間、松本先生にまた看てもらったんです。」

「……知っている。」

「薬をもらったのですがなかなか飲んでくれません。」

「……そうか……。」

「斎藤さんは沖田さんのこと……。」

「あいつの病のことか。」

「……はい……。」

「俺の目から隠すことはできん。あいつも隠し上手だな。昨年から知っていた。」

千鶴は驚くことなく頷いた。

「だが、俺にはどうすることもできん。あんたがなんとかしてくれ。俺も総司が病に苦しむ姿はこれ以上見たくはない。」

斎藤は千鶴の瞳を見つめる。千鶴は強い瞳をしていた。だから斎藤も安心した。

「やはりあんたが総司のそばにいるべきだな。あいつはあんたがいないならいないで不機嫌で、だがあんたの自慢話を嬉しそうにする。」

「顔色が悪い時もな。」

「そ、そうだったんですか……。」

千鶴は顔を赤らめた。

「あんたは新選組に必要な人間と同時に沖田総司にとって必要な人間だ。」

千鶴は微笑んで頷いただけだった。すごく嬉しい。本当に。

「斎藤さん。」

千鶴より先に行った斎藤は振り返った。

「病のことは近藤さんや土方さんには……。」

「それは俺が言うことではない。」

斎藤はそれだけ言うと先に行ってしまった。千鶴は走って追いかけた。

夜。千鶴は寢床についた。その時。

「千鶴ちゃん。」

「お、沖田さん……。ダメじゃないですか！お部屋で寝てないと・・。」

「えー。いいじゃない。今日は千鶴ちゃんに話を聞いてもらいたくって。」

松本先生から病名を聞かされてから沖田は基本、夜は千鶴としない。理由はお互い聞かなくてもわかつている。

「わかりました……。入ってください。」

「はい。」

沖田は襖を閉めて千鶴の布団の上にちよこんと正座した。

「お話ってなんですか？」

「ん？ああ。病気のことをね、近藤さんと土方さんに言おうと思う。」

「！！」

千鶴は口を開いた。その口を両手で隠した。

「これ以上。隠せないや。隊務中にも咳がひどくて……。たまに……。稽古の時も誤魔化せない。」

「沖田さん……。」

「だからこれ以上君にも近藤さんにも心配顔させたくないんだ。まあ。言っても二人は人がいいからするかもしれないけど。」

「しますよ。心配ですからね。」

「あはは。そっかあ。」

沖田は嬉しそうに笑うと千鶴にもたれかかる。

「あのさ。今日、考えたんだよね。」

「はい？」

「病のことを言って近藤さんはきつと僕のことを心配するから……。きつと僕が恐れていたことをするんだ。江戸に帰れ……。とか。」

「……！」

「そんなこと言われたらどうしたらいいのかなあ。近藤さんの言うこと何も間違っていないじゃない。だって闘えない奴はいらないんだから……。」

「そんなことない……。！」

千鶴は沖田を抱きしめる。沖田の髪をなでる。

「私は……。沖田さんが必要ですから。江戸には帰らないで……。」「うん……。」「」

沖田は起き上がると今度は自分から千鶴を抱きしめる。

「それからもう一つ。僕たちって女性を幸せにできないよね。結婚しても何をしてもらってもなんか意味ないよね。」

「意味がない・・・？」

「だってその人とずっといれないかもしれない。良いお父さんにもなれないなら・・・。」

「意味のないことなんてないですよ・・・。」

千鶴は沖田を見つめた。沖田は目を見開いて見つめる。

「沖田さんが好きです。それでは駄目ですか。いつ死ぬとか未来がないとかそんなのいいじゃないですか。今、この瞬間。あなたといれたら・・・。」

沖田はゆっくりと口づける。愛しい。病で死ぬなら彼女に殺された。い。そう思った。

彼女との未来はないに等しい。それは自分の体が訴えている。でも彼女はそれでもいいのだろう。

このぬくもりから伝わる思いがそう言っている。

彼女のことは大好きだけど彼女には幸せになってもらいたいからもうこんなことするのはやめよう。そう言おうと思っていたのに。

そんなことできない。

なんでこんなことになってしまったのだろう・・・。

それが憎い。自分が憎い。

いつそ、何もかも投げ出して彼女といたいと思ったり・・・。

でも近藤さんのそばにいたいと思ったり・・・。

（僕って意外と優柔不断？）

「うわっ！」

いつの間にか彼女を押し倒していた。彼女の顔は真っ赤だ。どうやら口付けが長すぎて彼女は息ができなくなって後ろに倒れてしまったらしい。

沖田がくすくす笑うと千鶴も笑い始めた。

「千鶴ちゃん。明日・・・。言いに行くときついてきてくれない

かな？」

「了解しました。」

沖田はすつと離れてさつさと部屋に戻って行った。

「そうか……。」

沖田の病名を聞かされた近藤は渋い顔をしたままだった。

部屋には近藤、土方、沖田と千鶴しかいない。

「でも全然平気ですから。人を斬るなら僕を使ってください。」

自分は道具です。そう言っているように聞こえる。

「それはできん……。総司。俺たちはいったいどんな顔でミツさんに会う？」

「そんなの近藤さんたちのせいじゃないですから。姉上もわかってくれます。」

沖田総司の姉。ミツ。千鶴は九月頃。その名を聞いた。松本先生に沖田を診せていたとき近藤が言っていた。

「総司。てめえ。自分の立場がわかっているのか？」

それまで黙っていた土方が鬼の目を向ける。

「お前は一番組組長だ。斬り込み隊のお前が病気でボロボロ。剣もまともにふるえねえなら組長返上だな。」

「わかつてますよ。でもなんで組長返上しないといけないんです？
僕より強い隊士がいるとでも？」

「ああ。今のお前なら勝てる奴らもいるだろう。」

沖田は本気で怒っているらしく土方を睨む目が千鶴には本当に怖かった。そして千鶴は声が出なくなつた。

「僕に勝てる？僕を斬れるって言つんですか？ええ？」

土方は目を逸らして腕を組んだ。

「前々から、お前は若すぎるって言われていたんだ。知ってるな？」

「そら、僕を見ながら聞こえるように言うんだから気づかないほうが馬鹿ですよ。」

「お前が病で闘えねえならさっさとやめろってんだ……。」

土方はそう言い残し去っていった。沖田は舌打ちする。

「総司。お前がよくなることを祈るよ。ちゃんといただいた薬を飲みなさい……。」

「はい……。失礼します……。」

沖田はうつむきながら去って行つた。

残された近藤と千鶴は何を言っているかわからなかった。

「雪村君……。」

「はい……。」

近藤が沈黙を破った。

「俺は総司に何をしてやれるんだろう……。」

「それは……。沖田さんはここにいたいと望んでいるんです。だから……。どうかここにいさせてあげてください……。」

千鶴は深々と頭を下げた。

近藤も頭を少し下げた。

その日から土方と沖田はほとんど話さなくなった。

土方はものすごい不機嫌になっていった。

隊士たちの間でも爆発的に沖田の体の噂が広がった。

こうして沖田総司は徐々に前線から後退していくのであった・・・。

32・ 眞実（後書き）

もつそろそろラストスパート

33・醜悪（前書き）

これから薄桜鬼本編通り進めていきます。ちょっとセリフは変えていきますが。ていうかアニメ！！誰か語りませんか！？周りの方に誰もいないんですよ・・。

慶応三年三月。

千鶴は沖田と昼の巡察の最中に彼女を見かけた。

南雲薫……。どこか不思議な雰囲気的女性。千鶴は走って追いか
け、薫に九月の制札事件のことを聞いた。原田は千鶴に顔が似てい
る女だったと言っていた。千鶴に似ている女……。それは心当たり
は一つだけだった。

薫はどこか挑発的な目をして違うと言った。優美で色気があって・
……。その艶やかな肌にも何もかもに千鶴には違うものがあった。

後に駆けつけた沖田は薫を睨みつけた。何故こんなにも殺気だっているのか千鶴は後に知る。
いたい……。彼女は何者なのだろうか……。

その日の夜。

千鶴の部屋には何もなかったはずだった。もの寝ようとしたところ白髪の男が現れた。

目は赤く、奇声を発し、これこそがあの雪の夜に見た羅刹――！。

千鶴は腕を斬られてしまった。壁に寄り掛かると男はよってくる。血が欲しい……。そう訴えかけてくる。千鶴の目にはその男しか映らなかった。

恐い……。誰か助けて。

（沖田さん……。）

沖田が言った言葉はいつも千鶴を助けてくれる。守るとか大丈夫とか。彼の声が蘇る。

蘇ってまた消える。

「た、助けて……。誰か助けて!!」

頼ればいい。そういつてくれたから叫ぶことができた。現れた人は彼ではなく鬼の副長だった。

土方は隊士を睨むと斬り捨てた。隊士はまだ動けるようだった。少しするとほかの幹部隊士も部屋に駆けつけた。

原田、永倉、平助が寄ってたかつて隊士を斬った。

あとは死体処理をすればいいという話だったのに……。

その時現れた男は伊東甲子太郎だった。伊東は叫んだ。だって幹部が隊士を殺しているのだから。近藤さんの対処で伊東は去っていくがこれが御陵衛士を組織するきっかけとなるのだった。

翌日。

伊東はご機嫌だった。理由は斎藤、平助ら十三人が離隊するからだ。伊東にすれば新選組はそりが合わなかっただろうし、斎藤は無敵の剣と呼ばれているし平助は同じ一刀流だ。

だがこの離隊は簡単なものではないだろう。だって斎藤と平助は幹部で、気が合う仲間だったのだ。

千鶴は中庭にいる沖田に聞いた。今回の離隊のこと。

彼は次会えば殺し合いだと淡く笑った。それが自分の仕事だと。

そうかもしれない。新選組の前に立ちはだかる敵を斬ることが彼の仕事であり、生きる理由だ。

だから千鶴が止めても無駄なのだ。

千鶴の怪我はすっかり治っていた。まだ包帯で隠しているが……。離隊した後、千鶴に募る不安感は簡単に消えることはなかった……。

慶応三年六月。

その日の夜、千鶴に客人が訪れた。
土方と呼ばれ、広間に行けば幹部が勢ぞろい。そこにいた女性二人
お千と君菊だった。

お千は千鶴にとって衝撃的な言葉を口にした。千鶴が鬼だということ。
と。風間千景の目的・・・。

なんでも鬼は人とは違うのだがこの日本にかすかに生息しているらしい。

鬼は超人並の力を持っているので人間に利用され、それを拒めば村
が襲われたこともあったそうだ。

風間は西の頭領で千鶴は東の鬼頭。その二人の間の子供は強い鬼の
子だ。その子供を風間は狙っているらしい。

お千は千鶴はここにいないべきではないと言った。彼らでは千鶴を守

れないと……。

でも千鶴にはそんなことできなかった。だって……。

お千と二人で話するとき千鶴は沖田を見つめた。

彼は変わらず微笑んでいたが千鶴がすべて決めればいいというような表情をしていた。

顔色があんまりよくないのに沖田はずっと起きている。それが辛くて千鶴は顔をすこしそむけた。

お千に好きな人はいるか。そう聞かれたとき、千鶴は正直に答えた。消えることのないこの思い。彼のことを愛している。それが自分の真実なる思いだ。偽りなんかなかった。

お千が帰った後、床に着いたが中々眠れない。外が騒がしい。

現れた島田という千鶴がよく知る隊士が言うのは鬼たちが襲撃に来たということだった。

千鶴は外へ走った。すると風間に腕を首に回され、身動きができなくなった。

土方と原田がこちらを見て助けようとしてくれる。

「あなたたちの目的は知っています……。」

千鶴はかすれる声で風間に言い放った。

「ほう……。」

「だから……。皆さんに手を出さないで！殺さないで！！」

千鶴は叫んだ。その姿を見て土方と原田は驚く。

「ならば大人しくついてくるのだな？」

「いいえ・・・それはできません・・・。」

「何？」

「私にはやるべきこととできることがあるのです・・・。」

だから・・・私は今、生きる。ただあなたたちの助けが必要です。そんなことを心のなかでいい、土方と原田と見つめた。

それがわかるように二人は助けてくれる。現れた天霧と不知火もあしらって。

土方と風間の打ち合いは緊迫感と緊張感が重なって怖いくらいだった。

風間がなぜか去っていくと緊張の糸がきれて、どうしようもなく足の力が抜けて涙が止まらなかった。それを原田は兄のように慰めて拭ってくれる。さすが女性の扱いがうまい・・・。

原田に部屋に送り届けてもらうと自然と眠りについていた。

次の日、朝起きて冷たい水で顔を洗った後、広間に行くと島田や、

山崎がいた。皆の表情は厳しかった。そして後から現れた近藤が言

ったのは屯所移転の話だった。

鬼の襲撃もあったので本願寺の御坊様たちも我慢の限界だったのだらう。

元々、西本願寺は長州藩に協力的だったから・・・。

こうして・・・。

六月十五日には新選組は西本願寺が用意してくれた不動堂村に屯所を移すことになったのである。

33・醜惡（後書き）

セリフない。ほとんどない。マジすいません。読みにくくて・・・次回は・・・もっとマシなはず・・・。。頑張って薄桜鬼通りに・・・この辺はあつさりしていきます。大事なんだけどね・・・。すみません。

34・溺れた瞳（前書き）

更新遅れます・・・すみません。

34・溺れた瞳

千鶴は屯所移転の話や、島田が怪我を負ったことで罪悪感でいっぱいだった。千鶴は生真面目な性格だからこんな時一番気にしてしまうのだ。

気にしないのもどうかと思うが。

千鶴は広間を出て、中庭に出た。

少し暑い日差しが千鶴に降り注ぐ。でも風は気持ちがいい。

千鶴は目を伏せて、空を仰いだ。しばらくしていると。

「よく、そんなに目を閉じて立っていられるね。」

声の主は一瞬でわかったが、千鶴は驚いて、腰を抜かし、相手のほうをうつるんだ目で見た。

「お、沖田さん……。」

か細い声がでる。自分でも驚いた。

「驚きすぎじゃない？」

彼はおかしそうにくすくす笑い千鶴が腰を抜かした縁側に近付いてきた。千鶴は体制を戻してちゃんと座った。

「大丈夫？近藤さんから聞いたんだ……。」

そうか。彼は眠っていたので気づいていなかったのか。昨夜、鬼が襲撃してきたことを……。

「勘違いしないでよ。僕は起きていたよ。でも、動けなかった。」
彼は悔しそうに唇を噛んだ。

「君を僕の手であいつらから守りたかった。ごめんね。」

彼は悔しそうだがどこか寂しそうだつた。

「屯所も移転しなきゃなんないんだつてね。」

「私のせいですね……。」

彼は舌打ちした。そんな風に千鶴には見えた。

「馬鹿。なんでそんな風に思うの？」

千鶴の目から涙が零れた。それを沖田は目じりに指をふれ、拭う。

「僕らの仕事は君を守ること。お上の民を守ることとも仕事なんだから。それに君のことは千姫から守ると言つて預かつたんだ。だから君は甘えればいいんだよ。」

そんなこと言われると涙が止まらない。千鶴は沖田の優しい目を見ていたが辛くなる。それでも見つめ続ける。

「だつて……私がここにいなければ……。」

「ああ……もう……。うるさい。千鶴。斬るよ!？」

沖田は本当に怒っているようだ。普段は千鶴ちゃんと呼ぶが夜の時や、何か特別なことを言うときには呼び捨てにしたりする。だから千鶴もつられていつたりする。

「そんなに深く考えないで。君はここにいる。ここにいていいんだよ。」

千鶴は訳がわからなくなつていた。もう無理だ。

「駄目……っ!だつて私は……。鬼です……。」

彼の目の色が変わった……。気がした。

「お千ちゃんのお話、お聞きになつたでしょう。私は人ではない。」

「人じゃないからここにいちやいけないの?」

沖田は少し顔を緩める。

「何度も言つてることを言わないといけないかなあ?」

彼は少し顔を赤らめてから真顔になつて。

「僕は君が好きだから……。愛しているから……。どこにも行かないでほしい。」

その瞬間、闇が消えたと思つた。沖田はに抱きしめられて泣いて。思いが言えない。自分なんかいないほうがいい。出て行つたほうが

いい。そう思った。でも彼から離れられない。そんなことできない。そんなことしたら死んでしまう。そうも思ったのだ。

「ありがとう……。」

かすれる声で呟くと沖田の抱きしめる力を強くする。まるで決して離さないように。

「気にしないでいいんだ。君はいていいんだ……。守るから。」

このまま溺れていた。彼だけを見ていたらどんなに幸せだろう。羅刹のことも鬼おことも考えないでいたら……。この先を……考えなければどんなに幸せだろう。

「おおゝ熱いね。」

二人は飛び上がった。この声は。

沖田は振り返ってその人物を見た。

「なんですか。新八さん。いい雰囲気ブチ壊しじゃないですか。」

沖田は口をとがらせ、永倉を睨みながら言った。

「悪いな。生憎、二人がいちゃついているところは見たくないんだよ。

それに俺は千鶴ちゃんを心配してだな……。」

「あ……。永倉さん。ありがとうございます。」

千鶴は頭を下げる。新八は恥ずかしそうに頬を？いた。

「まあ。俺より総司のほうがいいか。」

「そうですよ。早く行ってください。」

「へいへい。」

永倉はさっさと去って行った。

（珍しく、気がきいてるじゃないか。）

沖田は少しにやつと笑った。

おまけ……です。動かないのはおまけだからです。

「ありがとうございます。沖田さん。」

「うん。」

「お体どうですか？」

「大丈夫です。」

「お薬飲んでますか？」

「飲んでますよ。」

「隊務は……。」

「うーん。それはどうか？前より仕事減ったね。昼の巡察くらいしかさせてくれないんだ。」

「土方さんが……心配なさってるから。」

「ふーん。僕はそうは思わないけど。」

「どうしてですか？」

「だって土方さんは……見えてるくせに見えてないところがあるから。」

「？」

34・溺れた瞳（後書き）

最後の会話はオマケです。

35・終焉と始まり（前書き）

迷ってます・・・。羅刹のこと・・・とか。

35・終焉と始まり

慶応三年六月十五日。新選組は屯所を不動堂村へ移した。

このころ、近藤勇は直参になった。また新選組、組長たちは幕臣にもなる。この時、これに意を表した隊士もいた。理由は新選組は全くの幕府の家来になってしまったからだ。

それぞれ尊王派や佐幕派、攘夷派・・・組織というのは様々な人間がいるものだ。

怒った隊士たちは離隊することになった。けれどもうまくできないものは切腹をよぎなくされた。

千鶴は与えられた新しい部屋を綺麗に掃除していた。初めての屯所だ。地理も何もかもわからない。

思わずため息をついた。千鶴は今、考えることがいっぱい息をしているときに辛いときがある。けれど。

「千鶴ちゃん。」

振り返ると部屋の襖が開き、背の高い男が立っていた。

「沖田さん・・・まだ寝てなくていいんですか？今日は非番なのに・・・。」

沖田は苦笑して口を開きながら座り込んだ。

「そんな病人みたいな扱いしないでよ。」

「沖田さんは気になさすぎです・・・。ご自分のことをもっと考えてください。」

「へー。よくわかるね。僕が自分に關心ないって。」

「それは・・・。好きな方のことですもの。」

千鶴は優しく微笑んだ。沖田は不意をつかれたように驚いた顔を少し笑った。

「普通はもつとあつたほうがいいのだろうけどね。僕は人を斬ることができればそれでいいんだ。」

「・・・はい。」

「まあ、君には恋人は男前ですって言ってほしいね。僕は男前じゃないけど。」

「そ、そんなことはありません！沖田さんは世界一かつこいいです！」

千鶴は思わず言っていた。言った後、千鶴は顔を赤くしながら口を手でふさいだ。

「あ、あははは！そんな恥ずかしいこと言っただろ。」

旁咳が嘘のように彼はニコニコ笑う。この会話が本当に幸せだと思う。

「土方さんや、左之さんより僕はかつこいい？」

沖田が首をかしげて微笑む。

「は・・・はい。そうですね。だから島原へ行っても沖田さんはもてるんですからちゃんと・・・。」

「僕はもてないよ？土方さんたちのほうがもてる。だから大丈夫。ていうかもう行く予定なんかないけどね。」

それはそれで・・・。千鶴は思う。きっと千鶴のためか体のためだ。

「ね。今日、出かけない？」

「へ！？な、何言っんですか！？」

「今日は葬式の準備だし。武田さんの。」

「あ・・・。」

武田というのは武田観柳斎という五番隊の組長だった。此間、鴨川の橋で暗殺された。暗殺した人物は土方は語らなかった。彼が暗殺されたのは伊東や薩摩藩と接触したためだった。

「ま、一樣、組長だしね。葬式はしないと。僕はあんまり好きじゃなかったけど。まあ。一回斎藤君がいいこととしてすっごい笑ったのを思い出すといい思い出だね。」

「いい思い出って・・・。」

「武田さんの話聞きたい？」

千鶴は頷くこともしなかった、が目をぱちくりさせた。

「ねえ、出かけようよ。いいでしょ。」

沖田は千鶴の手を引っ張ってくる。

「わ、わかりました！でも土方さんに許可をとらなければ・・・。」
もうこれ以上反対しても無駄だと思い、千鶴は諦めた。

「うーん。問題は許可だな。こういう時斎藤君がいたらなあ。言ってくれたのにね。」

「反対されると思うんですけど・・・。」

「そんなことないよ。彼は彼で僕のことわかってくれてるんだ。同じ剣を持つもの同士ね。」

千鶴は沖田の横顔を見つめた。その顔は淡く、穏やかだった。

「幹部で頼りになる人がいなーい。新八さんは論外だし。左之さんは・・・。左之さんなあ。」

「お、沖田さん？」

「よし。左之さんに頼んでみよう。行こう。千鶴ちゃん。」

沖田は千鶴を連れてるんで屯所を巡った。

「屯所の地理全然わからないです・・・。」

「ああ。大丈夫。僕、完璧。地図見せてもらっただけで全部歩き回

ってないけど。」

彼は本当に頭のいい人だと思う。地図を見ただけで屯所内を全て理解できるなんて。普段は意地悪でけらけら笑う沖田だが、純粹にすごい。自分なんて普通の普通だ。

やがて原田の部屋についた。そういえば俺はこの部屋だ。何か用があればいつでも来いって笑顔で言われたのを思い出した。

「左之さん。総司です。」

中から声が聞こえた。原田は入れと言ってくれた。

二人が部屋に入ると原田は何やら部屋を整頓していたようだ。千鶴と同じで原田も綺麗好きなところがある。

「何だ。二人だったのか。どうしたんだ？」

「す、すみません。原田さん、お邪魔でしたよね。失礼します。」

千鶴は頭を下げて謝ると沖田の手を引っ張る。

「もう！いいじゃない。どうしたの？千鶴ちゃん。」

千鶴は口を結んで答えない。

「あ？どうしたんだ・・・？」

「あ。実は二人で出掛けようと思ったんですけど、土方さんに言ってもらえませんか？」

沖田は簡潔に単刀直入に言った。

原田は苦虫を踏みつぶしたように口をあんぐり開けている。

「な、なんで俺が・・・。」

「お願いしますよ。頼れるのは左之さんだけなんです。」

沖田は原田の肩にもたれかかる。

「や、やめろ！気色悪い！！」

「離れてほしいなら土方さんに言ってください。」

「わーったよ！」

沖田はすつと離れると嬉しそうに笑顔になる。

「でも・・・土方さん、今すげー機嫌悪いぞ。武田さんのこともなんか難しそうに考えてたし。葬式の準備も忙しいみてえだし。それにお前・・・。」

原田は目を細めただけでそれ以上言わなかった。

「わかってます。でも僕のこと考えてくれませんか？」

沖田はふふつと笑う。それは変わらないが顔色が悪い。

原田は全てを察した。言わなくとも男ならわかる。そして千鶴を見る。

元々あまり口数の多い娘ではない。彼女は目を下に向け、黙っている。

「千鶴。」

原田は優しい声色で千鶴を呼んだ。千鶴は顔を上げる。

「安心してろよ。」

それだけ言つと原田は部屋から出て行った。

「土方さん。いいかな？」

「ああ。入れ。」

土方は机に向かって機嫌が悪そうな声を出す。正直、もうこの部屋にいたくないと原田は思った。沖田と千鶴の外出許可をくれなど言語道断、的なことを言われそうだ。

「どうした。原田。」

「いや・・・あのさ・・・。」

原田はうまく言えない。冷や汗が何故か出てくる。

「早く言え。」

こちらを向いて土方は原田を睨む。

「そ、総司が・・・ち、千鶴と出かけたいから許可をくれと・・・。」

「

原田は思わず目をつむって言っていた。絶対怒鳴られる。と思っていたが。

「・・・そうか・・・。わかった。くれてやる。」

「へ!？」

顔を上げ、土方の顔を見る。相変わらず目を惹く顔をしている。

「な、なんで・・・いいのか？土方さん。」

「・・・あいつのことを考えたらな・・・。」

「!」

「あいつの病はそう簡単に治るものじゃないんだろう？あいつは休むことは考えない。あいつの気持ちも俺は少しはわかる。俺だって病気でもなんでも新選組のために働くさ。」

「そ、そうだよな・・・。」

「あいつはいつも遠慮してるところがある。自分のことを一番知ってるし、いろいろな見方をしてる。俺なんかより視野が広い気がするな。」

「総司は変わり者なんじゃねえか？」

原田は緊張がとけ、足を崩す。

土方は淡く笑っただけだった。

「なんであいつなんだろうな・・・。俺だって、お前だって人を斬って・・・。」

「ああ。俺たちもあいつも変わらねえのにな。神様は残酷だ。」

原田は天井を仰ぐ。

「総司は・・・千鶴に本気みてえだ。島原に誘っても来ない。」

「お、お前らは行きすぎだ。」

土方が呆れた顔をする。

「まあまあ。で。千鶴はやっぱ心配しまくりだ。」

「・・・・・・。」

「総司もそれが嫌みてえだな。誰だってそうだろ。惚れた女の元氣のない顔なんて見たくねえ。」

「そうだな・・・・・・。」

「そついや、土方さん。武田さんの暗殺は誰をつかつたんだ？」

原田はざり聞いた。ずっと気になっていたので。

「それは・・・言えねえ。すまねえな。まあ時が来ればな。」

「そうか・・・・。いや武田さんが死んで皆正直ほつとしてるみたいだな。俺もだけどな。」

「死者をそんな風に言つな。」

「いやいや。でも俺も言い寄られたことあるし・・・土方さんもだろ？」

土方は嫌な顔をして答えなかった。

「総司も斬りそうになって大変だったじゃねえか。まあ武田さんは優秀な軍師だけだよ・・・・。」

「もういい。早く総司に伝える。それとお前も一樣ついていけ。こつそりでいい。」

「はあ！？なんで俺が！？」

「何言つてやがる。お前が俺に頼んだんだろう？考えてもみる。伊東派がごろごろいる。長州の奴らもごろごろいる。そんなところに病人と娘一人。危険じゃねえか！」

「危険だけど・・・よ・・・なんでせつかくの休みの日に・・・・。」

「いいから行け！山崎にも頼んでおく！」

土方は舌打ちをして原田を部屋から追い出した。

35・終焉と始まり（後書き）

武田さんは男色家という設定です。フィクションらしいですけど。

36・裁かれる四肢（前書き）

EDは二つつくろつかと思います。

36・裁かれる四肢

「まさか……。本当に左之さんが許可くれるなんて。しかも着物まで用意してくれるとはね。」

沖田は大通りを歩きながら横にいる少女をまじまじと見た。

少女はいつもの男のものの着物ではなく女の着物で、薄い白地に桜の模様の着物は彼女が屯所に来てとても成長したことがわかる。

沖田は日々、彼女のことを見てきたつもりだったがこれまで綺麗になっっているとは思わなかった。

千鶴は頬を赤くしてうつむき何も言わない。沖田は千鶴の少し冷たい手をとった。

「行こうか。千鶴ちゃん。」

「は……。はい……。」

こうして歩いているとなんだか本当の恋人同士のように思えて千鶴は一人少し笑う。

沖田は長身で彼を見上げることしかできない。

「どうしようか……。ここは人が多いけど買い物にはちょうどいいよ。」

「買い物って……。お金はあるんですか？」

「あのね……。僕は一樣組長だよ？給料くらいもらってるさ。ま。実際最近使わないからね！。いらないつちゃいらないか。」

「お金はいるものです。世の中には飢えた人々もいるのですから……」

」。

深刻な顔をする千鶴は可愛いくて沖田は笑った。

「わ、笑い事ではありませんよ！」

「ごめん。ごめん。そういえば思い出した。」

沖田は千鶴を引っ張った。千鶴は抵抗せず体を任せた。

連れて行かれた場所は簪を売っている店だった。

「お、沖田さん・・・。」

「大分、前、なんか物欲しそうに見ていたのを思い出してね。ごめん。僕は自分のことしか見えてなかったから。それに女性になんて言ってあげればいいのか・・・気のきいたことを僕は言えないと思うし。」

千鶴は信じられないというような顔をした。あの沖田総司がそんな・・・女のことで悩むなど・・・。なんていえないのか？そんなの沖田にとつてどうでもいいことのはずだ。それなのに。

「これ、一番きれいだ。君に似合いそうな簪だ。」

沖田が持つ簪はいかにも高価な銀色の翡翠が飾りの簪。綺麗で・・・

。千鶴は何とも言えなくなった。

すると店員が乗り出し。

「ああ。お客様、お目が高い。これは非常に高価な簪です。きっとお嬢さんにお似合いです。」

笑顔のふくよかな女性は千鶴を見据える。

「そうだね。これ、ください。」

「だ、ダメです！こんな高価なものを・・・。」

千鶴は沖田を止めるが沖田は。

「一つくらい君に残してやりたいんだよ。」

その言葉が重くて千鶴は次の言葉が見つからなかった。

「はい。千鶴ちゃん。」

そう言われて簪をつけられる。簪だけが華やかで絶対に似合わない
と自分で思う。

「すごい。似合ってる。可愛いよ。」

耳元で囁く沖田はとても嬉しそうに笑うので何も言えなくなった。
やや笑うと沖田もまた笑い返す。

「どこに行こうか……。」

「そうですね……。」

いつの間にか会話は途切れて河川にいた。日がだんだん暗くなり
はじめているのがかすかにわかった。

「ありがとうございます……。沖田さん……。」

「うん？」

沖田の髪が風になびいて綺麗だと千鶴は思った。

「私を見ていてくれて……。」

「見ていて……？簪買ったことより？」

「いえ。それももちろん感謝してもしきれないほど嬉しいです。
でもあれもこれも沖田さんが私を存在してもいいと思ってくださる
からです……。」

「どういう……。」

「私はいつでも死ねた。気に入らないなら捨てればよかった。それ
だけの存在です。今も役に立てている自身はない。でも沖田さんの
ためならたとえどんなことがあっても大丈夫。今はそう思えるん
です。」

なんて悲しいことを言う娘だ。沖田は苦い思いをした。

「私は世界一の幸せ者ですよ。愛する人とこんなにそばにいれるの

ですから。」

沖田の胸に千鶴が近付いてくる。沖田は手を伸ばして抱きしめる。今日は本当に女の子。

「僕もだよ。幸せだ。ねえ。千鶴ちゃん。思わない？僕がいつか死んだときのこと……。」

「嘘をついても……いいですか？」

「うん……。」

「思いませんよ……。そんなこと……。」

千鶴のくぐもった声ですべてがわかる。この娘はいつでも沖田を見て、自分の力のなさを呪って生きているのだ。こんな彼女を昔はきつと憐れに思っただろう。でも今はただ愛しくて仕方がない。

「君はすぐ泣いてしまうから……。大丈夫だよ。」

顔を上げると沖田は微笑んでいた。穏やかな顔で。

「僕は君のために生きたいと思うから……。」

「……！」

「嘘……についてもいいんだよね？」

すると涙が溢れて声を殺すのが精一杯だった。

本当のことをお互い叫んで言えたらどんなにいいだろう？

知っているのに知っているのに……。

言葉にしてくれないと不安で仕方がない。

怖い。明日が怖い。

笑顔が見れるのに？話せていれるのに？

それすら心のどこかで怖い……。

「帰ろう・・・。」

「はい。」

こうやって二人で出掛けれるのはこれで最後・・・そう言い聞かせて沖田は目を閉じ、もたれかかる少女を盗み見た。

自分は異端な存在だ。幸せになど・・・人を幸せにすることもできない。幸せになる権利も何にもない。

何故なら人の幸せを奪ったのだから。

なのに生きたい。この病を蹴散らしどこかへ二人で逃げ出したい。

大事なものを全て捨ててまで彼女といたいなんて誰も許さないのに。でもしないのに・・・。

何故、またこんなことを思うのだろう。

自分は武士だ。

武士での死に方は決まっている。

戦場で死ぬか、腹を切って死ぬか。

病で死ぬなど絶対に自分は嫌だ。

そう・・・それは確実に本当のことなのに・・・。

彼女になら殺されてもいい・・・。

自分を憎んで殺してくれても構わない。

でも彼女の手を汚したくない……。

「……………」

「沖田さん？」

「ん？なんでもないよ。」

自分がおかしくて沖田は笑んだ。

37・嘘と横顔（前書き）

本編と違うようにしたいです・・・。

二人はどこも寄り道せず、屯所へ帰った。彼女の娘姿が見れたのは初めてだったのでおいしい思いが多い沖田だったが体のほうが限界のようだ。

最近ではいつ咳がでて、血が出るかわからない。体が常に辛い。あの労咳なのだから当然かもしれないが精神的にもきつくなっている。

彼女の笑顔を見れば元気になるのだが自分がこんな状態では彼女はうまく笑ってくれない。本当に正直で真っ直ぐな娘だ。

「沖田さん？」

屯所の門の前でいつの間にか立ち止まっていた。

「ああ。ごめん。早くしないと土方さんに怒られちゃうからね。裏から行こう。君の部屋は遠いから僕の部屋で着替えなよ。着替え、持ってくるから。」

千鶴の返事も聞かず、沖田は自分の部屋に連れて行って千鶴を押し込んだ。襖を閉めると。

「ごほっ……ごほっごほっ……。」

咳がいつもより大きく長い時間おこる。口をおさえていた左手には血が。

沖田は少し目を細めて何事もなかったように立ち去った。

「土方さん。」

「入れ。」

土方は沖田だと声でわかったらしく部屋に通した。沖田は土方が机に向かつている姿を見て、遠慮がちに襖を閉める。

「どうした？俺は夜まで帰ってこねえと思ってたんだがな。」

「そのつもりだったんですけどねえ……。」

沖田は頭をかきながら座り込んだ。

土方と話すのは久しぶりな気がする。自分も部屋にこもることが多くなった。いやそうせざるおえないのだ。土方は土方で機嫌が悪いし、忙しい身だ。

土方はこちらに向いて沖田を見据えた。

「お前……。」

沖田のいい色でない顔色を土方は目を細めてみる。それに沖田はいらだって睨む。

「これ以上……僕の機嫌を害さないでください。」

「はあ！？てめえ何言ってやがる。いつも気分害されてるのは俺のほうだ。」

「あははは……。そうですよね。土方さんは怒ってばかりだ。」

「お前は……。我慢しすぎなんじゃないか？」

「は？」

「千鶴のことも近藤さんのことだ。お前は恐ろしく執着心と独占力があるからな。」

沖田はお腹の底から笑った。

「はっ！土方さんでもそんな冗談みたいなこと言っんですね！」

「真面目に言ってるんだ！馬鹿野郎！」

沖田に愉快に笑われて土方は怒鳴った。

「・・・そうですね・・・。僕はいろいろ我慢してるのかなあ。」

「なんかお前が言うともむかつくな。」

「土方さんは僕が何言っても腹立たしいんでしょうよ。」

「そうかもな・・・。」

しばらく沈黙が落ち、それぞれ違う方向を向いた。沖田は刀を横に置き、寝転がった。

「土方さんの気持ち少しはわかったかもしれない。わかりたくなかった気持ちだね。」

「ああ？なんだよ。わかりたくなかった気持ちって。」

「僕って色々矛盾していますから。真っ直ぐな馬鹿な人の気持ちがわからなかっただけです。」

「てめえ・・・。」

土方は沖田の顔をつねる。普段の沖田なら斬りかかってくる勢いで睨んでくるだろうに沖田は穏やかな顔をして天井を見つめている。

思わず土方は手を離れた。

「総司・・・。」

「時々・・・思っんです。近藤さんと出会ってなかったら・・・僕は何してたんでしょう？・・・多分、とくに死んでたかなって。」

「俺も・・・近藤さんと出会ってなかったら武士を夢見てるただの薬屋だっただろうよ。」

「そうなんですよねえ・・・。あなたとも出会ってなかったでしょうね。あーあ。これって人生において一番の不思議ですよね。」

沖田の声はだんだん小さくなつて聞き取りにくくなつたが土方はしっかりと聞きとつていた。

「そんなの考えるだけ無駄だぞ。過去なんてどうしようもねえんだ。」

沖田は頭を土方に向け、優しい目で土方を見た。

「だから土方さんも僕のこと気にするのやめにしてください。」

「！」

「あなたの心配ははつきり言つて余計なお世話です。あなたとは一番付き合ひが長いですけど・・・僕たちは他人だ。」

「お、おま・・・。」

「感謝してますよ。あなたには。まあ嫌なところもいっぱいあるけど今日のことも感謝してます。ありがとうございます。」

沖田は少し頭を下げ、刀を手に取つた。

「過去なんてどうしようもないんだから気にしないでくださいね。」

「これも定めです。」

「そんな簡単な言葉で片付けんじゃねえ！俺は・・・俺はお前を・・・あの人が託されてんだ！」

「そんなあ・・・。人の姉が死んでいるみたいに聞こえるんですけど。」

沖田は立ち去り際にふつと笑つて言つた。

「僕は新選組のためにこの命尽きるまで闘いますから。副長さん。」

僕のこと、思う存分使つてくれていいですよ。期間限定で。」

まるで近藤のおまけのように沖田は面白く言う。

本当は沖田のことが心配で仕方がなかった。でも沖田はきつとは全部知つていてものすごく嫌だったのだろう。

人に病のことを心配されるのは嫌だ。自分ならどんなに辛くても言うまい。でも沖田は自ら言つた。それはきつと近藤のためで。

沖田が自分をあまり好いていないのは知っている。だが自分たちはこの関係でいい。

沖田はずつと剣なのだから。大将の敵を誰でも斬れる剣だ。

「はあ．．．．．馬鹿か。俺は．．．。」

今日のことはまるで沖田総司の最後のようではないか。自分はどこかで沖田が死ぬとも思っているのか。

（あいつが死ぬなんてない．．．．．）

どんなに病が大きくても自分はそう信じている。

でも彼もきつと新選組が散れば、もうどうでもいいのだろう。自分もそうだから。

（千鶴が．．．．．いる。）

千鶴のためにお前は生きろ。

そう言いたかった。

37・嘘と横顔（後書き）

もうフラグじゃねえか……。これから重くくなっていくでしょう。十分重いけど。今回は沖田さんと土方さんの思いというかそんなのを書きたかった。

それと千鶴ちゃんと一緒に出掛けられるのは最後――。

このころましてや病気じゃデートもできなかったでしょうね……。

千鶴ちゃんの着物はちゃんと届けてますよ――！！

38・稲魂（前書き）

オリキヤラです……。マジで苦手な方は飛ばしてください。まあ
お千ちゃんもオリキヤラだしね。ちーさまだって薄桜鬼のオリキヤ
ラだもん。いや全然いいんですけど。
オリキヤラはなるべく早く終わらせます……。

それは十月が終わろうとしていた頃だった。

その日はいつもよりも暖かい日だった。京は江戸より寒いので十月もそこそこ寒かったのだが今日は驚くほど穏やかだった。

「おはようございます。」

千鶴はいつもと同じように朝飯の時間に広間に入った。普段は手伝っているが昨日別にいいと言われた。何故だろうか。

そんなことを考えながら広間に入ったのだが……。

千鶴は一步下がった。なんだ。この異様な空気は……。

幹部全員が難しい顔をして目の前の食事を睨んでいるのか……それとも。

千鶴が目に向けた先はある女性だった。女性は上品な淡い緑色の着物をき、派手な飾りの簪をつけ、濃い化粧は彼女の顔をきつくしている。彼女の年齢は土方と同じくらいにも見えたり土方よりも年上に見える。

異様な雰囲気的女性は顔を少し千鶴に向けた。ふっくらした唇と大

きすぎる瞳が千鶴の目に焼き付いた。

「可愛い男の子じゃな。」

その声は低くて、でも艶のある色っぽい声だった。

千鶴はどう反応していいのかわからなくておどおどしているばかりだった。

「このような狼の巣にこんな弱そうな男を置いて・・・何を考える？」

女性は目の前に対峙している土方に問いかけたようだった。

「お前には関係ねえ・・・。女のくせにでかい口をたたくな・・・。」

凍えるような殺気を土方は放っていたが女性は鼻で笑う。

「妾の口調を気にめさぬのなら拷問でもかけて妾を従えたらどうじゃ。最も。貴殿にはできぬだろうがな。」

「黙れ。俺は泣く子も黙る鬼の副長だぞ・・・。」

土方は本当に怒っているようで周りにいる幹部隊士は見て見ぬふりをしていた。

「ふふふ・・・。そうじゃな。すまんかった。で。飯は食わんのか。その子供で全員揃ったのではないのか？」

「てめえな・・・。」

土方は女性に説教をはじめめる。千鶴はそつと一番近くにいた原田に耳打ちした。

「あの・・・原田さん。あの方は・・・。」

「ああ？俺たちも初対面だよ。」

「ええ！？」

「土方さんも初対面ばいな。だけど友達みてえに見える。ていうか初対面であんな態度する女はそういねえか。」

友達ではないと思うが・・・。千鶴は女性を見つめた。こんなに綺麗な女性は見たことがない。君菊のこととも綺麗だと思った。でも彼女はまるで・・・。雨にも風にも負けない強い華のような・・・。

「てめえ……。自分の名前も言えねえのか？ああ？」

「名を聞くときはまず貴殿から言うものだろう？それに全員揃ってからだと思つたのじゃ。驚いたものじゃ。かの有名な新選組が素性も知れぬ女を屯所へ入れるとはな。」

「ああ。それ氣になつてたんだ。なんでだ？土方さん？」

永倉が土方に聞いた。

「朝目覚めたらこの女が部屋にいて俺に大事な話がある……。簡単に殺せるか？だいたい女が入れる隙間があることが問題だろうが！！」

「そんなあ……。俺にきれねえでくれよ……。」

本当に怖い。千鶴は土方の顔を見ながら思った。

「入るのは簡単だったぞ。まあ。よい。局長殿は出かけているようだが話そうか。」

彼女は幹部隊士全体を見回し、優雅に礼儀正しく頭を深々と下げた。その角度も全て完璧で千鶴は口を開けてしまった。

「妾の名はお蓮れんと申す。今日は伊東先生のことです。参った。」

「伊東のこと……。だと……？」

お蓮は頷いた。

「妾は御陵衛士の一員だ。」

「あんたは伊東の命令でここに来たの？」

それまで黙っていた沖田が低い声で言つた。

「そうではない。幕府の犬の貴殿達に興味があつた。」

「は？そんなことで？馬鹿じゃないの？絶対死ぬじゃない。」

「そうじゃな……。妾の力では貴殿達を負かすことなどできません。だがな。妾の力は役に立つと思ふのだが。」

お蓮は土方を見つめにやつと笑つた。

「心配せずともすぐ帰るわ。こんなむさ苦しいところでゆっくり眠れん。」

お蓮は愉快に笑うが隊士たちは彼女を睨み続けるだけだった。千鶴は横で殺氣を感じ、震えはじめた。

「いいから早く話せ。伊東がなんだ？」

「まあまあ。妾は自己紹介してもらつたらんぞ？貴殿をなんと呼ばいいかわからん。鬼の副長でよいのか？」

土方は舌打ちして面倒くさそうに言った。

「新選組副長土方歳三。」

「ほう。貴殿は噂で聞いたわ。伊東先生も言っていた頭のいい男だな。えらい色男だな。」

「……うるせえ……。」

完全に彼女のペースになっている。あの土方が自分のペースを作れない。恐ろしい女だ。

お蓮はまず永倉に指差した。

「貴殿は？」

「俺は……。二番組組長永倉新八だ。」

さすがの永倉も彼女に不快感を抱き、隠そうとしていなかった。

お蓮は頷くと横の沖田を指差す。そして貴殿は？と美しい顔をかしげる。

沖田は睨み、そして目を逸らし答えようとしなかった。

お蓮は微笑んでそれを無視し横へと続いた。

やがて最後原田に指が差された。

「十番組組長原田左之助。」

「ほう……。しんがりか。」

ふむ。と頷いて次と言った。

「え！？」

まさか聞かれるとは思わなかったので千鶴はまぬけな声を出してしまった。

「そなたは？幹部隊士ではないだろうな？」

「は、はい……。あの……。土方副長の小姓で……。雪村千鶴と言います。」

千鶴は頭を下げた。お蓮はそうかと笑った。お蓮は立ち上がって味噌汁をすすった。その時皆信じられないというような顔をした。

「うまい。のう。土方殿。貴殿の部屋へ行ってもよいかのう？話したいことがあるんじゃ。」

「はあ！？さつきと言ってることが違うじゃねえか！ここで話せ！お蓮は仕方がないというような顔をして土方の顎を掴んだ。」

「妾は貴殿と二人きりで話したいのだ。よいか？」

土方はお蓮の瞳にひきつけられ、断ることができなかった。

土方が出て行ったあと。広間ではまだ異様な空気が続いていた。重苦しい空気の中。

「なんであんな人入れたんです！？土方さんの馬鹿！」

「おい……。総司。そんな怒るなつて。土方さんだって考えがあるんだろ？」

永倉がなだめるが沖田は。

「あんな態度のでかい女初めてです！！女の人は男を立てるものでしょう！？それなのに自分のほうがえらいみたいなああの口調。斬つてしまえばいいんだ。」

「確かに。伊東の密偵にしかみえねえだろ。ていうか自分から言つてたし。」

密偵とは言っていないかったが伊東のことで来たと彼女は言っていた。「とにかく僕はただで返すことは絶対にやめたほうがいいと思いますよ。御陵衛士の仲間なら伊東のこと聞き出してから殺せば問題ないでしょう。」

沖田は舌打ちしながら広間から去って行った。

千鶴はあんな女の人がいることに驚いた。男の人を全然恐れていな

かった。武士の家系の人もたくさんいるのに……。この時代は男が絶対えらい。ちゃんと女を立てる男もいるがたいていは亭主関白だ。

「まあ……。でも変わった女だな。死ぬ覚悟で堂々と来ているんだろうな。」

原田が言ったことはもつともで、千鶴は頷いた。

「おい。わかっているのか。そう簡単に帰れねえぞ。話しても話さなくてもお前は生かして返せねえ。」

「知つとるわ。心配せずとも帰るつもりはない。」

土方は首をかしげた。彼女は姿勢よく座って前を見据えている。

「どういうことだ。」

「妾は伊東の芸妓の女だ。名目上はな。」

土方は目を細め、足を崩し、胡坐をかいた。

「妾の主君は松平容保公だ。貴殿達ともゆかりの深いな。」

「それで？」

「いわゆる妾は新選組の監察のようなものだ。相手は男なのでな。女の体を使えるのと殺せるすべを持っている妾は結構使えるだろう？」

「……………」

「今日、参ったのは斎藤殿に言われたから・・・もあるのだ。」

「斎藤が？最近は連絡がねえが。」

斎藤は今御陵衛士だが実は近藤と土方で相談して密偵として入ったのだ。今でもひそかに連絡を取り合っている。

「妾は薩摩、長州も出入りしている。それは伊東が出入りしているからだ。・・・そんな光景を見て現実を受け止めている。」

土方は押し黙りじっとお蓮を見つめている。

「伊東は幕府をよく思っておらん。此間の大政奉還はさぞ喜んでおった・・・正直妾はよく思えん。」

「お前は どうしたいんだ？伊東の元にずっといるのか？」

「そうではない。妾は元々会津の者。伊東には未練はない。だから妾はここに來たのだ。殺してくれて構わん。だが・・・。。伊東を殺せ。」

「なんだと!？」

「時期にわかる。斎藤と話せ。妾が言うことではない。以上だ。」

一瞬沈黙が流れ土方がお蓮に詰め寄り胸倉を掴んだ。

「お前・・・こういう神経してるんだ!？こんなとこまで来て・・・

お前の言葉が信じられるとも思ってたのか!？」

お蓮は笑った。

「思つとらん。信じるのは貴殿次第だからな。ただ妾は普通の女ではない。ずっと疑問に思うのだ。何故妾は男に生まれなかった？生まれの家は?・・・何故妾は貴殿達男に頭を下げなければならん!？」

「お前・・・何を・・・。」

「そんなことを考える女だ。普通ではない。だから信じらんでもよい。伊東には殺すだけの理由がある。それだけの話だ。」

土方はお蓮を離し、襟を直した。謝りはしなかったが。

「一つだけ。妾から質問してもよいか？」

「何だ。」

「雪村千鶴の前に風間千景という男が現れたか？」

「なんでお前が風間のことを知ってる・・・!?」

「やはりな。現れたのか。」

「知っていることを全て話せ。」

「妾は鬼だ。」

「・・・!」

「妾は会津の者だが東の鬼の一員だった。尤も妾は鬼の中でも下級の者だ。鬼として仕えておったのが雪村家じゃ。」

「千鶴のことを知ってるってことか……。」

「ああ。一度お会いしたことがある……。一目ではわからなかったが名を聞いて確信した。」

お蓮は頬を緩め昔のことを思い出す。最悪の記憶も、思い出してしまったが。

「俺たちも風間には手を焼いている。度々、屯所を襲撃された。」

「ほう……。そうか。妾も風間とは面識がない。それに男の鬼を殺せるほどの力はないんでな。」

お蓮は喉の奥で笑うと立ち上がったて閉めていた襖をあけ、庭を見渡した。その背中を土方は見たがお蓮はどことなく嬉しそうだった。

「何か質問はあるか？」

土方は少し驚いた。今初めて屯所に来てこの話しぶり。こいつは相当頭がよく、かつ話し上手でなくては駄目だ。馬鹿な奴ならとつくの昔に殺していただろう。いやこの女の雰囲気は独特だ。鬼だからかしらんがなんとも言えん威圧感があり、今までにいない女だ。

「……。お前は俺たちが伊東を殺せばもう文句ねえんだな？」

「左様。貴殿でも同志を斬るのは嫌か？」

「ふん。俺は鬼の副長だぞ？新選組のためだったら何でもする。」

お蓮は嬉しそうに笑う。その笑い声も色っぽい。

「伊東を殺すと決めたのであれば……。それは妾を信じたという

訳か？」

土方は迷った。この女の言うことは筋が通っているのかいないのか・
・。鬼と言っても証拠がない。伊東の手の者という証拠もない・
・。だが彼女が嘘をついているようには見えない。外見で信じる質で
はないのだがこの女はまるで・
・。黒く輝く瞳を見れば信じなければならぬように。

「わからねえ・
・。・。」

「ふふ・
・。まさか土方殿が妾をわからぬままここに置くのか？」

「いくら考えてもお前のことを信用しちまいそうだ・
・。・。殺して
しまうのが一番楽なのにな・
・。・。」

「そうじゃな・
・。・。妾は貴殿達を傷つけることはしまいと・
・。言うことしかできんからな。難しいものだ。まあよい。妾は死
んでも拷問にかけられても覚悟はできてるからのう。」

「・
・。・。・。」

「妾は幕府の犬の貴殿達に興味があると言った。今、ここでその
真意を言おう。」

土方は少しうつむいた顔を上げお蓮を見つめた。

「妾には未来が見える。」

「はあ？」

「妾は特別な鬼のようだな。その人の未来が見える。まあ。浅はか
なものだな。」

「どういうことだ？未来だと？俺の未来も見えるというのか？」

「ああ。だが決して言わん。この力は贅沢なものなのじゃよ。いい
か。考えてみる。妾が言った言葉は全て変えることができるのじゃ。
たとえば、未来の貴殿はお茶をこぼす。だが飲まなければいいだけ
の話だろう？」

「・
・。・。・。」

「妾の力は見えるだけでそれを決定する力はないのじゃよ。」

「だが戦いの未来が見えるならばその未来を言えばなんとでも対処
できるんじゃないのか。容保公の力になれるんじゃないのか？」

「…………それは意味がない。戦の先は見えても何処で思い違ふことをするか見えんのだ。それを全て通して見ればいいのじゃない……。所詮は鬼か。」

「全部見れる奴なんていんのかよ。」

「いるわ。この世にはいない。神がな。」

「ふん。神か。俺はそんなの信じないんでね。お前の言う未来とかなんとかどうでもいいよ。」

土方は立ち上がり出て行こうとしたがお蓮は腕を掴みとめた。

「一つだけ言おう。名は自分で聞くからよいが……あの背の高い碧眼の男。あれは……。」

「あいつの未来が見えたつてのか？」

土方はにやつと笑うが内心冷や冷やしていた。この女には説得力がある。さっきの話も嘘だと思えばそれでいいのだが……。

「…………。この戦も貴殿達も…………。妾の見えるものならば全て変えたいものじゃ…………。土方殿。突然で申し訳なかった。次の機会に会いたい。」

お蓮は頭を下げた後、踵を返した。

「斬られたいんですか？」

沖田は襖の向こうの人物に訪ねた。

「斬られとうはないのう。」

お蓮は襖を勢いよく開け、沖田に微笑み、部屋に入り込んで座り込んだ。

「何、勝手に入ってきてるんだよ。屯所をほつつきまわるなんて・・・土方さんは何をしてるんだ。」

沖田はまだ怒っているようだったがお蓮は気にせず微笑みをたやさなかつた。

「その作り笑いやめてくれます？気に障るんですけど。」

「おや。バレたか。」

「そりゃ。わかりますよ。僕もしますから。」

「名を聞いておらんかったから聞きたかつたんじゃ。」

「言いたくありません・・・。」

お蓮は笑みを消すとまだ敷いてある布団に目をやる。

「ひどい病じゃな。労咳とは。」

「・・・！なんで・・・。」

咳も何もしていなかったのに何故わかる！？

「妾も医術を少し勉強したものでな。まあこの鬼の血が大きいだろうが。」

「鬼・・・？」

「なあ。教えてくれぬか。妾は信用できんか。土方殿は信じてくれたがな。」

「土方さんと僕は違うんですよ。」

沖田は目を逸らした。

「そうか・・・。よい。貴殿に忠告にきたのだ。」

「忠告？」

「貴殿の未来は貴殿の選択次第で天と地まで変わる。それを肝に銘じておけ。」

「はあ？意味がわからないんだけど。なんで僕があんたの言葉なんて信じないといけないの？」

お蓮の目は曇りもなく澄んでいて沖田は何も言えなくなった。

「それと千鶴殿を頼むぞ。貴殿なら大丈夫そうだ。」

「なんで千鶴ちゃんがでてるの……。」

お蓮は仕方がないのでさきほど土方に言った鬼のことを言った。

「それも全部嘘かもね。」

「そう思うならそれでよいわ。」

（まったく……。土方殿より妾を警戒しとるな。それが普通なのだが……。それにしてもこの男。かなり弱っておるな。……。脅してもかけてみるか。）

「のう。貴殿。」

「その話し方やめてくれない？あんた吉原の出身でしょ？」

「……。何故わかった？」

「そんな変わった口調。吉原の人では普通だから。」

島原では京言葉だが吉原の廓詞は独特だ。沖田は吉原に行ったとき少し驚いたのを思い出した。

「すまんができん。変える気はないのでな。それより……。」

お蓮は沖田にじりじり近付き、沖田の襟をつかみ沖田に寄った。

「妾を抱いてみんか？」

「……。」

「妾ならば病をうつすことを気にせんでも、体を気遣うこともない。千鶴殿がずっと欲しいのだろう？」

「……っ！」

全て見破られ、沖田はお蓮を睨んだ。そして刀を抜きお蓮の首に近付ける。

「あんまり生意気なこと言っただったら許可なしであんたを殺してあげようか？」

「そんなことで自分の命を捨てるのか？切腹ものだろう。」

「ご心配なく。局長がいない今、あんたは客人じゃない。ただの不法者だ。」

お蓮はニヤリと笑い、舌を巻いた。

「貴殿。弱いもう。」

「・・・！」

沖田が気付いた次の瞬間には喉元にお蓮の髪を束ねていた簪があった。お蓮の漆黒の髪は沖田の額におちる。

「妾だつて貴殿を殺すことぐらいできるぞ。妾は全て覚悟しておる。なめるな。」

「・・・。」

手を動かすことができない。昔ならこんなこと絶対させなかったのに。自分の力のなさに腹がたった。

「貴殿は気をつける。あまり女を泣かせるなよ。」

そういつて沖田を残しお蓮は去つて行つた。

お蓮は伝えることは伝えたので帰ることにした。帰るのはまだとりあえず伊東のそこだ。幹部連中には全員挨拶したが・・・。

（血が早い男どもだ。まあ予想と少し違ったな。）

二度と来ないだろうが容保公が言うやつらだ。なかなか侍の誇りが

ある。

「あ、あの・・・。」

一人笑んでいるといきなり声をかけられたのでお蓮は少し驚いたが顔にはださなかった。

「千鶴殿・・・。」

元は仕えていた一族の子供。本来この娘のために来たようなものなのかもしれない。血が、この娘に惹きつけられるのだ。

「あの・・・もう帰るんですか？」

「ああ。失礼する。千鶴殿・・・。千鶴殿はあの背の高いの男が好きなのか？」

力があるお蓮は千鶴の未来も見えていた。だが二つある未来はあの男が映っていた。

「沖田さんのことですか・・・？」

「沖田・・・。」

（そうか。噂に聞く沖田総司か。街で聞いたことがある。若い侍がよく子供と遊んでいると。その男はどうやら凄腕の剣士とか。）

「ふん。」

「あの・・・お蓮さん・・・？」

「すまない。千鶴殿。質問の答えを聞こう。」

「え？あの・・・好きですけど・・・私のこと・・・。」

「ああ。女子だろう。わかってる。気にするな。」

やっぱり見破られているのか。千鶴は少し沈んだ。

「何故。あの男なのだ？貴殿は鬼だろう。風間ではないのか。」

「なんで鬼って・・・。」

「ああ。もうよい。」

お蓮はもうどうでもよくなって話を終わらせた。自分には関係のないことだ。彼女は自分のことなど知らないのだから。

「あの。さようなら。」

それでも千鶴は頭を深々と下げてくれた。お蓮もそれに応え、頭を下げた。

「では失礼する。」

お蓮は風のように去って行った。

39・未来と過去（後書き）

グダグダです。書きたかったのにもっと……。お蓮さんはオリキヤラで容保公に使えてる女の人。もとは吉原の太夫です。今回出てきたのは沖田さんが自分の将来のことに考えてほしいなと……。千鶴はあんまり重要じゃないのかもしれない。お蓮さんにとってはお蓮さんは土方さんより年上で、まあ君菊さんみたいな忍びでもあり強いんですけど……。やっぱり性格からして迫力があるんですよね。

40・暗躍する世界（前書き）

更新しばらくできないかもしれません><

慶応三年十一月十五日。坂本龍馬が暗殺され死亡した。

犯人はいまだ不明だったが、新選組が強く疑われた。どうやら伊東たちが現場に原田左之助の鞘が落ちていると言い張ったらしい。

坂本龍馬は薩長同盟の仲立ちや大政奉還の確立を進めた土佐藩の男だった。個人的な恨みで紀州の三浦休太郎も疑われたが事件は謎のままだった。

その頃と同じく、斎藤一が新選組の屯所に現れた。彼は元々伊東派ではなく、局長と副長に密偵になるよう命令されていたから御陵衛士になったのだった。

斎藤の報告は伊東が近藤勇の暗殺計画を練っていることだ。

それも薩摩の藩士と共に。

そして十一月十八日。油小路事件が発生する。

「貴様は……。」

風間は新選組屯所を襲撃すべく夜道を歩いていたら後ろから近づく女を振り返り睨んだ。女は丁寧に頭を下げた。そしてきつく笑んだ。

「お初にお目にかかる。風間千景殿。」

「……貴様は何者だ。」

「妾は、お蓮と申す。かつて雪村の家に仕えていた女鬼だ。」

「……ほう。」

風間は薄く笑って見せたがお蓮を警戒し睨んだままだった。

「で。俺に何の用だ。」

「貴殿は本当に雪村の娘を嫁にするつもりか。」

「当たり前だろう。俺の目的はただ一つ。」

「妾にはそうは見えんが。」

「なんだと……？」

お蓮は艶やかな唇を三日月にし、風間に一步一步近付いた。

「妾には貴殿のやり方での幸せは見えん。貴殿が無理やり連れ去ったところで子供もできぬさ。」

「何故……貴様はそんなことを言いきる？」

自信に満ちているお蓮の顔に風間は違和感を覚える。ほかの鬼とも違う気品に満ちているこの女。

だがその答えにはお蓮は答えなかった。

「妾は貴殿とは敵にあたる。妾は会津の者だからな。」

「何故人間にそれほどまでに肩入れする？やつらは・・・。」

「知っておる。しかし妾は信じることが出来るのじゃよ。妾はもう子も産めぬ体じゃ。そんなものを誰が必要とする？だがあの方は違う。妾を見てくださる。風間殿。人と鬼は違うが人とは時に強い力を持つているのだよ。鬼よりもな。」

「鬼よりも強いだとー！？そんなことがあるはずがない。」

「そう思うならそれでよい。妾は貴殿に会いたかったただけだ。止めて悪かったな。」

お蓮はもう一人の鬼の存在を見て、風間を先に行かせた。あちらのほうに質が悪い。

「貴様・・・。新選組の味方か？あんなまがいものだらけの巢の。」

「まがいもの？」

「知らないのか？あいつらは綱道が作った変若水を使っているのだぞ？」

「・・・羅刹かー！ー！」

お蓮は舌打ちし、風間の先へ行つた。

「この世、そんなものが広まる時代か。妾が守るものとは・・・。いったい何であろうな？」

それだけ問いかけも一人の鬼の元へ急いだ。

南雲薫のことは知っている。お蓮は薫のことのほうが心配だった。成長した姿を街で見かけた。するとなんだあの顔は。まるで憎しみに囚われている人形のようなのだ。

「南雲薫！」

闇夜に隠れるかのような薫の姿はお蓮にとって心臓に悪い。薫は振り返るがその微笑みは悪魔のようだ。

「ああ。なんだ。蓮か。」

「妾のことを覚えているのか。」

「覚えてるよ？俺はあんたのこと嫌いだったから。」

嫌いと言われてお蓮は眉をひそめた。こんなことを言う子供ではなかっただろう。

「お前・・・これから千鶴の元へ行くのか。」

「仕えていた女鬼のくせに・・・主を呼び捨てとはね。」

薫はくくつと笑ったがお蓮は怒りの表情を見せた。

「妾の君主はお前達ではない。だが。妾はお前を止める。」

「僕がどこに行くのかわかってるの？止めるって・・・さあ。あははは。」

薫は大笑いしていたがお蓮への眼差しは変わらなかった。

「千鶴のことをどうするつもりだ。」

「どうするって？決まってるじゃない。俺と同じ苦しみを味あわせるんだよ。」

「だからその懐にもっているものを沖田殿に飲ませるのか？」

「・・・なんでわかるの？」

変若水の使い方まで見破られ薫は笑いを消した。

「わかるわ。妾は雪村に仕えていたものとしてお前を見過ごせん。いいか。」

お蓮は簪を持ち、薫の元へ一直線へつつこんだ。薫は突然で反応できなかった。押し倒され、刀を奪われる。

「貴様！！」

「動くな。殺すぞ。」

お蓮の本気の殺気に薫は唾をのみ込んだ。

懐の変若水も奪われ薫はもう何もすることができなかった。お蓮は変若水をしまうと薫に刀をつきつけて立たせた。

薫を立たせ睨み続けていると薫も睨み続ける。

「考え直せ。千鶴のことは嫌いではないんだろう？」

「・・・黙れ！お前なんか俺の気持ちなんかわからない！」

「わからないな。だがお前も千鶴の気持ちなどわからないだろう。

妾の気持ちも・・・」。薫。お前だけが苦しんだのではない。千鶴も今、苦しんでいる。」

「はっ！そんなの甘っちょろいもんだろう？俺の・・・。」

お蓮は薫の胸倉をつかんだ。顔を近くするほど睨む力が增える。

「千鶴とお前は違う。いい加減諦めろ。お前の生きてきたものと同じ道を千鶴は味わえない。誰にもできないんだっ！」

「・・・。。。」

お蓮は手を離し、薫はしりもちをついた。お蓮は冷たい目で見つめた後、刀を持って去って行った。

薫はしばらくその場から動けなかった。

近藤勇は資金の用立、国事の相談があるとの口実で七条の妾宅に伊

東を招いて酒宴を張り、帰路に待ち伏せし暗殺した。伊東は深手を負ったが隊士に一太刀あびせ、「奸賊ばら」と叫び絶命したという。伊東の死体を囷に御陵衛士をおびき寄せたが薩摩藩の横槍が入り戦いは熾烈を極めた。

永倉、原田は同志である平助をなんとか逃がしてやりたかったが、薩摩の藩士などに斬られ、重傷。命を繋ぐためにはあの薬を飲まねばならなかった。

時として同じくした風間千景による屯所への襲撃。風間は何故か千鶴の顔を見たたん去って行ってしまった。千鶴は全く意味がわからなかったが、隊士たちが誰も傷つかなかったのはありがたかった。まるで・・・千鶴と新選組を蝕むように羅刹は存在する。

こうして油小路事件と呼ばれるこの事件は一月後の事件をも発生させてしまう・・・。

40・ 暗躍する世界（後書き）

ウイキをお借りしました。大分、本編と違います。なんとか沖田さんは羅刹になるのはふせげそうです・・・オリキヤラ助かった。風間さんは真剣に千鶴のことを考えるのだ。薫のことはまだ未定です。

4 1 ・ 偽りの笑顔（前書き）

最初の文章はそのまんまです（^^；）

41・偽りの笑顔

王政復古の大号令の後……。將軍職を廃止された徳川慶喜公は十二月十二日には大阪を下った。旧幕府軍も慶喜公に追従し、大阪に戦力が集結し始めた。

薩摩藩の横暴な振る舞いは続いている。薩摩を何とか抑えなければならぬ。

薩長の手から朝廷を取り戻そう。慶喜公を新政府に迎えさせよう。それがお国のためなのだと言って、新選組は一触即発の京に身を置いていた。

新選組は伏見奉行所の警備を任されていた。新選組は二条城の警備もしていたがもともと配属されていた水戸藩と対立し、また大阪にも入るが、京から大阪への途上に位置する伏見まで引き返し、十二月十六日から幕府の軍が陣を置く奉行所の警備を行った。

その二日後、伏見街道にて伊東殺害への復讐のため、御陵衛士の残

党が局長である近藤勇を銃で狙撃。近藤は命には別状なかったが肩をうたれ、負傷した。

「近藤さんが撃たれたー！？」

それは隊士たちにとつて突如のことであり動揺が隠せなかった。

一番怒っていたのは沖田で、近藤の安否よりも復讐に燃えていた。土方は隊士たちが下手なことをしないよう対処をするが自分自身も驚いていた。

千鶴の目に映る近藤は肩から血がどくどく溢れ、痛々しくて声をかけることもできなかった。

これは後からわかることだが近藤もまた、二度と剣をとれぬ体となつてしまった。

「ちっ。」

沖田は舌打ちをし、近藤を治療している部屋から出て行こうとした。

「どこに行くんですか！」

沖田の尋常じゃない顔に千鶴はどうしようもなく心配になって沖田の腕をがっしりとつかんだ。すると沖田は。

千鶴が見たこともない恐ろしい表情で千鶴を睨んだ。まるでその手を離さなければ殺すと言っているかのように。以前見たのは自分に降りかかる殺気ではなかったからこんなにも驚かなかったのか・・・。

「……っ！」

千鶴は震えを止めることができなかったが沖田から目を離さなかった。

「近藤さんを撃つたのは誰なんですか？」

近藤の治療を見守る土方に聞こえるよう、沖田は精一杯声を張り上げる。しかし沖田は思ったより声がなくて焦った。

土方は沖田を見据えて。

「御陵衛士の残党だ。」

それだけを低い声で吐き捨てた。

「誰が殺しに行くんですか。」

「……お前の一番組と二番組を向かわせた……。」

しばらく沈黙が流れる。聞こえるのは近藤の苦しい声だけだった。

沖田は今度こそ千鶴を振り払って部屋を出て行った。

「待ってください！沖田さん！」

千鶴は必死にその後を追いかけた。

沖田が向かっている場所は千鶴にはわからない。沖田を追うことに必死で、そんなことを考えている暇がなかった。

「待つて！お願い！」

本気で走って、やっと沖田に追い付く。後ろから抱き着いている格

好になったがそんなこと気にしない。

「近藤さんが狙撃されて悔しいのは沖田さんだけじゃないんです！だから・・・。」

「だから・・・？」

沖田は千鶴をまた恐ろしい顔で睨む。そして千鶴の手首を掴む。男の力だ。手首には赤い痕がつく。

「いつ・・・。」

「だからここでじっとしている？僕がもう動けない体だから？復讐すれば死ぬとでも？」

「そんなこと・・・っ！」

「わかってるよ！僕がもう・・・働けないのも！近藤さんを守れないのも！わかってるんだ・・・。」

沖田は叫んだ。こんな沖田の顔は見たことがない。千鶴はどうしようもなく悲しくて・・・だが沖田からは目を離さない。

「だけど・・・。」 どうしても許せない。殺したい！近藤さんを撃つた奴が憎いつー！」

「・・・。。。」

千鶴は涙を流したが。

「なんで・・・笑ってるの・・・？」

千鶴の少し緩んだ表情を見て沖田は信じられなかった。でもこれは・・・。

「考えてみてください。沖田さん。逆の立場になつて、もし沖田さんがその人の大切な人を殺したら復讐してくると思いませんか？今と同じ状況になります。わかってください。闘いはこれの繰り返しです。憎しみを持って剣を振るえば、死ぬだけです。だけどそれは・・・どうしようもなく悲しいことなんです。許せとは言わない。でも今出て行つても近藤さんを心配させるだけ・・・。大丈夫です。近藤さんは死なない。でも伊東さんは死んだ・・・。」

「彼らの思いも理解してください・・・。」

まるで沖田がわかっていなかったかのような口ぶりに沖田は腹が立ったが千鶴の表情を見ればそんなこと忘れてしまった。千鶴は必死に笑っている。まるで沖田に憎まないでと訴えるように。

「土方さんも・・・誰も悪くないっ・・・！」

沖田は護衛が少なかったことも怒っていたようで、土方に悪態とついていた。見栄のほうか命よりも大事だと・・・。そういつているのかと・・・。

「わかった・・・。」

沖田の思い。それは恐ろしく辛い。と千鶴は思う。きっと今にでも飛んで行って殺したい。けれどできないんだ。その己の体はもう・・・。

いつもより今日は顔色が悪く、歩くのも辛いだろう。こうして話すことも・・・。

「寒いから・・・部屋に戻るよ。」

「はい・・・。」

「ごめんね。千鶴ちゃん。君に・・・。」

沖田は千鶴の頬に触れて、顔を千鶴に近付けた。

「触れることすら・・・辛くなってしまった。」

「おっ・・・。」

その言葉を口付けで黙らせて。ずっと離れ、沖田は去って行った。

そして一月三日には俗に言う鳥羽・伏見の戦いが開始される。しかし近藤局長と沖田組長は大阪に護送される……。

だが戦いはすぐには簡単には終わらなかった。薩長軍の数は五千。幕府側は一万五千。戦いは圧勝かと思われた。しかし薩摩藩などの西洋の武器は旧幕府軍に衝撃と共に多大なる被害を与えた。

淀の戦いでは試衛館時代からの同志、井上源三郎が戦死。

橋本の戦いで、隊士が重症。後に死亡。そして監察の山崎烝が、江戸に下る新選組の船、開陽丸にてその命を枯らした。

旧幕府軍の圧勝のはずだったこの戦いはたった五千人の新政府軍に大敗した。

41・偽りの笑顔（後書き）

鳥羽・伏見の戦いがわかりません。ですが旧幕府軍の大敗だったということはわかりました。文章が下手でごめんなさい。

沖田さんは大阪で松本先生に診てもらった後、一緒に江戸に下りました。近藤さんも同じく・・・。

42・毒犬（前書き）

いきなり変なボタンを押して小説が消えた。最悪ww

なんにしてもあけましておめでとうございます！本当に今年がいい年になればいいですね！今年もよろしくお願いいたします！あと、小説読み直してて本当に字間違い多いですね・・気をつけてても見逃しています。すみません。その辺はマジでご理解ください。では

←
←

42・毒犬

「まさか・・・源さんと山崎君が逝ってしまうなんてね。」

沖田は体を引きづりながら甲板へ出て、山崎を流した海を見据えた。千鶴は沖田の体を支えていて、沖田に声をかけたかったができなかった。声をあげて泣きすぎたせいでもう声が出ない。

山崎は最後にこう言った。

「君が、あの人の元にいてくれてよかった……。」

山崎は最後まで千鶴を褒め称え、安らかな眠りに落ちた。最後の最後まで……新選組のことを言って……。

「本当に……だから君は嫌いなんだよ……。」

沖田は横にいる娘を見ながら言った。沖田が一番大事な娘をここまですで泣かせる山崎。許せない。それに沖田は山崎が新選組に必要な人間だと認めていたのだ。だから彼はもつと生きなければいけないかったのに沖田より先に死んだ。それも許せない。

気が合わなかった。そうだ。嫌いだった。けれど認めていた。だから無性に、むかむかするのだろうか。

沖田は生き残った隊士たちを見回した。隊士たちはまるで不安を隠すように歯をくいしばっているような顔をしていた。

そして沖田は昔と変わらない背中を見つめた。大嫌いだけど、気になる存在。

「ひ……じかた……さん。」

沖田は千鶴の腕を離し、数歩先の土方に駆けた。途中足が動かなくてどうしようもなく悲しくなった。

「あなた・・羅刹になったんでしょ？」

「っ!？」

まるで沖田が来ていたことを気付かなかったように土方は目を見開き、沖田を見つめた。沖田は土方の肩に手を置く。

「羅刹の体は・・相当苦しいですよ・・。」

羅刹の平助や羅刹隊のことを見ていた沖田はそう言葉を絞り出した。

「お前・・。」

沖田の目はうつろな目だが、確かな意志と殺気があった。

「土方さん・・無理しないでくださいよ・・。」

「・・。」

沖田が言ったことが信じられなくて土方は訳が分からなかった。沖田は千鶴の元へもどり、船の中へ去って行った。

「無理をするな・・か。」

（そんなことできる訳ねえだろ！近藤さんもない今、俺が呑気にしててどうする!？）

「副長。」

「斎藤・・。」

拳を握りしめている土方に斎藤は静かに寄った。

「総司は・・もう自分のことをわかっているのでしょうか。闘えないということ。」

「!!」

「だからあなたに無理をしてほしくないでしょう。」

「俺が・・・そんな・・・」

「それもわかっていますよ。でも・・・新選組を支えるあなただ。だからあなたは無理をしてはいけない。その命は一人の者ではない。」

「・・・」

「羅刹は未来がない。それを土方さん。あなたは。」

斎藤はわかっていた。土方がそんな長生きを望んでいないことを。自分もこの戦が終われば・・・どうなるかわからない。

「わーってるよ。お前は俺の母親か。」

「・・・今この状況で笑うのはどうかと思いますが今少し笑ってしまいました。失礼しました。」

あまりに恥ずかしがっている斎藤が面白くて土方は淡く笑った。だが。その笑いも長くは続かなかった。

「俺は闘わなきゃいけなかったんだ。鬼なんかに負けられなかった・・・。だから・・・」

「副長・・・そんなことではありません。ただ、薬を飲むという選択があつていても間違つていても

あなたが無理することはない。ということです。」

「・・・」

斎藤は頭を少し下げて去って行った。

慶応四年一月。新選組は江戸に上陸した。新選組は品川にある、旗本専用の宿、釜屋に身を寄せた。また怪我を負った近藤と労咳である沖田は松本良順の邸宅に身を寄せた。

隊士たちがたまに訪れてくれたが、沖田は部屋で床に臥せた。近藤の怪我は回復していったが気をつかってか沖田の部屋にはあまり訪れなかった。

沖田の病はよくもならず悪くもなかった。ただ沖田は松本先生に処方された薬を飲み続けることしかできない。

「近藤さんは・・・？」

沖田は床のそばの千鶴に聞いた。千鶴は少し微笑んで。

「もう大分よくなつたようです。もうすぐ釜屋へ行けますね。」

「また・・・。闘うのか。」

「沖田さん・・・？」

「僕だつて闘うのは嫌だと・・・思うことがあるよ。仲間でも、好きな人でも殺さないといけなかったり、逆に誰かに殺されたり。憎しみに囚われて狂う人間も何度も見た。僕もそれに殺されるか不安でいっぱいだったな。」

千鶴はあまりに悲しい話で涙がでそうになつたが口元を両手で押さえた。抑えるとかかが出そうになつた。

「戦場は辛く苦しいものだ。背を向ければ死ぬ。それにわかるんだ。後ろから何かがついてくる感じ。わからない・・・か。」

沖田はおかしそうに笑うが、千鶴はそんな場合ではなかった。戦場、それを沖田は知っている。でも自分は知らない。それがどうしようもなく苦しかった。

「ち・・・づる・・・ちゃ・・・ん。」

沖田がゆつくりと手を差し伸べたその時。

部屋の間が突如開いた。背の高い、茶髪の女性が立っていた。

「総ちゃん！！」

「みつ・・・姉上・・・？」

その女性はまぎれもない沖田の実姉、沖田みつだった。千鶴は混乱し、みつを見つめるだけだった。みつは千鶴に構いもせず、沖田に駆け寄った。

「松本先生と土方さんから文を頂いたの。新選組も江戸に上陸したと聞きました。総ちゃん・・・。」

みつは優しく、沖田の頬に触れた。だが悲しそうでもなくただ穏やかで、涙はなかった。

「頑張ったんだね……。」

沖田は淡く笑ったが何も言わなかった。

みつと沖田は微笑みあった。千鶴は本当に姉弟だと思う。二人の顔はよく似ている。

「千鶴ちゃん。紹介します。僕の姉のみつ姉上。」

沖田に言われたみつは千鶴に向き合った。千鶴もみつと向き合った。

「初めまして。沖田総司の姉、みつと申します。」

みつは優雅に頭を下げた。千鶴もあわてて。

「ゆ、雪村千鶴です……！は、初めまして……！」

「彼女はある事情で屯所においていたんだけど、今は僕の看病してくれてるんだ。」

「そうなの……。千鶴さん。ありがとう。」

またみつが頭を下げたので千鶴もまた深々と頭を下げた。

「で。姉上。家はいいのですか？林太郎さんは……。」

林太郎というのは沖田家を継いでいるみつの旦那だった。

「大丈夫ですよ。旦那様はご理解のあるお方です。それに総ちゃん江戸にいるのですから会いたいに決まっていますでしょう。」

うふふと笑うみつは美しくついで千鶴は見惚れてしまった。弟も他人を惹きつける力があるので驚きだ。

「ありがとうございます……。」

沖田はいっぱいのありとうを言うが声は小さい。

「今日から私もあなたの看病を手伝います。しばらくは……一緒にいれますね。」

42・毒犬（後書き）

土方さんは羅刹になりました……。ルートしてる人はわかりますかね？

みつさん登場。あと隠れ家は場所わかりません……。

43・氷舞

千鶴はいつもと同じ時間に目覚めた。江戸に帰ってきて数日。けれど何か月もいるような気分だ。自分の家に帰りたいと何故か思わない。父を捜しに京に行ったのにそんなことも忘れてしまったのか。

（わかつてる……。父様があの薬を……。）

表には出ないけれど羅刹の存在は千鶴を確実に追い詰めていた。いつか襲われた時のことも。今度の土方の羅刹のことも……。

父と会えば何が変わるだろうか？自分は父が本当にしていることを知らない。

（風間さんは……。知っているのだろうか。）

あの男はいつか綱道がこちら側だと言った……。そのことを信じられなかったが彼が嘘を言っているとも思えない。

平助も……。どこか千鶴を遠ざけているような接し方だった。彼が悪いことをしている訳ではない。話しかければ笑顔で返してくれた。けれど……。彼は自分の葛藤と闘っているのではないかと最近わかりはじめた。

なんて自分は馬鹿なのだろうと一人でじっとしていればそう思う。でも呑気にしている訳にはいかないのだ。

千鶴はもう袴は着ていなかった。松本先生が着物を調達してくれたのでそれをありがたく着ている。
着替えた後、いつもすることがある。

それは沖田の部屋に訪れること。どうせ後に行くのだが、これをしてないと落ち着かない。

簡単に言えば沖田が生きているか・それを確かめること。

本当はこんなことしたくない。でも不安には勝てなくて、本当の本当は訪れてもいいのだと思っている。

沖田の部屋の襖をゆっくり開ける。彼はあまり寝息をたてないのでわからないときがある。

千鶴はそつと入り沖田が息をしているか耳をたて、そして彼を見る。確認するとふうーと息をして出ていく。これが日課だった。

台所を借りて千鶴は沖田の食事を作る。簡単なものでいいと沖田はいつも笑う。それが嬉しいのを彼は知らない。

「千鶴さん。」

野菜をきっていると声がかかった。綺麗な透き通るような声だった。

「みつさん。おはようございます。」

千鶴は手を止め、みつに頭を下げた。みつもおはようと頭を下げてくれた。

「朝飯ですか。いつも？」

「は、はい。」

みつは嬉しそうに千鶴の横にたつて手伝ってくれる。

千鶴は少し気恥ずかしくなったがすぐに礼を言った。

「千鶴さんは総ちゃんのことを慕っているんですね。」

「えっ!？」

突然言われたので千鶴はわからなくなった。

「昨日……。総ちゃんと久しぶりに話したの。辛いことも・・・新選組のことも。けどあなたの話が一番多かったの。総ちゃんはあなたが自分の傍にいてもいいのかと悩んでいたわ。」

「沖田さんが・・・私のことを・・・。」

千鶴の手は包丁から離れていなかったたので震えがみつにもわかった。「総ちゃんはね・・・私の前ではいつも笑うけれど、本音は言わないの。でも私は初めて彼の本音が聞けたと思った。その顔がね、すごく輝いてた。自分の弟だと思えないくらいにね。」

みつの顔は穏やかで千鶴は自然に微笑んでいた。

「総ちゃんが・・・ここに居る理由は笑って言えるものじゃない。それは知ってるの。」

「・・・!!」

「病を治すことは私にはできない……。千鶴さんにも無理でしょう。」

千鶴は深く頷いた。

「でも総ちゃんのために何か・・・できると思っの。ですから千鶴さん・・・力を貸してくれませんか？」

「は、はい……。私ができることは少しですけど・・・私は沖田さんと・・・もつと・・・。」

いたいから。それが今の切なる願い。

「みつ姉上。僕は大丈夫ですよ。それに千鶴ちゃんもいるし。」

なんでもしてくれる優しい姉に沖田は微笑んだが遠慮した。

「何を言ってるの。私はあなたを土方さんからも近藤さんからも任されたんですよ。」

「土方さん・・・はどうして・・・。」

沖田の問いに、みつは優しく答えた。

「まさかあの人が直接言いに来るとは思いませんでした。」

土方は忙しい身のはず・・・みつに言いにいくとは思えなかった。

「土方さんはあなたのことを本当に大切に思ってくれているのよ？」
「・・・。」

みつは少し遠い目をしてあの時のことを思い出した。

將軍が江戸に逃げ帰ったことに対して町人たちは色々な意見を言っていた。まもなく新選組が上陸したと聞いてみつは弟の総司のことが気がかりだった。

でも自分から会いに行くことはできない。元気にしているだろうか。
。。
ある日のこと。みつの旦那の林太郎が客人が来ていると言った。客人に会えと言われたのでみつは首をかしげながら客人の部屋に行った。

「お久しぶりです。」

頭を下げた男は少しふけたというか疲れがたまっているかつて試衛館道場に通っていた青年だった。

「歳三……さん。」

土方はみつを見つめて難しい顔をしている。

みつは座ると、土方はまた頭を下げた。

「何故……そのように頭を下げるのですか……？」

「俺は……あんたの弟を託された。だが……。」

「総ちゃんか……一緒では!？」

土方はふうと息を吸い、伏せていた瞼を開けた。

「総司は……労咳なんだ。」

「!……そんな……。」

みつは目を見開いて口を手で押さえた。有名な死病に弟がかかっている……？

「俺が全て悪い。はやく医者に見せていればこんなことにはならなかった。あんただったら俺を殺めてもいい。だが……。」

「何を言っているの!？私があなたを憎むとでも……!？冗談言わないで!!」

みつは本気で怒っていた。

「いいですか？あなたが悪いなんて私がわかると思いますか!？あなた勘違いしているでしょう。私はあなたの部下ではない。あなたが悪者役を買って出ても私にはわかります!!そういうところがいい

やだったの。私をのけ者にするから……。」

土方は渋い顔をしてうつむいた。やはり昔と変わらずきつい人だ。

「……総ちゃんは今何処に……？」

「松本良順という……俺たちの専属の医者に邸宅に厄介になって
いる。近藤さんも……右肩を撃たれてな……同じとこに療養し
ている。」

「そうですか……。で。用件はそれだけですか。」

土方は驚いた。弟が労咳だと伝えたのにそれだけとこの女性は言う
のだ。

「あなたには……総司の看病をしてもらいたい。あなたならば……
・・・総司が回復するのは早いはずだ。」

「私が行っても早くなるとは思いませんが……歳三さん。あなたは
総ちゃんをまた戦へ出すのですか……！」

「……総司の実力は新選組一だ。その総司が戻れば士気も上が
るし、勝利が見える。」

みつは立ち上がって土方を見下ろした。穏やかな顔ではなくただ怒
っている大仏のようだ。

「また戦に出すのならば……私は回復を望みません。」

「な、なんだと……？あんだ自分の言ってること……。」

「わかっています！それでも総ちゃんを死なせたくないっ！当たり前
前じゃないですか！またあの子の背中を見送るのも嫌なんですよ……
・・・。」

みつは京に行くときの逞しい弟の背中を思い出した。

「みつさん……。」

「土方さん。どうか……総司を……。」

そこでみつは言葉に詰まった。だって弟は……総司はきっと体が
治れば行ってしまうだろうから。どんなに止めても。

「土方さん……今まで総司のことを……本当にありがとう……
ございました……！」

みつは静かに涙を流しながら深々と頭を下げた。

土方はみつと同じくらい頭を下げ、手紙を置いて家から去って行った。

これが土方歳三と沖田みつの最後の会話だった。

「姉上・・・？」

「ああ。ごめんなさい。」

食事を食べ終わった沖田は遠い目をしている姉を不思議な目で見ていた。先ほどの会話で何か思い出したのか。

「今日は少し疲れたみたいです・・・。薬は・・・。」

「駄目よ。飲みなさい。」

薬が苦すぎて飲みたくない。沖田の嫌がる気持ちはわかるがみつは無理やり薬を飲ませた。薬を飲んで、沖田は苦い顔をした。

「じゃあ。私は片づけてくるからね。」

みつが去ると沖田は布団にもぐりこんで咳をした。まだ激しくなかった。それで沖田は安心した。

そして姉にもこんなに気をつけてもらうことが辛くて少し涙が出たことを・・・沖田は気が付いていなかった。

「土方さんも大変だな……。幕府のお偉いさん方と作戦会議。毎日だろ？」

「ああ……。近藤さんもない今、土方さん、必死なんだろう。あのままじゃ体壊すぜ。」

永倉と原田は釜屋にいるのもなんだか気がひけて毎日、吉原に行ったり、居酒屋で酒を飲む毎日を送っていた。

永倉も原田も毎日飲んで、何かを紛らわすようになっていた。

話は変わって平助のことになった。

「平助も……。前のあの元気がからつとなくなっちまったな……。」

永倉が萎れた声で呟いた。原田もそうだなと頷く。

「あいつは……。きつと責任感というものを前よりも感じてるんだと思う。前は酒をいつ飲みに行っても許されたところがあった。

でも今あいつの隊は一度は死んだ連中で、普通の奴とは違う体……。

平助はその頭選ばれた。昔みてえに元気にはしゃぎまわるなんて許されねえ……。とても思ってるんだろう。」

「ああ……。俺たちは弱かった。あいつを守ることでもできなけりや武士らしく死なせてやることもできなかったんだ……。」

平助に生きてほしかった。それだけが原田と永倉の願いだった。だから……。あの薬を飲ませたのだ。

「あの薬はあつちやいけねえものだったのかもしれない……。
綱道さんは今何処にいるんだ？」

原田が聞いたのは平助と土方のことがあつたからだ。羅刹のあの症状をどうにかできないかと。あれだけ千鶴と捜していたのにまだ見つからない。

「知らねえよ……。だが何処にいるんだろうな。」

みつが看病を手伝ってくれてからもうすぐ一か月がたとうとしていた。千鶴は夕食の買い物に出かけていて、今、帰路についた。夕暮れの下を独り歩くと何故か無性に切なくなった。でも……。いつだったかみつがこういったのだ。

「そんな顔で総ちゃんに会わないでください。」

みつにきつい口調で言われたとき、自分の弱さに呆れたくらいだった。自分が気付かないうちに泣いていたのだ。いや気付いたいたけれど拭うことを忘れてしまったのだ。不安という恐ろしいものが毎晩千鶴を襲い、千鶴を泣かせていた。

千鶴は顔を上げて沖田が隠れている家に少し足早に向かった。だが後ろから肩を掴まれた。

「っ！！？」

あまりにびっくりして千鶴は声にならない叫びをあげ、振り返った。するとあまりにも美しいというか・・・まるで蝶のような深々とした異様さを兼備えている女が立っていた。よくよく見ると、彼女とは会ったことがあった。一度だけ・・・。

「あなたは・・・。」

「久しぶりじゃな。千鶴殿。」

去年の十月、突如新選組に現れた絶世の美女。その名もお蓮。土方は千鶴に多く語らなかつたが彼女は務めを果たしに来ただけだと言っていた。普通なら殺してしまつたところだろうけれど彼女を殺せ

ば新選組は危ないと淡く笑っていたのを覚えている。

「お蓮さん！お久しぶりで……。」

千鶴が挨拶していたらいきなりお蓮の細い綺麗な白い指が千鶴の頬に触れていた。

「貴殿……。どうした。ひどく悲しい顔をしているな。」

聞かずともお蓮にはわかっていたが聞いた。それは千鶴の口から聞きたかったのだ。

「それは……。。」

千鶴はなかなか言おうとはしない。お蓮は微笑んだ。

「言いたくないのならいい。今日、沖田殿もいる邸宅にお邪魔しようとしていたところ、貴殿に会っただけだからな。」

「えっ！？お蓮さん……。沖田さんのところへ行くのですか？でも・
・なんで居場所を……。。」

お蓮はそれは言えないので無視し、

「元々、沖田殿には用はないのだ。妾は貴殿に用がある。」

「わ、私にですか……。。」

「まあ。ここで会えてよかった。沖田殿は妾のことは嫌いであろうからな。……。で、千鶴殿。」

お蓮が差し出したのは刀だった。

「えっ？？これは……。。」

「これは貴殿の持っている小太刀のついになっっている刀だ。妾が奪ってしまっただ……。しかし奴に渡すことは少々恐ろしくてな。貴殿に預ける。」

「どうして……。私の小太刀と……。。」

お蓮は目を細め、寒い風を感じた。

「千鶴殿、言っておく。貴殿は鬼だ。妾も鬼だ。それを肝に命じ、死ぬまで忘れるな。いいか。悪い取り方をするでない。鬼は裏切らない誇り高き一族。貴殿は決して一人ではない。」

その言葉で千鶴は勇気づけられたような気がして思わず笑んでいた。それを確認するとお蓮は千鶴が胸で抱きしめている刀をもう一度自

分の指で触った。

「貴殿には……兄がいる。」

「え……。」

「その兄も、貴殿の父も、貴殿とは思いつくかもしれない。だが貴殿が精一杯生きれば必ずそれを認め、喜んで笑ってくれるだろう。」

意味深な言葉を残し、初めて会った時のように風のようにお蓮は消え去った。

「……久しぶりだね。」

沖田は襖の向こうにいる人物に朗らかに挨拶した。

こんな早朝にまさか沖田が起きているとは思ひもしなかった。人は、襖をゆっくり開け、日が当たらなくて暗い部屋に入り込んだ。

沖田は刀も構えず、ただその人物を見つめていた。

「まさか……俺がわかつているの？」

「わかるよ。街で出会った時からね。南雲薫。」

薫は少し笑んだ。薫は刀も持ってきていないただの丸腰だった。

沖田は寝ころんでいた体を起こした。

「何しに来たの？君……。」

「俺の正体は聞かないのか？」

「・・・・・・じゃあ。聞かせてよ。君は何者？」

「俺は・・・・千鶴の実兄だ。その昔・・・・人間に俺たちが住んでいた村を滅ぼされ、生き残ったけれど俺たちは離れ離れになった・・・・」

「ふーん。それで？」

沖田の態度に薫は腹が立つたが気にせず、薫は続けた。

「俺は南雲家に引き取られ・・・・男鬼としてひどい扱いを受けた・・・・。だから何も苦しみを知らず笑って生きている妹が大嫌いなんだ。」

「そう。だからどうしたいの？」

沖田は半ば面白そうに薫に聞いた。

「俺と同じ苦しみを味あわせたい。だからお前に近付いたんだよ。」

沖田。

沖田は薫を見つめたまま離さなかった。見つめ返す薫は何故か心がざわざわして落ち着かない。そして自分から目を逸らした。

「君は僕を殺しに来たの？それとも千鶴ちゃんを殺しに来たの？」

薫は下を向いて、沖田に背を向けて座っていたがゆっくりとこちらに向いてきた。

「本当は・・・・この変若水をお前に与えるつもりだった・・・・。」

薫は言っただけで物を持ってきてきてもいなかった。

「なんで気が変わったの？」

「・・・・千鶴が・・・・。」

「千鶴が・・・・？」

沖田は薫を見つめ続けている。薫には沖田の目がギラギラ燃えているような気がしてならなかった。

「千鶴はね・・・・。弱い女だ。知ってる？」

「・・・・・・。」

「でも・・・・ここにきて、毎日、声を上げて泣いていたはずだ。昔の千鶴だったらとっくにお前に泣きついてた。」

「・・・うん。」

「ただだね、千鶴は・・・毎日お前のために飯を作ってお前の世話をして・・・夜眠るとき、布団にもぐりこんで泣いているんだ。もちろん声を殺して。そして毎日また笑顔を作ってお前の前に現れるんだよ。」

「・・・！」

「本当は千鶴にも薬を与えて二人羅刹になつて、千鶴を縛つてあげたかった。でも千鶴がお前と生きてきて幸せを悲しみと両立させているんだ。わかるよ。そういうの。今まではどうでもいいと思つてたけど。千鶴は悲しくても辛くてもお前と生きていたいと望んでいるんだ。」

その瞬間沖田は薫の腕を掴んでこちらに強引に向かせた。

「僕だつて・・・生きたいよ。彼女と共にさ。でも・・・僕にはつ・・・。」

薫は沖田の声を聴き、沖田の頬を思い切り殴つた。しかし沖田はひるまなかつた。

「俺が、どれだけ辛い思いをしてきたかわかるか！？でもな今・・・俺は・・・千鶴が可哀そうでしかたがないんだよ！！救つてあげたくて仕方がなくなつた！！あんなに弱いのに・・・我慢して・・・！沖田！お前は羅刹なんかにならせない！！生きて見せろ！最後の瞬間まで千鶴を幸せにしてみせろ！」

兄の悲痛と愛情の声に沖田は何かが溢れてくるのを感じた。

彼は言うのだ。羅刹という人間ではないものじゃなく、最後まで沖田総司として彼女を幸せにしろと。きっと薫は妹が大事なのだろう。薫は千鶴が声を殺し、毎日泣いているのをどんな気持ちでいたのだろうか・・・。

「わかりました・・・。お兄さん・・・。」

押し倒され、襟を掴まれていた沖田は起き上がり、薫を強い目で見据えた。

「あなたの妹は・・・僕がこの命枯れるまで・・・幸せにしてみせ

ます．．．！！」

沖田は深々と頭を下げた。薫は何故か気恥ずかしくなって頬を赤くした。

沖田には命がない。知っている。だけどこの男にならあの強く弱い少女を幸せにできるだろう。

「．．．だれがお兄さんだ。気色悪い！」

薫は立ち上がって去り際に。

「千鶴の父親．．．雪村綱道は千鶴の実の父じゃない．．．。彼は薬を研究し、幕府を今裏切って薩長にっている。」

「．．．！」

「今、どこにいるかわからないけど．．俺が捜す。多分．．千鶴はもう二度と会えない。それ、伝えといてほしい。俺も．．千鶴と会う気ない。それだけ．．．。」

「わかった．．薫。」

「．．．。」

「ありがとう．．。」

沖田の満面の笑みとその優しい言葉に、薫はかすかに嬉しさを感じ、それを理解していた。

朝日が昇ろうとしていた頃、南雲薫は憎悪をいう言葉を封じ込めた。

45・置いていく空（前書き）

時間間隔はとびとびになっています。

45・置いていく空

その日、沖田は風にあたりたくて、縁側に静かに腰かけていた。床に置いている右手の傍には愛刀、菊一文字則宗がかすかに輝いて見えた。もう昼近くなので千鶴は食材を買いにいつていていない。沖田はただ黙って手入れがされている殺風景な庭を眺めていた。すると一羽の鳥が沖田の膝の上に乗った。鳥の種類には詳しくないのでなんの鳥かわからない。

沖田はその灰色の小さい鳥を細い目で見つめた。その鳥は沖田の周りをぐるぐる回るかのようにちょこちょこ動き回った。

その時、何故かその鳥に無性に腹が立った。思えば沖田自身が病のことに腹が立っていたからだろう。それがたまりにたまって何処にも発散することができなかったから。

薫に言われたことを千鶴にまだ言えていない。何故かと言うと沖田は自信がない。彼女を本当に幸せにする自身が。そのことが確実に沖田の心の中に染み渡って言葉を出すことをしない。

「……………」

独り言のような声が出そうになって沖田は口を堅く結んだ。そして刀を手にとった。沖田はちょこちょこ動く鳥に殺気をぶつけて、斬りかかった。

「っ！！！！？」

「総ちゃん？」

刀は空振りし、地面に刀がぶつ刺さった。違う部屋にいたみつはその鈍い音を聞きすぐに駆けつけた。

「どうしたの・・・？総ちゃん？」

みつが近付いても沖田は振りかぶることなくただただ地面に刺さった刀を見ていた。いつの間にかあの灰色の鳥は飛び立っていた。

「姉上・・・。」

「・・・そうちゃ・・・。」

こちらに向いた沖田は悔しそうな顔を必死で抑えているような顔だった。みつは息をのんだ。こんな弟の顔は見たことがない。今までどんな思いをしてきたのかみつにはわからない。けれど今の弟の顔は・・・。涙を流していた。

「僕は・・・斬れないよ・・・斬れないよ・・・。」

今まで人を斬ることしかなかった沖田総司がもう何もできなくなったと自覚した瞬間だった。

「総ちゃん・・・。」

みつは駆け寄ってそっと抱きしめた。もう沖田は泣いていない。さっきのは幻だったのだろうか。

「総司。俺はもう行くよ。お前は・・・できればまた戦に参加してほしいが、ゆっくり休むんだぞ。」

近藤にそう言われて、沖田は何も言えなくなった。部屋には松本先生や千鶴、みつがそろって近藤を見送ることになっていた。

「近藤さんもあんまし無茶をするんじゃないぞ。傷は治ったがこれから戦闘は厳しいものになるだろうからな。」

「はい。今までありがとうございました。先生。これからも総司を・・・。」

「近藤さん!!」

その時、沖田は目にいっぱい涙をあふれさせながら近藤の胸に飛び込んだ。近藤は沖田の背中をなでて、沖田を優しく抱きしめた。千鶴は涙をこの時は止められなかった。江戸に來た時から沖田の前で泣かないと決めていたのに。

みつもこの時だけは涙を見せていた。

何故なら沖田が声を上げて泣いていたからだ。

「近藤さんっ!!!!ごめんなさい・・・っ!!!!ごめんなさい!!!!」

「何を謝る・・・総司。お前は十分俺たちのために闘ってくれた・・・感謝してる。ありがとうな。」

「うつ・・・あああっ!!」

そんな優しい声で言われたら沖田は泣くことを止められないではないか。沖田は我慢していたすべてをこの瞬間解き放った。

しばらく沖田は思いう存分泣き、落ち着いた頃、近藤はこの家から出て行った。

そしてこれが近藤勇と沖田総司の最後の対話だった。

甲府を新政府軍より先に押さえるよう出陣を命じられた。一説では勝海舟が暴発の恐れある近藤を遠ざけるために命令したとある。

新選組は甲陽鎮撫隊と名を変え、近藤と土方もそれぞれの名を名乗り、三月一日には甲府へ出発した。

近藤は混成部隊を組織するために道中、人々と酒を飲む毎日を送っていた。

このころから永倉、原田は近藤への忠誠心を亡くし始めていた。

そんなことをしているうちに、板垣退助など新政府軍三千人が先に甲府を押さえてしまった。

甲陽鎮撫隊は甲州街道と青梅街道の分岐点に陣を置いたが恐れをなして隊士が逃走。三百だった兵が百二十一にまで減ってしまった。

土方は援軍を呼びに行くがそれも黙殺。

三月六日、甲陽鎮撫隊と新政府軍との間で戦闘が始まった。戦況は甲陽鎮撫隊が圧倒的に不利だった……。

45・置いていく空（後書き）

色々違うと思います。戦闘の様子は次書くつもりです。

46・止まぬ悲鳴（前書き）

千鶴ちゃんがないので鬼たちは参加しておりません。薩長も軍が多いので風間さんには命令しなかったのです。

46・止まぬ悲鳴

新政府軍の砲撃で大砲が破壊された。会津の援軍が虚報だとわかると隊士たちは次々に敗走し始めた。

「やべえぞ！新八！このままじゃ……。」

「ああ……。援軍も来ねえ。羅刹隊もつかえねえ……。」

永倉と原田が悲痛な声を叫びながら闘っていても近藤は動かなかった。

近藤が敗走するのを拒むのは面子が大きい。勝海舟と幕府から軍資金を頂いてきているのにこのこ逃げることなどできない。だがこのままでは確実に全滅する。

「近藤さん！！もう隊士たちも逃げてる！！俺たちも早く逃げよう！！」

それでも近藤は動かない。砲撃の音があちこちから聞こえる。叫び声しか聞こえない。

（くそ……。どうしたら近藤さんをひかせることができる……。）。

原田は舌を嚙んで考えた。でも見つからない。ふと思いつくのは無邪気にいつも笑っていたあの男のこと。

近藤の態度が気に入らなくて永倉が幕府に手紙を出したときも、自分が病気になってもどんな時でも近藤のことを慕い続けた沖田。きつと沖田は近藤を生かすことだけ考えるはずだ……。

「左之さん！！しんぱっつあん！！」

振り返ると血だらけの平助の顔があった。

「平助……！！」

平助ははあはあ息を荒々しく吐きながら言った。

「羅刹隊が……。こんな昼間じゃ使いものにならない……。俺も限界……。」

原田は倒れそうになる平助を抱え、近藤を見据えた。

「近藤さん。今退かないと待ってるのは死だけだ。ここは立て直してまた戦にでるべきだ。」

「そうだ！！近藤さん！！隊士たちのことも考えてくれ！！」

「……。」

近藤がじつと黙っていたその時。

「！！！！」

銃声が耳のすぐ近くで聞こえた。全員が音のした方に顔を向けた。すると銃を持った数十人の兵士たち。洋装に身を包み、こちらを見据えている。

その顔をふと見た原田たちは驚いた。

「羅刹……。！？」

平助はもうフラフラでたてもしないのにこいつらは羅刹なのにまだまだ戦ができる状態に見えた。こちらが不利だからとかそんな問題じゃない……。

「ははは。どうかね。新選組の諸君。私の羅刹は。」

「あんたは……。っ！！」

羅刹隊の一番最後尾から現れた男は千鶴と新選組がずっと探し続けていた男だった。

「綱道さん！！！！？」

綱道は深い深い笑みをたたえ、こちらに近付いてくる。

「ふふ……どうだ？昼間でも動ける完全なる羅刹！！」

綱道は高らかと笑うが原田たちは硬直するだけだった。

「なんで……。あんたが……。薩長の仲間？」

「薩長とは協力しているだけだ。」

綱道はきつぱりと言い切ったが……。原田たちにはわからないことだらけだ。

「羅刹を……。改良して……。そんな……。こと……。」

平助がかすれる声で訴えた。

羅刹を道具にしか見ていないような綱道の口ぶりがどうしても許せなかった。

「私の目的は鬼の一族の再興。そのためには彼らが必要なのだ。」

綱道は嬉しそうに羅刹たちに命令する。この男たちを殺せと。

羅刹たちが銃と刀を抜きだした瞬間――。

原田たちの前に花びらが舞った。白い淡い花びらが。

目の前には小柄な一人の男か女かわからない人が立っていた。自らの剣を血に濡らして。

その足元には一気に斬ったのだろう。五人の羅刹が倒れていた。全て急所を思い切り斬っている。

「お前は……。薫君！！」

綱道は叫んだ。薫は薄く笑んだ。

「お久しぶり。綱道のおじさん。」

薫は挨拶すると後ろにいる原田たちを顔だけ振り返った。

「千鶴……。？」

平助は薫の顔を見て思わずつぶやいていた。

「残念だけど俺は千鶴じゃない。まあお前たちに名前を名乗る気なんてないけどね。」

「お前……。たしか……。制札事件の時……。俺の邪魔をした……？」

あの顔が印象に残っていた原田はすぐ思い出す。

「そんな昔のことまだ覚えてるんだ。さすがは殿を任せられることはあるね。」

薫はいかにも面白そうに笑った。

「さてと。おじさん。覚悟はできてる？」

「・・・っ。薫君。何をする気だい？千鶴のことは・・・。」

「もちろん。俺は可愛い妹のために闘うよ。でも前とは違う。苦しめる訳じゃない。」

薫はもつと苦しめたかった。でもあの泣き声を、沖田の優しい笑みも大切なものと思ったから。薫が今まで一番求めていたものが手に入った気がしたから。だから今ここに立っている。

「おじさんは・・・千鶴が望んでないことばかりした。泣かせることをした。羅刹と言うものがどれだけ苦しめているかわかる！？俺はね。もう・・・。嫌なんだよ。羅刹はこの世にはあつてはならないんだ。」

薫の言葉に綱道は震える。だが綱道はひるまない。

「ええい！！羅刹たち！やってしまえ！！」

薫は刀を強く握る。そして斬りかかる。永倉も、原田も、平助も加勢した。

「お前たち・・・。」

「へっ。俺も羅刹なんかいいと思うぜ。俺も羅刹だけだね・・・。」

薫は少し微笑み、剣を振り続けた。

やがて羅刹は全て滅んでしまった。それでも砲撃はやまない。あちこちで叫ぶ声も消えない。返り血を浴びている原田たちは暗い目で綱道を見下ろす。

綱道はしりもちをついて震えているだけだった。

「おじさん・・・本当は、おじさんと千鶴と一緒に・・・一族を復興して・・・雪村の地で暮らしたかった。でも俺は・・・自分が憎くて仕方なかった。酷い扱いを受けた自分がね。俺が千鶴を憎んでいたのは自分が嫌いだったから。でもわかったんだ。千鶴が俺と同じ苦しみを味わったって何もならない。むなしいだけだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「俺は・・・千鶴に幸せになつて欲しい。」

「千鶴の幸せは・・・わたしと一緒に暮らすことだ！！一族の復興だ！！」

「まだわかんないの！？今、千鶴が江戸で何してると思う！？新選組の帰りを待つてるわけじゃない。好きな人が生きていることを毎日毎日祈ってるんだ。沖田が・・・いつ死ぬかもしれない体だから！！どれだけ辛いかわかる！？」

薫は何故か涙がでそうになった。いつの間にか・・・自分は千鶴に囚われていたのか。

『ありがとう・・・・。』

今はあの優しい沖田の声を信じている。

「それで・・・私を殺してもいいという理由にはならない！！薫君が憎まれるだけだ！！」

刀をもう喉元につきつけている薫に綱道は叫んだ。

「そうだね・・・だから・・・・。」

薫は自分の胸に刀を突き刺した。

「おい！！お前！！」

永倉が叫んだ。その瞬間。薫は叫び声をあげながら自分の胸の刀を抜いて綱道の胸に刺した。

「ぐ……………」

その瞬間綱道は絶命していた。

刀は特殊ではなかったのに何故絶命したのか薫にはわからなかった。もしかしたら綱道は……………」

「ふん…………。お前たち……早く逃げたほうがいいよ。もう…………。戦いは終わりだし……………」

薫は原田に支えられながらなんとか話していた。そして近藤を見つめていた。

「…………。ねえ。お願いしてもいい…………？お前たちから…………千鶴に伝えてよ。おじさんが死んだこと……………」

平助は静かに頷いただけだった。皆、言葉が見つからない。

「俺のことは…………。いいからさ。俺は…………千鶴をどこまで苦しめさせようとした最低な兄だし……………」

「そんなことねえ…………千鶴を守ったさ。薫……………」

原田が優しい声をかけてくれた。それだけでもう何もいらぬ。薫がもらったこの幸せ。千鶴のおかげだ。

「沖田に伝えてよ…………。ありがとう…………って…………。それと…………。死んだら覚えてろって……………」

薫は優しく笑むと深い永遠の眠りについた。

薫と綱道を弔った後、甲陽鎮撫隊は八王子へ退却した後に解散し、江戸へ敗走した。近藤たちはその途中土方と合流。

こうして新政府軍は圧倒的勝利を手にし、甲陽鎮撫隊は羅刹隊を全

て殺害した。

新政府軍は江戸城の無血開城と上野戦争で江戸を確保し、戊辰戦争の戦場は関東北部の宇都宮やより北の会津、北陸へと移った。

「近藤さん。大丈夫かな・・・。」

沖田は心配になって呟いた。

「大丈夫です。私は信じてます。」

千鶴は満面の笑みをしていつも沖田の傍で世話をしてくれる。

千鶴が愛しくて、欲しくて沖田は時々たまらなくなる。そういう時は・・・。

「千鶴ちゃん・・・。」

「はい？」

「お粥食べたい。卵の。」

千鶴は沖田が少食だったので食べたいと言ったのが嬉しくて飛び上がった。

「はい！早く作ってきますー!!」

「いいよ。丁寧に作って。おいしいやつ食べたいし。」

「は、はい!!」

千鶴は元気よく走り去った。

沖田は薄く笑うとまた布団にもぐりこんだ。

「悪いけど……明日の朝来てくれない？千鶴ちゃんにばれと厄介だし。」

「長居はせん……。」

沖田はぱつと起き上がり、襖を開けた。

46・止まぬ悲鳴（後書き）

ぐちゃぐちゃwww薫の扱いよ・・・。

こんなこと思ってたばいいなと思ったのです。

父上の羅刹隊を全部殺したわけですがまだ羅刹があります。

薫の言うことがわかる平助は少し落ち込みます。

でも戦い続ける感じですね・・・。

「だから帰ってって。」

沖田は突然来た来客に不機嫌に言った。風間は沖田の顔を見て、目を細めた。顔色が悪すぎる。頬もこけて痩せて……。池田屋で対峙したあの時と全然違うではないか。

「僕の姉上も来てくれているんだよね。姉上……。結構口煩いから帰った方が身のためだと思うけど。」

縁側で座っていた風間は立ち上がって沖田を睨んだ。そして笑む。

「そんなことどうでもいい。俺が話したいのだから話す。」

「だから。じゃあさ。あんた、僕が千鶴ちゃんを襲ってるところ見たいの？」

それは見たくない。

「……。いいだろう。明日の明朝来てやる。病人に無理はさせたくないからな。」

「あは……。意外に優しい感じ？気持ち悪い。」

沖田は敵意剥き出しでもなかった。ただからかうような感じだった。
「……。時間をちょうだい……。。」

風間に聞こえないように沖田はつぶやき、襖を閉め布団に戻った。

「沖田さん！！起きてます？」

「起きてるよ。千鶴ちゃん。できたの？」

目を閉じ眠っているように見えたので千鶴は声をかけた。沖田はすぐ起き上がり皿を手にとった。

「熱いですから気を付けてくださいね。」

沖田は微笑んだだけで手を進めようとしなかった。

「ねえ。千鶴ちゃん。食べさせてよ。」

「ええ！？沖田さん！？？」

いきなりそんなことを言われ、千鶴は戸惑った。

「ねー。いいでしょ？食べさせてほしいなあ。」

沖田の子供のようなおねだりに千鶴は赤面する。そしておそろおそろ粥を口に運ぶ。

「はい……。あの……。あーん……。」

すごく小さい声で千鶴は言った。それでも沖田は満足のようでおいしそうに食べ、笑う。

「おいしいよ。ありがとう。」

沖田にこんな微笑みをむけてもらえて幸せだ。千鶴は調子に乗って次々沖田の口に運んだ。

やがて全て食べきってしまった。

「ごちそうさまでした。」

沖田は手を合わせて少し礼をした。

「では、片づけてきますね。」

そう言つて千鶴が立ち上がろうとしたとき。

沖田のしなやかな長い腕がのばされた。千鶴が気付いた時には沖田の胸の中にいた。

「沖田さん……？」

久しぶりにこういうことをされて千鶴は少し驚いた。京に居た頃は……毎日のようにこうしていたかもしれない。

病がわかつてからは沖田が離れて行つたけども。

「ごめんね……。でも今抱きしめたいから。」

抱きしめたいから抱きしめただけのこと。そう沖田は言つた。千鶴は何も言わず沖田のぬくもりを感じていた。

やがて力がゆるめられ沖田が千鶴と目を合わせる。

吸い込まれるかと思つたほど彼の目は綺麗だった。いつ見た時よりも……。目の奥が深いとも言うのだろうか。逸らそうとしてもできない。

「ねえ……。千鶴ちゃん。話が……。あるんだ。」

「はい……。」

「実は……。君の實の兄がここに来たんだ。」

「えっ!？」

お蓮から聞かされていた……。兄がいると……。

「昔……。君が住んでいた村が人間に襲われて……。それで離れ離れだつて。綱道さんも……。君の實の父親じゃない。」

「そんな……。」

あまりにも突然で千鶴の頭の中は真っ白になった。でも沖田が膝に千鶴を乗せ、目を合わせて話してくれるので何故か安心していく……。そして話も信じられる。

「南雲薫……。覚えてる？ 巡察の時にあつたよね。」

「ええ……。覚えてます……。」

「あの子は女装してたんだ。僕たちに近付くために。君の双子のお

兄さんね。」

「あの時の・・・薫さんが・・・私の・・・。」

そういえば顔がそっくりだった。双子・・・これなら納得できる。

「薫は・・・南雲家で酷い扱いをうけてて・・・千鶴ちゃんが幸せそうで憎かったって。でもね。僕に言っただのは違うんだ。兄として・・・千鶴ちゃんが幸せになつて欲しいって・・・。」

その瞬間、何か塞き止められていたものが零れ落ちたような感覚がした。

「薫・・・さんは・・・？」

「もう君には会えないって・・・綱道さんを探す・・・って。」
「父様を探す？」

「うん。多分・・・もう会えないと思う・・・。」

沖田の言葉は重くのしかかった。信じたくない気持ちはあった。でも嘘ではないことが痛いほどわかった。

「わ・・・かりました・・・。ありがとうございます・・・。沖田さん・・・。」

「千鶴・・・ちゃん。」

千鶴は決めていた。沖田の前でもう泣かないと。でも今我慢の限界がこようとしている。一刻も早くここから離れないと・・・。

「沖田さん・・・離して・・・。」

千鶴の細い腕を掴む沖田の手は強い。細く痩せ細ってはいるけれど。
「駄目だよ・・・。我慢しないでいいんだよ。泣いて・・・。」

千鶴にはどうしようもなく何かがあふれ出して止めることはできなかった。

「私は決めたの！！あなたの前では泣かない！！お願い・・・お願い・・・苦しいの・・・っ！！」

こんなことで泣きそうになる自分が大嫌いだ。我慢しろ。そう言い聞かしても目から溢れそうになる涙を止めるのに必死でほかに何もできない。

沖田は離そうとせず、千鶴をきつく抱きしめた。

「離して．．．．．お願いだから．．．．．」

「嫌だ。離したくない．．．．．お願いだから泣いて．．．．．ここで僕の胸で泣いてよ。」

顔を上げると沖田の儚い消えそうな顔があった。太陽の光で余計に消えそうに見える。

その顔を見た瞬間千鶴の縛っていた強い意志は消えてしまった。

「うつ．．．．．あああああ！！沖田さん！！沖田さああああん！！！！」

千鶴は今まで沖田の前で我慢していた涙を全てだした。声を上げて泣いて泣いて。これでもかというほど泣いた。

沖田はただただ抱きしめてくれた．．．．．

「ごめんなさい．．．沖田さん．．．．．」

落ち着いた頃、千鶴は謝り続けた。

「だから、なんで謝るの？僕は．．．．君が布団の中で声を殺して

お願いしますと千鶴は沖田と同じくらい深々と頭を下げる。

（あれ．．．？どうしたのかな．．．。）

ずっと頭を下げているのに沖田は何もしてこない。千鶴がゆっくり頭を上げると．．．。

見たこともないほど顔が赤くなっている沖田いた。

「お、沖田さん．．．？大丈夫ですか？熱でもあるんじゃない．．．。」

「ああ。もうわからないかなあゝ嬉しくて．．．すこし恥ずかしくて．．．顔が赤くなってるんだよ。」

沖田は微笑んで再び腕を伸ばし、千鶴を抱きしめる。

「よろしく．．．お願いします．．．奥さん。」

「はい．．．．．。旦那様．．．。」

いつまで生きれるかわからない。

それでも君に．．．伝えないといけなかったんだ。

ごめんね．．．千鶴。

僕は我儘だから．．．。

君を縛っておかないと不安なんだ。

でもね．．．。君は君の幸せのために生きてね．．．。

夕刻時になつて千鶴が買い物に出掛けた時。

「明日の朝来てくれるんじゃないの？」

「・・・・・・・・。」

風間千景が沖田の部屋に入り込んできた。

48・指の間（前書き）

やっと完治しました。いやなんか謎の病気がw風邪なら一日か二日休めばいいんですけど今回はかれこれ一週間はかかりました…。

48・指の間

「なんですつといたのさ？」

沖田はにやつと微笑みながら部屋に入り込んだ風間に聞いた。風間
は不機嫌そうに殺風景な庭を見つめている。

「貴様は何を考えてる？あんな小娘に……。」

「小娘？はは。何を言うかと思えば……風間さん。あんたこそ
何を考えてるの？」

「何……？」

「千鶴を迎えに来たんじゃないの？僕を殺しに来たんじゃないの？」
大笑いを堪えるような沖田の質問に風間は目を細め、沖田を振り返
る。

彼の全身をまじまじと見るとやはり胸のどこかがざわついた。

「俺は……貴様に話しに來ただけだ。殺す気はない。」

「ふーん。で……千鶴のことは？」

「……やつは……貴様のことを心底好いている。」

「知ってる……。」

「だから貴様に任せるかどうか俺は考えた。」

ものすごい真剣に話すものだから沖田はいつの間にか笑みを消して
いた。

「俺はあの小娘に惚れたようだ。」

「……！」

「だから貴様から奪って貴様も殺し、無理やり子を産ませようかと
思った……。」

その時、かすかに風間が動いてその影が伸びていくのを沖田は見た。
「だがあの顔を見ればそんな気失せてしまった。貴様というあの嬉しそうな顔……。奪いたくはない。貴様がもう命少ないのも知っている。その命を鎖す役目は俺の仕事ではない。」

「風間さん……。」

「沖田総司。俺は貴様を武士として認めている。一人の男として認めている。ふつ……。人間などに俺がこれほどまで興味をもつとはな。」

彼はまさしく滑稽とでも言うように深く笑った。

「帰る前に伝えることがある。……。羅刹がなくなった。」

「なくなった……。？」

「全滅ではないが……。千鶴の実兄が綱道の羅刹隊を殺したらしい。此間奴らが逃げ帰った戦の時にな。」

「そうか……。薫が……。」

風間は立ち上がった。そして沖田をその緋色の瞳に映す。

「俺は一切お前たちに干渉しない。あの土方とは決着をつけねばならんがな。」

「へー……。土方さん。恨まれてるんだね。」

沖田はなんとも悲しそうに淡く笑った。沖田は土方の顔を思い浮かべていた。

「ねえ。風間さん……。」

「なんだ。」

「千鶴のこと本当に好き？」

風間は答えるべきか迷ったがどうせ死ぬ人間だ。正直に答えた。

「ああ。」

「どんなことがあっても守る？」

「貴様……。何を……。」

風間が答える前に沖田は何故か風間の前に頭を下げている。それも深々と。

「僕は命がない……。彼女を置いていくだろう。だから僕が死ん

だあと・・・彼女を守って欲しい。あなたが。」

風間は信じられなかった。たった一人小娘のために・・・。

「貴様は・・・馬鹿か！武士ともあろうものが何故そのように頭を下げる！？女のためになど・・・。」

「僕は・・・彼女をこれ以上泣かせたくはない。僕がいけないことで誰ともいず孤独に生きさせるくらいなら誰かに託したい。」

「・・・貴様は愛する女が違う男と契を交わしてもなんとも思わんのか・・・！？」

沖田は奥歯を噛んだ。嫌に決まってる。でも・・・。

「僕は・・・彼女を独りにさせたくないんです・・・！」

「僕は・・・彼女のためなら命も面子も何も要らない。どんなに恰好悪いと言われようが構わない！！だから・・・。」

「夫婦に・・・たった今、なつたというのに俺に託すのか。馬鹿な事だ。千鶴の性格をよくわかつているだろう。」

そう千鶴はきつと沖田が死んでも一生夫婦だと思ひ誰とも付き合わないだろう。こんなことをしなければ千鶴は自然に違ふ誰かと結婚したかもしれないに・・・。

「この想いは伝えないといけなかったから・・・。だから伝えたいんだ。それに・・・僕が告白してなくとも彼女は誰とも付き合わないよ。」

その自身はどこからくるのか・・・つつこむところだが風間も事実だと思つので何も言わなかった。俄然沖田は頭を畳にこすり付けた。お願いします・・・。どうか千鶴を・・・独りにしないで・・・。

「頭を上げる・・・。」

沖田が頭を上げ風間を見ると目の前には風間の白くしなやかな手が差し伸べられていた。

「貴様の意志は受け取った。だからもういい。」

その一言だけを言つて風間は風のように素早く消えた。

（何故・・・あのようなことができるのだ・・・？自分の愛する女を他の男に託すなど・・・。土下座までして頼むなど・・・。）
誇り高い風間には全く信じられなかった。沖田は自分と似て嫌いな相手には死んでも頭は下げないと思っていたのだが。

『彼女を守るためなら・・・。』

それほどまでに二人の愛は深く沖田は千鶴を本当に愛しているということなのだろう。きっと沖田も彼女が他の男という様など見たくはないだろう。

でも千鶴を一生独りにしてしまう人生も彼はきつと望まないのだろう。彼女が生きているのに自分は死ぬ。それは変わらないと沖田はわかっている。彼女のそばにはいられない。そして彼女は独りにな

る。それが耐えられないのだろう。

「風間さん……。」

振り返れば恋をした少女がこちらを見つめている。優しくはないが威嚇するようでもない。風間はたった今自分がまだこの隠れ家の周辺にいたことに気が付いた。

ここはまだ門の前。

「どうしてここに……。」

風間は一度千鶴を嫁にしている。それにここは沖田が隠れている隠れ家。薩摩の風間がこんなところにいたら警戒もする。

「沖田に挨拶に来ただけだ。」

「沖田さんに……？」

少し強気なきらきら輝く目。こんなところも風間が惚れた理由。そんな目で見られて少し気恥ずかしいのを風間は認めない。

「たいしたことではない。安心しろ。ここにはもう来ないし、口外もせん。鬼は約束を守る。」

そう言い風間は背を向け立ち去ろうとした。

「あのっ!!」

振り返くと千鶴が頬を染めてこちらを見つめている。夕日に照らされ、風を受ける彼女を美しいと思った。

「ありがとうございます……。沖田さん。喜んでいただけますか？ 私では話し相手は不十分だと思いますから。」

「……そんなことはない。お前がいるほうが何倍も喜ぶだろう。それと千鶴。」

「はい……？」

「何故俺が沖田を殺していないのだと思っただ？」

千鶴は不思議そうな目をして風間を見つめている。

「だって・・・風間さんなら正直に言うでしょうし。わかりますよ。愛する人が誰かに殺されればね。そういう絆。信じられないかもしれないけどあるんですよ。」

「それは・・・離れていてもわかるという訳か？」

「はい。そうです。それに私には風間さんがそんな悪い人には見えないんですよ。そりゃ過去のことを考えれば・・・。」

「全く正直な娘だな。」

風間はこらえきれず千鶴の元へ寄った。千鶴はそれを避けようともしせずただ突っ立っていた。風間は大きな手で千鶴の頭を撫でた。

「風間さん・・・？」

「お前が笑える未来はどこにあるだろう・・・。」

聞こえない声で言われ千鶴は訳がわからなかったが撫でられたのは何故か嬉しかった。

風間は手をそつとはずしそのまま足早に去っていく。その背を千鶴は頭を下げて見送った。

「ただ今戻りました。」

今日はみつが家に帰っていていないので沖田と二人だ。さきほど夫婦と・・・なったわけだが（祝言はあげていないが）千鶴はいつものような顔でいることにする。

「おかえり。早かったね。」

「はい。風間さんとは何をお話していたのですか？」

千鶴の作ってくれた飯を食べながら沖田は答える。

「べえつに」。楽しいお話だよ。」

「そうですか。」

「なんだ。嬉しそうだね。」

「・・・沖田さん。今日はよく笑うから。」

千鶴を見つめる沖田はいつも元気がないような気がしていたから。

「だって・・・今日は君が奥さんになった最初の日。元気もでるって

千鶴。」

千鶴と呼ばれて・・・千鶴は。

「総司・・・さん。」

少しの沈黙が流れそれがおかしくてお互い腹を抱えて笑い出した。

「あはは・・・なんかおかしいよね。」

「そうですね・・・。ささ。早く食べちゃいましょう?。」

「はい。」

こんな何もなく穏やかな時間が・・・ただただ続けばいい。

それが無理だとわかっていても。

二人は思わずにはいれなかった。

翌日。

沖田の隠れ家に堂々と訪ねてきた隊士たちがいた。

「よう！総司、千鶴ちゃん。」

「話があるんだ・・・いいか。」

やってきたのは永倉新八と原田左之助だった。

49・誰にでも（前書き）

こんなことなければいい。あつてほしい。そう思うことがある。

49・誰にでも

「あの・・・お茶います。」

「いいよ。ここにいて。」

雰囲気が悪くて早く部屋から出たかったが沖田に言われたら千鶴はじつとしているしかない。今、永倉と原田が訪ねてきて沖田の部屋にいる状況だが雰囲気は重く、愉快に話せる場合ではない。

（確か・・・近藤さんたちは江戸に帰ってきたんだ。）

連絡はなかったがそれは知っていた。甲陽鎮撫隊は甲州勝沼の戦いで敗走したと・・・。

「で。何しに来たんですか。早く言ってくださいよ。」

沖田は声は笑うようだったが目は全然笑っていなかった。千鶴には彼の表情は最近わかるようになってきたので彼がものすごい不機嫌なことがわかった。

「近藤さんのこと・・・総司聞いてるか？」

永倉が沖田に聞いた。

それに沖田は答えることができなかった。本来彼と共にいる自分は今彼の元にはいない。だから何も知らないのだ。

「近藤さんは・・・北に行く最中もずっと酒を飲みかわして隊士を募ってたんだ。それはいい。隊士が増えたほうがいい。まあ腰抜けな奴は必要ないが・・・。で結局道草くつてたらあつという間

に仙台城はもう奴らの手にあつた。そして戦でも……。」

「近藤さんは……幕府に認められて嬉しいから俺たちにも大将面してる……。」

「はっ。」

沖田は鼻で笑つた。

千鶴は愛しい人の怒りを胸に受け止める気持ちになつていた。

「近藤さんの愚痴を僕に言いにきたんだ。二人とも性格悪いな。」

沖田は永倉と原田を睨んで嫌味を言い出した。

「健康な人は口数が多いなあ。関係のない人にも愚痴ってるんですよ？ そんなことに体使つて馬鹿だと思わないんですか？」

二人は返す言葉がないというような顔をしていた。

それでも沖田は二人を軽蔑するような嫌味を言い続ける。

「総司……。俺たちは離隊する。」

沖田は途端嫌味を言うのをやめた。永倉が言つた言葉によつてか……。或いは。

「離隊？」

千鶴が二人に聞いた。

「同門の……芳賀さんが隊長で……靖兵隊つていう組織を作ることになった。」

靖兵隊。新選組とは別の組織を作る。その隊に二人は入るというのだ。

「なるほど……。だから言いに来たんですね。よくわかりました。あなたたちは裏切つたということだ。」

「それは……っ！」

「わかつてますよ。左之さん。どうしようもないんでしょう？ 近藤さんの下でいれば死だけ……。勝ちは見えない。近藤さんといったら喧嘩がたえない。でしょう？ 新八さん。」

沖田は穏やかな笑みをたたえている。

二人はそれに救われたかのように顔色がよくなった。

「僕は……反対もしませんよ。いずれこうなることはわかつてま

したし……。それに近藤さんを守る人はいますからね。」

千鶴はあの鬼の副長の姿を思い浮かべた。

「僕はここにいて病を治すことしかできないけど……。お二人は己の信じるもののため闘ってください。」

「総司……。」

なんかしみじみとして永倉が目には涙をためていた。原田は少し苦笑いになる。

「ちよつと……。新八さん。泣かないでくださいよ。これが最後ってわけじゃないし……。」

「泣いてねえよ!!」

この会話が少しおかしくて千鶴が少し笑うとつられて皆が笑い出した。

「総司。元気そうじゃねえか。安心したぜ。」

原田が優しく言った。

「そりゃ……。新婚ですから。」

「新婚!!??」

「お、沖田さん!!」

千鶴は顔を真っ赤にして沖田を止めたが遅い遅い。

「こら。千鶴。沖田さんじゃないだろう?」

眩しい笑顔で言われたら千鶴は何も言えなくなった。

「総司さん……。」

「ほら。僕のお嫁さんはすぐに恥ずかしがるんだ!。」

意地悪に、そしてとても嬉しそうに沖田は言った。

「へー。千鶴。おめでとう。」

「ま。総司が旦那じゃあ大変だろうけどな。頑張れ!千鶴ちゃん!!」

「は、はあ……。あ。」

二人は祝福してくれるのだけどんなか違和感がある気がした……。

「あはは。千鶴。お茶入れてきて。」

「は、はい!!」

千鶴はぱつと立ち上がり部屋からさつさと出て行った。

「総司・・・お前・・・。」

千鶴が出て行ったあと。男三人の会話が始まる。

「結婚することが駄目ですか？それともあつさり許したから？」

「・・・両方だ。」

（正直だなあ。新八さんは。）

「千鶴ちゃん・・・。本当に女の子だよ。お前の前では幸せそうだ。」

「そりやそうですよ。千鶴は僕のが好きですからね。」

自信たつぷりの沖田の顔がものすごく輝いていて二人は何も言えなくなつた。

「まあ・・・千鶴と総司が決めたんだ。俺たちは何も言えねえな。」

原田の言ったことを新八は頷いた。

「でよ。近藤さんのことは・・・。」

「正直さあ。」

沖田は冷えた声を出したので、二人の心は一瞬固まつた。

「僕は近藤さんを見捨てるような・・・裏切るような全員殺すよ。だからあなたたちも殺したいよ。でもできない。僕にはそんな力ない。刀を抜いたら逆に斬り殺されるよ。」

そうか・・・と重い声で二人は答える。

「でも僕はあなたたちを仲間だと思ってますしお二人の生き方に口は出しません。だからいいです。気にしないで。ま。あの人・・・頼りないんですけどね。」

沖田は空を仰いだ。今日の空は晴れ晴れしている。晴れすぎた空・・・。

「総司。お前、変わったな。」

「え？」

原田の言ったことが信じられなくて沖田は聞いた。

「昔だったら・・・とつくの前に斬りかかってたんじゃねえか？何も考えずよ。」

「そうかもね・・・。僕が変わったとしたらあの子のおかげだ。」
真っ直ぐで・・・正直な・・・沖田を変えた不思議な少女。何もかもが違う考え。そんなものを考えること事態、沖田は興味がなかったから本当に変わったのだろう。

「皆さん。お茶が入りましたよ。」

そう千鶴が笑顔で部屋に入ってきた。その時沖田は千鶴と目を合わせた。千鶴も不思議とこちらを見つめている。

そして微笑み返してくれる。とても幸せだった。

人殺しの自分が幸せになんてはいけない。沖田は心のどこかでそう思っていた。

女を幸せになどできないのだから。

でも今は。彼女に幸せでいてほしい。

ずっと笑顔にしたい。

自分は変わった。そう初めて自覚した瞬間だったのかもしれない。

二人はまだ昼時だが帰ると言った。

「夕餉も食べていけばいいのに・・・。」

千鶴だけは門の外まで見送ることにした。

「いや。あいつの体のことを考えたらな。」

そうだ。会話の途中も何度か血を吐いたのだ。無理をするなど言っても沖田は会話をやめなかった。

「千鶴ちゃん。じゃあ。元気で。また会おうぜ！」

「はい！お二人ともお元気で！！」

千鶴は頭を下げ二人を見送った。

その背中とは、いつも千鶴が見ていた武士の背中と同じだった。

月日は流れ・・・。

新選組は下総流山に陣を置くが新政府軍に対抗できず・・・。

四月三日。近藤勇は新政府軍に投降した。

近藤は仮に名乗っていた大久保と言い続けるが近藤勇であると看破され、捕縛。

近藤勇の処遇は中々決まらなかったが、四月二十五日。

中仙道板橋宿近くの板橋刑場で斬首された。

「あれ？」

「どうしたんですか？総司さん。」

「いや……。桜はもう散ってしまったのに桜の花びらが……。」

「
舞い降りてきた桜の花びらを沖田は優しい目で見つめ、優しく握った。」

49・誰にでも（後書き）

もつそろそろ・・・駄文ですいません。

最近は、とても楽だよ。働かなくて寝ているだけの生活はもう随分慣れてしまったよ。

もう五月になるけれど新選組がどういう状況になっているのか全く知らない。

だって僕は外にも出られないのだから。

時々、話すのも、起き上がるのも苦しくて死んでしまつかと思う時がある。

いやいや冗談じゃないよ？

まあ。どんなに苦しくても君にだけは言わないよ。千鶴。

君は我慢して僕の前で笑うのだから。見ていて辛い時がある。

けど僕はその笑顔に助けられているんだ……。――。

君と初めて出会ったのは寒い冬の夜だったね。もちろん。ちゃんと覚えてる。

まあ僕が君に思った第一印象って小さい。だったかな。小さくて弱い・・・。そんなこと思ってた。

知つての通り僕は君を殺そうとした人間だ。本当に別に殺せばいいと思っただ。

けど僕は君に恋をしてしまったね。

なんでだろう？君といると嬉しいんだ。君をいじめたら君は泣きそうな顔をして怒る。

可愛いと思っちゃいけないかな？

僕が君を傷つける存在ということはわかってる。

僕は刀だから。刀は傷つけるものだ。

でもね。それと同時に大事なものを守れるんだ。

僕は君を守る存在になれるかな？

今は守られてるような気分だけだね。

僕はもう刀を持てない。あの小さな鳥さえも殺すことができない。
あの新選組の沖田総司が？仲間からも戦闘狂だと言われていた男が
もう刀も持てない？

馬鹿みたいな話だね。僕は昔から近藤さんの役に立たないのなら生
きる価値もない存在だと思い込んでいた。

はは。だからね。病に侵された時点で僕はもう死ななくてはいけな
かったんだ。

でも僕はできなかった。

君がいるからだ。千鶴。

僕の大好きな愛しき人。

君の兄の薫も、綱道さんもどうやら亡くなっただけ。左之さんた
ち……君に伝えたかったことがあったんだって。でも言えな
かったって。

それほど僕が君を追いつめていたのかもしれないね。

君は天涯孤独になったね。僕はそれが耐えられない。僕はその辛さ
が少ししかわからないから……。

君に結婚を申し込んだの、本当はすごく後悔することがあるんだ。
もちろん。君を愛している。だけど僕は自分の命がいつ終わるか
くらいわかるから。

君を縛るようで嫌だ。

けど僕は君を縛らないと駄目だった。どうか僕を許してほしい。

僕が死んだら君は誰とも寄り添おうとしないだろう。

僕は君がそうする人だと知ってる。僕を愛し続けてくれるだろう？

僕は驕っているかもしれないけど、本当にそう思うから。

あのね……。僕は君をどこまでも独占したいとか思っちゃうわけ。

最低かもしれないけど君が選んだ男です。

まあ君はどこまでいっても逃げらんないよ。

はは。そうだ。そうだ。話を戻して……。

僕は君を独りにしたくないんだよ……。

思い出を抱いて生きていても駄目だ。

前を向いて現実を生きなければならぬ。

だからあの風間に託したんだよ。

あの人のことは別に好きじゃない。仲間を何人もやられたし。

でもね。彼は君に惚れているみたいだし。

彼なら君を大切にしてくれると思うてさ。

悔しいけど。君とずっといれないと思うと。

きっと子供も生まれないだろう。僕は体が弱いし。

家族を作る。自分が大黒柱になって。そんなの考えたことなかった。

でも今は望むよ。

君と笑顔でいたら……。

もしこの病が治っても君にはわかってるか。

そうだ。僕はどうしようもない大馬鹿者だよ。

斎藤君。一度も来てくれなかったなあ。まあ。彼は馬鹿みたいに真面目だから左之さんや新八さんほど暇じゃないんだろうけど。でも僕は彼のこと認めてる。

彼もすごい強いし、初めて対峙した時は興奮したもの。

平助は羅刹に……。気にしていないふりをするけど本当はすごく心配だった。羅刹になろうかと何度も思った。山南さんの腕が治ったのだから僕の病も治るのではないか。

そう何度も思ったよ。

でも……。僕は狂いたくなかった。君を殺したくなかった。

おかしいなあ。はじめは殺すとずっと言っていたのに。

新選組の邪魔になれば斬ると言っていたのに。

笑っちゃうよ。本当……。

僕の愛は永遠だ。そう言えば君はずっとそれを抱く。

だから言わないよ。奥さん。

大好きだよ。言わないよ。

言えば僕は満足するけど君を縛ってしまっから。

ねえ。千鶴。

僕が死んだら泣いてくれる？悲しんでくれる？

それは一瞬でいいんだ。

僕は君に世話をしてもらってる。僕が死んだらそれもないよ。
君は君らしく羽ばたいて。

君の人生だから僕が口出すことじゃないけどね。
君は君の幸せを見つければいい。

まあ。僕は笑ってくれば一番安心。

あー。僕は最後に何をするだろう。

今は近藤さんに会いたいな。もう一度彼の笑顔がみたいな。

僕はない人間だけど彼は可愛がつてくれるんだ。

土方さん。あんたには会いたくないね。

僕はあなたのことが好きじゃなかった。だって近藤さんと仲がいい
じゃない。僕よりも。

僕より後に入ってくせにね。気に入らない。

まあでも一番気に入らないのは僕の姉上に色目つかってたでしょ？
一瞬でも揺らんだんじゃないですか？

もて男の土方さんが。人の姉をとるなんて冗談じゃない。

土方さん。あなたにはいろんなことをしましたね。ヘタクソな句集
を捨てちゃったり。あなたに嫌がらせばかり……。

でも僕は楽しかったです。そして僕を反対を押し切って一番組組長
に推薦してくれたこと……。

僕を強い男と認めてくれたこと感謝してます。

あなたは強い人だと思いますから……。

近藤さん。元気にしているかな？土方さん。近藤さんを死なせたりしたら許さないですよ。あの世で覚えとけてんでしょ。

時代がもうじき変わる。全てが急速に変わる。だとしても僕たちの絆は消えない。

人と人が互いに交わった思い出は消えはしない。

それが辛いものでも幸せじゃないものでも。

思い出は優しいままだ。

50・穢れた笛（後書き）

沖田さんの思いを色々と書きました。

次回最終です。

ですが、イフ話を作りますので大丈夫でしょう。

51・情愛（前書き）

動かねば闇にへだつや花と水

止まっ^ていては闇に別れてしまう　あなたと私

51・情愛

聞こえない……。もっと近くに…………。

あなたは誰？

私は今、問いかけている。

私の目に映る人はあの時と同じではない。ちゃんと男性の着物を着ている。

「思い出した？千鶴。」

「薫…………。」

私は思い出していた。彼と幼少の頃過ごした時間を。

どうしてあんなことになってしまったのだろうか？

どうして死ななければいけなかったのだろうか？

「死ななければならなかった？ってそんな馬鹿な事考えてるの？」

薫は薄く笑った。背景は今の私の部屋で、薫は私の傍に腰かけてきた。横から私を覗き込むと私の頬に触れ髪を撫でる。

「千鶴…………。わかってるよね？沖田は人を殺した。」

私はわかつてはいたが目を見開いて聞いた。

「蓮が俺の刀を渡したみたいだね？」

私は頷いた。

「刀というのは何のためにあると思う？」

「人を……斬るため……。」

「違う。」

「え？」

私は薫を見た。薫はどこまでも穏やかな顔をしていた。薫の腕が私の背中にまわってきた。薫は私を抱きしめてくれた。優しく。

「人を守るためにあるんだよ。」

「……！」

「確かに沖田は人を斬り続けた。狂っていたときもあつただろう。でもすべては守るためなんだよ。お前を守るためでもあるよ。」

「そんな……私は……彼に何も……。」

「千鶴。お前は沖田といれて幸せだろう？沖田だつてお前といれて嬉しいはずだ。いいか？人は人とながつてこそ強くなれるんだよ。」

「

私は泣くばかりで薫の顔が歪んで見えた。

「人は人と繋がらないと幸せにはなれないんだよ。俺が死んでわかつたことだ。」

だんだんと薫の感触が消え始めた。

「いや……いかないで……。」

「沖田はもうお前とはいれない。でもあいつはお前の傍にいる。お前があいつのことを忘れない限りな。」

「薫……。」

「沖田は自分のこと好きじゃなかったと思う。ここにきてあいつは絶望のどん底にいた。けどお前がいたから笑えたんだ。沖田は確かに許されないことをした。あいつに斬られた人間はあいつを憎んでる。だからあいつは自分が幸せにならなくていいと思ってた。でもね。お前がそれを変えたんだよ。このこと生きたいと思うようになった……。」

千鶴は沖田の顔を思い浮かべた。大好きな彼の笑顔を。

「私は忘れないよ……。」

どんなことがあっても私は忘れない。

彼のことを思い出す人間がもうほかにいなくなっても私だけは絶対に。

「ありがとう。私のたった一人の兄様。」

薫が微笑んでくれた。

それを見届けた後、私はそこで目を覚ました。

千鶴は起き上がるともう朝日が昇っていた。千鶴は着物を着換え、髪を結った。

いつものように沖田の食事を作る。

やがて出来上がるといつものように沖田へ運ぶ。

そういつもと同じだ……。

「総司さん。朝餉です。」

沖田は痩せ細っているから何がなんでも食べさせなければならなかった。襖をあけるといつもは眠っている沖田が庭の方をぼーっと眺めていた。

「総司さん。」

もう一度名を呼ぶと沖田はゆっくりこちらを振り返った。

「……おはよう。」

彼は小さく挨拶する。千鶴は笑顔で。

「おはようございます。はい。ではお食べになってくださいね。」

沖田はいつも千鶴に食べさせてもらいたいと言うが、今日は言わなかった。茶碗を手に取ると粥をちよびちよび食べ始める。

会話という会話はなく沖田がやがて食べ終わる。

「ごちそうさまでした。」

「はい。では片づけてきます。」

千鶴は繰り返し繰り返し沖田の世話をしている。これもいつもと変わらない。

でも妙な胸騒ぎがする。今朝の夢と何か関係があるのかもしれない。

早く片づけて千鶴は沖田の部屋へ戻った。

「総司さん。ご気分はどうですか？」

さっきと同じように庭を眺めていた沖田はまた振り返る。ほんの少し微笑し。

「まあまあかな。外に出る気はならないね。」

「そうですか……。」

「ねえ。千鶴。」

「はい？」

「近藤さんから文とかこない？」

「え……。きてませんけど……。」

千鶴が近藤の死を知るのはまだ少し先のことだった。

「おかしいね。もう江戸にはいないのかな？」

沖田の問いかけに千鶴は答えることができなかった。

沖田の横顔を見ていれば昔のことが思い出された。出会いから、恋人になった瞬間も。

「ごぼっ……。」

沖田は軽く咳をすると、手で口を押えたが、我慢ができなくなったらしく血を思い切り吐き出した。

「総司さん！大丈夫ですか！！」

沖田は辛そうに汗を？いていた。千鶴は必死に沖田の体を心配していた。

「無理なさらないでください！これ、洗いますから、私の部屋で寝ていてください。」

そう言うつと沖田を起き上がらせ腕を自分の肩に回して千鶴は沖田を連れ出した。

部屋まではそんなに距離はないが沖田の体は大きいので千鶴には辛かった。

千鶴の部屋で布団をひかせ沖田を寝ころばせた。

「はい。寝ていてくだ……。」

千鶴は一瞬で沖田の胸の中にいた。

「総司さん……。」

彼は何も言おうとしない。沖田は膝の上に千鶴を置いて、体を起こした。沖田の腕の中にすっぽりと入った千鶴は沖田を仰ぎ見た。その碧眼がかすかに歪んでいたのを千鶴は見てしまった。

「千鶴・・・僕のあげた翡翠の簪。持ってる？」

「持ってますよ。ちゃんと。」

千鶴は沖田の腕を掴んでいたが離し、自分の懐から前に沖田が買ってくれたたった一つの贈り物を握り、沖田に見せた。

「これをお守りにしているんです。つけてしまうのはもったいない気がして・・・。」

「つけてほしい。」

「え？」

「後ろを向いて・・・。」

簪をとられ、千鶴は大人しく後ろを向いた。沖田が丁寧な髪に簪をさす。

そして振り向かされる。

「うん。綺麗だ。」

そう微笑まれて千鶴は自然に笑った。

笑んでいると沖田の唇が突如重なった。突然でびつくりしたが、やがて目を閉じた。口付けは昔のように激しくはないけれど甘い優しい口づけだった。

でもかすかに血の味がしたことを千鶴は言わなかった。

「今日・・・僕の隣で眠ってよ。」

「はい・・・。」

夜になって千鶴は沖田の横で眠りについた。手を握り合いそのぬくもりを感じて。

千鶴にはわかっていて。彼が、もう永遠の眠りにつくことを。

千鶴は沖田に気付かれないよう涙を流し続けていた。布団を濡らしても・・・。

暗闇の中、沖田には千鶴の姿は見えないはずだ。なのに沖田が寝返りをうつてこちらを見るような気配を感じた。

「独りにならないで・・・千鶴。」

「・・・そう・・・じ・・・さん・・・。」

小さい声で言われて千鶴は沖田にしがみついて声を上げて泣いた。
「お願いっ！！いかないでえええ！！」

そう叶わない願いを何度も何度も言いながら泣き続けた。その泣き声を聞きながら沖田は一筋の涙を流した。

そして深い深い、水の底にいつてしまうような安息の眠りについた。

ねえ。千鶴。

人を斬った僕が幸せになんてなれない。

そう思ってた。

でも……僕は……。

ありがとう。幸せにしてくれて。本当にありがとう。

君にはきつと辛いことも降ってくるかもしれない。

だけどいいこともたくさんあるはずだ。

どうか生きてほしい。僕の方までとは言わないけれど。

僕は君を守る神様になろう。

僕は君を、いつまでも愛し続けているから。

言いたいけれど決して言わない。

慶応四年五月三十日。

近藤勇の死を知らず・・・。沖田総司は永遠の眠りにつく。
享年二十七歳。

千鶴が近藤の死を知るのはこれから十日後のことだった。

五年後。

総司さん。聞こえますか？

戦いは終わり、今は明治という新時代を私は必死に生きています。

新選組のことを今でも忘れていませんよ。辛いこともありましたが楽しいことも多かったですよね。

私はその場所で少しは成長できたような気がします。

京に父様を探しに行つてあなたたちに出会った。総司さんに出会った。

あの瞬間から運命というものが未来へ繋がっていたのでしょうか？

今、私は江戸で一人暮らしをしています。

心配しないでくださいね。独りではありません。近所の人がよくお話してくれます。

近所の子供たちが遊んでくれます。

それに風間さん……。おぼんの時や、正月前には私に会いに来てくれます。

何故会いに来てくれるのだらうと聞くと笑うだけで答えてくれませんが。

風間さんは最初は嫁にするとかなんとか言っていますが今は全然何も言っていないので安心しています。

あなたのお墓の前で手をあわせている訳ですが、今、彼は私の横にいます。

彼もあなたに語りかけているのでしょうか？

話を戻しますと……。

色々な事がありました。本当に。江戸時代が終わる日がくるなんて思ったことなかったですから。

私は知っています。新選組が闘った軌跡。あなたが闘った軌跡。

私は語り継ごうと思います。この平和な時をくれたのは彼らが闘って生きていたから。

難しいかもしれない。でも私は。

あなたが生きた証に私はなりたい。

どうか見守っていてくださいね。

私を変えた意地悪な旦那様。

51・情愛（後書き）

労咳はうつります。接吻とかアウト。でも二次元だから大丈夫だ、問題ない。

千鶴まで労咳で死ぬとかありえないないない？

江戸時代の人は労咳がうつるとか知らなかったそうです。

まあ千鶴は鬼なので大丈夫なのでしょう。

微妙な終わり方ですね。全く私はダメなやつです。

今回はイフ話です。

沖田は労咳なんかかかってないぜ。ずっと戦い続けていたぜ。

まあ土方と沖田は薄桜鬼では仲が悪かったりしてますけど、実際思っているのは多分沖田は土方のことを認めていたと思います。嫉妬もはいつていたけど、この人に敵うはずもないと心のどこかで思っていたのでは。

尊敬もしていたはずですよ。

沖田の年齢は色々な説があります。

最後の言いたけど決して言わないのは前にも書いた通り彼女が誰とも結婚しなくなるのをふせぐためです。愛しているという言葉を沖田は毎日言いたかった。命がないのをしっていましたから。でも自分が死んだあとのことを考えました。沖田は彼女を孤独にするのは許せませんでした。自分の言った言葉で。彼女はまた恋をして子供を授かってくれればいいと思っていたのです。長くなりました。では次回。

追記日にち間違えました。土下座

52・再会（前書き）

ここからイフ話。長くなるので省略。主に明治に生きる総司を書きたいので。

沖田総司は近藤を守ることができず命をたとうとしたが土方についていくことを決意。

戊辰戦争を土方と共に駆け抜けるが生き残る。

とまあこんな感じです。暇なら詳しく書きたいと思います。

52・再会

明治七年十月。

「遅い！刀で斬るな！体で斬れ！」

「・・・うつせえな！わかつてるっての！！」

打ち合いの声が聞こえる・・・。千鶴は少し苦笑しながら道場のほうへ歩いていった。

「ねー。かあさま。」

「なに？^{そっか}瀧香」

栗色の髪に蜜色の瞳を輝かせるたった一人の愛娘。瀧香は千鶴の着物裾をひっぱる。

「どうして、とうさまはいつもけいこしてるの？瀧香知ってるよ！」

もうねー。刀をもっちゃいけないんだってー。」

「・・・・・・・・。」

千鶴は返答に困った。というのも千鶴は戦争後、沖田総司と結婚した。ある事情で京に行き、新選組に厄介になっていた千鶴は沖田と恋人同士になった。沖田は近藤勇が斬首され、自害を考えたが千鶴が止め、生きるよう訴えた。そして沖田は土方と共に旧幕府軍として闘うことを決意したのだった。

土方は戊辰戦争の際、亡くなったが生き残った沖田は千鶴の元へ帰ってきたのだ。

あれから五年の月日がたった。沖田との間にできた娘は五歳になった。

今、明治という時代では刀を帯刀していることは許されない。けれど沖田は道場を設立し開いた。天然理心流の師範代として後世に伝えなければならぬと沖田は思っている。

「そうね・・・・・・・・。」

千鶴は瀧香の腕をひっぱり道場へ向かう。十月だというのに道場の中はぶわっとしていた。道場は家と一緒にたてられているので敷地内に道場があるという訳だ。

「総司さん。雪江くん。もう昼飯にするのでやめてください。」

千鶴が声をかけると雪江はすぐ振り返ったが沖田は竹刀を止めなかった。そして雪江の頭に命中する。

「痛ってー！何すんだよ！この頭でつかち！クソヤロー！！」

「先生に向かつてその口の聞き方は何？え？お前がよそ見なんからだからだろ。馬鹿。」

「なんだとてめー！千鶴さん！なんとか言ってやってくださいよ！今のは先生が悪いですよね！？」

「あははは・・・・・・・・。」

この元気な青年の名は宮部雪江。この道場唯一残った門下生だ。沖田総司という名は実に有名で、剣を習いたいという人は多くいた。だが時代の影響で剣を持つ人間が減って習う人数も少なくなった。

しかも沖田は厳しい。どこの道場にも負けないぐらい厳しいのだ。そして残った根性のある青年が雪江なのだ。

しかし雪江は少し変わった面白い子でよく沖田と喧嘩しながら稽古をしているのだ。

沖田とこんなに言い合いができる子はそう多くない……と千鶴は思う。

「先生意味わかんねえんだよ。教えんの下手すぎー。」

雪江が嫌味を言い出した。

「うるさい。お前が脳なしだから駄目なんだ。いったいいつになったら僕を褒めさせるの？一回もお前を褒めた事ないよ。」

三十を過ぎた沖田だったがその剣の腕も容姿も変わらず元気に生きている。千鶴は夫の薄い笑みに嬉しくなった。

「とうさま。」

「瀧香。どうしたー？」

瀧香が沖田に抱き着いた。沖田は満面の笑みを浮かべて瀧香を抱き上げる。

「全く……。稽古の時と普段の性格が違いすぎて気持ち悪いぜ。娘にデレデレしすぎなんだよ。ねえ。千鶴さん。」

「……そ、そうね……。」「

雪江は沖田のことを嫌っているのか好いているのか全く千鶴にはわからない。彼の両親は他界し、金も全然ないので一緒に暮らしている訳だが……。

「マジで三十こえたおじさん？若々しいよねー。ねえ。千鶴さん。」

「う、うん。そうね……。」「

（本当に変わった子だなあ。）

夫も少し変わっているので気にはしないが。

「おい。雪江！うるさいつてば！」

「はいはい。すみませんねー。」

（なんか……屯所に居た頃の総司さんに似てるかも……。）

「ああ。千鶴。昼飯だったね。行こうか。」

昔と変わらず千鶴にはいつまでも優しい沖田は優しく言ってくれる。千鶴は本当に自分が幸せだと思う。

「ゆきえー。いこう？」

瀧香は雪江の腕を掴み、沖田の腕もつかんだままだ。よく見る父母、子みたいな絵図らになった。

「なんで千鶴じゃなくてお前なんだ!!」

「はあ!?!何言ってるんだよ!この若顔!」

と、怒鳴り散らしながら三人は部屋に向かっていく。千鶴はくすくす笑いながら後を追った。

昼飯が終わると瀧香が。

「ねー。とうさま。遊ぼう?」

「んー?何して遊ぶー?」

沖田は愛娘を膝の上にのせて頭を撫でながら聞いた。

「近所の靖太が今日遊ぼうって。だからとうさまも遊ぼうよ。近所の子たち皆とうさま好きだもん。」

「まあ。よく遊んであげてるしね。瀧香は父様が皆に好かれていて嬉しいの?」

「うれしいけど……。でもみんながとうさまをひっぱるからいや。」

「じゃあなんで僕を誘うの?」

「だってー。みんなと一緒に遊んだほうが楽しから!」

ニコニコ笑う瀧香を愛おしくぎゅーっと沖田は抱きしめる。

「苦しいよーとうさま。」

瀧香は笑いながらもがいている。

「ごめんごめん。じゃあ。行こうね。いつてくるよ。千鶴。」

「はい。暗くならないうちにお帰りになってくださいね。」

そう言い沖田は瀧香と一緒に家を出て行った。

「いい嫁さんだよなー。千鶴さんって。」

「え?」

雪江は茶を飲んで寝ころぶと言った。

「だってよ。今のこの時代に道場たてて門下生なんか来る訳ねえじやねえか。天然理心流のために正直生活きついんだろー?」

千鶴は返答に困る困る。でも……。

「辛くなんかないよ。総司さんが決めたことだし、私はついていく。それに道場の門下生が一人もない訳じゃないし。」

「あー?俺のことー?うん。俺は剣術、好きだしね。まあ先生が誘ってくれなかつたら俺は今頃飢えて死んでただろうな。あはは。」

千鶴は四年前を思い出す。沖田の稽古が厳しくて門下生がだんだん減って行きやがて一人もいなくなった頃。沖田が大雨の日拾ってきたのがまだ幼い顔をした雪江だった。そこからはずっと一緒に暮らしている。

雪江は聞けば食べ物盗みに山から街へ降りてきたそう。山に住んでいて食べ物があったがそれもなくしたから・・・とかなのか。幼い頃、綱道と家で過ごしていた千鶴はそんな過酷な生活をずっとしていた雪江に驚いたものだった。

「俺、ずっとここにいていいのかなー。」

「え？」

「だってね。飯もいっつも食わしてもらって・・・俺は毎日稽古受けてるだけじゃん。俺自分が下手とか絶対思わないけど先生に褒めてもらったことないし。」

（絶対って・・・。）

「千鶴さんは女の鏡だぜ。あの先生を言いくるめられて、餓鬼育て、家計をまわして・・・。俺も千鶴さんみてえな女ほしいよ。」
千鶴は褒められて少し顔が熱ったのを感じた。

「そ、そんなことないよ・・・。私も昔は本当に・・・。」

幼くて、新選組の足手まといにならないように必死に生きていた・・・。

「あーあ。なんで千鶴さんみたいな出来のいい女があ性格ひん曲がった男の嫁さんなんだ。世の中不条理だねー。」

（本当にこの子は・・・。）

「総司さんのこと悪く言わないの！仮にも先生でしょ！」

千鶴に怒られた雪江は起き上がって千鶴を見つめた。

「な、何・・・？」

「いやー。俺千鶴さんのこと好きなんだと思って。」

「は！？」

「いやいや。先生も大変だなー。千鶴さんに近付く男なんていっぱいいるだろうしなー。」

「雪江くん？」

「先生は考えないのかなー。俺が千鶴さんに惚れて奪うことなんてあるのに。」

雪江の言うことがわかった千鶴は頭を横にふる。

「そんなことで壊れてしまふ絆ではないの。雪江くんもわかってるでしょう？ね？」

「まあ……。俺が頭いいからねー。」

（自分のこと頭いいって……。）

「いいやー。千鶴さんよりいい女見つけることにするよ。」

「うん。私よりいい女なんてたくさんいるわよ。」

雪江は立ち上がって竹刀を持つと。

「素振りでもしようかなー。」

「あ。雪江くん。買い物いかないといけないから。お米もないし……。だからついてきて？」

「あー。わかったー。じゃ行きましょうか。」

二人はそろって家を出た。しかし門前に人影があった。不思議に思っ
て千鶴は人に近付く。門の影であまり見えなかったがどうやら警察の方らしい。

「あの……。何か御用でしょうか？」

「！ー！」

男は背中を向けたまま振り返ろうとしない。

「あの……。。」

もう一度声をかけると。男は振り返る。その瞬間。千鶴の目が自然に見開いた。

「久しぶりだな……。千鶴。」

「斎藤……。さん？」

約八年ぶりの再会だった。

53・時の船（前書き）

史実では十年で警察官になりますがここでは多少変更しております。
すみません。

千鶴の記憶に残っている斎藤一と目の前の男の顔が一致した。彼もまた顔は全然変わっていないのだが威厳のある雰囲気になったような気がする。

「ん？何？千鶴さん。」

雪江が不思議そうに斎藤を見る。千鶴は少し苦笑した。

「雪江くん……。ごめん。買い物はなし！明日行くことにするわ。斎藤さん！どうぞ中へ。」

斎藤は気恥ずかしそうに軽く会釈すると千鶴の後に続いた。

三人は家の客間で茶を飲んでいた。

「本当にお変わりなく……。元気そうで安心しました。」

「ああ。俺もあんたが元気そうでよかった。」

この穏やかな会話を雪江はぶすつとしながら聞き、茶を飲み干していた。

「でさー。なんなの？この人。千鶴さんの元旦那？」

「こらっ！雪江くん！！」

千鶴は少し怒鳴ったが雪江は目を逸らした。

「申し遅れたな。俺は斎藤一という者だ。今は藤田五郎だけだな。」

「で。その一？五郎？か知らないけど千鶴さんとどういう関係なの？千鶴さんが敬語つかうんだから千鶴さんよりは年上だよな。・・・先生と関係あんの？」

「先生とは・・・総司のことか。」

「先生を呼び捨て！？」

なんか知らんが雪江は沖田を呼び捨てにした斎藤に本気で驚いているようだ。沖田に対してどんなことを思っているのかこの子は・・・。

「千鶴。この子は、総司の教え子なのか・・・？」

斎藤が千鶴を振り返って聞いた。

「はい・・・・。今、門下生はこの宮部雪江くんだけで・・・・。」

「そうか・・・・。雪江。」

斎藤は雪江を見つめる。髪で隠れるその輝く瞳に雪江は今までにない感覚に襲われる。

（何・・・・この感じ・・・・。殺気とも違うけど・・・・この人から感じる強い気・・・・。）

「俺と手合わせしないか。総司から稽古を受けているお前の剣・・・・。一度交えたいのだが・・・・。」

「俺と・・・・？」

斎藤は頷く。雪江は迷ったが立ち上がり、隅に置いてあった竹刀を手にとった。

「いいぜ。左利きの警察官なんて初めて見たけどやってやる！」

斎藤は嬉しそうに微笑む。

「言ってくれな。」

千鶴の心配する顔を無視し、二人は道場へ向かった。

「いい道場だな。しかしたった一人ではもつたいない。」

「うつせえなー。どうでもいいじゃんよ。そんなこと。昔はいつばいいんだぜ？でも根性なしばっか。拳句の果てには先生が厳しすぎとか文句つけて金目のものまで盗んでいきやがった。千鶴さんも瀧香も・・・いっぱい嫌な思いしてるんだ・・・。」

雪江は舌打ちしながら斎藤に向かって言った。斎藤は目を細め、聞いていた。この青年はさほど根性があり、沖田を慕っているのだろう。それに千鶴のこと・・・。

「いい弟子を総司ももったものだな。」

「へっ。俺は先生を師匠とは思ったことないよ。まあ。俺が弟子と呼べる段階じゃないからだけどねっ！！」

「！！」

話している途中に斬りかかってくるものだから斎藤は驚いた。だが借りた竹刀で受け止める。

雪江はニヤニヤしながら斎藤を見てる。斎藤は試衛館時代、こうして沖田と対峙し、沖田がこんな顔をしていたのを思い出す。しかしこれで終わる斎藤ではない。伊達に新選組三番組組長を務めた男ではないのだ。

斎藤は足を開き、その竹刀を思い切り上へふった。

「ぎっ！！」

雪江はその力の強さに圧倒されふつとびそうになった。その隙を容赦なく斎藤は攻めた。斎藤の竹刀は雪江の脇腹に命中した。

「痛・・・。」

「いい太刀筋だったぞ。雪江。」

「はあ！？何言ってるんだよ！ちゃんと見てなかったじゃねえか！！」

「そんなことはない。俺の目はちゃんと見ているぞ。」

「本当かよ・・・。」

ことの顛末を黙ってみていた千鶴は苦笑しながら。

「二人とも！もういいでしょう。もうじき暗くなります。斎藤さん。どうぞ夕餉も食べて行ってくださいね。」

「ああ。そうしていただく。」

「千鶴さん！もう腹減ったよ。」

「総司さんたちが帰ってないしまだ暗くなってないから駄目！菓子もありませんからね！」

「いや。俺がもってきたかすていらはまだ残っているから食べてもいいぞ。」

千鶴は斎藤を細い目で見て。

「駄目ですよ……。うちではめったに食べれない菓子ですよ！雪江くんの腹に全て収めるのは嫌です。」

「千鶴さん……。」

斎藤と千鶴は総司たちが帰ってくるまで昔話を楽しそうにしていた。

雪江は少し聞いていただけで飽きてきた。でも斎藤が沖田と同じ試衛館道場に入入りをしている、あの新選組の三番組組長を務めたということはわかった。

「それで。斎藤さんは何しに来た訳？」

「そういえば聞いてませんでした。」

雪江の言葉に千鶴も頷いて斎藤に問いを投げかけた。

「実はな……。」

「ただいま……!!」

外から瀧香の元気な声が聞こえた。千鶴は立ち上がって玄関まで迎えに行った。

「おかえりなさい。二人とも。」

「うん。ただいま。千鶴……ん？この靴は？」

沖田はブーツを見て聞いた。

「実は斎藤さんが訪ねていらつしやったんです。」

「斎藤……君？」

沖田は目を見開いていた。かなり驚いて……いや動揺にも見える。

「かあさま。あのね。お話があるの……。」

「ごめんなさい。瀧香。母様。今夜はお客様とお話しなくてはいけませんから明日でいい？」

「うん……。」

しょんぼりする瀧香を沖田はその大きな手で頭を撫でてやった。

沖田はそのまま瀧香と一緒に客間に向かった。

「久しぶり。一君。」

「ああ。総司。邪魔している。」

彼らも全く会っていないだろうにまるで昨日もあつたような雰囲気だつた。

「それが娘か。」

「それって何。それって。」

沖田はむすつとして斎藤を見るが瀧香は微笑んで。

「沖田瀧香です！」

と頭を斎藤に下げた。

（（かつ、可愛いすぎるんですがー！！））

親馬鹿な千鶴と沖田は同じことを思っていた。冷めている雪江とはいうと。

（ぜってー。可愛いとか思ってるな……。この馬鹿共。）

という世話をしてもらっている身で考えていた。

「俺は斎藤一という。藤田五郎でもいいが。今日くらいは斎藤でいいだろう。」

「ねえねえ。一君……。今日は斎藤のつもりならわざわざ小さい子に言わなくてもいいじゃないか……。」

「す、すまん……。」

沖田に注意され、しゅんとなつてゐる姿はまるで子供のようで千鶴はくすりと笑ってしまった。

「さあ。夕餉にしましょうか。すぐできますから。雪江くん。来て手伝つて。」

「へいへい。」

千鶴と雪江は台所に向かった。

「瀧香。今日は母様のところに行って母様と雪江を手伝って？」

瀧香は何も答えずただ沖田の目を見つめていた。沖田の目がどこか寂しそうだったのが子供にもわかった。

「今日のことは・・・明日ちゃんと母様に話そうね。大丈夫。心配することないからね。」

沖田は軽く瀧香を抱きしめる。瀧香は顔を赤くして沖田から離れればたばたと台所に向かっていった。

「ふん。随分と父親らしいことだな。」

「なんかむかつくなあゝゝ一君に言われたら。」

「関心しているのではないか。昔のあんたから想像もできんかったからな。」

「それもそうだ。でも今も昔もあんまり変わらないよ？」

「変わったさ。時代が変わったのだからな。」

二人は目をお互い逸らして話した。日がだんだん沈んでいくのがわかる。えらく今日は空が赤い。

「でさ。今日は何の用で来たの？」

「それは・・・。」

斎藤がゆつくりと口を開いた。

「俺はお前に俺と同じ警官になつてほしい。」

沖田は何も言わずただ斎藤の言葉に耳を傾けていた。

「お前が道場をやりたいという気持ちはわかる……。だが、今いる門下生はたった一人だろう？それに雪江の世話を全部しているそうだな。それでお前たちはどうやって食べていくんだ？」

「……僕は毎日出稽古に行つてるよ。今日は休みだったけど。」

「沖田はくすくす笑いながら答えた。斎藤は沖田の目を見て、彼に何も揺らぎがないことがわかった。しかし斎藤は諦めない。」

「俺の上司がお前のことを気に入っている。大久保さんも……。木戸さんも……。お前が警官になれば俺たちも心強いし、生活も豊かなものになるだろう？それに俺は色々な警官に剣術を教えている……。」

「だから何？僕が君と同じことをしるだけでも？」

沖田の鋭い視線と少し怒るような声に斎藤は唾を飲んだ。

「そんなこと言うためにわざわざ暇をもらってきたんだ？あははは。変わつてないなあー。一君。」

今度は笑いだす。斎藤は口をつむんで何も言おうとしなかった。

「あーあ……。僕は警官になんてなるつもりない。僕はこの道」

場を続ける。まあ。僕は自分の家を継いでいる訳じゃない。お金は全くないよ。はつきり言って生活はギリギリ。贅沢も全然できないから家族には窮屈な暮らしをさせていると思う……。」

「……総司……。」

「確かに……。今は刀や槍の時代じゃない。でも忘れちゃいけないんだ。あの血の戦も、かわって死んだ人も。そして戦争で何が変ったのか……。僕が死んでもつとつと先の未来でも絶対に僕たちが経験したことを忘れちゃいけない。人を殺す恐ろしい剣を忘れてはいけない。僕が剣術を習ったように、いろんな人が習う権利がある。」

それはそう思う。自分だって剣術を後世に伝えるべきだと考える。

「殺す剣ではなく……。守る剣だと、僕は伝えなくてはならない。」
沖田の碧眼の瞳が輝くのを見て沖田の意志が斎藤の予想よりも遥かに高いことが思い知らされた。

「雪江はね……。家族を知らないんだ。気が付いたら山奥で一人そこからなんとか生きるために山を知って自分を殺すものから怯えてた。僕が拾ったのは大雨の日で……。八百屋の野菜を盗むものだから追いかけて捕まえれば……。痩せこけた品のない子だったんだけど……。その瞳に燃えるような何かがあったんだよ。僕はその場でこの子に強くなつてほしいと思った。あの子、今はあんな駄目だし。やる気ないけど才能がある。」

「ああ。実は昼間、打ち合いをしたんだがいい太刀筋だった。お前よりも強くなるかもな。」

「あははは。それはないよー。冗談きついなあ。」

二人は笑いだす。あまり大きな声は近所迷惑なので出せないが。

「一君が会いに来てくれたの本当に嬉しかったんだ。ありがとう。」

「総司……お前……。」

「でもその話はお断りだよ。僕は雪江だけでも天然理心流を教える。僕は、生きているから。」

生きている。そう。二人はたくさんの仲間を失った。沖田は尊愛し

ていた近藤を。土方だって……。

「僕は千鶴と結ばれて、瀧香という娘ができて、自分のしたい事をしてる。幸せだよ。いらないって思ってた。僕は自分で短命だと思ってたし……。」

「俺も同じだ……。」

斎藤の呟きに沖田は少し微笑んだ。

「ご飯できましたよー。」

千鶴が食事を運んできてくれた。沖田は立ち上がって。

「さあさあ。どうぞ。一君。」

客人を手招きする沖田は昔と全く同じいたずらな笑みを浮かべていた。

「そんな遠慮なさらずに泊まっていてくださいよ。」

食事が終わり、斎藤は夜遅くだと言うのに帰ると言い張った。

瀧香はもう疲れて部屋で眠ってしまったので三人で見送ることになった。

「いや。明日も仕事があるのでな。その気持ちだけ頂いておく。」

斎藤は礼儀正しく、頭を下げた。

沖田は腕を組み、斎藤を見下ろすと。

「明日からは藤田五郎という警官に戻る訳だ。新選組の斎藤一君。」
「……ふん。」

斎藤は面白いとでも言うように鼻で笑った。

「千鶴・・・こんな男だが末永く付き合っただけてくれ。こいつは一人では何するかわからん。」

「ははっ！！斎藤さん、先生のことよくわかってるねえー！！」

雪江は何故か笑い出した。沖田は雪江の頭を思い切り殴った。

「いつてー・・・。何すんだよ！この石頭！！童顔野郎！！」

「うるさいよ。・・・雪江。明日の稽古で殺してやる・・・。」

「そ、総司さん！！」

二人が喧嘩をし始めたので千鶴はあわてて止める。斎藤は静かに笑い出した。

「まだまだにぎやかになりそうだな。そうだろう？総司。」

「うん。そうだね。千鶴にはまだまだ頑張ってもらおうよ！」

雪江を押さえつけながら笑顔で沖田は言う。千鶴には全然わからなかった。というか雪江の方が苦しそうでそっちに気がとられた。

「ではまた会おう。」

「あつ。斎藤さん！さようなら！」

短く言い、戸を開けたので千鶴が元気よく叫ぶ。最後にまた淡い笑みを浮かべて斎藤は帰って行った。

夜。千鶴は寢間着に着替え、夫婦の眠る寢室に行くと。沖田も同じく寢間着に着替え、今夜の月を見つめていた。

「もう、冷えますよ。総司さん。」

「ん……。」

どうやら飲みすぎたらしく沖田は少し顔が赤い。それほど斎藤と会えたのが嬉しかったのだろう。千鶴は沖田の隣に腰かけ、沖田の肩にもたれた。

「千鶴……。？」

「斎藤さん……。何をお話したんですか？」

千鶴は斎藤が何か言いに来たことを斎藤が来た時からわかっていた。でも千鶴に斎藤が話してくれるわけもない。

沖田は目を伏せ、口を動かす。

「警官にならないかって……。言われた。」

「……。で。お考えになったんですか……。？」

「……。僕はやらないよ。今の政府が嫌いな訳じゃないけどね。」

沖田は負けた身だ。今の政府の上層部は沖田が命を狙っていた人間ばかりだ。

「千鶴はいつも僕の思うとおりによければいいと言っただろう？だから言葉に甘えて一君にはつきり言っただよ。」

「……。はい。私は総司さんについていきますから……。どこまでも。」

そう言う、妻の顔が美しくて沖田は目を奪われてしまった。思わず強引に口づける。甘い口づけが二人は心地よかった。

「本当は……。君たちに窮屈な生活をしてほしくないんだ。警官になればいい給料をもらえるいいことづくしなんだろうけど……。」

「大丈夫ですよ。私たちは窮屈な生活なんて思ってませんよ。瀧香も雪江くんもあなたが大好きですし。」

「……瀧香はともかく雪江は思っでないでしょ。」

「そんなことありませんって。ただ素直になれないだけ……。」

「君と同じじゃないか。」

意地悪に沖田は千鶴に向かっていい、微笑む。

「私はあなたと一緒にいて……変わりましたよ。」

「うん……。」

夜風が沖田と千鶴にふく。寒いので二人は一緒に一つのところに入った。沖田は千鶴を抱き、千鶴の頭を撫ではじめる。その感触が気持ちよくて千鶴は思わず笑った。

すると沖田はゆっくりと語り始める。

「ねえ……。千鶴……。」

「はい？」

「僕と瀧香が帰ってきたとき……。瀧香何か言おうとしたでしょ？」

「はい……。」

「実は今日、瀧香が怪我をしてね。」

「瀧香が……？」

「うん……。」

それは昼間。瀧香と一緒に近所の子供たちと遊ぶことになった。

「おーい。瀧香あー。」

「靖太!!」

靖太というのは二軒先の呉服屋の息子で瀧香より二歳上の少年だった。靖太の家は沖田の家よりも裕福でいつもいい着物を靖太は着ていた。

「やあ。靖太くん。」

「げっ！お父さん……。」

「君にお父さんとか言われたくないなあ。」

なんと大人げないことを言うのか。沖田は子供だが瀧香を絶対に誰にも渡したくないので警戒していた。

靖太は瀧香に惚れている。そんなの一目見ればわかった。わかってないのは千鶴くらいだろう。毎日のごとく二人は遊んでいる。

「みつちゃんや三郎は？」

「今日は来ないってー。家が忙しいみたい。」

瀧香が聞き、靖太が答える。瀧香はそうと言って顔色を変えなかった。

「何して遊ぼうか？」

沖田は聞くと瀧香は笑顔で。

「じゃあ。鬼ごっこしようよ！とうさま、鬼になって？」

「いいよー。じゃあ、十数えるからその間に逃げて？」

子供なんだからハンデをあげればいいものを・沖田は手加減を知らないのか。

靖太は少し顔をひきつりながらも逃げ始めた。

「靖太！あんまり遠く行っちゃ駄目だよ！！」

「わかつてる！！」

瀧香と靖太は叫びながら逃げている。もう十以上たったが沖田は自分の娘がしっかりしているなーと感心していた。

やがて姿が見えなくなると。

「さあ……。行こうか。」

沖田は靖太一直線に走り始めた。

角を曲がったところで靖太の姿が見える。こんなの歩いても追い付ける速さだ。

「つかまえたあー。」

「うわ！！ちよっと！はやすぎだよ！！俺、全然逃げてないよ！」

「遅いのがいけないんだよ。体力ないねー。」

「うるさい！！瀧香と比べんなよ！！あいつは化け物並だ！！」

「化け物・・・？」

そんな風に呼んでいるのかと沖田は靖太の頭をがっしり掴んで聞いた。

「ちちち違っっっ！！！！たえ！たえだよ！！痛い！」

「そんなこと瀧香の前で言うんじゃないよ。靖太くん。」

沖田の笑顔が怖い。何かと脅してくるので靖太はこの男が苦手だ。

「さあ。愛しの瀧香を捕まえに行こう。何かに巻き込まれたら大変だし。行くよ。」

「ちよつと！！俺が鬼になるんじゃないの！？」

「え？それだと僕のこと永遠に捕まられないけどいいの？」

「いいえ・・・。いいです・・・。」

「そう。」

沖田と靖太は一緒に瀧香を探した。

沖田と靖太は瀧香を探したが中々見つからなかった。

「何処に行ったんだ？瀧香！。」

「瀧香はかしこい子だから遠くには行っていないはず……。ほら。」

沖田が指差したのは叢で座っている瀧香だった。瀧香はずっと地面を見つめている。幼いながらに靖太はその横顔に心を奪われる。

「何、鼻の下伸ばしてるの？厭らしい子だね。」

「な……。そんなことないよ！うるさいんだから！おじさんは！」

「おじさん？僕がおじさんに見えるの？」

沖田は自分が老けているとは思わない。それに今は幸せなので昔よりも若々しくなったと自分で思っていた。普通は友達の親なのだから年齢に関係なくおじさんだと思うのだが……。沖田はこの少年に言われることだけは解せなかった。

「いえ……。すみません。お兄さん……。」

「なんかそれも気持ち悪いからやめて……。よ。」

そっぴいながら瀧香の背中をポンと叩いた。

「瀧香。捕まえた。」

「父様……。」

「どうしたの……？」

瀧香の瞳が揺らいで見えた。それに頬に泥がついている。着物もさつきより汚れている。短時間でいたい何があったのだろうか？

「これ……見て……？」

瀧香は自らの手を沖田に差し出した。沖田はその小さな手のひらを見た。瀧香の手のひらは土で少し汚れて、それが乾燥していた。そして指には傷があった。しかし見る見るうちに治っている。

「こつちも……ここにいた猫にやられたの……。わたしがね。触れたくて駆けたらひつかかれちゃって……。でももう大丈夫。痛くないし……。」

瀧香はそう言い、自分の手を胸へ寄せ抱きしめる。痛くないのは本当だろう。さつき傷は浅かったし、今治ったのだから……。問題はそこではないのだ。

沖田は瀧香の頭を撫でて引き寄せた。

「早く御家に帰って、泥を落とさなきゃね。じゃ。そういうことで靖太くん。」

沖田は瀧香をつれ、靖太に笑顔で言った。その笑みが怖くて靖太は背筋が凍った。

「じゃあね。靖太。」

短く言った瀧香の顔は穏やかな笑みを浮かべていた……。

「瀧香が……。」

「瀧香はね……。幼いながらも自分が他の子供と違っていて……わかってるんだ。それを受け止めて僕たちに問おうとしない。強い子だよ。」

千鶴は沖田を覗き見た。沖田の顔は嬉しそうなのか悲しいのかわからない。ただ穏やかで綺麗な沖田の微笑み。千鶴もそうなればと思う。

「私が鬼ということを……。話さなければなりませんね……。」

「いつかは……。そうだと思う。瀧香が成長して塾にでも行って色々な子供たちと触れ合えば瀧香を異端者扱いする者もいれば、恐れるものもいるかもしれないね。」

「私が……。瀧香に辛い思いをさせるのかもしれませんが……。」

「違うよ。瀧香は悲しいとも辛いとも思っていないよ。ただ自分がどう生きていくか考えてるんだ。瀧香は頑固で強情だろうね。誰に似ただか。」

「ふふ……。瀧香はまるで……。花のようです。美しく凛々しい子で……。」

千鶴の声がだんだんと小さくなる。沖田は千鶴が本当はものすごく瀧香を心配していることをしっていた。誰よりも自分が鬼ということとで子供を産むことを怖がっていた千鶴。今生まれて違う恐怖が千鶴を襲っているのだ。

「瀧香は……。」

瀧香はどうして自分たちに何も言わないのだろう？助けを求めてもいいではないか。

母様に怪我がすぐ治ると言って瀧香はどう思いながら言っただろう？
自分はあまり記憶にない。父も母も・・・。
我が子の気持ちをわからない自分がもどかしい・・・そう思った。

翌日。

「母様。お話があります。」

「はい。なんですか？」

千鶴は目を伏せながら抱き着いてきた娘を抱きしめた。

「瀧香は不思議なとってもいい力があるの。お怪我がすぐ治っちゃ
うすこいでしょ？」

なんと明るく言うのだろう・・・。千鶴の胸が締め付けられた。

「ねえ。とうさまも見たでしょ？」

沖田はすぐ脇に立っていて優しく微笑んで頷いた。

「そうだね。」

「おい。早く行こうぜ。せんせー。」

「うっさい。」

横に立っていた雪江の頭を問答無用に床にたたきつけようとする沖田。

「てめえ！！俺を殺す気か！この野郎！！」

「そうだけど？・・・じゃあ。道場に行ってくる。来い。鼠。」

「鼠！？俺のどこが鼠なんだよ！！おい！！」

「お前は汚らしいんだよ。自分でわからないのー？」

「絶対許さねえぜ・・・。」

雪江と沖田はいつも通りの喧嘩をしながら道場へ向かっていった。

残された千鶴と瀧香はお互い見合って笑った。

「ほんとにゆきえはとうさまと仲がいいよねー。」

「そうね・・・。母様より仲がいいかもね。」

「えー？ゆきえが奥さん？」

「そういうことじゃないけど・・・。」

千鶴は薄く苦笑いをした。

「ゆきえは瀧香には優しいから好きだよー。とうさまにも優しくできたらいいねー。」

「・・・うん。」

瀧香は笑いながらどこかへ行ってしまった。

やがて稽古が終わって雪江はぜえぜえいいながら部屋へ戻ってきた。

「あー。終わったー！」

「ああ。雪江くん。お疲れ様。昼飯いる？」

「いるいる。ふう・・・疲れたあ・・・。」

雪江は肩をまわしながら千鶴の傍へ寄ってくる。

「もう・・・。あの人間じゃないよ！？俺と同じくらい動いてんのに息もきらさないで違う場所へ稽古に出かけるんだからさ・・・。」

「総司さんは、強い人ですからね。それに雪江くんの先生だし。」

「俺の先生は強い人じゃなきゃ駄目って？それは言ってるー。俺強いもん。」

またか・・・と千鶴は息を吐いた。

「でもさ。本当に先生って不思議だよねー。他人には優しくったり、冷たかったり・・・極端てか・・・。なんかよくわかんない。変人だ！変人！」

「人の夫を変人扱いしないでください・・・。」

「ああ！！すんません！千鶴さん！泣かないで！てか怒らないで！！」

雪江は知っている。千鶴を怒らせたら二人に殺される。

沖田はまず手加減を知らず絶対に雪江を殺すだろうし、瀧香だつて父親ゆずりの負けん気かなんかしらんが迫力があつて正直敵に回すと恐ろしい。

「さあ。雪江くん！それ食べたなら買い物に行きますよ！昨日でき

ませんでしたしね。」

「ああ。わかったよ。瀧香は？」

「瀧香はお腹が空いていないからいいって。」

「ふーん。あつ！千鶴さん！おかわり！」

雪江は飯を要求した。

「いいけど、もうないからね……。」

千鶴は渋々あまりない飯を渡した。

家計は火の車。それはいつまでもいつまでも続いている。雪江は食べる量が半端ではないので正直困る。でも沖田が食べたいだけ食べさせると言つので食材は多く買う。また買い物が大変なのが……。

「準備できた？」

「うん。もうちょっと……。」

雪江は玄関で千鶴が来るのを待った。だが全然来ない。

「千鶴さん……？」

不審に思い、雪江は千鶴がいる部屋に入った。

「あれ？」

いない……と思ったが。下を見たら苦しそうに眠る千鶴の顔が。

「千鶴さん！???大丈夫!!!?」

千鶴は荒い息を吐いている。雪江は慌ててかけよった。

「どうしたの！？千鶴さん！？？」

千鶴に大きな声で問いかけるが千鶴は苦しそうな顔をするだけだ。

「すぐに医者を・・・！！」

雪江は千鶴を担いで家から出た。

雪江は一直線にいつも自分が看てもらっている病院へ走った。

「千鶴さん！気をしっかり持て！！」

背中におぶっている千鶴は息はしているが荒い。いつもはニコニコ笑う千鶴だ。雪江は心配でたまらなかった。

「長岡先生！！いるか！！」

いつも看てもらっている長岡医院は流行つてはないが先生の腕は確かだ。きつと千鶴のことを治してくれるだろう。

「ああ？なんだ。雪江か。どうした。また沖田先生にやられたのか？」

玄関から現れた五十代のしわくちゃな男はくせつけのある髪を？きながら雪江に聞く。

「何言つてんだよ！このタマナシ野郎！！千鶴さんが目に入んねえのか！？ああ！？」

雪江は鼻から息を思い切りだして怒りの声を上げた。

「・・・・。千鶴さん？ああ。沖田先生の嫁さんか。どうしたんじや？」

長岡は千鶴に目を向けて言った。

「てめえ・・・・。目も見えねえのか！？ああ？それともボケてんのか！？どうしたじゃねえだろ！！苦しんだよ！！早く見てく

れよー!!」

「……そんなきつく言わんでも……。」

長岡は少ししゅんとしながら雪江に近付いて雪江が背負っている千鶴の額に触れた。

「……………。雪江。彼女は倒れたのか？」

「……………。ああ……。街に出かけようとしたときに部屋で倒れて……………。」

「とりあえず、ここにベットがあるから寝かす。雪江。お前は沖田先生と娘にこれを伝える。」

「わかった。頼むぜ!!」

雪江は千鶴を長岡へ預け、バタバタと慌てて出て行った。

「やれやれ……………。」

長岡はゆっくりと千鶴を運んで行ったのだった。

ある町はずれの道場は今日もたくさんの門下生が剣術指導を受けて

いた。沖田は隅の方で子供たちが竹刀を振っているのを見ていた。

「今日もご苦労だったな。沖田君。」

「河上先生。」

隅の方で座っていれば横からこの道場主が声をかけてきた。驚きはしないが相変わらず彼の威厳のある雰囲気と声には心を奪われる。

彼は歳はいつているが若々しさがあつてその剣も鈍っていない。沖田はいつもこの道場に出入りしている。河上から出稽古を頼まれたのだ。といつても。

「僕はいつも役に立ちませんね。ほとんど見ていただけです。」

彼は愉快に笑いながら。

「そりゃそうだ。沖田君は厳しい。俺よりも厳しいのだからな。あはは!!」

「そんなに厳しくしてしますか？僕には河上先生の方が怖いですけどね。」

「そうか？それは感じるここが違うのか・・・？」

河上は頭を指でさしながら言った。

「聞いたぞ。俺の門下生・・・。あそこで竹刀振ってる花吉の兄貴が、川原で弱いもの虐めをしていたときお前が止めたそうではないか。怪我が治るのに半年はかかったってほどボコボコだったそうなの。」

沖田は苦笑して。

「いつの話ですか・・・。まあ。かなりボコボコにしたんでちゃんと治ってよかったですね。」

「ふん。どうせお前さんのことだから治りやすい個所を狙ったんだろう。だが、どうしても子ども相手にそこまでした？」

「そいつが後ろから木刀を振ったんです。後ろを取るなんて卑怯でしょう。どうしても許せなかったんですよ。」

「・・・そんなことだから皆お前を恐れているんだよ。」

沖田は何も言い返すことができなかった。その通りだ。子供たちが沖田の道場に来ることはまずない。剣を持たない子供には優しく遊

んでやるがいったん剣を持ってしまつたらそうはいかなくなる。それが沖田の欠点かもしれない。

「なあ。沖田君。」

「はい？」

「門下生の一人はいつ連れてくるんだ？そろそろあの武雄と勝負させたいのだが。」

武雄と言うのはこの道場で一番最年長の男でこの道場で一番強い男だった。

河上はどうしても雪江を連れてきて欲しいらしく毎回言ってくる。そして沖田はいつもこう答える。

「雪江如きじゃ彼には到底敵いませんよ。」

「・・・お前さんの指導をずっと受けてる男だ・・・相当強いはずだろう？」

沖田の腕を理解している河上はずっとそう思うのだが・・・。沖田の厳しい稽古にずっとついていく雪江という男。気になって仕方ない。

「全然駄目ですよ。もう少しマシになったら連れてきますよ。」

という沖田の言葉は全て嘘だ。実は雪江はものすごく強い。沖田には敵わないがこの道場の門下生を全員こてんぱんにしてしまえるだろう。

それでは河上のメンツがない。だから連れては来ないのだ。沖田は心の中で少し嬉しく笑うのだった。

「先生~~~~!!!!」

いきなりどかい声が道場内に響いた。門下生たちは手を止め、声のするほうへ向いた。道場の入り口には汗を？いた沖田が毎日嫌と言うほど見ている姿があった。

「雪江!？」

「せ、先生・・・。大変なんだ!!千鶴さんが・・・!!」

「ち、千鶴が!？」

沖田は雪江にかけよりぜえぜえ言っている雪江をゆすった。

「千鶴がどうかしたの!？」

「た、倒れたんだ……。」

「……っ!？」

声にならない感情がこみ上げてきた。

「そ、瀧香は先に医院にいるよ……。近くで見つけたから……。」

雪江は道場まで全速力で走ったので最初しか沖田についていけなかった。沖田はその言葉を聞けば雪江の倍の速さで走って行ったのだ。「さすが……。先生……。」

雪江はいつでも思っていた。本当に愛のある夫婦だと……。自分の両親のことはあまり覚えていないがこんな万年恋人のような夫婦はそうないと思う。なんか街に行けば旦那を尻にひいている妻か、亭主関白の夫婦しかいないと思う。

（千鶴さん……。のこと本当に愛してんだな。）

自分の薄っぺらい愛情など千鶴に届くはずもなかったのだ。そうほとほと思う。

「千鶴!!」

「総司さん!!」

沖田は病室に駆けこんでくると千鶴の胸に飛び込んだ。

「本当に心配で……心配で……倒れたんでしょ!？」

沖田の抱きしめる力が強くて千鶴は身動きがとれない。

「あ、あの……。」

「熱いねえ……。なあ。奥さん。」

「あはは……。。」

長岡は耳をほじくりながら笑顔で千鶴に言う。千鶴は苦い笑いをするしかなかった。

（……どうやって説明しよう……。）

沖田は離してくれそうもない。だんだん息をするのもしんどいぞ。

「かあさま。」

病室に瀧香が入ってきた。瀧香はどうやら千鶴から話を聞き、安心というか嬉しかったようで特に何も心配していなかった。

「あれ。とうさま。どうして……?」

「どうしてって!!千鶴が倒れたって聞いたから!!瀧香だって心配だろう!？」

沖田は瀧香に振り向いて叫んだ。瀧香は圧倒され。

「う、うん……。そうだね……。」

やっと体が解放されたので千鶴は安堵した。沖田は近くにあった椅子に座る。

「やっと着いた……。」

その時、雪江が部屋に駆け込んでくる。

「雪江くん。ごめんね……。」

千鶴は雪江に本当に謝りたかった。ここまで運んでもらった挙句、沖田まで呼びにいつてくれたのだから……。

「皆心配してくれてありがとう。」

千鶴の天使のような笑顔に沖田の胸はきゅーんとした。胸がドキドキする。

（この感覚は本当とてつもなく辛い……。）

昔に千鶴に恋をしてからこの感情は恋心だと知り以来この感情がとてつもなく辛く、そして幸せだったりする。

「沖田先生よ。ちょっと奥さんに毎晩頑張ってもらってたようだな。」

「

子供の前だがどうせ意味はわからないだろう。沖田は正直に答えた。

「ま、まあ……。ほどほどに……。って！」

ということとは。

「先生の推測なんですけど……。多分赤ちゃんがいます。」

「……！」

瀧香は先ほど聞いていて驚かなかったが雪江は腰を抜かしていた。

「な、ななな……？」

「ほ、本当ですか！？長岡先生！」

「まあ……。奥さんの話聞けば月経が三か月はねえし、今日倒れたのも熱があつたからだ。妊娠の予兆がでてる。それに……。」

沖田にとろつとした目を向けた。

「よかったあ……。」

沖田は子供ができたことより千鶴が本当に病気でなくて安心してし

まった。

沖田は千鶴に優しく微笑んで。

「元気な子が生まれるといいね……。」

「はい……。」

生まれてくる日が待ち遠しい。沖田は一週間ほど浮かれすぎていて別人のように稽古の時も優しくなっていたと雪江は語った。

56・生命（後書き）

妊娠の知識が全くないので色々間違っています。まあ適用にそのへんは想像しておいてください。

明治七年十二月。

「たく……。あの野郎……。俺をどれだけ扱き使えば気が済むんだー！」

雪江は一人ぶつぶつ言いながら街の方へ歩いていった。というのも、先ほどのこと。

「はあ！？今から買い物！？」

「ん。どうせお前は暇だろう？稽古は終わったし。ね。」

「なあ……。目があんたには無いの！？俺、ここ綺麗にしているー！」

雪江は沖田の命令で廊下を雑巾で綺麗に拭いていたのだ。家は結構広いのでまだまだかかる。

「まだ終わってないのー？本当、とろいんだから。いいよ。それは千鶴がね……。買い物行かなきゃ行かなきゃ煩いから……。」

「お前が行つてきてよ。」

沖田は千鶴のことを氣遣いすぎだと思ふ。愛妻家な男はいるだろうけど沖田は優しすぎる。それでいて誠実なところがあつたりする。特に他人の女には……。いつもは甘えたで御茶目な雪江の先生。「わかつた……。行くよ！行けばいいんだろ！」

「そうそう。じゃあ頼むよ。僕は出稽古に行つてくる。千鶴には大人しくしてるように言つたから。」

沖田が氣遣う理由。一番は千鶴の妊娠。もうお腹が少し目立ち始めていた。雪江は女性のことを本当に尊敬に値すべき人だと思ふ。だつて女しか男を産めないのだから……。何故男は女よりも偉いといばるんだらう。

（まあ……。俺もまんざらでもないか。）

雪江は一人で苦笑いしたのであつた。

千鶴のためなら……。と思う自分と。あんな態度で頼まれてやつてゐる自分がもどかしくなつてゐる。沖田は何でも雪江に命令する。その命令の仕方はどうせ……。とかお前は能無しだから……。みたいな言い方なのだ。けれども断れるはずがない。沖田が雪江にキレたことは度々あるがその時は雪江であつても尋常じゃないほど怖い。いつもは笑顔で人に接する沖田だが気分が悪ければいつでも人を殺

せるような雰囲気を出す。

「あの人は……。本当に武士なんだな！」

独り言でつい言ってしまった。口を押えたその時だった。

「何言ってるの？雪江。」

「げっ！？」

「げっ！って何よ。げっ！って。」

気が付いたら目の前に仁王立ちしている背の低い女がいた。その女は雪江の幼馴染だ。幼馴染と言っても沖田に拾われて以来だから四年くらいだが。

その女の名は東城夏輝^{とじょうなつき}と言う。彼女と知り合ったのは塾だった。

というのも。字も書けなかった雪江を沖田が無理やり塾に入れたのだった。いいと言っているのに駄目だと言われ渋々毎日通った。一年もすればもう行かなくていいと言われたが。

行かなくていいと言われた理由は後で知ったのだが塾の先生が出す難しい問題を雪江がなんなくこなしたことだという。

「なんでお前がここにいるんだよ。」

夏輝はその小さな頬を膨らませて雪江を睨んだ。

「私の家は菓子屋よ！町の新作の餅が出たというから買い物ついでに見に来たの！貴方こそ何しに来たのよ！」

怒りん坊の夏輝は雪江にとって少し苦手の存在だった。女と言うのは千鶴みたいな天使のような心を皆持っている訳ではないのだ。

「見てわかんねえのかよ。買い物だ。」

雪江は冷たく言い放つと夏輝の横を通り過ぎた。

夏輝は何も言わず雪江の横に並んだ。

「沖田先生に……。頼まれたの？」

夏輝が頬を赤くさせて聞いてきたので、雪江は不機嫌になって。

「そうだよ。千鶴さんを無理させるのが嫌だって……。お前、全然会ってないのか？」

「う、うん……。。」

夏輝は沖田に一目惚れしていた。聞かなくても表情で雪江にはわか

った。いや鈍感じゃなけりや普通気付く。確かに沖田は明るい整った顔立ち・・・長身、それに優しい性格・・・美男という言葉が当てはまるのではないかと雪江も思った。でも実際のあのひねくれた性格といえば・・・雪江は自然に溜息が出た。

「言つとくけど先生はお前みてえな餓鬼に目なんて一生いかねえぞ。」

「わ、わかつてるわよ・・・！何その言い方！？好きなんだから仕方ないじゃん！！ゆ、雪江だって！奥さんが好きなんでしょう！？」

「ああ？好きだよ。何が悪いんだよ。」

「開き直らないでよ！貴方と私、何が違うのよ！！」

「違うよ。俺の好きはお前とは違う。」

「！？」

そう雪江の好きはもう恋ではない。はじめは彼女を手に入れたいと強く願った。でもすぐにできないと理解した。でも諦めきれない自分がいて、何度も何度も彼女を奪いたくなった。しかし沖田と千鶴の絆は雪江が想像していたよりももっと気高く強いものだったのだ。そして今は・・・。

「なあ。夏輝。」

「うん・・・？」

「沖田先生に思いを伝えなくていいのか。お前ももう十八だろ？縁談の話なんていくらでもくるだろう？」

夏輝は少し悲しそうな顔をして頷いた。

「伝えたいけど・・・。怖いよ。」

「俺は、伝えた。後悔はしてねえ。」

「なんで伝えられるの！？家に旦那様がいるのに？雪江は先生に世話をしてもらつてる身でしょ？」

「・・・恋愛にそんな関係ねえだろ。」

雪江は夏輝をいとおしい目で見つめた。

「沖田先生は・・・私のことなんか忘れてる。」

「そんなことねえよ。」

雪江は夏輝の頭をポンと撫でた。

「さあて。そろそろ買って帰らねえとな。来い。夏輝。手伝ってくれ。」

「えっ！？ちよっと!!」

雪江は小さな白い夏輝の手をきつく優しく握り彼女を連れ去った。

「おそいね。雪江。」

「そうね……。」

瀧香と千鶴は家で雪江と沖田の帰りを待っていた。まだそらは黄昏で暮れてはいないが雪江は昼に出かけたのに遅い。沖田はもう沈みかけたときにいつも帰ってくるから心配はしていないが。

千鶴は瀧香がいてもたまに感じる寂しさを、お腹をさすりながら堪えていた。

「ただいまあ~~~~!!」

外から聞こえてくる雪江の声。どでかい。

「あ。雪江。お帰り~~~~!」

瀧香は玄関まで飛んで行った。千鶴も立ち上がって玄関に向かった。玄関の先で見たのは雪江だけではなかった。

「あなたは……。」

千鶴はどっかで見たことあるなあと思いながら雪江が手を堅く繋いでいる少女を見た。

「お久しぶりです。奥様。東城夏樹です。覚えておいでですか？」

「あ……。」

雪江が三年前ほど前に通っていた塾で同じ子だ。確か雪江がよく家に連れてきていた。あまりに綺麗になっていたので千鶴は気づかなかった。

「綺麗になったね。夏輝ちゃん。」

まんまるした赤ちゃんのような顔の夏輝が微笑んだ。

「だあれー？」

全く覚えていない瀧香が夏輝を不思議な目で見た。夏輝は丁寧に。

「東城夏輝です。雪江と幼馴染なの。昔は瀧香ちゃんをだっこしたことあるのよ。」

「ほんとー？じゃあ。改めてよろしく！夏輝ちゃん！」

瀧香は丁寧に頭を下げた後、ふらりと部屋に戻って行った。瀧香は気が付いていた。雪江の手が夏輝の手を離そうとしていなかったことを。

「夏輝ちゃん。もうすぐ総司さん帰ってくるから一緒に夕餉食べない？」

「はい！千鶴さん！お願いしますー！」

夏輝が答えるまでもなく雪江が答えた。

「ふふ……。じゃあゆつくりしていつてね。」

千鶴は微笑みながら長い美しい髪をじやりと揺らし部屋に戻って行った。

「ちゃんと言えよ。すつきりするから。」

「うん……。」

夏輝は雪江の横顔を見つめた。凜々しい雪江らしい横顔。夏輝は笑った。

「どうした？」

「ううん。雪江がいてくれたら大丈夫だと思って。」

勇気を出せ。自分に言い聞かせながら夏輝は雪江と共に前へ進んだ。

しばらくするとまた玄関の方から。

「ただいま〜！」

沖田の明るい声が聞こえた。

58・戻らない（前書き）

時間は永遠に戻らない。

「帰ってきた……。」

雪江がつぶやくと、握った手から震えが伝わってきた。

「夏輝。」

小さく彼女の名を呼ぶと、夏輝は雪江を無言で見ってから沖田が来る足音を聞いていた。手を離すと夏輝の目は真剣に前を見据えている。瀧香と千鶴は玄関まで沖田を迎えに行き、一緒に戻ってきた。

「あれ……。君は……。」

沖田は深々と頭を下げている少女を見て呟く。

「お久しぶりです。沖田先生。東城夏樹です。何時も我が家をご贔屓にさせてもらい誠にお礼存じ上げます。」

頭を上げた夏輝は低い声で沖田に言った。

「あはは。夏輝ちゃん。久しぶりだね。たまに店に行くんだけど中々会えないね。」

雪江は沖田が店に行っていること自体知らなかった。夏輝の家はそこその菓子屋だ。客はいるだろうが……。沖田がよく店に来るならば自分から避けているのだろう。

「申し訳ございません……。私はあまり役に立たないのです。看板娘でもなんでもありませんから……。」

女は夏輝しかいないのだが父親が夏輝にはやらせなかった。看板娘と言うのは愛嬌があつていつも笑顔でいる女のことだと雪江は思っている。あまり心を見せない、見せたくない性格の夏輝には荷が重すぎる仕事だろう。

沖田は微笑んだだけで答えようとしなかった。

「さあ。皆さん。食べましょうか。」

千鶴が台所に向かったのを沖田は見て、雪江に目を配らせた。雪江は目を合わせると早く手伝ってこい。カスと言われるのかと（目で）

思ったが違った。沖田は目を細くさせて笑ってきた。

「お客様がいるんだから僕が奥さんを手伝ってあげよ。」

そう子供のように言った沖田はあっという間にあちらに消えてしまった。

「先生・・・私のこと覚えててくれたんだ。」

夏輝が嬉しそうに一人語った。

「何度も家に来たからだろ。」

「何度もって三回くらいじゃない。それも雪江が無理やり。」

「お前は変なところで我が強いくせに積極性がないんだよ！たく。俺に一目惚れしたってしがみついてきやがったくせに・・・。」

「う、ごめん・・・。」

特に客が来たからと言って豪華でもなく。いつも通りの魚と味噌汁。漬物。米という献立だった。雪江は米が大好きなので三杯はおかわりした。

沖田は少食なので雪江がなんでそんなに食べれるのか理解し難いと言ってくるがあった。

夏輝は緊張していたようだが黙々と食べ続けていた。

食事の場で無言。その時だ。

「でもどうして突然夏輝ちゃんは家に来た訳？」

沖田が首をかしげて二人に聞いた。

「それは……。」

夏輝はぐくりと唾をのみ込んだ。

「雪江。お前はどいうつもりで？まあお前も十八だし恋愛なんてごまんとあるだろうけどそういうことは前に言っておいてよ。主である僕にさ。」

「ばっ、馬鹿！！何言っただ！瀧香の前で！！」

「瀧香は気にしないよね」ねえ。瀧香。瀧香は雪江よりお姉さんだもんね。」

沖田は瀧香に明るい声で問いかける。

「そつだよー。ゆきえー。私、雪江が家に来る前にいたんだよ。記憶にないけど……。」

瀧香は当時一歳だったのだ記憶がなくて当然だ。雪江は話を戻して。『……そんなじゃねえよ。なあ。夏輝。』

夏輝はいきなり同意を求められ戸惑った。沖田の目線を感じ、震える。なんとか頷いた。

「ふーん……。まあ夏輝ちゃんの顔が久しぶりに見れて僕は満足だからそれでいいや。夏輝ちゃん。お酒でも飲まない？」

「ちよつと！総司さん！女の子に何言っんですか！？自分が飲む口実作らないでくださいよ！！」

千鶴が沖田にプリプリ怒った。

「だってー。千鶴。僕がお酒好きなの知ってるでしょ？それを三か月に一回なんてさあ……。千鶴。酌もしてくれないし……。」

「そ、それは……。私だって疲れるんです！夜は苦手なんです……。」

「そついえば昔から早く寝てたよねー。僕が叩き起こしてたっけ。」千鶴は恥ずかしそうに顔を赤らめて黙り込んだ。いったいいくつなんだ。この人は。

「わ、私……。先生と一緒にお酒飲みたいです……。」

雪江は目を見開いた。この女が自分からしたいことを言うとは・・・。
夏輝の性格を理解している雪江には信じがたいことが起こった。
沖田は満足そうに。

「うん。じゃあ後でね。片づけ終わったら・・・。」

「いいよ！先生！俺が手伝うし！瀧香も手伝え！」

「命令しないでよ・・・！」

あまりに言い方があれだったので流石の瀧香も少し膨れた。

「兎に角！夏輝は早く帰らないといけないし！ほら、早く酒！・・・
・って取りにいこ。」

雪江は勢いよく立ち上がって酒を台所から持ってきた。

「ここに置くぞ。千鶴さん！瀧香！早くこれ片づけよう！」

「う、うん・・・。」

雪江のなんか生き生きしている姿に二人は圧倒され従うしかなかった。
千鶴たちは器を運んで部屋から消えた。

残された二人はとりあえず酒を飲むことになった。けど夏輝はどう
したらいいかわからず戸惑うばかりだった。

「夏輝ちゃん。」

名前を呼ばれ、うつむいた顔を上げると沖田が悪戯に笑んでいた。
酌をしてくれと要求している。夏輝は顔を赤くしながら酒を注いだ。

沖田はそれを無言でぐくりと飲み干した。

「あゝおいしい。夏輝ちゃんも飲めば？」

「・・・・・・・・・・」

夏輝はうつむいたまま何もしようとしない。

「・・・・・・・・夏輝ちゃん。前来た時はもつと怯えた表情してたけどよく笑うようになったね。」

「・・・・・・・・！」

夏輝は昔から人見知りが激しく友達も多くない。塾では打ち解けようとしたがあまりうまくいかなかった。ただ一人。本当に仲良くなれたのが雪江だった。雪江にはなんでも相談できるし頼りになる友達・・・・・・・・雪江にだけは自分の本当の感情を出せた。

「雪江のおかげです・・・・・・・・私は雪江といるとき、すごく安心します。」

「・・・・・・・・そう。雪江は変な子だけど君の前では自分がしっかりないとか思ってるのかな。」

「・・・・・・・・先生。私は、今日ここに来たのは先生に会いたかったからです。」

「・・・・・・・・？」

「私は仕事をして、生きていくだけです。ただただ御菓子を作って売って・・・・・・・・それだけ。何も求めない。だから自分に嘘をつくことだけは自分で許さない・・・・・・・・何も求めないからそれだけは貫こうと思っんです・・・・・・・・私は貴方のことが好きだと・・・・・・・・今日伝えにきました。」

沖田は夏輝の紫陽花のような色の綺麗な瞳を見据えていた。

「数回お会いしただけで・・・・・・・・何も知らないのにどうかと思います。ですがこの感情は・・・・・・・・」

「変わらない・・・・・・・・そんなもんだよ。人を好きになるってさ。」
「・・・・・・・・」

「僕も初恋の人は年上のひとだったんだけど一目惚れだったなー。何も知らないのにね？名前も声も何も・・・・・・・・でもその時から彼女の

ことを考えると胸が熱くなるんだよ。いやゝなつかしい……。あ。ごめん。夏輝ちゃんが僕のことを思ってくれてるのはすごい嬉しいよ。」

沖田は笑っただけでその先の言葉を言おうとしない。それがとてもなくうれしかった。

「私は伝えただけで満足です。聞いてくれてありがとうございますございました……っ！」

後半声がかすれてしまい。焦ったが、沖田は頭を撫でてくれた。

「こちらこそ伝えに来てくれて……。ありがとう。」

月明かりに照らされる彼の表情が美しくて目を奪われて、涙が止まらなかった。

「よしよし……。」

沖田が撫でてくれる手の感触を夏輝は一生忘れないだろう。

「よかったじゃねえか。ちゃんと言ってよ。」

元々夏輝を送るつもりだったが沖田に蹴りを入れられて家から追い出された。雪江は尻をさすりながら歩いた。今日は月が大きいので視界が広がった。

「うん……。雪江。ありがとう。貴方のおかげ……。」

「ふん。お前今日は大人しいな。いつもそのほうがもてるぜ。」

雪江は愉快に笑いながら言った。夏輝はうんと頷く。

「雪江。また遊びに来てね。御馳走するよ・・・。」

「ああ。お前の家の餅は格別うまいしな。楽しみにしとく。」

「うん・・・あのね。雪江。私多分近いうちに結婚する。」

「・・・!!」

「まだそんな話はないけど私の家なら絶対父上がもってくるはずだから・・・。」

雪江はうまく動揺を隠そうと必死だったができなかった。

「なんで・・・俺にそんなこと言うんだよ。」

「雪江だから・・・だよ。」

小さな小さな彼女の体を気が付けば抱きすくめていた。強い力に夏輝は潰れそうになった。

「ゆ、雪江・・・。」

「結婚したらできねえんだから・・・。ていうかしたことねえけどな。」

雪江が温かくて夏輝は知らぬ間に目を閉じていた。

その顔を見た途端。雪江の何かがはじけて溢れだした。無意識に夏輝の唇を奪っていた。

「・・・どうして・・・?」

口付けを何故されたのか全然夏輝にはわからなかった。

もう一度触れるだけの口づけをした後、雪江は消えていた。ただその時、雪が降ってきたのが無性に悲しく見えた。

「ただいま・・・。」

「遅いお帰りだね。雪江。」

壁にもたれて玄関でいた沖田。雪江は無視して草鞋を脱いで通り過ぎようとした。

「ねえ。雪江。こっそり一緒に飲もうよ。」

「・・・。」

雪江は振り返って優しく微笑む男を睨んだ。

59・誕生（前書き）

えらいとびましたね・・・。しゃあないです。きりないですから。

雪江はぶすつとしながらも沖田に酌した。自分も酒を一気に飲み干す。

「う……。」

「何だ。お前は酒に弱いのか。」

「弱くねえよ！好きじゃないだけだ！！」

沖田は昔、雪江と同じことを言っている誰かさんを思い出し、つい笑った。

「さつき……。夏輝ちゃんに告白されたんだ……。びっくりだよ。」

沖田は少し微笑みながら言うつと酒を飲む。

「……。夏輝は初めて会った時からあんたのことばかりだったよ。俺にもあんたがどんなのか聞いてくるんだから。」

「……。ふーん……。そんな風には見えないなあ。」

「皆はうつとおしがつてたけど……。俺は……。」

雪江の真っ直ぐな瞳を見て沖田は目を閉じた。

「僕は、夏輝ちゃんはお前のことが好きなんだと思ってたよ。」

「夏輝が！？なんで！？」

「お前が、夏輝ちゃんを好いていたからだよ。」

「……。」

雪江は黙り込んで考えた。自分が夏輝のことを好き……。そうかもしれない。

「でも。先生。前に言ったよね。俺、千鶴さんのこと好きなんだ。」

「うん……。」

沖田は怒ることもなくただ雪江の話を聞いた。

「拾われてから……。千鶴さんに初めて恋をした。思いも伝えた

よ。何度も。でも俺が先生に敵うはずもないんだ。それにね。わかつたんだ。俺……。」

雪江の表情が嬉しそうになって沖田は少し驚く。

「家族ってこんなのかな……って。千鶴さんは、俺が赤の他人なのにいつでも怒ってくれる……。灌香はいつも俺に笑ってくれる……。毎日毎日、俺を稽古してくれる沖田先生……。食べていくのも正直辛いのに……。俺を食べさせてくれる皆……。」

雪江は思い描いた家族像があった。幼少の頃、気が付けば山に居て人と干渉せず生きてきた十四年。街に行つてまた山に帰るつもりが一人に男に拾われた。その時自分は死ぬのだと思つたが逆だった。彼らは雪江を生かしてくれたのだ。幸せにしてくれたのだ。

千鶴に恋をして雪江は素晴らしい気持ちを手に入れた……。

「俺は多分、一生このままでもいいと思つて……。でも無理なことを知ってるよ。」

「……。」

「俺、夏輝が好きだと思う。でもそれだけでいいんだ。あいつと結ばれようとか思つてない。なあ。先生。知ってる？夏輝は確かにあんまり可愛い顔でもない……。」

千鶴という美人な妻を持つている沖田は否定はできなかった……。性格も、ひねくれてるといふか……。変なところ頑固で我が強くてあんまり積極的じゃなくて……。塾でも皆、よく陰口叩いてた……。口煩いこともある。しかも愛想よくない女だ。でもさ。」

雪江は目を輝かせ、頬をそめて。

「たまに笑つた顔がすごく綺麗なんだよ……。千鶴さんより綺麗に思うなんて変だろ？」

雪江は可笑しそうにこちらに笑つてきた。

「おかしくなんかないよ。好きな人の笑顔はどんなものより綺麗だ。」

沖田の言葉が優しく思わず雪江は沖田を優しい気持ちで見つめた。いつもは憎たらしくていつでも沖田と喧嘩しているが今は違った。

雪江もわかっている。沖田は自分を愛してくれていることを・

「なあ……先生……。どうして俺を拾ってくれたんだ？俺、生意気な口叩いて迷惑もかけて……。」

雪江は最初から打ち解けるような性格ではなかった。つねに人を恐れていたからすぐ噛みつく。家に連れてきたときは暴れたり、すぐに出て行こうとした。体が悪いのも関わらず……。塾に行かせても喧嘩して相手を半殺しにしてしまうこともあった。沖田は何度も謝りに行ったものだ。雪江はずっと不思議だった。沖田の性格だとつくの前に自分を斬っているだろうと。

「最初見たとき……。自分に似ていると思った。いやお前の方が僕よりずっと不幸だ。親を知らずその年まで一人で生きてきたんだから……。僕はお前みたいに皆に迷惑かけてきたから、いいんだ。僕はお前を拾った。後悔してないよ。お前は甘えてなさい。」

沖田が頭を撫でてきた。こんなことをされたのは初めてだ。

「いっお前が出て行っても、ずっとここにいてもいい。お前が悔いのないように生きなさい。」

「はい……。っ！！」

何故、こんなにも涙が溢れてくるのだろう……。泣くことを教わらなかった雪江は泣いたことがなかった。でも今気づいた。この涙は嬉しくて流れているんだ。

明治八年七月。

「せ、先生……。なあ！なあつてば！！」

「なんだよ！！うるさいなあ！！黙って待てないのか！！」

二人がいるのは病院。千鶴は今、お腹の子を産もうとりきんでいる最中だった。男は外……。それは最初からそうで沖田たちは待つしかなかった。

雪江はブルブル震えて沖田の隣に座っていた。瀧香の時も沖田は不安だった。沖田も震えが止まらない。

「とうさま。大丈夫だよ。かあさまは強いからちゃんと元気な赤ちゃん生まれくるよ！」

「瀧香……。」

瀧香のほうが全然頼りになる。さすが女の子だ。沖田は瀧香を自分の膝の上に乗せ、瀧香の頭に頬を寄せた。

「な、なんでそんな冷静なんだよ！！瀧香あ！！」

雪江はぎやぎやー横から言ってくる。

「だって……。」

「もううるさいなあ！！雪江！お前は家に帰ってなさい！」

「そんなあ……。」

沖田が怒鳴っている間にも千鶴の喘ぐ声は消えない。シーンと静まると千鶴の声が大きく聞こえ、雪江は益々不安になった。

「千鶴さあああああん！！！」

「馬鹿！！どこに行くつもり！！？」

雪江が今にも病室に入りそうになるので沖田は雪江を止めた。

「だってえ！！先生との時より辛そうな声だしてんじゃん！！」

「本当にお前は馬鹿だね！！出産なんだから当たり前だろう！！」

「二人とも……。」

沖田と雪江が大きな声で怒鳴りあっているので瀧香は苦笑した。

「先生！！」

病室から産婆の女が出てきた。彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「生まれましたよ！元気な男の子です！！」

その瞬間、空気が変わった。

「千鶴！！」

沖田と雪江は部屋に突入し、千鶴の元に駆け寄った。

「ち、千鶴さん！大丈夫！？」

「大丈夫よ……。雪江くん。」

千鶴は大分きつかったろうに穏やかに微笑んだ。沖田は千鶴の手を握って、千鶴の隣に眠っている我が子を見ながら。

「ありがとう……。千鶴。そして生まれてきてくれてありがとう。」

千歳。

前々から決めていた子供の名前。男の子なら千歳。女の子なら千花。

その昔、千の名は鬼の象徴と聞いた。沖田は千鶴の鬼の名を誇りに思いたかった。その子にも誇りに思ってほしい。千歳という名は、

千年の時のような永遠の時を、幸福で満たせ。という願いをこめたものだ。

「うわ。目とか先生に似てんね。色一緒。うわ。性格やばくなりそう。千鶴さん！俺たちでちゃんとした子に……。」

沖田は笑いながら雪江の頭を殴った。

「いてゝゝえ！！」

「ゆゝきゝえゝくゝん？？何か言いましたか？」

燃え上がるような雰囲気です。雪江は死ぬと覚悟し、謝った。

「すみませんでした……。冗談です。」

「わかればよろしい。瀧香。来なさい。弟の千歳だよ。」

瀧香はゆっくりと近づいてきた。いつもはあまり驚かないし泣かない瀧香だったが何か怖いようで恐る恐る歩いている。

その小さな千歳の手を優しく握る。

「よろしく……。千歳。」

千歳に微笑むと千歳がニコリと微笑んだ。

沖田瀧香に、弟ができた瞬間だった。

59・誕生（後書き）

生まれてくる日付かえました。

60・誓い（前書き）

廃刀令の配布の日って私の誕生日・・・（笑）

明治八年が終わり……。明治九年三月二十八日に廃刀令が発せられた。その名の通り、一般人の刀の帯刀及び、所持を禁止するものである。持つのを許されるのは警察のみ……。なのだが。時は、明治九年五月。

「って！！先生！何持ち歩いてんだよ！！」

「え？何が？」

沖田は意味がわからないような顔を本気でしている。今日、雪江と沖田は出稽古に出かけた。もう雪江も二十歳だし、教えられるようにもなっていていだろう。河上の道場にはまだ行けないのだが。

沖田から見ても雪江の剣の才能はかなりのものだ。だが、沖田が教えている教え方をほかの子にしては駄目だ。沖田は昔から他人に教えるのが苦手だった。それでよく土方に怒られたものだ……。ふっと笑うと。

「何笑ってんだよ！先生！早く刀しまわないと捕まるって！ここは人通り少ないけどさあ……。」

雪江は本当に不安らしく沖田の刀をずっと見つめている。腰に差している愛刀、加州清光が輝いている。

「大丈夫だよ。そんなに早く捕まらないって。まあ今の警察って僕のこと皆嫌いだろうから殺しにかかってくるかもね……。」
腕を組みながら歩く、沖田は目を閉じて言った。

「……昔、斎藤さんって人来たよね？」

「うん。そうだね。」

「あの人は警察で……。先生と同じ新選組の組長だったんだよね？」

「そうだよ。」

「なら斎藤さんと同じ警察になったらいいじゃん。道場はやめてさ！生活も楽になるし！刀も持てる！」

「明るい顔でいう雪江の顔を見て、沖田は溜息をつくどころか呆れた。お前は……。何年僕たちといえるの？何年僕の稽古を受けたの？はあ……。いいか。僕は道場を続けてたいと思ってる。そのためにお前は尽くすんだ。」

「はあ？なんで俺が尽くさないとけないんだよ！」

「馬鹿か！お前は今まで門下生してた！でももう二十歳！結婚して千歳ぐらいの子供がいてもおかしくない歳だ！お前も剣術を志すならいずれ道場を出て、自分の道場をたてる！でも僕の門下生がいなくなるだろ！お前は一人でもいいから探してくるんだ！」

「えー！？？そんな理由だったの！？？」

「他に何があるんだよ。」

「うーん……。ていうか先生。俺の年には子供も、いなかったじゃん。」

「時代が違うから……。」

「言い訳っすか。」

「うつさい。」

沖田は舌打ちして、さっさと行ってしまふ。雪江は小走りで追いかける。

「わかってるよ……。もう刀や槍の時代じゃない……。でもさ。僕はまだすがっていたいようだ。」

「いいよ。先生。俺、先生の言うことすげーわかるよ。千鶴さん言ってたよ。先生と初めて会ったとき……。先生が千鶴さんに殺すって言ったんだって？」

「それは……。」

最悪の出会いだったと今でも思う。

「でも一緒にいるうちに先生を好きになったんだって。そして刀を持って戦う先生を恐れたと同時に目を奪われたって。」

沖田は自分の体が熱くなっていることを感じた。

「先生は刀を持って家族を守るのが一番いいんじゃない？俺はそういう先生が好きだし、千鶴さんもそう思ってるんじゃない？」

「……。」

「先生は変わらないで生きてたらいいいんだ。そしたら俺たちが学んでいくさ。うん。早く行って、蒼井道場の門下生を沖田道場に持つて帰ろう！！」

沖田には雪江の背中が眩しく、大きく見えていた。

「あー……。しんどかった……。蒼井先生ってへらへらしているくせに結構強いんだね。」

「何言ってるんだ……。」

雪江は道場主である蒼井をもう少しで打ち負かそうとしてしまった。道場の門下生は皆、信じられないようで……。雪江は年のわりには若く見えるのでこんな少年が熟練の蒼井と同等かそれ以上の打ち合いをしたのだ。信じられないだろう。

（この子は……。想像以上かもしれない……。）

自分を追い抜くのはまだまだ先だと思っていたがもう抜かされているかもしれない。そう思うとこの子の才能に少し嫉妬した。

「なあ。先生、帰りに餅でも買って帰ろうぜ！もう千歳も食えるだろう？」

「まあ……。柔らかいものならね。」

「夏輝の店、やってるだろうし！」

町はずれの道場を出て、大通りに入る。刀は布でかぶせてあるのでバレはしないだろう。街は人通りが多い。今の時間では一番だろう。沖田が横に目を配れば、店の販売にケチをつける悪徳警官がごまんといた。

（皆……。斎藤君みたいな気のいい連中は少ないみたいだな……。）
全部が全部悪徳とは言わないが幕府を倒したことで天狗になっているのか。はたまた刀を自分たちが所持できるのでいつでも人を殺せると思っているのか……。どっちにしろあまり好意を持ってないな。やがて夏輝の家、永楽屋えいらくやが見えた。様々な菓子が置いてある東京でもそこそこの評判だ。

「いらっしやいませー。」

店の女将である夏輝の母、夏梨かりんが店の前で愛想を振りまいている。

「お久しぶりです！おばさん！」

「まあ。雪江君。いらっしやい。」

雪江は嬉しそうに頭を下げた。沖田も後から行くと同じように頭を下げた。

「あら。沖田先生！？先生もお久しぶりね。」

「すみません……。子供が生まれたのでなかなか行けなかったん

です。それに夏梨さんよりも誠一さんのほうがよく会計してくれましたからね。」

「そうでしたか……。お子様が生まれたんですね。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

「今日はわたくしがお会計いたしますよ。何かご希望のものは？」

「柏餅が欲しいです。それ……。五つ。」

「はい。毎度ありがとうございます。」

夏梨は微笑みながら餅を渡し、金を受け取った。

「なあ。おばさん。夏輝は？」

「夏輝は家の中です。あの子。何か考え事してるみたいだね……。出てこないの。」

「何かあったの？」

「まあ……。多分、お見合いの話を持って行ったから……。」

「帰るよ。雪江。」

沖田が冷たく言ったのでこの話はここで終わった。大人しく雪江は帰路についた。

「まあ。柏餅ですか!？」

千鶴は千歳を抱きながら沖田に聞いた。

「うん。これなら小さくして食べられるよ。」

「そうですか? 私、幼い頃は餡子が食べられなくて……。」

「そうなの?」

「ええ……。贅沢だと思うんですけどどうしても無理で……。この子は大丈夫でしょうか。」

沖田は小さなよく泣いてしまう千歳の頭を撫でた。

「千鶴……。」

「はい?」

「もう、この子は剣術を教えないでおこうと思う。」

「どうして……?」

「廃刀令が配布されて、刀を持つことを許されない。この子には違う生き方をしてほしい。もちろん。僕がいつも思っていた刀は守るためにある。忘れてはいけない……。これも大事だと思うけど……。」

「そうですね……。剣は守ることができますけど、間違ったら傷つけてしまう……。この子はこの時代で生きる子ですから……。」

「どんなふう to 育つのだろう。この子は……。沖田はいずれ道場をやめなければならぬことを知っている。もし今年……。いや今月、門下生が入らなければやめる。」

「(この年で仕事ね……。一君と同じ警察になるべきかな……。?)」

沖田の真剣な目が千歳に伝わって千歳は大泣きしだした。

「千歳!?? どうしたの?」

「よゝしよゝし。」

二人は仲つつましく千歳を寝付かせたのだった。

翌日。夏輝のことが心配になった雪江は一人で夏輝の家へ向かった。しかし家に行っても夏輝はいなかった。母の夏梨に聞けば朝、ふらりと出て行ったらしい。顔色がよかつたし、ちゃんと話せていたのだたいして心配はしなかつたらしい。

雪江は夏輝探しに奮闘していた。

「どこ行つたんだ……。あいつ……。」

独り言で呟きながら、どんどん街を離れた。雪江は川岸らへんをうるちよろした。

昔はよくここらへんで夏輝とたわいもない話をしていたものだ。それも長くは続かなかつたが……。

「うん……？」

雪江の目に映つたのは川岸で、男三人に囲まれている女の姿。顔は見えなかつたがこれは助けなければ！！

「おい！てめえら！何してる！！」

雪江が叫ぶと男たちが振り返った。

「おや。雪江じゃないか。」

「……。洸樹ひろきお前ら……。」

頭の名前は竜崎洸樹。ほかの二人の名は忘れた。洸樹は夏輝と雪江と同じく塾の生徒だった。金持ちの商家でいつも自分の金をつかつては仲間をつくつていた……。雪江のことを貧乏人と何度も蔑ん

だこともあった。

「夏輝！？」

中心にいた女は夏輝だった。どういうことだ。

「駄目・・・雪江・・・。」

「お前ら夏輝に何してる！？？」

「何って、俺は夏輝の婚約者だから逢引してるだけだ。」

雪江は聞きたいことがやまほどあったが・・・まず叫んだ。

「女泣かせて・・・子分連れて逢引なんざあ・・・何考えてやる！？」

「ふん・・・。なんとでも言え。その女はまあ遊びだ。綺麗な女でもないし・・・。お父様が結婚しろとうるさいからするだけだ・・・。この女は俺の妻となるのだから今から奴隷として調教でもしようと思っただけ。」

「ふざけんな！！奴隷だ！？ああ！？てめえのしてることは最低だ！クソヤローが！！」

雪江は完全にキレているらしくこんな雪江を初めて見た夏輝はどうしようもなかった。

「夏輝！！お前はこんな男と結婚するな！お前のことを幸せになんかこいつには絶対できねえ！」

「はっ！馬鹿な事を言うな。貧乏人。俺は、この女に、いままでよい生活させてやろうというのだ。幸せではないか。」

「うるせえ！！てめえは黙ってる！なあ！夏輝！お前は家のためにこんなクソヤローと結婚するのか！？お前の人生それでいいのか・・・？」

「私は・・・。」

気が付けば夏輝は大粒の涙を流していた。雪江を見るが歪んで見えた。

「夏輝！俺は確かに貧乏人だよ！家柄も何もない！先生がいなかったら死んでる男だ！でもな！俺はお前を女として幸せにできる自信がある！！」

「え・・・？」

「こんな男と結婚するんなら俺にしとけ！この野郎！！」

雪江の声が響き渡った。今雪江はなんといった？

「傑作だね！雪江！大胆な告白だ。しかしお前も変わっているな。

沖田千鶴のほうは何倍も美しいのに・・・こんな不細工な女を選ぶなんて・・・。」

「千鶴さんの名を呼ぶな！タマナシ野郎！それに何言ってやがる！俺には夏輝の方が千鶴さんより何倍も綺麗に見えるぜ！だって好きなんだからよ！！」

夏輝を見る雪江の瞳には何も嘘などなかった。

「そこをどけよ。」

「嫌だね。夏輝。お前はこいつと結婚するのか・・・？あーあ。家はどうなるかな・・・。俺をふったことをお父様に言えばお前の家は一瞬で終わりだ。いいのか？」

「・・・っ！！！」

それは耐えられることではない。洸樹と結婚することは夏輝の家にとつてとてもいい事だ。しかし、夏輝を全く愛さず、さらには奴隷と言った最低の男洸樹と、夏輝を好きだと叫んだ、雪江・・・。

「いやだよ・・・雪江・・・。ごめんなさい・・・。」

夏輝は立ち上がって小さな身体を自分の手で抱きしめた。

「雪江・・・。お願い・・・。私は・・・。もう・・・限界なの・・・。」

「夏輝・・・？」

「先生に思いを打ち明けて・・・何も悔いかなかったはずなのに・・・。気が付いたら貴方のことを考えていたの！！」

「！！！」

「結婚を断ることは・・・できないよ・・・。」

雪江は夏輝の元に駆けようとしたが洸樹に止められた。

「ほら。こいつが断れないんだから無駄なことをするな。」

「うるせえ・・・。」

雪江は殺気を出しながら洸樹を思い切り殴った。洸樹は一瞬で気絶し、倒れ込んだ。

「洸ちゃん!!」

二人の男は叫んだが、雪江に睨まれると一瞬で消えて行つた。雪江は夏輝に駆けると思い切り抱きしめて、口づけた。長い情熱的な口付けだった。

「雪江……ごめん……。ごめんなさい……。」

「なんで謝る。」

「私は……弱いんだよ。全部捨てて貴方と一緒ににはなれないの……。」「

「わかつてる……。お前が決めたんならそれでいい。俺は何も言わない。いいか。夏輝。俺は消える。」

「えっ?」

「道場を出て行つて、日本全国旅するんだ。東京から離れたことないからさ……。このままだと洸樹に殺されちまうだろう。お前ももしかしたら……。危ないかもしんねえけど……。」「

「私のことはいい……。雪江は雪江の生きたいように生きたら……。私は別に幸せにならなくてもいいの。雪江のこと思ってるだけで幸せよ。」

夏輝の笑顔に吸い寄せられて何度も口づける。倒れている洸樹を無視して……。

「雪江が……。私のこと思ってくれて嬉しかったよ……。」

「うん……。俺もだよ。夏輝。俺はお前のこと、一生忘れないし、お前のことずっと思ってる。だから寂しくないだろ?泣くなよ?」

「うん……。ありがとう……。」「

二人はそれぞれ別れを告げた。

家のために自分を犠牲にし、好きでもない男と結婚する夏輝。

自分の家柄がないのを気にし、彼女を無理やり奪おうとせず、彼女のために身をひいた雪江。

その日、雪江は本当に道場を出ていく決心をしたのだった。

その夜のことだった。闇夜に現れた一人の人影。

「お初にお目にかかる。沖田総司殿。」

低い声の主は顔が見えなかった。

「誰・・・？」

この瞬間。沖田は心が締め付けられ、少し恐怖したのをいつまでも忘れなかった。

60・誓い（後書き）

長かったです。

追記、団子と餅を間違えていました。

61・牙

「私、いちじょういん一条院雅楽と申します。元新選組一番組長沖田総司殿がこの道場にいと聞き今宵伺いました。私をどうか門下生に入れていただきたく存じます。」

夜に訪れる非常識の男は玄関で頭を下げた。沖田は目を細めて小柄な目のきつい男を見ていた。

「総司さん……。」

千鶴は旦那のただならぬ雰囲気気が付いて、沖田の腕を掴んだ。

沖田は千鶴を一瞬見ると、客人に向いた。

「いいでしょう……。どうぞ中へ入ってください。」

沖田は男を招き入れた。しかし、沖田は一度も微笑みもしなかったのが千鶴には不安でならなかった。

「こんなに広い道場とは思いませんでした。」

男の割には艶のいい声をして雅楽は言った。

「あつ。そう？ご期待にそえたかな？」

「ええ。これなら存分に先生の稽古を受けさせてもらえますよ。」

客間に案内しているときに、左のほうにある道場は沖田が見ても立派だ。昔いた貧乏道場とは比べ物にならない。

「あつ！先生！お客さん？」

雪江が何故か客間から出てきた。ひょっこり顔を出した雪江は一条院を見ると目を見開いた。そしてまた目を細める。

「先生……。」

「いいから。雪江。お前は部屋に戻ってないさい。千鶴。君も席を外してほしい。瀧香たちといてくれ。」

この夜更けには瀧香と千歳はもう寝付いていた。千鶴は昔と変わらない表情をしていた。

（またこの顔を見るのは嫌だな・・・。）

戦に行くときに見せる彼女の表情。これが辛くてたまらない。笑顔でいてほしいのだ。千鶴には・・・。

沖田は千鶴に近付き、軽く抱きしめる。細いけれどしっかりした手で彼女の頭を撫でる。千鶴にも何故かわかるのだ。沖田は目に映るこの男を警戒していると・・・。

「わかりました・・・。」

千鶴はもう一度沖田を振り返りながら、部屋に戻って行った。

「お前も早く行け。お子様は寝なさい。」

「ちよつと待つてよ！先生！こいつは門下生になるんだろ？それなら俺だって関係あるだろ！！」

「うるさい。大声だすな。お前にはいつでも話せる。明日にしろ。」

沖田は珍しく全く笑っていないので怖い。いつもケラケラ笑うのも怖いがこっちのほうの方が怖いかもしれない。

「う・・・。」

雪江は沖田に話したいこともあったが仕方ないのでさっさと退散した。

沖田は客間に一条院を通し、座布団を渡し、座らせた。

真っ直ぐ、一条院の淡い橙色の瞳を見る。沖田には彼の心境が、わ

からなかった。

「君、歳幾つ？」

「先月十六になりました。」

「御家族は？一人で来たの？」

「家族は、おりません。父は戦で、母は盗賊に、弟と妹は餓死しました。」

あまりにも悲惨な光景が想像できて沖田は寒気がした。そして本題に入った。

「本気で僕の門下生になるつもり？」

右にいている竹刀に沖田は鋭い視線を放ち言った。

「覚悟はできております。私は元は士族でございます。剣をとり、生きていくのが宿命です。どうかご指導お願いいたします。」

沖田は黙り込んだ。頭を下げているこの少年をじつと見つめ、長い溜息をした後、やっと口にした。

「女の子……なの？」

「……！」

「どういうつもりか知らないけど、君みたいな子供を入れるわけにはいけない。」

うまく化けているかもしれないが。まあ昔の千鶴よりはましな男装だが沖田の目は騙されない。背も小さな一条院、肌も真っ白で、腕もすぐに折れそう。刀を持っているか知らないが全くの素人だろう。まあ道場に来た時の雪江も素人だったので気にしないが、明らかな女なのだ。

「女だからですか。」

「そうだと言ったら？」

いきなり彼女の橙色の瞳が暗くなり始めた。

「私は、男です。女などとうの昔に捨てております。どうしても貴方に教わりたい。どうかお願い致します。」

「どうして？廃刀令のこの時代にそんなこと思ふの？」

「それは……。」

彼女は言葉に詰まったようで苦い顔をした。

「確かに、門下生が一人しかいなくて喉が出るほど欲しいけどね・
・。僕はどうかやら厳しいらしくて皆すぐやめていくんだ。君もその
一人だろう。」

「何故！？そんなことがいいきれの!？」

彼女の声は透き通り綺麗な声をしていた。無理して男の声をしてい
たことがわかる。

「僕は君を殺すぐらいまで鍛えるつもりだから。」

次の瞬間には沖田は押し倒されていた。喉元に短剣をつきつけられ
ていた。

沖田は絶望した。こんなにも自分の勘が鈍っていたとは・・・。
感じていた。最初沖田を見つめる視線からこの子は沖田に稽古をつ
けてもらうためだけに来たのではないと・・・。

「私は・・・貴様を殺しに来た。」

沖田は大して驚きもせず割と顔立ちの整った一条院の顔を眺めてい
た。

「私の父はお前に殺された。そのせいで母は理性をなくし、身を売
り、最後は梅毒で死んだ。妹と弟を病から救えなかった・・・。」

「へー。全部僕のせいだ。君の人生僕が壊したのか。」

ケラケラ沖田が笑い出したので、一条院は怒り、沖田の首を思い切
り掴んだ。

「何を笑っている！貴様は今から死ぬんだぞ!!」

「何のために、僕を殺すの？」

「決まっている！復讐だ！」

その言葉に、沖田は眉をひそめた。

「それはやめた方がいいよ。」

「何!？」

「僕は復讐のために闘ったけど・・・。残ったものは悲しい虚しさ
と自分のどうしようもない無力さだけだよ。」

「黙れ!!貴様にわかるか!!」

沖田は目を伏せた。近藤が斬首されて……。自害を考えた。でも千鶴に止められ、彼女を残し、旧幕府軍として戦に出かけた。仲間が死んでいくとき、自分の力のなさに腹がたった。最後の戦……。土方が目の前で死んでいく様を見たとき。ああ。自分は何もできなかったと心の底から思った。復讐のために駆けても何もならなかったのだ。

「君が誰を憎もうが殺そうが君の勝手だけだね……。僕は君のために死んでやる訳にはいかないんだよ。」

とたん、一条院は沖田に顔を近づけた。もう少しで唇が触れ合うほどだった。

「貴様は……。私の父を平気で殺し、母を殺し、妹と弟を殺して、自分は死ぬわけにはいかないとぬかすのか!？」

「……。そうだよ。」

「ふざけるな!!」

彼女は叫んで沖田の顔を思い切りぶった。頬がじんじんと痛む。沖田は自分で赤くなっていると思う。殴られるのは子供の頃以来と不意に思った。

「貴様なんかに……。私の孤独な人生はわからないだろう!？私はお前を思っしか生きていけなかった!!お前をこの手で殺せばほかに何もいらないんだ!!」

その悲しい考えをこんな少女にさせたと思うと胸が痛んだ。沖田はゆっくりと彼女の頬に触れた。彼女の溢れる涙を指ですくった。

「わかんないよ……。教えてよ。言葉でさ。」

「……。そんな……。こと……。」

「できないでしょ? そうだよー。言葉で伝えられないよね……。」

「お前……。」

「なら僕を殺すの? 僕を殺したら君は自分がされたことをほかの人にさせるの?」

「!?!?」

「僕の子供・・・まだ六つと一つなんだ。君はそれでも僕を殺すの？」

一条院にはそんな恐ろしいことはできなかった。まだ六歳と一歳の子供から父親を奪って、その憎しみから逃げられる自信がなかった。「僕は・・・。勝負して僕を殺してほしいな。でも君はどうも素人みたいだから無理だよ。」

沖田の優しい笑みに一条院は言葉を失った。

「さつき、君がお願いしたように道場に入れてあげる。天然理心流を君に全部叩き込む。そして時がきたら僕を殺せばいいよ。毎日僕の命をねらえばいいよ。まあ簡単に殺させないけどね。」

とたん、彼女の目の色がもとに戻った。

「貴方は・・・。自分を殺す牙を自分の手で育てると言うの・・・？」

「そういうことだね。あはは。」

愉快に笑う沖田。一条院はどうしようもない安堵した感情をいつまでも忘れなかった。

この訪問が彼女のどん底だった人生を明るくするものへと変えたのである。

正直、あの男が全然わからない。

私ははっきり殺すと言ったのに、布団と部屋を与え、今日から生活しろと言い出した。

想像していた沖田総司と全く違う。

まだ幼き頃、家族を奪われ、毎日泣きながら生きてきた私はいつの日か父の復讐をすると父の墓の前で誓った。

それはまだ変わっていない・・・だが。私はまだ迷っている。家族を奪われた苦しみを知っているのに今度は自分がそれを与えるのかと・・・。

しかし沖田総司のことは許せない。もし彼が自分を殺しに来るならば私はなんとしても奴を地獄へ連れて行こう。

だが私を生かし、本当に剣術を教えてくれるならば私は奴を凌ぐほどの技術を身に付けてやろう。

いつか勝負をして奴を殺せるならその時の素晴らしい喜びはこの世のものではないくらいだろう。

そうだ。私は奴を利用するんだ。奴は絶対後悔するだろう。いつかのその時が待ち遠しい。

「雅楽。起きなさい。」

「うん・・・？」

布団をゆつくりとどけると、目の前に胸があつた。結構露出している男だな……。目をこすり、上を見上げると若々しい男の翡翠の瞳と目があつた。

「なななな!!?なんだよ!!?」

「ん?だつて呼んでも起きないんだもん。だから部屋に入つて、君をゆすつたのさ。」

「。。。。。」

沖田の面白そうな顔に、憎しみという感情が薄れていく気がした。

「ていうか『みらく』ってなんだ!私の名は『うた』だ!なんで字がわかるんだ!?」

「竹刀に彫つてあるんだもん。でもみらくつてあだ名可愛いでしょう?」

「意味わかんねえよ!!」

と、朝から怒鳴っている自分がおかしく思えてきた。

「さてと。目覚めたみたいだし。朝ごはん食べて稽古だよ。」

「え?もつ?」

「当たり前じゃない。君は今日から門下生になったんだから。それと雅楽。」

「何!?」

みらくと呼ばれ、ひそかに雅楽は舌打ちした。

「髪を伸ばしなさい。そんな雑な切り方、君には似合わない。せつかく可愛い顔をしているのに。」

今の雅楽の髪型は坊主に近い短髪だ。女とバレないよう、髪を切り続けた結果だ。

「う、うつるさい!あんたには関係ないだろう!!?」

「はあ……。初対面のあの口調は何処にいったのかなー。」

沖田はぶつぶつ言いながら襖を閉めて行つた。雅楽は知つた。沖田総司はとんでもない変わり者だと。そして自分は彼の手の上だと。。。

「あ！昨日の子！泊まったのか。」

朝いきなり雪江が雅楽の前へ飛び出した。

「おい。雪江。驚かすな。」

沖田は雪江の頭をたたいた。

「う！先生！朝からやめてよ！聞いただけじゃんかー！」

「お前は朝からうるさい……。千鶴。すまないけど雅楽の分も頼むよ。」

千鶴はすぐに反応して。

「はい……。けどみらくって……。？」

「それはあだ名です。」

雅楽が凜とした声で言う。沖田は笑い転げた。

「なっ！？」

「あははは！！君面白いな。気に入ったよ……。あはは！！」

沖田だけ笑っていたが他は全くわからなかった。

「あ。」

瀧香が起きてきて、部屋に入ってきた。

「おはよう。瀧香。」

「おはよう……。父様。母様。雪江……。と。」

昨日の客人の名を瀧香は忘れてしまった。

「今日から門下生になる……。一条院雅楽です……。」

「門下生！？」

瀧香は飛び上がると、雅楽に抱き着いた。

「よろしく願います！でも父様は厳しいんだって。だから無理しないでね。」

六歳の割にはどうも艶のある声だったので、雅楽はどきつとした。

そして妹のことを思い出す。沖田の妻、千鶴が抱いている子供を見れば弟を思い出した。弟は生後七か月で死んでしまったけど……。

「なあ。先生。話あるんだけど。」

「後にしなさい。稽古が終わってから。」

「はい……。」

雪江は自分の決心を言わねばならなかった。朝、こっそり千鶴には話したのだが千鶴は笑って納得してくれた。

雪江は心底安心したが、ここから……沖田から離れることが辛いのは事実だ。

沖田は自分の父のような兄のような存在だった。いい加減で、変わり者の沖田だが、尊敬していた。剣士として強い沖田がずっと憧れだった……。でももう自立の時がきてしまった。

最初見た時からわかった男装しているこの女……。この女が門下生に入ったとしたら自分はもう出て行っていくのだろうか。沖田ならさっさと出て行けと言うだろうが……。

まだまだ心配は消えなかった。

「ふうん。なるほどね。お前の言うことはわかったよ。」

雪江は稽古が終わった後、夏輝と交わした言葉を話した。自分がこの道場を出ていくことも・・・。

「ま。あれじゃん。門下生も入ったことだし。俺がいなくてもいいよね？」

「お前はどうでもいいけど・・・。あの子は正式な門下生じゃないよ。」

沖田が顎を掴みながら話しているのを見て雪江は不審に思った。

「なんで？女の子だからか？でもいい線いつてたよ。あの・・・。

雅楽だっけ。剣筋も結構できてたし。俺の方が全然できなかったよ。」

「そんなことない。お前と同じくらいだね。問題はそこじゃないんだよ。」

「何？」

沖田は畳の上に置いてあった湯呑をとり、お茶を飲んだ。

「彼女は僕の命を狙っているんだ・・・。どうやら彼女の父を殺して、彼女の家はめちゃくちゃになったみたい。」

「復讐するために・・・ここに来たのか。でも先生はそれ知って

てアイツに稽古つけてるのか！？おかしいじゃねえか！」

「そうだよ。彼女を育てれば育てるほど僕の命は危ないね。でもそれって当然だと思うんだ。僕はお前と違ってたくさんの人を斬ってきた。それが仕事だったし……。恨まれても仕方ないでしょ？残されたものの痛みや、憎しみを背負うのが僕の運命……。だから。」

「先生……。。」

沖田はいつか必ずあの娘に命を差し出すだろうと雪江は思った。そうしたら残された千鶴たちはどうなるんだ。

「先生。これだけ覚えておいてくれよ。もしアイツが先生を殺したなら俺がアイツを殺すよ。千鶴さんじゃなくね……。。」

教え子の真剣に怒る様子を見て沖田は嬉しくなった。微笑んで礼を言う。

「ありがとう。」

雪江は一瞬頷いて。

「ほんじゃ。俺、荷造りする。できたら出ていく。」

「馬鹿か。金もないくせに……。。」

「えっ！？」

そういえば金はなかった。沖田たちは今まで普通になんでも欲しいものを要求したら可能なきり対応してくれた。だから自分の金のなさに全然気が付かなかった。そうだ。一円もない。

「どうしよう……。。」

「どこかで働いて自分で稼ぐんだね。僕はお前の旅の資金まで面倒みられないよ。」

雪江は働くことが嫌いだ。なんでそんなことしなければならなかったかわからない。沖田のように剣術を教えて食べていきたい……。。

それが一番いいが、沖田は昔の実績がある。でも雪江にはない。これが現実だった。

「雪江。」

「……。はい？」

「本当によかったのか？夏輝ちゃんの場合は……。確かにお前の言うとおり結婚相手がどんなことしてくるか分からないけど……夏輝ちゃんも本当にお前のこと好きだよ。」

雪江は拳を震わせた。

「でも……。どうしたらいいんだよ。俺が無理やり奪ってどこかに連れ去っても、夏輝の家がどんなことになるかわからないだろ！？それに俺が連れていったら先生たちにも迷惑が……。」「

「僕たちのことは考えなくていいけど……。それだね。考えてみなさい。雪江。」

「へ？」

「お前は馬鹿だが頭は良い。」

「何それ……。矛盾してるよ。」

「でだ。相手は商家の人間だ。」

「それが？」

「お前の頭で、会社を興すんだ。御菓子でもなんでもいい。当然、商売したら金が入るよね。その金が多い会社は大きくなる。お前が社長になったら夏輝ちゃんの家を買い取るとか、その商家を買い取るんだ。そうすれば夏輝ちゃんを助けてあげられる。」

それだ。と雪江は手をたたいた。

「せんせーちょー頭いい！！それだな！！でも何年かかるか……。」「

「それはお前の動き次第だね。お前の人生だ。お前が決めなさい。諦めるのもよし。死ぬのもよし。もう僕は口出すのはやめるよ。」

沖田は手をぶらぶら振って舌を出しながら言った。

「いや！夏輝のことは諦めないよ！先生！俺やる！今までありがとう！明日から仕事バリバリやって、会社立ち上げる金を集めて大金持ちになつて夏輝を嫁さんにしてやる！よし！そうと決まれば夕餉だ！今日は何かな？」

と馬鹿丸出しことを言いながら雪江は千鶴の元へかけて行った。

「全く……。」「

馬鹿だけど面白い。沖田は全くの他人の子を拾って生活を窮屈にしたことをはじめのうちは後悔していた。でも雪江は辛さを隠しながら生きている。性格からか知らないが雪江には笑顔がたえない。そんな雪江が沖田も好きになって本当の家族ように思えた。

もしかしたら近藤も沖田にこんな感情を抱いていたのかもしれない。沖田は雪江にあまり優しくできなかったけれど……。

（まるで僕は土方さんかもしれないな……。）

優しくなくていつも怒っていた土方。でもどんな時も沖田を心配し、見守ってくれていた。

「はは……。」

「何一人で笑ってるんすか。気持ち悪い。」

突如現れた新人門下生、一条院雅楽。彼女は沖田を睨みつけてきていた。

（今度はこの子を育てるのか……。）

自分を憎み、いつか殺してくる存在でも自分はもうこの子を愛し育てられる。そんな自信があった。

「たく。それより何？あの稽古は。あんなんで伸びる子がいるのかね。」

沖田は今。気付いた。この子はとても雪江に似て変わった子だと……。

「千鶴様。」

「え？」

いきなり聞きなれぬ声で呼ばれたので千鶴は驚いた。

「み、雅楽ちゃん……。」

「うた、です。それより。これなんとかしてくださいませんか。」
「何？」

千鶴は台所から雅楽がいる部屋に戻った。すると、灌香がかたわれで書物を読んでいて、その横で雅楽と千歳がいた。千歳はどうやら雅楽の膝がお気に入りらしくそこから離れようとしない。

「このままじゃ寝てしまいそうです。なんとかしてください。」
きつい目で言われ、千鶴はうろたえた。

「ま、まあ……。私は調理しないといけないし……。」

「だいたい。あの男はどこにほつき歩いてるんです！？千鶴様も妻なら夫がどこに行くか気になりませんか！？」

（この子……。変わってるなあ……。）

雪江がいるので気にしない。雪江はさつき千鶴の元へきて。『俺、明日から働くぜ！千鶴さん。見てて！先生より遅い男になってやるぜ！』などと言ってどこかに行ってしまったのだ。

「出稽古だと思っけど……。ねえ。雅楽ちゃん。その千鶴様つてやめない？」

「どうしてですか？」

「だって……。変じゃない。私はそんな身分じゃないし……。」

「でも士族じゃないですか。私はもうそんな身分ないので千鶴様は千鶴様です。ただの穢多です。」

「そんなことないわ……。もう四民平等の時代よ？そんな考えは古いわ。」

自分のことを堂々と穢多という雅楽。まだ身分を気にしているのだから。

「古くありませんよ。当然のことです。武士がえらいことは変わりませんから……。まあ。あの男を武士呼ぶのは気が引けますがね。」
「……………」

千鶴はどう答えたらいいいのかわらなくなってきた。彼女と千鶴では考え方が全然違うのだ。沖田に昨夜聞いた話では彼女は沖田を憎み、殺しに来たのである。そんな彼女に千鶴はどう対応したらいいのかわからない。千鶴も人間だ。ずっと神様のように微笑んでいる訳にもいかない。もし沖田が彼女に殺されてしまったらどうすればいい？自分は狂うだろう。彼女を殺すまでこの世に生き続けると思う。

「やめてよ。変な話は。ね？」

瀧香が雅楽の腕を掴んで雅楽を見つめた。

「……………わかりました。こう考えましょう。私はこの家の使用人だ。ありがたいことに食べさせてもらっている……。ほんのお礼がしたい。千鶴様。なんなりと私にお申し付けください。」

「そんなんじゃないのに……………」

この子のことを千鶴はまだよく知らない。これから打ち解けて雪江のようにまた家族だと言いたいのに……。使用人とは変な事を言い出した。また身分がつくではないか。

「さあ。瀧香様。何して遊びましょうかー？」

「うーん……………とね……………」

「瀧香！話に乗らないの！」

雅楽に振り回されていく沖田一家です。

明治十年九月。

「ほんじゃ。行ってくるよ。まあ当初の予定だったし。いいよね。先生！」

「知らないよ。口出ししないって言っただろ。」

雪江の旅立ちの日が来たのだ。雪江はあれからものすごい量の仕事をし、金をためた。夏輝を救うため今から会社をたてる旅に出る。雪江の話では旅をしながら考える。そうだ。

「あまり金を持つと狙われるから、目を働かせなさい。女に目をくらますな。」

沖田はこの時でもいつもと変わらぬ厳しい言葉を口にしていた。

「はいはい。わかってますよ。」

雪江も相変わらずの微笑みだ。この朝早く。天気は快晴。秋風がほんのりと吹く。

「千鶴さん……。」

千鶴が雪江を呼ぼうとした次の瞬間には雪江に抱きしめられていた。

「・・・／＼雪江くん・・・」

沖田も瀧香も千歳も雅楽もいるというのに・・・。
雪江はそれで満足したらしく長い抱擁ではなかった。

「千鶴さん。ありがと。」

自然に彼の顔を見れば涙が出た。千鶴は思い出す。初めて来た日の雪江を・・・。

いかにも悪戯鬼っぽくて沖田に反抗的だった雪江。それでも千鶴に見せる笑顔はとても明るかった。そんな子が今日旅立つ。本当の家族のように思ってきた子が。

「雪江。」

瀧香が凜とした声で雪江を呼び、雪江を抱きしめる。まだまだ瀧香は小さいが心根はしっかりしていた。

「雪江。帰ってきてね。わたし、きつとお姉さんになってるよ。」
「うん・・・。楽しみにしとく。」

瀧香は雪江を解放し、雪江は雅楽が抱いている千歳へと向かった。

「大きくなって、母さんと、姉さんを守れよ。」

片言しか話せない千歳だったがあまり笑わない彼が微笑んだ。

「私は入ってないんかい・・・。」

すっかり打ち解けた雅楽。雪江とも仲がよかった。

「お前は十分強いって。なあ。先生。」

「そうだね・・・。」

「沖田先生の指導はダメですけど私が天才なんでしょうねー。」
「・・・。」

沖田はバツの悪い顔をした。実際雅楽は恐ろしいほど剣の才能があった。雪江よりは荒い剣だが時折、雪江より速いときあるのだ。しかし性格がだんだん変わり、今ではつねにボケている性格になってしまった。

「雪江兄様。頑張っておいでなすってください。」

「その日本語おかしくない？ねえ。」

「あんたに言われたくないです。」

（こいつ・・・。）

最後まで何かと変な奴だ。でも。また帰れる場所があつて本当によかった。

生きる希望をいつまでも見ていてられる。

「じゃ。元気だな。」

雪江は黙って泣きながら十四歳から過ごしたこの家を去った。

62・旅人（後書き）

とびとびですね。そろそろ終わります。

明治十一年一月。

私は、すっかりこの家になついていた。元々、私は沖田総司を殺しに来たのだ。門下生にいてくれというのは嘘だ。近付いたほうが殺しやすいと思つた。父が死んで……。母が狂つていき、妹と弟が飢えていく様を見ていたあの頃を私は一度も忘れたことがないけれど今、私は鮮明に覚えていた記憶が消えていくのを感じるのだ。私はどうしてしまったのだろう。

私はいつも早起きして、千鶴様の手伝いをする。千鶴様は本当に美しい方であんなになんでもこなしてしまう女性を初めてみた。私はもしかしたらかつての母を照らし合わせているのかも……。私に

は与えられなかった家族の絆がここにはある。

千鶴様はいつでも私に優しくしてくれた。だから私も大好きになった。

父を殺した男の妻など滅茶苦茶にしてやればいいと思っていた。家族共々、私が全て葬ってやると……。けれど今更できるはずもなかった。

すすくと成長する灌香様と千歳様……。見ているだけで幸せだ。私は一樣士族の生まれだが誰もそれを証明する人はいない。多分、母は穢多の人だったと思う。よく彼らと話していたから。私には穢多の血が流れているのだから士族に仕えられるのは有難いことだ。四民平等の時代……。そんなのおかしいと千鶴様はおっしゃったが私にはそんなもの関係ないのだ。

でもどうしてあの男の家の使用人などしようと思ったのだろうか？私はある時から気付いていたのだろうか。

先生の言う通り、復讐をしても何も残らず死ぬだけだと…………。

雪江兄様に言われたよ。彼は優しくて私の兄のような存在になってくれたけれど私がここに來た理由を知っていて、もし先生を殺したら絶対に許さないと…………。

あの時の雪江兄様の目は恐ろしい辰のようだった。

誰かが私に沖田総司を殺せと命令した訳じゃない…………。だから私は…………これでもいいのかな？

今日は大雪だ。どうも外に出れそうにない。なので朝の稽古が終わると、先生は一人で将棋をうっていた。

「将棋ですか？」

縁側で寒いのに戸も閉めないで沖田先生は一人、真剣な目をして盤を見つめている。

「雅楽……。」

このみらくと呼ばれるのにももう慣れてしまった。今では可愛い感じがして嬉しくも思った。

「皆は？」

「瀧香様は、この大雪の中塾に行きましたよ。家にいたら退屈で死にそうだそうです。千歳様と千鶴様はあちらの部屋でお昼寝しています。」

「昼寝ね……。千鶴ったらいつまでも可愛いんだね。」

「変な想像はやめてくださいよ。先生。軽蔑します。だいたい毎晩先生が中々千鶴様をお眠りにならさないからでしょう？」

「愛の形でしょ。ほつといてよ。」

パチッ。沖田先生が駒を並べていく音だけが響く。

「風邪ひきますよ……。」

私は沖田が薄着で寒そうなので羽織をかけてやった。

その羽織を着ると沖田先生は嬉しそうに微笑んできた。

「ありがとう。」

「……。」

そう言う先生の表情は歳がいつている男の顔とは思えないので困る。恋愛感情をもったことがないから素直にこの気持ちが悪なのかわからない。いや。私に限ってそんなことはあるはずがない。

「お、沖田先生。私も将棋指していいですか？」

沖田先生は一瞬不思議そうな顔をしたが、ニコツと笑った。

「いいよ。君できるの？」

「ええ……。まあ……。少しは。強くないと思いますけど。」

幼い頃に何回かしかがあったのでなんとなくできた。私は先生の向かい側に座る。

「はじめよ。」

沖田先生は自分が指していた駒をどけもとに戻した。

私は淡々と自分がうちたいところに駒を進めて行った。

「うーん……。。」

先生がいきなりうなりだした。どうしたのだろう？

「どうしました？」

「いやさ……。もうこれ、進まないと思って。」

「え？」

「つまり僕の負けってこと。あーあ。結構強い自信あったのにな。君に負けるなんてね。」

沖田先生は子供のように笑いながら悔しがっていた。しばらく先生を見つめていたが。

「さむッ！」

雪が入ってきそうになっていたので私は慌ててずっと空いていた戸を閉めた。しかしずっと座っていたので足が痺れ、おまけに頭がクラクラした。

「危ない！」

私が倒れそうになった時、先生が私を支えてくれた。目を開けると先生の顔が目の前にあった。先生はそこらへんの同じ年齢の男の人より若く見えていたけど確かに皺があった。

それでも輝く翡翠の瞳は魅力的だった。

「大丈夫？」

「……。はい。」

私が答えると先生は何故か私の前髪を掴んだ。

「髪、伸びたね。君は僕と似てともと茶色の髪だね。」

「今更ですよ……。」

私は門下生になるときに髪を伸ばせと言われそれを守ってずっと伸ばしてきた。今や背中に近付くぐらいある。

「あんな短髪だった君がそこまで伸びるほど時間がたってしまったんだね……。」

「先生……？」

「最近、時間が進むのが早いんだ……。もう歳だね。ねえ。雅楽。僕は君に殺されるより先に死んでしまいかもしれない。」

「なんですか……。急に。」

先生の顔を見て、私は声を失った。

「君は、いつになったら僕を殺すの？」

切れ長の目で見つめる沖田先生。憎くて……。でも私の憧れになった先生。先生は私を疎ましいのだろうか。

「私は、まだそれほど強くない……。」

「嘘。君は強いよ。女の子だと思えない。」

「けれどもやはり女だと見るのではないですか！私は一人の侍として……。」

私は何を言っているのだろう。馬鹿じゃないか。私は穢多なのだ。侍などと……。先生は優しいんだ。私をまるで武士として男として稽古してくれたのに、何故こんなことを言っているんだろう。

先生の腕は私を抱きかかえるようにしている。体が思うように動かない。

「君は僕の大嫌いな男に似てるんだ。頑固で、我儘で……。でもとっても優しい人だった。生きていた頃、ずっと一緒に居て。ああ。本物の武士なんだなって思った。なんで……。なんで彼が死んで僕が生きてるんだと何度も思った。僕は文句ばかり言うだけであの人に何もできなかったんだ……。」

「沖田先生……。」

「僕は言ったよ。君にくれてやる命はないと。でも君が力づくで殺

すのならそれでいい。千歳や瀧香の成長をずっと見ていたい。千鶴をずっと愛し続けたいと思う。……こわいんだ。」

「……つ。」

「僕は君を殺してしまうかもしれない。自分の欲望に左右されて……僕はまた罪を犯してしまう。」

先生はこう思っているのかな。先生はかつていつぱい人を殺したから、その復讐に殺されても文句は言えないけれど自分は死にたくないと思ってしまう。私をいつか自分が死なないために殺してしまうかもしれない。私に似ている人のことも……。先生は自分のせいで死んだとも思っているのかな。違うはずだよ。

「違う……。そんなの違います。先生。」

「……。」

「私は貴方を殺したいと願いつけてきました。でも先生。私を見てわかりませんか？」

「雅楽……。」

「私は学びました。家族と言う絆。沖田先生がどんないい人なのか。千鶴様たちがどんなに私を愛してくれているのかを……。」

雪江兄様だつてそうです。雪江兄様言っていましたよ。先生たちは本当に自分を家族だと思ってくれてる自分にとって全てを賭けて守るべき人たちだつて。私もそうです。先生。貴方は確かに色んな過ちを犯した。それは許されない。けれど貴方たちに救われた人間がいるんですよ。私は貴方が消えろと言うならどこにでも行きます。ですからどうか自分の手を汚さないでください。」

沖田先生。貴方を知って私は貴方をきつと好きになつたのでしよう。私は優しくつた父を、貴方と照らし合わせていた。

千鶴様は母様。瀧香様は妹。千歳様は弟……。

私は家族というものを再び欲しいと思いました。

でも貴方たちはくれたのです。欲しいものを奪わなくてもくれた……。。

欲しいものを誰が壊しますか？

ですから。心配しないで。

私は貴方の弟子です。あの沖田総司の弟子ですよ。

「先生。私はもっと強くなつて女でも闘えるのだと証明します。そのために先生のご指導お願いします。」

私は先生に抱き着いた。もう二度としないだろう。千鶴様に嘘はつけない。

先生は震える手で私の背に触れた。

「うん……。」

そう小さな声で言う。私は、立ち上がつて背を向けた。

「先生。知ってますよ。道場の経営が本当に辛い事……。瀧香様に十分な衣類も買つてあげられず……。私の給料だけではまだ辛いようですね。」

私は飲食店を掛け持ちして可能な限り働いた。全て助けるために……。

「先生。剣術を伝えたいのはわかります。けれど無理をしてはいけません。私に指導してほしいと願つたのは私ですが……。どうかよく考えてみてください。何が一番いいのかを……。私はここにいる限り先生の素晴らしい剣を見ていられますから……。」

道場をやめてしまつてもいいんだ。先生が無理しなくていい。誰も……。辛くならなくていいんだ。

「君は、ちゃっかりしてるね……。言いたいことだけ言つてさ……。自分勝手。」

「そうですよ。」

「……。ふつ。でもそれが君だもんね。ありがと。雅楽。僕、道場を続けられてよかった。千鶴にも無理させてた。瀧香もいじめられてた。知ってる。けどどうしても続けたかった。でも今ね。雅楽に言われて……。すつきりした。これで終わらせれる。」

「はい……。」

これを期に、沖田先生は、道場を閉めた。出稽古もやめ……。先生は警察官となつた。どうやらあまり忙しい仕事ではなく一緒に

居られる時間が増えた。

先生はその警察の中の剣術道場に足を運んでまた剣を教えている。
そして警官の先生にあこがれて私は同じ警官になりたいと思うようになった。

63・何もかも（後書き）

次回あたり最終です。微妙ですよ。

64・誠の背中

「おい。瀧香あ！」

またうるさい靖太が来た。私は面倒臭そうに振り返ってやった。

「何？」

私は低く、それだけ言った。靖太は近所の呉服屋の跡取り息子で、私は元道場主の娘。私は自分の家を横目で見た。建物だけは立派だが、もう道場は閉めて、誰も使っていない。

そんな道場を見るのは嫌だった。だって私は、ただの警官の娘になつてしまつたのだから。

「瀧香？」

「ああ……。ごめん。」

ぼーっとしていたようで靖太が首をかしげて私の顔を覗き込んだ。

靖太は良い奴だけれど恋愛感情を持ち合わせていない。此間、というか昨日か、いきなり告白され戸惑つた。まあ私も十七だし、恋愛の一つや二つして当たり前だと思ふけれど……。

「なあ。瀧香。明日出かけないか？一緒に。」

「何で？」

「何でって……。」

靖太は困つたような横顔を見せ付けてくる。わからないから聞いたのにどうしてそんな顔するんだろう。

「俺はさ。お前より年上だし……。お前より責任があるの。男だし。家を継がないといけないし……。」

「それとこれどう関係あるの？」

靖太は口をとがらせて不機嫌のような雰囲気を出し始める。

「だから！返事早くしてくれて！」

「返事？」

「昨日言っただろ！？お前が好きだって！俺、お前となら駆け落ちしてもいい！」

「駆け落ち？何それ。なんで私と靖太がそんなのするの？」

「だああああ！もう！お前本当に言っただけか！？あんな、瀧香、聞けよ（怒）」

私が家に入ろうとしていくので靖太は私の腕を掴んで離さない。

「……………寒いんだよ……………今三月だよ？」

「うるせえ！聞け！」

怒鳴られ、私はしゅんとしながらうつむいた。

「俺は家のために金持ちの不細工な女とも結婚しなきゃなんねえ！でも俺が好きなのはお前なんだ！だから結婚してほしい！」

「……………」

靖太が本気なのがわかって私は赤面した。靖太は私のことを好きだと真っ直ぐ見つめ言ってくる……………この気持ちはなんだろう。嬉しいのかな。

「靖太……………。私も靖太のこと好きだけどわかんないよ。結婚とか……………。恋愛とか……………。だって靖太は昔から一緒に居てくれたじゃない。私がいじめられても助けてくれなかったけど……………いてくれた。」

靖太は気が弱いから助けてくれなかったけど一緒にいてくれた。一緒に居ても平気だったのは靖太が塾で一番の金持ちだったからだ。

「私はあなたのことを恋愛対象として見てるかわかんないの。」

「なら、わからせてやるッ！」

そう言う私を無理やり引き寄せ乱暴に口付けしてきた。口付けは初めてだったし、驚いた。けれど靖太がこんなに近くに感じられ、しかも私を吸い尽くすような口付けは嫌いじゃなかった。

「わかったか？俺は、お前を昔から恋愛対象に見てた。お前だけだ。気付いてないのは。」

私は何故か可笑しくなって笑った。

「な、なんだよ！」

その時だ。後ろでズリツと土がこすれる音がした。振り返ると歳がいつても全然変わらない居候がいた。

「ご、ごめん……。いや。そろつと入ろうとしたんだけど……。お前ら家の門の前ですから……。」

「雪江……。」

彼は、私が一歳の頃から一緒に住んでいる宮部雪江。何年か前に自分の会社を立ち上げるために旅に出たが二年もすれば帰ってきた。何故かえってこれたのか。これまた驚いたのだがたったの二年で雪江は会社を全国にまで店を広げられるまで成長させたのだ。雪江は社長になって、永楽屋の娘、商家に嫁いだ夏輝さんを無理やり嫁にもらったそうだ。夏輝さんの旦那……。名前は知らないけど性格の悪いその人は雪江に何も言えないらしい。昔はずばずばと言ってたらしいけど。

ともかく雪江は社長で、それなりに会社も安定している……。はずなのに。雪江には社長という立場がわかってないようだ。よく家に出入りするし……。それにまだまだ貧乏臭さが抜けない。それが雪江のいいところかもしれないけど。

「雪江さん！邪魔しないでくださいよ！」

「うつせえ！お前らがそんな、そんなとこでイチャコラするからだろうが！！」

雪江は顔を赤くしながら怒っている。私は益々おかしくなった。

「ごめん。雪江。今日、泊まるの？夏輝さんは？」

「ああ。夏輝は病院だよ。なんかしんどいらしくて……。ついていくって言ったら嫌がってさー。意味わかんないよねー。もしかして浮気！？」

馬鹿か……。と私は独り溜息ついた。よくお前は鈍感すぎだ！と靖太たちに言われるけど雪江のほうがひどいよ。

「そのまま、ここに来るから心配なし！先生、今日休みだろ！？そういや、お前ら結婚するんだよな。じゃあ。先生に挨拶しろよ！靖

太！」

「ええ！？いきなり！？やめて！ちよつと！！」

雪江は嫌がる靖太を家に連れ込んだ。

「お前な……。瀧香、嫁さんにしたいなら絶対先生の許可いるんだから一緒だろ？お前、駆け落ちなんかしたら先生に殺されるぞ。

マジで。」

「……………」

私はよくわからずその後ろについて行つた。

「おかえ……。りなさい。」

数年前から仕えて……。くれている？雅楽さんが迎えてくれた。彼女は最初男だと思っていたけど女だと聞いてびっくりした。でも今ではすごく綺麗な人で私は好きだ。私の姉のような存在。彼女になら母様に言えないことを話せる。雅楽さんは玄関で首をかしげている。

彼女は実は警官で、しかも日本で初めての女警官なのだ。父様が警官になって、それにあこがれた雅楽さんはなんとかして警察官になった。今では父様の助手をしている。今日は父様が休みなので彼女も休みなのだ。

彼女は元は道場の門下生で、習った期間は雪江よりすごく短かった。「瀧香様が男性を連れてくるとは珍しいですね。」

「わ、私が連れてきたという言い方はやめてよ……。」

これが彼女なりのからかいなのだろう。彼女は変わっていると思う。なんか雪江も変わっているので気にならないのだが普通の人と感覚がずれている。

「雅楽……。お前こそ男の一人や二人連れてこいよ！あ、俺の家じゃねえけど先生許してくれるよ。」

「それはないですね。そんなこと言ってないで、早くどうぞ。瀧香様の彼氏様。」

「なっ！？」

雅楽さんは艶のある笑い声をあげながら奥へと入っていった。靖太はまだ落ち着かないように震えていた。

私は耳打ちしてやった。

「頑張つて。彼氏さん。」

私はいっぱいに笑った。靖太は嬉しそうに頬を赤らめてくれた。

四十をこえていた父だったがまだまだ若い。と私は思う。父様は背が高く、細身で私が言うのもなんだけど格好いいと思う。母様も穏やかで私は大好きだった。

「姉上。お帰り！」

私に抱き着いてきたのは、私と六つ離れている弟の千歳だった。この子はひきこもりがちで体が弱くてよく泣く子だったけれど優しい子で私の自慢だ。

「ただいま……。千歳。」

「お帰り。買ってきてくれた？」

「はい。母様。これでしょ？」

「そうそう！これ。ありがとう……。ってどうしたの？靖太くん……。？なんでここに？」

母様は頬をつやつやさせ、靖太に向いた。靖太は苦笑してる。

「瀧香様の彼氏だそうです。」

雅楽さんは父様の横に座りながら言った。靖太は冷や汗を？き始めてる。

「雅楽……。あんまりいじめてやるなよ。なあ靖太。」

「貴方ですよ。雪江兄様。」

大人二人は軽く談笑しているが靖太はそれでどころじゃない！と私の腕を掴んだ。

父様は何故か黙ったままお茶を飲んでいた。父様の横顔は相変わらず変わってない。

「えっ！？彼氏？本当？瀧香。」

「……。」。――

母様の問いに答えることができない。

「靖太兄ちゃん。久しぶり……。」。――

あまり話さない千歳だけど靖太には人見知りしなかった。靖太は千歳の頭を撫でてる。

「ああ。久しぶり。千歳。元気にしてたか？」

「雪江。」――

その時、父様が雪江を呼び、雪江を見つめた。

「夏輝ちゃんは？」

「夏輝は病院。ついてくんなって言われたんで、ついていけないで

ここに来た。夏輝も終わったらここに来るよ。いい？千鶴さん。」
「駄目って言ったってくるでしょ。もう雪江くん。そんなの聞かない！」

母様は何故かプリプリ怒りだし、どこかへ行ってしまった。

「千鶴はお前が遠慮しないこと喜んでるんだよ。まあ食事の支度が増えるから面倒くさいとは思ってると思うけど。」

「そっかあ……。さすが千鶴さん。天使みたい！」

「天使ってなんです。雪江兄様。千鶴様は人間ですよ。」

「なんだよ。雅楽ー！お前は冗談の通じねえ奴だなあ……。。」

「二人とも。部屋を移そうか。」

父様は立ち上がって、私たちに言った。どうでいい話を延々と続ける雪江たちを横目で見て苦笑していた。

「で。靖太くん。君が家に来るなんて久しぶりだねー。」

「沖田さんが、嫌がらせしたからもう来たくなかったんです……。。」

「何か言った？」

「いえ……。別に。」

靖太は私の横で正座してモジモジしていた。父様に見つめられ、私は気恥ずかしくなった。

「で？なんで来たの。」

「……瀧香と結婚したいから……。」

「瀧香さんだ。それに敬語使え。馬鹿。」

父様は持つているお茶を靖太にかける勢いだ。相当機嫌が悪いのかな。

「……俺は、呉服屋の跡取り……。言にくい話ですが、ただの士族の娘の瀧香さんを妻にすることを反対されてまして……。」

「だから？しなきゃいいじゃない。」

「でも！俺は瀧香さんを愛してます！ずっと……思ってきた！だから反対を押し切つても瀧香さんと結婚するつもりです！」

「何言つてんの？君。反対を押し切つても……。？はっ。それで瀧香が幸せになるの？」

「え……。」

「君の所に嫁いで、君の家族に白い目で見られる瀧香が幸せなのかと聞いてるんだ。」

父様の声はいつものあの穏やかな声じゃなくて私は恐怖した。

「それは……。」

「君の気持ちはわかるよ。瀧香を愛してるということは嘘じゃないだろう……。けど君は瀧香を幸せにはできない。」

「そんなことないよ！」

私は思わず声をあげていた。

「私を愛してくれる人を結婚したら幸せじゃない訳ないよ！なんなの？どうして父様は決めつけるの！？」

「……お前はその子と一緒にになりたいの？」

「そうだよ！私、靖太のこと好きだよ！恋愛対象として好きになつたよ！悪い？」

「瀧香……。」

私は靖太の手を握った。私の手は冷たいけど靖太の手はあつたかい。「靖太！家に私が迷惑なら駆け落ちでもいいよ！私を奥さんにして

！」

「あはははは！！」

私がそういった後、父様はお腹を抱えて笑い出した。

「父様……？」

「ははは……いやね……。若いなあと思って。いいよ。君たちの好きにすればいいよ。瀧香が靖太くんに嫁ぐのも駆け落ちするの……どっちでもいい。まあ駆け落ちするならちゃんと文を送ってきてね。」

「父様……。」

私は父様に駆け寄って抱きついた。すぐくうれしかった。

「ありがとう……。」

そして私は、その二日後に靖太と結婚した。父様の力で、靖太は呉服屋を継がないで済んだ。ご両親の話によればもう呉服屋はやめるそうだ。理由は聞かなかった。無事に結婚も許された。その時の父様のお話が……。向こうのご両親も気に入ったようだ。

そうそう。この日……。まだいいことがあった。

「実は……お腹に、子がいます。」

夏輝さんは夕方、家に入ってくるなり皆に言った。私はやっぱりそうかと思っていたが雪江以外と母様以外そう思っていたようだ。

「ええええ！？嘘だろ！？夏輝！」

「嘘じゃないわよ！皆の前で嘘ついてどうすんのよ！！」

と夏輝さんは雪江に怒鳴った。怖い怖い。

「わあ。おめでとう！二人とも！めでたいことばかりね。ねえ瀧香。」

「ええ！？母様なんで！？」

「そりゃ。総司さんは何でも私に話してくれますから。」

母様と父様は本当に仲が良く・・・街に歩くときは必ず手を繋いでるし、家の中でもよくくっついていてるから・・・けれどこんな短時間で伝わっているとは思わなかった。

「え？千鶴さん。瀧香ちゃん。何かあったんですか？」

夏輝さんが母様に聞いた。

「そうそう。実はね・・・。」

二人はにやにや笑いながら私たちの話をし始めた。私は、靖太の後ろに隠れた。

「・・・よくお許しになりましたね。先輩。」

いつの間にか仕事の上下関係からか雅楽さんは父様のことを先輩と呼び始めた。父様は子供のように無邪気に笑んでいる。

「瀧香が幸せになれる！って言うもんだからさ。」

「ねえ。父様。姉上出ていくの・・・？」

千歳は不安な表情になりながら、恐る恐る聞いた。

「そうだね・・・。しばらく会えないね。」

「嫌だ！会えなくなるのは・・・っ！」

千歳は、瀧香と靖太に抱き着く。

「もう会えなくなるのは嫌だ・・・。」

「千歳・・・。」

その時、父様はやれやれと言いながらこっちに向かって。

「靖太くん。明日にでもご両親とお話させてもらえる？僕が、ただの土族じゃないってことをさ。」

私はその話を初めて聞いた。衝撃で忘れもしない・・・話。

「俺の子か・・・。やったなあ。頑張ったかいあったよ。」

「雪江！うるさい！！」

相変わらず、雪江と夏輝さんは仲良し夫婦だった。

父様が言った話を聞いたとき、私は自分の子供に話そうと決意した。私は若かったけれど父様の気持ちを理解しようと考えたから……。

父様が戦に出た時の、気持ち。

仲間が死んでいった様を見た、気持ち。

一番の師を失った時の、気持ち。

全て私が経験したことのない事ばかり。

私はまだまだ平和しか知らないのだと思い知らされた。

母様も……。新選組という組織にある事情で厄介になっていてそこで父様と出会ったって言っていた。

その仲間は気の合う人たちばかりで……。とてもよくしてくれたって。

たまに来る父様の友達の斎藤さんも昔のことを少しは話してくれた。辛い過去、楽しい過去。そんなことも全部。

私、思った。

父様の嫌いな・・・土方さんも、
みんな・・・。

武士っていうものだと思う。

明治生まれの私は土族に統一されているけれど、武士にも色々ある
と思うから・・・。

私が思い描く武士っていうのは・・・。

誇りと理想のために全てを亡くしても闘い続ける・・・。

狂い咲く桜のように・・・。

母様の見てきたものを、

父様の見てきたものを、

私は見れなけれど。

私はまた違うものを見ていくだろう。

そして私の見たことや、感じたことを、子供たちに伝えていくの・・・。

未来を見ている私の子供たちはまたどんな世界を見るのでしょうか？

ねえ。新選組の皆さん。

父様を見守ってくれていますか。
母様を見守ってくれていますか。

私は貴方たちによつて生かされているのかもしれませんが……。
会ったこともないのにおかしいかもしれないけれど……。
二人を見守ってくれているのなら私もついでに見てください。
私は貴方たちのように生きてみたいと思っていますのです。
沖田総司と沖田千鶴の子として……。
強く気高く……。笑つて。

完。

64・誠の背中（後書き）

やっと終わりました。けれど次、番外編です。すぐ終わります。いかがでしたでしょうか？（駄文だよ！！）

すみません。駄文です。

武士というのがテーマでしたがちゃんと伝わっていないと思うんですが・・・（汗）

まあ最終はオリジナルで子供のお話が多いし、恋愛ばかりでw
瀧香と靖太が結婚速いのは瀧香は変な子だからです。

あの変な家族の結末はきつと笑えるものだと思います。

あの後どうなったん？とか思いますのでしたら感想をおよせください。答えます。

次回番外編。

沖田総司が闘っている場面を書きたいなあと思ってます。やらないかもしれません。

新連載は、転生です！！オリジナル要素多めで、新選組の女剣客が混じってますのでご了承ください。

転生でかSSLですね。書きたかったんですよ。ほかサイトさんとかぶる設定ももしかしたらあるかもれません。

まだ駄文だけど付き合ってくれるならどうぞお願いします！

番外編 戦場に響く獣の声

森のざわめきが耳に心地いい。そう感じ始めたのはいつごろだったか？

木々の声が聞こえる。虫の音が聞こえる。夏には葉が揺れ、冬には木だけが風に揺れる。

しかし土はまだまだざらざらしているままだ。

「はあ……はあ……はあ……。」

目の前の男は僕を見つめている。恐怖しているのか、死を恐れていないのか。しかし、男の刀を持つ腕が震えているので僕は無性に腹だつてしまった。

僕はゆっくりと足を進めた。すると男はしりもちをついてしまった。僕はイラッとしてしまって、つい、声に出していた。

「どうして？」

「頼む……殺さないでくれ……。」

信じられなかった。どうして戦場で、命を惜しむのだろっ。戦場は命を捨てるところだ。死を恐れるなんてありえない。

こんな腰抜けは死んだほうがいいのだ。そう思って僕はズダズダに斬り捨ててやった。

「あはは……。」

刀から伝わる快感の痺れが僕の全身を包んだ。この時の快感は気持

ちよすぎる。けれど、それと同時に来る虚しさと悲しさは何もなく
ただただ僕を闇へと染めて行った。

僕はその血だらけのその場で寝ころんだ。頬や髪に斬った男の血が
付いたが気にしない。

ただ、目を閉じて鳥の鳴く声を聴いた。

ああ。このまま死んでしまいたい。

近藤さんを助けられなかった自分が憎くて殺してやりたい。
けれど自分にはできない。

愛しい彼女はそれを自害を許してくれないんだ。

馬鹿だ。僕は彼女を殺せるはずだったのにできない。どうして？

こんなにも自分は弱いんだ。臆病者なんだ……。

「おい。何してる。」

「……！！」

かすかに影が見える。夕日で男の顔は見えないけれど声でわかった。
しばらくじっとしていると髪をわし掴みされ、顔を向けさせられた。
「てめえ、また死ぬつもりだったのか？」

僕は土方さんの問いに答えることができなかった。

「俺だつて死にてえよ。近藤さんがいなきや新選組はどうしようも
ねえ。」

「……うるさい……。」

かすれた声は土方さんには届いていないと思う。

「でも、俺たちは闘わなきゃなんねえんだよ。近藤さんが俺たちに
預けた新選組のためにな。」

「結局……近藤さんは死んだじゃないか。僕の気持ち知ってるで
しょ。」

近藤さんのために剣をふるったんだ。どんな奴でも斬った。仲間で
も斬った。

僕は自分でわかってた。土方さんのせいにすれば自分の気持ちが楽
だから彼に強くあたるんだって。

「甘ったれるなよ。総司。お前はもう餓鬼じゃねえ。てめえの武士道、てめえが決めて貫く。それが武士つてもんだろ。俺はもどきだがな……。お前の血は武士なんだから。」

その土方さんの声も目も優しく、僕はどうしたらいいかわからなくなってきた。とつくに僕は子供じゃない。僕の武士道ってなんだろう。近藤さんの剣になることが僕の武士道だった。でもそれを貫けないなら武士じゃない……。？なら土方さんはどうなの？僕と一緒にじゃないの？土方さんはもう決めてるの？わからないよ……。「お前は、命を奪いすぎた。お前の行く道、奪うしかないんだ。とことん奪いやがれ。」

「……………」

僕は思った。これが彼なりの慰めなのかな……。と。それなら土方さんに慰められるとは思ってもみなかった。こう思えばいいの？お前は許されない人斬りだから、とことん戦を駆けるって。

僕は笑って見せた。子供の頃のようにさ。

「歳さん。」

僕は貴方と闘って見せますよ。貴方に褒めてもらいますよ。僕らは痛みを伴いながら生きてきた。そしてこれからも……………。

「立たせてくれます？」

僕は血だらけの手を伸ばした。土方さんは薄く笑ってその手をとった。

血だらけの戦場は僕らの生きる場所だった。

戊辰戦争で目の前で土方さんが死んだとき、僕は悲しくなんかなかった。

僕は土方さんの生き様を今日この日まで見てきたのだ。

皆が誤解していても僕だけは知ってる。

血筋なんか関係ないんだ。性別も関係ないんだ。

自分の決めたことを最後までやりぬき、闘った土方さんは誰が何と言おうと武士であって……。

僕の大嫌いな大嫌いな……上司だ。

「おい。総司。何ねぼけてんだ。」

「え？」

僕が目を開けると背景は真っ白だが、くっきりと土方さんの顔があった。全身はちゃんとある。

「どうして……？土方さん……？」

「バーカ。お前の夢だ。」

「夢？」

そうか夢なのか。なら納得できるな。

「おお。本当にいた。おーい総司ー！」

「平助・・・？」

平助の姿がいきなり現れた。

「こら。いきなり出るんじゃない。」

「まあまあ。いいじゃないですか。久しぶりですし。」

またまた突如に現れた源さんと山南さん。僕は声を上げられない。

「遅いぞ。山崎。」

「申し訳ありません・・・副長。」

「山崎君・・・。」

まさか彼が現れてくるとは思わなくて僕は驚いた。

「なんで・・・皆・・・？」

「そりゃ。お前が珍しくうなされてるからだ。」

「・・・！！？」

「餓鬼が生まれんだろ。もうすぐよ。」

そうだ。千鶴のお腹には新たな生命が宿っている。

まさか自分がかつてこんなに不安に襲われたことはなくて千鶴にも言えていない。

「たくよ。お前がそれぐらいでびびるなんて笑っちゃまうぜ。」

土方さんは相変わらず嫌な笑いを見せ付けてくる。けれど僕はどうしようもなく不安なのだ。

「僕は・・・人斬りだ。自分の子に触れていいのかわからない・・・。」

「何言ってるんだ！総司！千鶴はそれでもお前を選んだじゃねえか！」
平助が叫ぶ。

「そうですね。貴方は幸せになれるのです。そんなこと気にしないでいい。子供は貴方を受け入れてくれます。」

山南さんが笑う。

「雪村君の体の方が心配ですね。沖田さんちゃんとしてくださいね。」

山崎君は少しずれてる。

「とにかくだ．．．びびるんじゃない。俺たちはお前をちゃんと見守ってるよ。」

優しく皆笑ってくれる。僕は泣くほど嬉しくなった。

「ありがとうございます。」

目を閉じ、頭を下げて、もう一回目を開くと、そこは家の天井だった。

「．．．!？」

さっきの世界はもう消えてしまったのか．．．僕は一人溜息をついた。

僕は腕の中に千鶴がいたことに気付いた。千鶴はすやすやと眠っている。

僕は彼女の頬に触れ、そのまま頭を撫でた。

（僕は父親になるのか．．．）

信じられない。僕は父を知らない。本当になれるのかな？

そんなことを考えていたらまた怒られそうだ。

僕はまだまだあちらに行くことを許されないようだ。

今行ったら追い出されそうだな．．．

僕は今更ながら彼らと出会えてよかったと思った。

近藤さんは現れてくれなかったけれど．．．

近藤さんも見守ってくれている？

僕は生きていくよ。

貴方たちが僕を生かしてくれる、千鶴が、生まれてくれる子が．．．

僕はそれに甘えて生きてみるよ。

辛くても、死にたくても．．．

たとえ、僕が嫌いで死ねという人がいても．．．

まあ文句は言えないけどね．．．

僕は幸せになりたいと思ったよ。
ありがとう。

彼らに心の中で礼を言いながら、
僕は一人泣き続けた。

番外編 戦場に響く獣の声（後書き）

終わりました。番外編は灌香が生まれる前の総司を書きたくてですね。。。

次回は学園ものです。もちろん薄桜鬼で！

オリジナル多めで、土方さんが生徒に手を出してるね・・・みたいですけど健全です（笑）

まあまたちょびちょび連載するんで、よかつたら見てください。

タイトルは仮に決めてるのが、Homines id quod

volunt creditとかですかね？まだ決めてないです・

。。。

ではまた！。

番外編 知らないことこそ一番の恐れ（前書き）

お久しぶりです。春桜です。

最近は学園の薄桜鬼を連載してます。最近詰んでます。最終的にどうするか迷ってるかぎりです。

えー。今回から、というかいったん終わったはずが番外編を書きたくなりまして。新しいのはすぐ終わりそうなのでこちらに書かせてもらいます。

最初は灌香のお話というか、明治政府のお話です。無知ですがよろしくどうぞ。

二部目は沖田総司の初恋です。以前書いた内容とは異なる場合があります。

最近気づいたのですが総司の父は生まれる前にいないと思い込んでいましたが、それは間違いで四歳の頃でした。

番外編 知らないことこそ一番の恐れ

明治九年七月下旬某日。

「おい。沖田。」

「・・・・・・。」

真夏日と呼ばれる今日、沖田瀧香はいつもと同じ通りに塾に行った。本を読んでいるところに、明人という、意地の悪い少年が呼びかけてきた。

瀧香は本を読んでいるのに邪魔されるのが気に食わなかった。面倒くさそうに明人を睨むと、また本に目を戻した。

「俺様を無視か？負け犬。」

「・・・・・・は？」

何が負け犬なのかわからない。すると後ろの二人がくすくす笑い出した。この塾では金持ちが多く一番貧乏なのは瀧香だった。

「お前は負け犬の血をひいているから負け犬だろ？なあ？」

「ああ。」

「ほんと。ほんと。それもマジ馬鹿な犬！！」

ゲラゲラと三人は瀧香の前で笑いだす。瀧香は眉を動かした。歯をギシギシさせ、動かすと血が溢れた。何故こんな気持ちになるのだろう。胸が熱い。

「負け犬って何？馬鹿な犬って何？」

「ふん！お前の父親のことさ！新選組だって？」

その新選組という名を知っている子供はそう多くないがこの塾では知っているものがほとんどで皆瀧香に向いた。

「あの・・・有名な人斬り集団？マジ？」

「え・・・。なんか壬生狼とか呼ばれて煙たがれてたんだよね・・・。」

「結局勝てなかった。なるほど負け犬か。」

次々に皆が同じようなことを言い出した。

瀧香はいつの間にか、本を閉じ、立ちがあっていた。

「なんだ？貧乏人。何か文句でも？」

明人が高笑いを続けている。瀧香は左目を髪で隠れさせたまま右目でじつと明人を見つめた。

「ふふん。俺は本当のことをみんなに言っただけだ！なあ皆！なんでもこいつが貧乏だと思う？こいつはな、人を殺しまくった男の娘！そして明治政府に負けた男の娘！こんな奴、家族もろとも死んじゃえばいい。父上が言っていたよ。沖田総司は師も誰も守れなかった弱い侍！！最悪最低の侍だつてさ！！あははは！！」

その瞬間少しの笑いがおこったが一瞬で終わった。何故なら瀧香が明人を押し倒していたからだ。

きゃあ！と女子の悲鳴がこだました。そんなもの今の瀧香には何の害もなさない。

「なにを・・・！？」

瀧香は何も言わず明人を見つめた。明人は知らぬ間に、その不思議な瞳に惹きつけられていた。それでも瀧香のことは好きにはなれない。

「なんだ！？俺は事実を言ったただけだろうが！！」

明人の吠えは中々迫力がある。

「事実？そんなのお前にはわかんないよ。あんたの父親も、このここにいてる皆も。知っているのは・・・。」

自分も知らない。自分は何も知らない。瀧香はちゃんと理解していた。

「戦を経験し、戦を見た人だけだよ。あんたの父親は高みの見物。ただの大名でしょ？人も殺したこともない奴が私の父をそんな風に言う権利ないよ。」

「う、うるさい！お前おかしいぞ！お、俺様にこんなことする訳・・・。」

「だから、私は壬生狼の娘だって。」

瀧香がじりじり顔を近づけてくるのでついに周りが止めに入った。腕を掴まれた瀧香は。

「何すんの？」

「お前明ちゃん殴ろうとしただろ！！？」

「してないよ。離してよ。」

瀧香は舌打ちして不意に周りを見渡した。皆、瀧香と昨日まで一緒に遊んでいた。大好きな父と共に・・・子供たちも父を慕っているのに。

幕府の言いなりの金持ちばかりだから・・・。沖田総司の娘は嫌われるのか・・・。

瀧香はこの怒りをどうしたらいいのかわからなくなった。

「何やってんだ！お前たち！！」

一番最年長の靖太と、大友という塾の講師が入ってきた。

「どうしたのです！？」

大友が、瀧香たちにつけよつた。瀧香は勢いよく手をふり、掴まれている手をはらって、ついでに。

パンッ！！

その音が部屋に響いた。

瀧香が明人の頬を思い切りぶつたのだ。

瀧香は無表情な表情を変えず、出て行った。

「おい！待て！瀧香！！」

靖太は瀧香を追いかけた。

「待てつて！瀧香！何があつたんだ！？」

「靖太には関係ないよ。たいしたことないし。」

「たいしたことないわけねえだろ！お前が喧嘩おこすほどのことだろうが！！」

靖太は何故か怒っているようで瀧香の細い萎れた腕をわし掴みする。瀧香が振り返った瞬間、靖太は目を疑った。彼女が涙を流しているのだ。確かに……。

「瀧香……？」

「こんな顔、靖太だけには見せたくなかったなあ。」

瀧香は可笑しそうに笑った。靖太はどうしたらいいのかわからない。

「私は、大丈夫だよ。だから塾戻って？ね。」

「ほっとけるか！瀧香。話してくれ！頼むから！」

靖太があまりに必死なので瀧香は口をバツにした。

「靖太は優しいすぎるのかも。」

「は？」

瀧香は靖太を軽く抱きしめるとすぐに離れ、もう振り返らなかった。ただ一言。

「私は、それでも生きていくしかない。」

それが変えられぬ今と現実だった。

「瀧香様〜？瀧香様〜？」

瀧香の耳に第二の居候一条院雅楽が呼んでいる声が届いた。けれども今の瀧香は誰にも話す気になれない。夕方だったので暑さはマシだった。雅楽いくら呼んでも瀧香が出てくるはずはない。だって瀧香は屋根の上に座っているのだから。

「千鶴様。瀧香様がいないのですが……。もう夕餉の時間ですが。」
「うん……。総司さんが、今、大友先生からお話を聞いているの。それと関係があると思う……。」

「探しに行ったほうがいいのでは？」
大友先生が状況を話せるとは思えなかった。瀧香は彼のことは嫌いではないが理解の足りない人だと思う。厳しくもなく、甘くもなくただ子供の親に怯えている若造……。にしか瀧香には見えなかった。

「大丈夫。瀧香は総司さんに似ているから……。」
（父様に似てたら大丈夫なのか……。な。）

瀧香は自分がよくわからなくて首をかしげた。

「たしかに。瀧香様はお強い方ですね。私もそう思いますよ。」

「雅楽ちゃん……。」

二人は遠ざかって行くのもう声は瀧香には聞こえなかった。

「そうですか。瀧香が明人君を殴ったのですね。」

「……そういうことになります。すみません。私がない間に何か起こったみたいで……。子供たちに聞けば、詳しいことは言おうとしなくて……。」

「……。瀧香にはちゃんと謝らせに行きます。先生。お忙しいところわざわざありがとうございます。」

沖田は顔色も何も変えず微笑んで、年若い大友に丁寧に礼を言った。
「私に力がなくて……。すみません。私は元々百姓の子。四民平等と言っても大名の息子や商家の子に強くあたれず……。」

「怖いのですか？」

「え？」

沖田は目を少し細めて大友を見つめた。

「いえ。なんでもありません……。それより先生？」

「はい？」

沖田は傍に眠っている息子の額を細長い指ですべらせていく。すやすや眠っている千歳は少し微笑む。

「僕は、将来この子に大友先生の塾へ行かせようと思っています。

よろしいですか？」

「そんな……。待ってください。沖田さん。私はまだまだ三流です。父の名をつかっているだけにすぎず……。それなのに……。」

大友の父親は有名な小説家だった。大友はその名を使い、塾を開いたのだと言う。それほど自分に自信がなかったのだろう。

「いいえ。そんなことはありませんよ。」

沖田は優しい笑みを浮かべた。大友はこの人のことをよく知らなかった。

けれど自分の家は尊王派で、佐幕派の沖田とは違った。
新選組という名も有名だし、強い人斬り集団ということしか知らなかった。

そう。沖田総司という人物を知らなかったのだ。

「あなたは、その頭脳を独り占めしているんですよ。あなたは自分に自信がない。あなたは子供たちの手本となる方だ。あなたは色々なことを考えすぎているんですよ。特に、未来の不安をね。」

「……！」

ズバリ言い当てられ大友の心臓は高鳴った。

未来のことを考えると怖い。

自分はもう24になるというのに嫁ももらわず塾もちゃんとできているのかわからない。

仕事は教えているだけであとは親に食わせてもらっている。

いつまでこんな生活が続くのかわからない。それこそが一番の不安だ。

「今はそんなくだらないものは必要ありません。そんなことを考えていたら死ぬだけです。特に僕はあなたの年には毎日人を斬っていた生活をしていたのでね。」

恐ろしいことを笑顔で言う沖田。でも大友にはわかった。この人は自分には経験のしたことのない死というものを毎日経験していたのかと……。

「あなたもまだまだ学ぶところがあるようですね。先生。千歳が大きくなつてあなたのところに行くときには、もっと厳しくなってもいいんじゃないかな？」

「厳しい……。」

大友は優しくて有名。ゆるくて有名なのだ。教育の仕方がよくわかっていない証拠だ。

周りの年配の塾、および寺子屋講師は眉がきつくて厳しい人が多いけれど大友は悪く言えばつねに人に媚っているのだ。

「すみません……沖田さん。私もつと成長します。本当にすみません。」

「謝らないでください。瀧香のことはこちらでなんとかしますので明日はいけないかもしれません……。」

「わかりました……。失礼致します。」
大友は晴れやかな顔をしながら家を出た。鼻水が着物に垂れたのは秘密だ。

（私知らないんだ。）

今日、言われてはつきりわかった。自分は無知だと。
戦を知らない。父が何をしたかまだちゃんと知らない……。

そして自分の存在を理解しようとしていない。

明人を殴ったことを後悔していない。

だって父親をあんふうに言うなど許せない。

でもいけないことだったとは思う……。

「……………む……………」

「瀧香ちゃん。何してんのかな？」

「げっ！？雪江！」

どうして屋根の上に雪江が昇ってきたのかは知らないが、何故か隣にいた。

「何よ。げっ！？って。失礼な奴。」

雪江は瀧香の頬をつねって笑顔で叱ってきた。いつでも雪江は笑顔なので瀧香は雪江のことが好きだった。

「どうして……………？雪江。いつもこの時間には働いてるのに。」

「ああ？お前なあ。今日は、朝から昼まで。俺はな。お前がぐーす

か寝てる時から働いてんだよ。それに！今は屋根の修理頼まれたんだ。」

「だ、誰に？」

「先生に決まってるんだろ。たくよ。あの人はいつまでも人を使うんだから……。」

そういうと、雪江は工具を持って、瀧香から少し離れたところへ歩いて行った。剥がれている瓦を新しい瓦と取りかえる。

（父様は……さすがだな。）

瀧香はふつと笑みを漏らした。

しばらくすると雪江は作業が終わったらしくこちらに戻ってきた。

「ふう。終わった。で。瀧香。」

「ん？」

「なんでお前、笑ってないんだ？」

「え？」

「なんでだ？」

「なんでって……。」

瀧香は自分の声が震えているのに気付かなかった。雪江はすべてを見透かしているような目で瀧香を見ている。

「だって。お前は人一番笑う子だ。まあ。お前は結構千鶴さんに似て真面目だけだな。辛いことがあってもお前は艶のある顔で笑うんだ。」

知っているという顔で雪江はニツコリ微笑む。

「あのね……。」

瀧香は今日あったことを話し始めた。

「なるほどね。お前がいじめられてんのは知ってたけど今日はひどかったな。」

「うん……。」

「お前は大人しいからな。無視し続けてたけど今日の話は無視できねえはな。」

瀧香は頷く。

「先生のこと……負け犬か……」

「私知らないの。父様が新選組で何をして、何を見てきたのか……」

「俺も知らねえ。先生つて変ていうか、あれじゃん。あの性格だろ？だから辛いことないように見えるんだよな！」

雪江の通りだと思う。

「けど。千鶴さんもあんまりいい話じゃないって言ってたな。戦に負けたのは事実だし……」

「……」

「でもな。瀧香。」

夕日が沈んでいく瞬間に、雪江はその瞳を輝かせていた。

「先生は負け犬なんかじゃなく、侍だ。関係ないんだよ。勝敗なんか。」

雪江はいきなり立ち上がって、頭をかきながら。

「瀧香。降りるぞ。」

「うん。」

と言って手を差し伸べてくれた。

番外編 知らないことこそ一番の恐れ（後書き）

追記です。これは明治九年七月頃のお話です。書き忘れます（泣）

番外編 一緒に歩いていければ

部屋ではもう食事が用意されていて、瀧香はもじもじしながら座った。

静かに真正面に佇んでいる沖田は瀧香をじっと見据えている。

「わー。腹減ったー！もうくたくただよお。せんせー。瓦くっつけておいたぜ？」

「ああ。ご苦労。」

雪江が腰をたたきながら言うと、沖田は微笑む。

「ごめんね。雪江くん。此間の大雨で瓦がとれちゃったから……。雪江くん忙しいの頼んじやってありがとうね。」

千鶴が笑顔で言うので雪江はいやーと照れくさそうに笑う。

「雪江兄様。後で、私の稽古見てくださいよ。今日、沖田先生に褒められたんです。」

雅楽はすっかり沖田とも打ち解けていて雪江に嬉しそうに話した。

「そっかー。俺全然褒められたことなかったけどなー。」

「ふん……。お前は、雅楽より駄目駄目だったただだよ。雅楽はすごいから褒めてるんだ。」

「はあ！？ひでえな！先生！ていうか絶対、雅楽が可愛いからだろ！！！」

小柄な雅楽は最近きやつきゃつと笑ってかわいらしい。瀧香は自分の頬をつねてみた。

自分はそんなに可愛いくない。と思う。誰かに褒められたこともないし。

否、近所の人はお世辞で言ってくれる……。が塾の人間はそんなこ

と言わず、虐めてくる。

別にいじめが辛い訳ではない。今日はきつかったが。

瀧香は思う。もしかしたら父は、自分でなく、雅楽のほうが可愛いのもかもしれない。

「……………」

瀧香の視線は沖田にあったが、今度は千鶴の手の中にある千歳にいった。

千歳はまだまだ小さい。自分がもっとしっかりしなくてはならない……………。

けれど、姉は自分じゃなく、雅楽のほうがあっているのかも……………。

「瀧香。」

はっとして顔を上げると、沖田が優しく笑んでいる。

「話があるんだ。後で。」

瀧香は黙ってこっくり頷いた。

食事が終わり、千鶴が片づけをし、雅楽と雪江が道場に行くと。

沖田が千歳を抱いて瀧香の横に座る。

縁側では涼しい風が吹いて夏なのに寒いくらいだった。

しかし気持ちがよくて瀧香は目を閉じた。

「瀧香……………。今日ね。大友先生が来て、話してくれたよ。」

「・・・・・・・・。」

「詳しく聞かせてくれる？どうして……。殴ったの？」

瀧香は目元が歪んできたのを感じた。

「父様は……。悔しくないの？」

「えっ？」

「父様は明治政府に負けて……。悔しくないの！？」

自分でも驚くほど大きな声が出てびっくりした。その時、沖田の腕の中の千歳が泣き出した。

「ああ。もう！何やってるんですか！総司さん！」

千鶴が顔色を変えてこちらに駆けてきた。

「ごめん。」

子供の扱いがうまい沖田だ。下手なのは瀧香の方で沖田が悪いわけではない。

「か、母様……。怒らないで……。。」

「怒ってない。千歳。おなかいっぱい疲れちゃったのよ。じゃああちらでおねねしましうねー。」

千鶴は千歳に微笑みながら部屋から立ち去った。瀧香を見る優しい

笑顔はいつもと同じで瀧香は思わず笑む。

「瀧香。話の続きだけど……。。」

「は、はい……。。」

「君は、悔しくないのかと、聞いたね。」

「うん……。。」

「悔しくないと言えば嘘になるよ。僕は新選組っていう人斬り集団の組長で、人を殺しまくった。それは許されることじゃなくて……。。」

父が人をその手で殺しているということは知っていた。こんなに優しい父が人殺しということをいまだ自分は信じられない。わかっていても想像できないのだ。

「けど、僕は役に立ちたくて……。それはもう人を殺すことではできなかったんだ。」

「うん……。」

沖田の言うことの意味が少しわかって瀧香は頷く。

「僕は大事な人のため、その人のために剣を振るってきたけど、僕の力がなくて、その人が斬首されちゃったんだ。」

「……！」

「その時……。僕が大嫌いなあの人にくつついてた上司を責めた。何故、あの人を守れなかったのかと……。けどね。それって筋違いなんだ。あの人が悪いんじゃない。守れなかった僕が悪い……。僕は逃げてた。自分が憎くて憎くてたまらなくなった……。そして僕は自害しようとした。自害っていうのは自ら命を絶つこと……。」

「で、でも父様は……。」

「うん。見ての通り。生きてるよ。僕が落ち込んでいたときに……。支えてくれたのが君の母上だよ。」

沖田が笑顔になって言う。瀧香は母と父が仲がいいことを知っている。いつも二人は笑顔で……。

「彼女は僕を救ってくれた。僕が死んだって喜ぶ人なんていないから……。僕はなんか悲しくなってるね。この子は泣いてくれるのにどうして死ぬことを選ぶのかと……。どうせ死ぬなら戦場の方がいいと思った。そして僕は彼の信じた幕府を守るため、最後まで戦った。悔いはない。負けたって僕の志は最後まで折れなかったんだから。」

「……。」

「生き残って、今に至る。誰かに敗者って罵られても僕はかまわない。僕は戦には負けただけど自分の信念を持って生きてる。それだけでいいんだよ。それに、とっても幸せな日々を送っているし。」

その時、瀧香にはわかった。父は悔しがっていない。確かに自分の大切な人を失い、守れなかった悔しさはまだあるだろう。けれど戦いを戦いぬき今でもある志を掲げ生きていることはいつまでも誇ることだろう。

だからこそ、瀧香は聞きたくなった。

「政府のこと……どう思ってるの？」

「ん？明治政府のことね……。瀧香はわかるかわかんないけど、明治政府は昔の倒幕派の人たちがしきっているんだ……。徳川將軍がずっと治めていた政を天皇にさせるっていうこと。それが現実になっている訳。僕は佐幕派……。政府には煙たがれる存在で、消したい存在でもあると思うよ。」

「え？どうして……。？なんで父様が消されなきゃいけないの？」

「僕がたくさんの人を殺しているからだよ。明治政府中心にとって大切な同志を僕は殺してる。人間は感情を持つ生き物だから憎んで当たり前だろ？」

「そ、そうだね……。」

瀧香はぎこちなく答えた。

「僕は明治政府はまだまだ学ばなければならないと思う。あの戦が始まったことは仕方がないことだと思う。時代が変わるのだから。僕はそれに流されうまいように生きればそれでいい。瀧香たちと一緒にさ。」

そう言う父の横顔が眩しく見え、凜々しくも見えた。

瀧香は思った。自分も……。

父のように強く生きたいと。

瀧香から見れば父は不満を不満だと思わないようだ。

今の時代を受け止めて、それなりに生きればいい。

確かにまだまだ不安はあるし、政府も安定しないけど、家族と生きられればいいと……。

「雪江も……。雅楽さんもそう思ってるかな……。？」

（私たちと生きたいと思ってるのかな……。）

「雪江も、雅楽も普通の人とは違う人生だからね。政府をどう思ったり……。してるのかわからない。あの戦で命を落とした人も、大切な人を亡くした人もたくさんいる……。きつと同じだよ。恨んでも、憎んでも、どうにもならない。今を強く生きていくしかない

い……。人って案外強いから大丈夫だよ。瀧香だって生きてる、でしょ？」

とほけるような笑みに瀧香は喉を詰まらす。そして涙をそっと流した。

やっと泣けた。

「瀧・・香・・？」

久しぶりに娘が泣いたので沖田は戸惑う。

「わたし……。っ！別に自分がどうなるうがよかった！人に……。嫌われてもよかった。だって父様たちがいるからっ！わたしっ！今日明人を殴ったのは父様が負け犬呼ばわりされてどうしても許せなかったから！！わたし言い返せない。だって知らないんだもの。父様が生きてきた戦を……。でもわかったよ。少しだけなら、私にもわかったよ。」

袖で涙を拭くと少しだけ元気になれた。

「父様は負け犬なんかじゃない。雪江の言う通り本当の侍！私はその娘だから立派な女になる！」

沖田は嬉しくて瀧香を優しく抱きしめる。

「ありがとう……。瀧香。」

優しくされると泣きたくなる。瀧香は笑いながら沖田の胸で泣き続けた。

翌日。

「明人。」

塾の朝一番。瀧香は昨日殴った明人の傍へ行った。明人は何も言わず、こちらを睨んだままだった。

「昨日は殴ってごめんなさい。」

頭を下げた瀧香を見て、皆がざわついた。あの瀧香が頭を下げて謝るなどありえない。

「・・・俺こそすまなかった。」

それだけ明人は短く言う。瀧香は笑顔になる。瀧香の顔にドキリとしながら明人はうつむいた。

「おい・・・。瀧香。お前、どうした？」

「え？何がー？」

いつもと様子が少し違う瀧香を見て、靖太は心配になった。

「いや。お前が明人に謝るとは思わなくてさ・・・。」

「うん・・・。私もそう思ってた。でもね。」

空を見上げれば青々した緑の樹がたくさんある。瀧香は空気を肺に吸い込むと。

「私たちは、誰かに愛されて生きているから。私も、明人を憎みたくないと思ったの。私も知らなかったのは悪いと思ったし。」

「はあ？知らないことが悪い訳ねえだろ。お前幾つだったの。」

「うるさいなあ。靖太は。」

靖太は本当に瀧香のことを心配していてくれるから瀧香は好きだった。

夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ、春が来る。

季節が巡るように時代も巡る。

私たちは、それに流れて生きるしかない。

過去や、未来の不安を考えたらきりが無いけれど。

前を向いて笑って生きられれば

それだけでいい。

番外編 一緒に歩いていければ（後書き）

えー。あんまりうまく書けませんでしたが残念です。

ようするに沖田総司が明治政府をどう思ってたかというお題です。瀧香はそれの引き立て役だけです。

私が思うに、明治政府を悪いと思っている訳ではないと思います。仕方がないというか。ペリー来航で外国勢力が怖かった徳川幕府は力を持つ人たちから見れば弱く見えて当然です。

斎藤も維新後は政府に仕えていた訳ですから。

きっと自分の信じるものがちゃんと見えていればどこに行ってもいいのです。ただ日本という国を見るのに政府がよかったのかな・・・とか思っています。

沖田も、今の幸せな生活を政府が守ってくれるのなら憎む必要も何もないと思います。負けたとしても彼は正真正銘の武士だったのですから。

では次は沖田総司の初恋の物語です。

前と違うようになってるかもしれませんが。

また後日。

番外編 怯える瞳は嘘を言う（前書き）

間違ってます。京言葉とかなんぞ。名前は実在の人物ですが関係ないです。ので特に相手の方は。

番外編 怯える瞳は嘘を言う

ある日のこと。

その夜の沖田夫婦の秘め事が終わった時、千鶴は横にいる沖田に抱き着きながら呟く。

「総司さん……。」

「なあに？千鶴。」

まだまだ若々しいこの夫婦は新婚の時のように仲が良く、沖田は優しく愛する妻に微笑んだ。

「総司さんの初恋ってどんなものだったんですか？」

「何聞くの。いきなり。」

千鶴が頬を赤く染め聞いてきたので沖田は少し戸惑う。

「総司さんと……ずっといますけど聞いたことがなかったから……。だって私、さっきしたことを総司さんが他の女の人としたと思うと……。」

「嫉妬してくれるの？」

千鶴は目を少し歪ませ、頷く。沖田は堪えきれず千鶴に口づける。全く、こんな顔をされたらたまったもんじゃない。

「嬉しいなあ。嬉しくてもう一回したいけどやめるよ。かわりに僕の初恋の話……聞きたい？」

「き、聞きたいです！」

沖田は目を伏せ、ゆっくりと語り始めた。

それは・・・、壬生浪士組を結成して、京に上陸して二か月ぐらいたった頃だったかな。

新選組が出来上がる前ね。

桜が満開の頃・・・四月の初めに、近藤さんと土方さんと源さん。源さんのお兄さんの松五郎さんと吉田屋って言う揚屋に行くことになったんだ。

僕は女の人とかどうでもよかったんだよね。遊郭なんて行っても値段が高いくだけで僕には何の役にも立たない。なんだけど。

「総司！色街に行くぞ！ほら、支度しろ。」

「勘弁してくださいよ。近藤さん。」

近藤さんが僕をひっぱるものだから僕は行きたくなかったけど仕方

なかった。嫌な顔をしながら立ち上がると。

「ふん。そんなだと男色家だとか噂たっちまうぞ。総司。」

土方さんが面白そうにからかってくる。僕は負けじと返してやる。

「ご心配なく。ていうか土方さんみたいに女癖悪いのもどうかと思いますけどね。」

「俺は女癖悪いんじゃない。あつちから寄ってくるんだ。仕方ねえだろ。」

「はいはい。」

僕は土方さんの自慢げな言い方を無視して、さつさと草鞋を履いた。

吉田屋は結構有名な揚屋なんだ。後に、新見錦っていう土方さんの前の新選組副長が切腹させられた場所。この時点ではまだまだそんなことわからなかったけど。

近藤さんは結構出入りしてて一見さんじゃなかったからすんなり入れたし、座敷を用意してもらったんだ。さすがに一番位の高い太夫は呼べなかったけど。

京に来て、まだそんなに日がたつてないのに入れたのは芹沢さんの力が大きかったと思うよ。まあどうでもいいんだけど。

座敷では華やかで、おいしそうな料理が次々運ばれてさ。僕の人生で初の色街！って感じで結構嬉しいっていうか男だなとも思った。おかしいけど。

僕はお酒が好きだから、ずっとそれ飲んでた。近藤さんに酌したり・
・。ああ土方さんは下請の女の子たちがほっておかなかったみたい
いで腕掴まれてた記憶あるなー。

「失礼します。」

座敷に入ってきた遊女は二人。一人はお鹿っていう店の看板遊女。
普通会えないんだけど近藤さんの人柄を気に入ってか会いに来てく
れたんだ。まあ横にいる・・・彼女が初恋の相手だよ。

「お鹿さん。わざわざ会いに来てくれたのか。嬉しいなあ。」

近藤さんが頬を赤らめて言うとお鹿も微笑む。

「いいえ。近藤さんたちにはお世話になってるし、噂の男前様にも
お会いして見たかったんです。禿の子たちまで噂しとるんですよ？」

お鹿はその美貌を土方さんに向ける。土方さんったら酒に酔ってる
のか知らないけどにやつと笑うんだ。僕はそれを見て吹いちゃった。
「井上さんご兄弟も吉田屋をご贔屓にしてくださって感謝しとりま
す。」

お鹿が頭を下げると、横にいる彼女もぎこちなく下げる。源さん兄
弟は

「いいえ。我々は楽しみで来てますからね。」

つて昔から本当、源さんたちは優しい。

「そつとすか。」

お鹿はにこつて笑う。その時、僕が聞いたんだ。

「その子は？」

指差して聞いたもんだから指差された子はびくつとしちゃってね。
怯えたようにこつちを見る。

お鹿は微笑して。

「ああ。この子は天神の・・・ほら、挨拶しいや。」

お鹿はその子の背中をぼんと叩く。

「お、お初と申します・・・。どうぞよしなに・・・。」

頭を下げたお初はその瞳をゆらゆらさせながら僕を見る。僕は今までにない感覚に襲われた。なんていうのかな。痺れたような感じ？お初は、大きな目で、色が白くて、小さくて、唇は厚い感じで頬も大きくて子供みたいな顔立ち。赤ちゃんをそのまま大きくしたような。

豪華な着物はさぞ重いようで僕によって酌してくれても手が震えてさ。本当に遊女？って思ったよ。でもそこいらの子じゃ天神なんてくらいにはつけない。この子は嘘をついているのかなとも思った。お初は一言でいうと初々しい子なんだ。

「すんまへんなあ。この子、不器用やさかいあんまり酌もうまないけど・・・。お兄さん、いける？」

僕の指に少しお酒が零れたのを見て、お鹿は丁寧に言ってくれる。

僕は彼女の指が震えていたのを見たのできつく言えなかった。

「大丈夫ですよ。ありがと。」

僕は二人に礼を言う。お初はにこつと微笑んだ。

その時から僕は彼女から目を離さなかった。否、離れなかった。

なんだかんだで楽しく皆でわいわいやる。座敷にはお初しかいないし近藤さんたちも泊まる気はなかったから早くに帰ることになった。でも僕は帰る気になれなかった。

お鹿がいなくなって皆が帰るとき、土方さんは言ったんだ。

「何だ？お前。泊まる気なのか？」

「・・・・・・・・。」

見破られたのがしゃくだった。僕が僕は頷いた。

「本気か？総司。」

珍しいなと近藤さんが言うから少し気恥ずかしくなった。

「お初ちゃんと話したいんです。」

と言うと、お初は真つ赤な顔をした。土方さんは薄く笑って

「ふん。なら今夜は帰ってくるなよ。感謝しろよ。総司。天神位の遊女と寝れるなんてよ。近藤さんのおかげだ。」

「そうですね……。ありがとうございます。近藤さん。」

僕、やっぱり恥ずかしがらない性格なのかも。揚屋に泊まるのつて島原と同じです。すごいお金かかるんだけど……。僕も一樣武士の子だからそれなりの蓄えはあったし。

その時からこの子の身請けを考えてたと思う。

「なんでどす……。？なんで……。？」

お初は僕を歪んだ瞳で見るんだ。遊女のくせにさ。まるで僕に抱かれるのが嫌みたいに。

「なんでつて、何？」

僕が腕を掴んで引き寄せるとついには涙を流すんだ。店主に言ったらお初は追い出されるかな？

「わたし、いやや。あなたもわたしを遊女としかみてないやろ！？そうに決まってる！」

今思えばこの問いつて遊女としてありえないでしょ。天神の位のくせに。何回も抱かれてるくせにさ。

「そんなことないよ。僕は君をそんな風に見てるつもりないよ。僕

は遊女とか好きじゃないもん。一緒に寝るなんて御免だよ。」

「なら……。」

「だから僕は君と話したいんだよ。遊女のお初じゃなく、ただのお初にさ。君のこと知りたいし、僕も知って欲しいから。」

そう純粹に思ってたんだ。恋って不思議だな。僕の考え以上の方向に行ってしまうから。

「お侍様……変わってる。お侍様は、その刀でわたしたちを殺してしまうから……こわい。でも賣方様は……。」

お初は不安そうに言うんだ。僕の刀を見ながら。死を恐れるように。「怖くない。」

僕を見る目は恐ろしいと言ってるのに口ではそんなこと言う。僕はその矛盾を愛してしまった。

「そっか。怖くないのか。初めてかも……。そんなこと言われるの。」

「そうですか……。」

「君の話、聞きたいな。ねえ。聞かせてくれる？」

僕は彼女を引き寄せ、彼女の香水の香りをかぎながら、彼女の話聞いた。

彼女は小さい頃からこの吉田屋に居て、いろんなことがあったそうだ。

病で死んでいった姉たち。男に馬鹿にされた屈辱。

位が低ければそれなりの奴らが来るからね……。

天神になった今は身請け先に悩んでるとかさ……。

一日じゃ足りなくて、僕はその日から吉田屋に通った。

毎晩泊まるのはお断りだから、泊まりはなしで毎日毎日。

僕が見てきた話をして、彼女が見れないものを話した。

楽しくて……。その頃の僕はお初のことばかり考えていたと思う。

名前を呼んでもらいたくて……。

僕はついに四月二十二日に彼女を身請けした。

番外編 怯える瞳は嘘を言う（後書き）

身請けしないと名前は呼んでもらないそうです。間違ってるかもです。苗字は大丈夫だと思います。もう少し続きます。

番外編 同じ月を見ているだろう貴方に誓う（前書き）

なんか微妙です。いやー。ほかに番外編は今のところ考えてないです。

番外編 同じ月を見ているだろう貴方に誓う

「すごいなあ。総司様は。わたしの知らんことをなんでも知ってはるんやなあ。」

「そんなことないよ。」

お初が酌してくれながら僕に言うもんだから僕は否定する。確かに彼女の境遇を考えたら僕はいろんなものを見てきて知っているのかもしれない。

「わたしは・・・総司様が怖くないけど・・・お侍様はまだ怖いんや。」

初めて出会ったときに見せたあの瞳を思えば頷ける。僕を怖がっていたから。でも身請けした今は僕を怖くないって・・・きつとそうなんだろうね。

「遊女になる前は普通の百姓だったんですよ。けど・・・おつかさんもおつとさんもお侍様に斬られてしもた。お侍様を怒らせてしもたんどす・・・でもな・・・なんで死ななあかんかったんやろ・・・いまだにわからんのどす。」

悲しげに言う彼女を僕は抱きしめる。彼女はここから出られない。何処にも行けない。身請けしてしまった今、彼女には僕しかない・・・僕は彼女を愛していたから彼女に泣いてほしくなかった。

遊女のくせに何回男に抱かれてもやっぱり嫌だったんだって・・・

悲しかったんだって。

女としか見ていない男の目は嫌いだったんだって……。

彼女の辛さや、悲しみはなんとなく僕にもわかるよ。

彼女、本当の本当に……身を売りたくなかったんだろうな。

できるならここから連れ出してやりたいけど……。

今の僕にはできない。

僕はいまだに無力なままだ。

「総司様……。私を愛してくださいますか？私を……。ただの

お初として……。」

「じゃあ君も僕を好きになってよ。ただの沖田総司として……。」

「

その夜、僕は彼女を大切に抱いた。遊女としてでなくお初として……。

毎日、たわいもない話をして、楽しくて、けど僕には時間がなかった。

芹沢一派のこともあつたし、攘夷派のこともあつて、幕末の時代が急速に動いていた。

僕も何度命を奪われそうになったか、奪ったか覚えていないぐらいの数だよ。

そんなときに僕だけ女のところばかり行っている訳にもいかないよ。仮にも色街だしね……。

だんだん彼女と会えなくなっていっただけだ……。

文久三年の八月と言えば、新選組ができた時だ。

芹沢さんの多分……おかげでできた。壬生浪士組の活躍が將軍様に認められてね。

その時かな……。

「総司様……もう会いに来ないで。」

と彼女に言われたんだ。なんで？僕は訳がわからなかったよ。だって彼女を傷つけるようなことした覚えがないんだもの。

「どうして……？」

「あなたが好きだからもう会いたくないんです……。だってわたし悲しいんやもん……。なんもできんもん……。総司様に何か差し上げること……。子を作ること……。御飯を作ること……。

・わたしには総司様の役には立たないんです・。ごめんなさい・
・。・。・

彼女はもう僕の思った彼女ではないのかもしれない。彼女は弱い。思うに僕らはお互いを愛しすぎたのかもしれない。そして壊れてしまったんだ。

彼女はここから抜け出せないから、けれど僕が好きで仕方ないから・

・。・。会わないほうがいいと思ったって言った。

僕もそう思った。彼女を連れ出すことができない。

全て捨てて彼女を守ることできない僕。

近藤さんの刀としてその手を汚した僕。

その手で彼女に触れる僕。

結ばれることはない。子供が生まれることはない。

「お初・。・。・」

僕は、そう。彼女を殺してしまえるだろう。

今、この時でもいつでもこの刀で。

愛する人をその手で殺してしまうだろう。

彼女が僕を独占しそうになってしまったら、彼女がずっとそばにいて欲しいと言っても僕はそんなこと決してできないから。

夜を共にすることだけの目的ならなんでもいいんだ。

それこそ隊士の半分以上がしてるようにさ。

けど僕たちの場合違う。

僕は彼女を幸せにはできないんだ。そして彼女も・。・。・。

「ありがとう。お初。僕を好きになってくれて。」

お初はいつぱい泣いて僕にすがすが彼女が顔を上げて部屋から出ていく。二度と振りからずに・。・。

そんなこんなで僕は彼女と数か月の間付き合って終わった。
その年の冬に……。君に出会ったんだよ？

ねえ。千鶴。

「総司さんの初恋っていい加減なものじゃないんですね……。」「
千鶴がそんな意地の悪いこと言うからむっときてしまった。

「何、その言い方。僕がいい加減みたいだね。言っとくけど好きになつた女の子には慎重だから。そうでしょ？」

「そうですけど……。私でよかったですか……。？だってお初さんが遊女じゃなかったらお初さんと結婚してたかもしれないじゃないですか……。？」

「それはないよ。きつとお初が遊女じゃなかったら僕らは出会わなかったよ。そういうもんなんだよ？出会いつてさ。」

「そういうものですか……。」「

僕は千鶴の頬を触ってつねってやる。

「い、痛いですっ！総司さん！」

「あははは。ごめん。ごめん。やっぱり僕は……。千鶴が一番かな。瀧香も千歳も僕らの子供だ。雪江も雅楽も血は繋がってなくとも僕たちの子供……。今は幸せ。それでいいと思うんだ。お初は今も孤独かもしれないけど……。」

「お初さん……。本当に総司さんのこと好きだったと思います……。」

千鶴が目をはらして泣いているのが月明かりで見えてしまう。

ホラ、こういう子だから。もういい年なのにさ。子供ぼくって……。

自分のことでもないのに悲しんでさ。

お初が好きだったのは嘘じゃないよ。愛してた。

けど今は千鶴のことの方が彼女より大事で、今なら言えることがある。

僕は彼女を絶対に殺さない。

彼女も家族も全部、残された剣で、この腕で、守ってみせるよ。

番外編 生きている事が何よりも嬉しい事（前書き）

春桜です。

東北、関東大地震のニュースを見て、日々胸が痛み涙が止まらぬ状態です。

関西に住む私がいくら節電しても何なりません。

なるべく寄付をして一人でも命が助かれば何も要りません。

生きている事がどれだけ幸せな事か、安心して眠れることがどれだけありがたいか、今回の地震で深く理解致しました。

こんな状況で小説など書くな。当たり前です。皆さんが思うのはあっています。しかし私は不安をまぎわらせたいのです。生きている事を幸せだと思つてほしい。そう思い今回のお話を書きました。しばらく学園ものの方も更新しないかもしれません。

本当に、一日でも早く孤立している方が助かる事を願います。

そして、皆様の安全をせつに願います。

番外編 生きている事が何よりも嬉しい事

空を見たら、星が出ている。無数の星たちは私を照らすように輝き続ける。

私はこの星空を綺麗だと思った。でも父は違った。

「考えてみなさい。雅^{うた}楽。この星空は予兆にすぎない。明日への予兆だ。結局は日が昇り、またこの時間が来る。それだけなんだよ。お父さんは明日が嫌いだ。」

明日が嫌いななんてどうしてそんな風に思うんだろう。お父さんは私たちといたくないんだろうか。

「明日には人が死んでしまうからだよ。お父さんの持っている刀が、人の命を奪うんだよ。こんなこと誰が喜ぶ？死んでいい人間などいない。お父さんがその人の人生を奪うことは絶対に嫌だ。」

「でも・・・お父さんは・・・。」

武士だから、人を殺す。私はお父さんの手が汚れていても気にしなかった。私はわかっていたからだ。お父さんが人を殺すことで私は生きていける・・・ということを・・・。

「お父さんは・・・なんでこんなことしているんだろう。もう土にかえる人を見たくないんだ・・・。」

「お父さん・・・。」

父は武士にしてはお人よしで、百姓にも誰にでも優しい人で皆に好かれていた。そんな父が好きであつたが私はこの人は武士でないのかと疑った。幼い私だつたが父の友人を見る限り自分に厳しく皆威厳のある人たちだつた。

「なあ。雅楽。お前は人を助ける生き方をしてくれよ・・・。家のことはどうでもいい。權^{かいた}太が大きくなれば家も相続されるしな・・・

。。
」

權太というのはつい此間生まれたばかりの私の弟だった。長女の私、次女の真愛^{まい}、弟の權太というのが我が一条院家の子供たちだった。

「さあ。帰ろう。皆心配するから・・・。」

「うん。」

父は私の手を握り、家のほうへ足を進める。

私と父が手を握り合ったのはそれが最後だった。

一条院家は水戸藩に属し、そこそこの地位をずっと守ってきた。貧乏という訳でもなく金持ちという訳でもなかった。

戦国時代では越後に属していたらしいが、江戸にはいつてからは代々將軍家に仕えている旗本だった。

しかしそんな一条院も変わってきた。

名は今では忘れてしまったが人のよさそうな男の人が言葉巧みに父を引き取った。

引き取ったというのは佐幕派から尊王攘夷派に乗り換えたということだ。

何故、父がその気になったのか今でもわからないが子供の私たちにどうこう言えるものではなかった。

父の剣の腕を買ったその人は、父に京へ行つてほしいと言った。京には天子様がいます。天子様を守るのは我々の仕事だとその人は言う。父はたいして悩まず、京へ行くことを決めた。私たち家族はそろっ

て京へ上陸した。

幕末の京は血生臭く、争いが絶えなかった。京には攘夷志士にとって最大の敵がいた。

壬生狼と言われる壬生浪士組だった。気性の荒い連中で人斬りの集まりだと言う。

父は彼らを殺す命令を受けた。一人でも多く奴らの首を獲れと命じられた。

父は従うしかない。自分は武士で人を斬るのが役目だと思っていたからだ。

私は正直、攘夷派も佐幕派もたいして変わらないと思っていた。父はどちらについても同じだと思ったからだ。

父は結局、その刀で人を斬り家族を守っていくことしかできないからだ。

この戦が終わるまでは父は刀を振り続けなければならない。

父は戦が嫌いな人だ。人を殺すのも嫌いな人だ。

でも父はやる人だ。

父と星を見に行つた次の日の事だった。

「では行ってくる。」

「はい。いつてらっしゃい……。気をつけてくださいね。」

と母は日が沈んだ頃出ていく父に微笑む。私たち子供も玄関まで父

を見送った。末っ子の櫛太はさすがに眠っていたが。

「戸締りを用心するようにね。」

そう父はにこやかに笑って言った。母ははいと頷いた。父は戸を開けようと手をかけるとき、不意にこちらに向いた。

今にして思えば父は出かけるときいつもこうしていたと思う。私たちを愛しく見る父。彼は自分の命がいつなくなるやもしれぬと覚悟しているに違いなかった。

父の背中を見送ると、私の心はふわふわと浮かんで簡単に眠れなかった。

浅い眠りについた私は不意に目を開けた。あたりは真っ暗で部屋には妹と弟が眠っている寝息だけが聞こえる。

今は八つぐらいだろうか。私は月明かりだけを頼りに戸をあけて庭に立った。

庭は閑散としていて当然誰もいず、静けさだけが満ちていた。

父が帰ってきた形跡はない。血の匂いもしない。

私は胸騒ぎがしてならなかった。こんな時間に父が帰らなかったという日はなかった。

私はなんとか家の中から一つの提灯を持ち、火をつけ外へ走った。

真夜中に外出するなどどれだけ危険な事か子供の私にはわからない。

私はその時、恐怖というものを感じていなかった。ただただ父のあの温もりを探していた。

子供の足ではせいぜいいつも通っている大通りぐらいしかいけないけど今夜は違い、全く通ったこともない通りを通った。走り続け、草鞋が飛んで行ってしまいそうだった。

月は私を笑うかのように大きく輝いている。提灯もいらなくらい、あたりの視界はよかった。

その視界が良かったことが間違いだった。

風が吹いて後ろを振り返った時、二人の人影が見えた。

私は一瞬、父を見なかったかと聞こうと思ったが一瞬で消えうせた。黒い人影が崩れ落ちた。私は一步一步ゆっくりと近づいた。間違いであってほしいと願いながら・・・。

でも私の見たものは正解だった。崩れ落ち、首が飛んでいたのはまぎれもない私の父だ。

自分の父の顔を見間違えるはずがない。

私は駆け寄りたくなる衝動を冷静な理性で封じ込めた。爪で腕を押さえつける。

刀を持ち、父を見下ろしている人は背の高い男だった。

その人は遠くからでもわかるような殺気を放っていた。縛られるような感覚に私は陥った。

私はとつさに壁に寄って壁から離れなかった。見つければ殺されると本能的に悟ったからだ。

そこからじつと彼を見ているとまた人数が増えた。一瞬で黒い影が現れたのは驚きだ。

私は耳を澄ませ、その人の声を聴いた。

「危なかったですね・・・。新選組一番組組長沖田総司ともあろうお人が名も名乗らぬ志士に負けそうになるなんて・・・。こいつの顔は見たことがあります。沖田さんの知り合いですか？」

「知らないよ・・・。それに何その言い方。ものすごいむかつく言い方だね。山崎君。」

背の高い男が沖田。現れた人が山崎という名のようだ。私は溢れる涙と、出そうになる声を押さえながら二人を見つめた。

「調べる必要があるようですね・・・。」

と山崎という男は父の首を持ち上げた。

「・・・その必要はないよ。名もあげない志士なら僕のことを知らなかったかもしれないし。京の旗本なだけかも。」

「それはそれで問題ですよ。」

「もともと違う誰かを殺しに来たのに殺されそうになったんだ。斬って何もおかしくない。僕らは人を斬る刀を持っているんだからこ

の人だつて覚悟してたでしょ。」

「・・・そうですね。今は人が足りないので移動はできませんね・・・。このままにしておくしか。」

「そうだね・・・。あーあ。帰って寝よ。眠いや。」

と沖田という男は欠伸をしながら去っていく。山崎は小さく何かつけくわえる。

「沖田さん。やはりしばらく暗殺の仕事は遠慮してください。」

「なんでさ？」

「あなたに死んでもらつては困ります。理由はわかっているでしょう？」

「全く・・・。だから君は嫌いなんだよ。」

「知ってます。」

二人は振り返る事なくその場を去つた。私は崩れ落ち、声をあげた。心臓の音が高鳴つてうるさい。私はもつれる足を動かし死体の方へ向かう。山崎が置いて行つた首は目を閉じ穏やかな顔をした父。胴体と首が離れている絵図らを見て私はその場で嘔吐した。

父にかかる私の涙。もう父は拭つてはくれない。笑ってくれない。土に指を沈め、怒りを鎮めるように私は指に力をこめる。痛みがあつても気にしなかった。顔をあげれば父の顔がわかる。それが溜まらなく嫌だった。

私を今生かすものは、憎しみだけだと私はよく理解した。

あの顔を忘れない。一秒でも忘れる訳がない。父を笑う浅葱色の羽織を着た噂の新選組・・・。

沖田総司。父を殺した男。

殺したい。この手で。父と同じように殺してやる。

そう私は泣きながら小さな声で叫んだ。

翌日には家族にも町の住民にも父の死が伝わった。嫌なご時世だと口々に言う。母や私たちにも励ましの言葉をくれる人々がたくさんいた。

嬉しかった……。そんな思いは何処にもなかった。そんなことが思えるほど私たちは強くなかった。

母は父を心底愛していたから、悲しんだ。三日三晩泣き続けていた。食事もしない。何もしようとしない。私はなんとか母を励まし食事を食べさせた。

普通の武家の妻なら夫が死んだから家のことを一番に考えるだろう。父が守った家を守り続け息子に継がせる。それが母の役目のはずだった。

しかし母は悲しみ狂った。家を出て、男に体をささげた。娘の年齢になって男と肌を重ねた今日ではあの快楽を知っている。母は何処から構わず男と寝るため風呂屋娘になったのだった。

母は時々帰ってくるが何も話さず食事も与えてくれなかった。私は生きるため街にくりだし食べ物を与えるよう嘆願した。

最初のうちは父が死んでことで同情して心よく与えてくれるものもいたが一月もすればそれもなく煙たがれるようになった。

母はやがて男からもらった病で倒れ死んだ。別人のようになった母の顔はもう見れたものではなかった。

私は妹と弟を食べさせていくためまた街へくりだし働き口を探した。雇ってくれるところはあったが一人でもぎりぎり食べれるぐらいの収入で三人ともが十分な生活ができるまではほど遠かった。

妹も弟も育つべき時に何も食べれない日が続いた。やせ細るのは私も同じだったが妹や弟はもっとひどかった。

最初に死んだのは弟だった。あれだけの食料で生きれるはずがなかった。弟は眠るように死んでいった。妹はやつと話せるような年齢だ。駄々をこね続けた。食べ物欲しい。お腹が空いた。頭がかゆい。風呂に入りたい。

いつの間にか街に私たちがいると皆私たちを汚いゴキブリをみてい

るような目つきになった。私は働くことも満足にできないほど精神的にも体力的にも限界がきていた。

そんな頃、妹も同じく弟と同じように眠るように死んでいった。もう涙も枯れてしまった。

私はなんとか人に頼み、妹を父や母が眠る墓に埋めてもらった。もちろん弟も同じだ。

何度同じように埋りたいか思ったことが。けれど私には死ぬ勇氣もなかった。

ただ生き続けたかった。何がつき動かすのか。それはやはり憎しみだった。

母は憎んだのだろうか？父を殺した男を。今になっては誰にもわからない。

私は手を合わせてそこで誓う。絶対にいつの日か、沖田総司をこの手で殺すと。

誓ったのはいいものの私は目を開けるのも辛くなった。そんな時、一つの光が現れた。

拾ってくれたのは一人の好々爺だ。名前は聞いたことがない。今になっては後悔している。人当たりのいい顔をして、血色のいい顔。

じいさんは私を娘姿になるまで育ててくれた。

けれど私はじいさんに最後まで自分の心のうちを全て打ち明けられなかった。自分の名前も言うのに一年以上かかった。じいさんは百姓で山暮らし。人と干渉することもなく平穩に暮らしていた人だ。

私はじいさんに学問を習い、字も教えてもらった。そしてじいさんは稽古もつけてくれた。真剣は与えてくれなかったが自分を守るような剣を。私は話さない娘だったからさぞかし可愛くなかったことだろう。じいさんは笑うように死んでしまった。私はつくづく自分が嫌いになった。

私はいつの間にか自分のせいで・・・と思うようになっていった。でもそれがたまらなく嫌で沖田総司のせいにした。あいつを殺せばこの虚しさも晴れ、私は自由に生きていける・・・そう思った。

じいさんは江戸の人間で私が11の頃に京から江戸へ出ていたので
それ以後は私は江戸暮らしだ。

明治に入って世の中が落ち着いていた頃。私は十六になった。

私は自分で腕を磨いた。彼の顔を思い浮かべ、夢で何度も殺した。
東京で彼の噂を聞きつけた。

どうやら彼は道場を開いているらしい。私は奴の門下生になってや
ろうと思った。

近付くにはうってつけの理由だろう。

沖田総司の道場の門の前に来たとき、私は胸の重荷が解けたような
気分に襲われた。

気持ちがよくて笑ってしまうほど・・・。

(やっと・・・終わるよ・・・。)

涙を拭いて、私は凛々しく門をくぐりぬけた。

「雅楽・・・？」

「沖田先輩・・・。」

昼寝していたようで沖田先輩は不思議そうな顔をする。休みの日で
私が眠るのは珍しい。

私は沖田総司を殺すつもりだった。今も変わっていない・・・はず
だ。

けれど命を奪う尊さを私を知った。彼の人生を聞いていたら私の思うことは何もありはしないと心底思ったのだ。

言い訳かもしれない。父や母への……。たまに聞こえるのだ。殺せと。私の中で叫ぶのだ。

けれど私は沖田先輩を好きになった。今では恋心だと知っている。でもそれとは違うものだとも知っている。家族……。いうものだと。

父が好きなように同じようになっってくれる沖田先輩が好き。

私を育ててくれる千鶴様が好き。

私を姉のように慕ってくれる瀧香様が好き。

私の弟のような千歳様が好き。

好きなものや……。望んでいたものを切り捨てることが私にはできない。

最近では死にたくないと思っつに思っつになつた。

此間の火事で数十人が亡くなつたと聞いた。

悲しかった。笑い合つた人が死んでしまつた。

泣いても戻つてこない。残されたものの痛みも私にはわかる。わかるからこそ命を奪いたくない。

（あ……。お父さんが言つてた……。ことだ。）

命を奪わないでくれ。と父が言つていた。父は知つていたのだろう。生きていることが一番の幸せだと。

沖田先輩も言っつもの。子供たちの成長、家族とずつといたい。だから生きたいのだと。

自分のしてきたことは罪だと、悲しむもの。

殺したつて何も残らない。

死んでほしくない人が一瞬で死んでしまつ時がある。

生きていたい。何もなくても。

きつと幼い私は求めていたんだ。

憎しみだけで動いていた訳じゃないんだ。私は……。

この幸せを掴みとりたかつたんだ。

お父さん、お母さん。真愛、權太。

私は今も生きています。

憎い人の隣にいます。

でも私は彼が大好きです。

殺したいと思いました。

でも今では生きてほしいと思います。

奪うものが恐ろしい。

私は恐ろしい狂気になりたくありません。

私は、人を助きたい。

警官になった今それができているかわからない。

でも……。私は……。

生き続ければ、こういう幸せな未来が必ずあると信じています。

「沖田先輩……。」

「何？」

「何でもない。」

私は笑った。先輩も笑う。

笑い続ければ、私の憎しみも不安も何もかもが消えてくれた。

番外編 生きている事が何よりも嬉しい事（後書き）

訳がわからなくなりましたが雅楽が父の命を奪われた場面です。

暗くなりますが今では生き続けていれば幸せが必ず来るのだと学んでいます。

生きていればそれだけでいいと思うんです。

苦しみも悲しみも必ずありますが必ずいいことがあるのですから・・。

番外編 同じ痛みを知る者（前書き）

今回は風間来襲です。

設定は灌香が結婚する一年前です。

子供は適当に名前決めました。

美形です。

更新遅れますがよろしく。書きたくなったら書いてます。すみませ
ん。

番外編 同じ痛みを知る者

「如何したの？」

沖田は泣いている子供に話しかけた。子供は警察官の服を着ている沖田を見て、少し安堵したように話し始める。

「お家に帰れないの……。」

「そっか。雅楽。一君に帰るの遅くなるって伝えて？」
と後ろにくついていた雅楽に沖田は言った。

「了解致しました。私は報告が終われば家に帰ります。千鶴様に夕飯の用意を手伝えと言われているので。今日はもう見回りいいんですね？」

「うん。御苦労さま。」

と沖田と雅楽は其処で別れた。

子供を無事送り届け、無邪気に遊んでいる子供たちと軽い話をしてから沖田は帰路についた。

今は開けていない道場が目立つこの家は無駄に広い。これも新選組にいた時に蓄えが在ったからだった。

（結構な額をくれてた土方さんに感謝しないと。）

もう命日が近いので土方の事を思い出す。憎い顔を思い浮かべながら門に入った。

「ただいまー。」

といつもならずぐに千鶴が駆け寄ってくる筈なのに来ない。どうし

たのдарう？

「千鶴ー？」

靴を脱いで、何時も皆で食事を食べる広間に向かう。戸の前で何やら賑わっているのがわかった。

開けると沖田は思わず絶句した。

「ど、どうして…？」

「お久しぶりね。沖田さん。」

そう言つて笑つたのは、数回しか会つた事はないが忘れなかつた女性。その名も千姫だった。

しかし沖田が驚いたのは千姫だけではない。その隣にいる男…もう何十年も会つていないのにまるで老けていない金髪の髪をした男だった。

鬼と名乗り、新選組の前に立ちはだかつた男…風間千景。

「ふん。明治政府に下つたか。笑えるな。」

そう言つて彼は茶を飲んだ。

沖田はやつと落ち着いて状態が呑み込めてきた。

「千鶴…どうしてこの人たちが此処にいるの？」

沖田は一指し指でさしながら聞いた。

「えつと…今日、突然いらしたんです。でも本当に久しぶりで！ねえ。お千ちゃん、風間さん。泊まって行きませんか？ねえ。いいでしょう？総司さん。」

余程嬉しかつたのдарう、顔を艶めかせる最愛の妻、千鶴。

沖田は渋い顔をしたまま質問を重ねた。

「その子…子供？」

沖田が聞いたのは隅の方にいる金髪の男女と千姫が抱いている五歳くらいの子供の事だった。父親似のようで皆、髪が金色だった。

「あ。沖田さん。紹介します。こつちが、千月。でこつちが千早。

この子は千尋。」

長い金色の髪をたらしめている目が鋭い少女、千月。短髪で堀が深い顔をした少年、千早。愛くるしく無邪気に笑う子供が千尋だ。

千月、千早はそれぞれ頭を下げるが何も言わない。

沖田は深い溜息をつきながら座った。

「あのさ……子供連れて人の家に突然来るなんて非常識だと思わない訳？」

「ごめんなさい。驚かせようと思って……。」

千姫は謝るが風間は反省の色を見せなかった。

「何故、俺達が此処に来るのに連絡等いれねばならん？客人を迎え入れる事も出来んのか？貴様は。」

「相変わらずムカツク言い方。」

と数十年ぶりの再会にも拘らず、沖田は吐き捨てる。

「今日は、出来れば泊まらせてくれるとありがたいんだけどな！。これから宿探すのは面倒だし。」

と千姫は控えめに言う。

「ええ。どうぞ。部屋は沢山余ってるから。」

千鶴はさぞ会えた事が嬉しかったようで機嫌がすこぶる良い。沖田は千鶴の嬉しそうな顔を見ると何も言えなかった。

「雅楽は？瀧香も千歳も居ないの？」

帰っている筈の雅楽が居ない。雪江は夏輝と結婚したので居ないのは当たり前なのだが。

「雅楽ちゃんには、買い物頼みました。まあ……彼女、無理やり何か無いか聞いてくるのでそれ頼んだんですけど。瀧香は塾で、千歳は遊びに行ってます。あつ、そうそう。」

千鶴は続ける。

「雪江ちゃんと夏輝ちゃん。今日来るそうなんですよ。先日、永楽屋に行ったら行くって言っていたから……そろそろ、夕食の用意なくちゃ。じゃあゆつくりしてくださいね。」

と千鶴は去ろうとするが千姫が止める。

「私も手伝うわ。千月、千早。千尋をよろしくね。」

そう言い残し、千姫と千鶴は勝手場へ向かった。

風間と風間の子供をじっくり見る沖田。部屋には静けさが満ちる。

沖田は上着を脱ぎ、白いシャツ姿になった。

それを皆凝視してくるものだから、少し気になった。

「貴様…よくあんな明治政府の犬になる気になったものだな。所詮、幕府の番犬は番犬のままという訳か？」

「犬、犬って…人の事を動物呼ばわりしないでくれる？失礼だと思わない？」

風間を睨んでも、彼はまるで老けていないので少し老けてしまった自分が嫌になって余計落ち込んだのは言わないでおく。

「ただいまー。」

と其処に声が聞こえた。沖田は彼女がここに来るのを待つ。

「た、ただいま…」

「お帰り、瀧香。千歳も居たの？」

「う、うん。そこで会ったから…でもこの人たちは…」

そこで、風間は瀧香と千歳を見てほくそ笑んだ。

「ほう。流石、千鶴の娘だな…息子も千鶴に良く似ている…」

「違うでしょ。よく見てよ。瀧香は僕似てるの。褒めるなら僕も言うてよ。はあ…何言ってるんだろ。僕。あ。瀧香、この人は風間さん。僕が大嫌いな人。そしてその子供。」

「貴様…人の事を非常識と言えるのか？」

沖田は正直に言ったやっただけなので全く罪悪感は無かった。ただ子供たちには悪い事をした。

「瀧香。千月ちゃんと千早くん。遊んでおやり。」

「そんな…父様、私もう15なのに…どうしたら…」

そうつぶやく瀧香に千月と千早は近付き、部屋から一緒に出て行った。

「遊ぼう？」

千尋は千歳に近付いて、千歳は頬を赤らめていた。子供たちはあつという間に部屋から消えてしまった。

残された二人は睨み合ってから軽く溜息をついた。

「私は沖田…瀧香…あの…。」

瀧香は二人と一緒に庭に出たはいいものの全く会話が無いので耐えかねて自己紹介した。

「父上は何を考えているんだ。こんな人の集まる場所に…。」

千早が舌打ちしながら言い出した。

「仕方ないでしょ。東京での会合があるのだから。」

「だからって、俺達まで連れてくる事は無いだろう。胸糞が悪い…。」

「

「逃げない貴方は如何なの？」

「父上に逆らえるか！お前こそ、何で何も言わない！？」

と二人が喧嘩しだすので瀧香の頭は混乱した。何にそんなに怒るのかわからない。

「落ち着いて…。」

「ふん。只の人間が指図するな。」

「私、只の人間じゃない。傷もすぐ治るし、普通じゃない。あなたたちも同じでしょ？」

千月と千早は言葉に詰まった。驚くほど真っ直ぐな目をした少女。人間の事が好きではなかった二人は人間を罵り生きていたが、こんな人を見た事がなかった。否、彼女は鬼なのだ。だからこんなに…。「あなたたちの事はわからないけど…二人が喧嘩しても意味ないでしょう？だから…。」

「…。」

「君は…。」

千早が瀧香を見つめるが、彼は何も言わない。瀧香は少し笑んで見せ、庭に咲く花に目をやる。咲いている白木蓮は風に揺られ、美しいが、儚く散っている。昨日の雨で桜も少し散った。

「すまなかった。」

それだけ言い残し、千早は去って行ってしまった。千月は声を上げて笑いだす。

「千早ったら貴方に負けてしまったね。わかるんだよ。双子の姉だから。私もごめんなさい。私達は人間をよく思っていないのよ。貴方は千鶴さんの娘なのだから鬼ですよ。それはわかっていなければならない、人間に埋もれた鬼は下衆だと……千早は思っているのです。」

千月は長い睫毛がある瞼を伏せる。

「しかし、あの子は優しい子です。感情的な部分もありますが、自分の事を好きではなくて……意地っ張りですが一途な子です。悪い子ではないので其処は理解してほしい。」

「わかってます……話せばわかります。」

瀧香にだって、千早と面識はなくとも話し方でわかる。鬼として生きてきた千早たち。人として生きてきた瀧香。それぞれ色んな思いがある。

「千早は……人間と関わりたいと思い、里を出た事があったのです。私もついて行った。けど其処にあったのは差別と言う名の現実でした。このような髪に子供とは言い難い力、頭脳……人は私達を妬み、恐れた。その時、理解しました。私達は此処で生きれない……。」

「私も、化け物と言われました。だけど私にはどうしようもない。私は私でしかないもの。それを変える事はできないから。」

そう言う彼女の横顔は悲しみに満ちていて千月は絶句する。

「千早の事、連れてきます。」

「わっ、私も……。」

「ええ。瀧香。来てくれます？」

千月は思っていた。この子なら、自分と同じ痛みを背負う子なら、友達になっても……いいかもしれないと。

「お前は、変わっていないな。」

と風間と沖田は将棋を指しながら話す。

「変わったよ……変わったから警察になんてなってるんでしょ。昔だったら、明治政府なんか僕が全部斬ってたよ。」

そう笑う沖田は攻めの一手を盤の上で下す。

「そうだな……」

「あのさ。何で来たの？会合があるとか言っても人間の場所になんて……」

「桜を見ると……思い出す。貴様ら新選組の事をな……此処に来たのは、千が千鶴に会いたいと言い出したからもある……しかし貴様が戦に出ていた時、俺は千鶴を護っていた。陰ながらだったがな。それを知った千鶴はこう千と俺に言ったのだ。必ず……また会おうと。鬼は約束を守る。だから会いに来た迄の事。」

簡潔に述べる風間。彼はまるで老けていない。あの時のまま。

沖田が戊辰戦争に出ている間、風間は千鶴を狙っていたにも関わらず、守ってくれていた。後でそれを聞いた沖田は風間に感謝した。過去にあれだけ色々な事があったが戦で傷つき帰ってきた沖田は千鶴がいなければもうこの世にいないかもしれない。それほどに沖田は千鶴を愛していた。

「あの……」

「ただいま！先生！聞いてよお。雅楽がさあ……市場で菜の花買ってさあ。それはいいんだけど食べないって言い出すんだぜ？」

「あ。沖田先生、こんにちは！」

「違います。菜の花は食べれませんって。」

「食えるわ！山暮らしなめんな！」

と大声で会話しながら、雪江と夏輝、雅楽は入って来た。沖田は苦

笑し、風間を見た。

風間も驚いている様子でぽかんと雪江たちを見上げている。

「ん？客…？」

雪江は風間に気付いたようで呟く。

「沖田…お前の息子か？」

「血は繋がってないんだけど…縁あつて拾つてね。雪江は僕の門下生だった子。今はこの辺では有名な会社の社長。この馬鹿の奥さんがこっちの女の子、夏輝ちゃん。彼女は一条院雅楽。彼女は女の子だけど門下生だった子なんだ。」

沖田の述べる言葉を風間は相槌を打って聞いていたが、嘲るように笑いだす。

「お前は、血も繋がっていない子供を育てたのか？らしくないな。」

「まあ…ね。拾った時は結構大きかったし。だから言つたでしょ？僕は変わった。」

沖田が楽しそうに話している様を雪江も雅楽も不思議そうに見つめる。

「なにになに…？先生、教えてよ。」

「貴様らに名を名乗る必要はない。」

「雪江、ごめんね。彼はこういう人だから。」

珍しく、相手を立てる沖田。沖田は普通ならこんな言葉づかいなら嫌味の二つや二つ当たり前なのだが、雪江に謝り、彼を立てている。

「何か、変なのー。先生がそんな態度とるなんて。あ。千鶴さんに食材。夏輝、千鶴さん手伝おうよ。」

「うん。」

と二人は礼をし、のさくさ言ってしまった。残された雅楽はすつと戸を閉め、深々と頭を下げる。

「一条院雅楽と申します。このようなご無礼をお許してください。」

「風間千景だ。…沖田、貴様の家は賑やかなようだな。」

「そうでしょ？雅楽。お茶入れてきてくれる？」

「はい。先輩。」

カラになった湯呑を渡すと雅楽の顔が明るくなる。丁寧に戸をあけ、急ぎ足で出て行った。

「先輩……？」

「ああ。彼女は日本で初めて女で警察官になった子だよ。まあいろんなコネを使っただけ……雅楽には内緒だけどね。まあ勘が鋭い子だから気づいていると思うけど。上下関係から家でも先輩って呼ぶんだ。」

「ふん……。お前は中々やるようだ。親としても剣客としても尊敬される人物なのだろうな……。」

「へー。あんたがそんな事言うんだね。」

妙に可笑しくて、ついつい笑う。

「沖田。」

「何？」

「夕餉が終わったら、酒に付き合え。」

少し頬を赤くしている風間。そんな表情を昔は知らなかった。

彼は自分たちの前に立ちはだかった。だから敵だった。殺すつもりだった。

なのにこんな風に今は話している。不思議なものだ。

戦は嫌いとか好きとかそういう感情はいつさい関係ない。ただ敵だから斬る、それだけだ。

彼をまだよく知らないが、今は穏やかな時を過ごしている。それだけで感謝せねばならないかもしれない。

「いいよ。」

沖田は彼を、理解しようと努めていた。同じ痛みを知っているからこそ……。

番外編 同じ痛みを知る者（後書き）

更新は遅れます。少し続きます。

番外編 愛されたいと願うのは罪か

その晩の食事はやけに豪華だった。こんなに大人数で食事するのもあまりないし、何より千鶴がこんなに頑張って作る料理は珍しかった。

千鶴は料理は得意で上手だったが、好きではないようだった。それでも新婚の時から文句も言わず、やってくれている。

沖田は文句を言った事は無いが、千鶴がこんなにも出来るとは思いもしなかった。

「千鶴さん。すごすぎ！この味噌汁、具多いし。なあ。千歳。」

「うん！母様美味しいよ。ねえ。千尋もそう思うだろう？」

「そうね…母上が作るものより美味しいかもしれないわ。」

千歳と千尋はすっかり仲良しになって隣同士に座り、にこにこ笑い合っている。

「如何ですか？風間さん。」

風間が黙ったままなので千鶴は小さな声で聞いた。もう千鶴と夫婦になって長い沖田だったが、今の顔は反則だ。直視出来ない。

「美味しい。千よ…貴様も見習ったらどうだ？」

「な、何よ！私だって頑張ってるわよ！もうそれだったら千鶴ちゃんにお嫁さんに来て貰いなさいよ！」

と千姫は怒りの声を思い切り風間にぶつけていた。それを千月と千早は真剣な表情で黙ってみていた。

「沖田：お前は本当に幸せ者のようだな。千鶴。沖田に愛想尽きたら俺の処へ来い。可愛がつてやるぞ？」

「あはは…そう言うてくださるのは嬉しいですけど、私は総司さんに愛想尽かす事なんて無いと思いますよ。」

つつこみどころが多かったが、千鶴のその言葉が嬉しくて沖田は何

も言えなくなつた。顔が熱い。

「うわあ。先生顔真つ赤！」

「どうかされましたか。沖田先輩!？」

雪江はちやかしてきたが、雅楽は鈍いので沖田の体調が悪いと思い、気に掛ける。

その様に風間は大笑いしてしまう…。

こんな風に笑い合いながら食事はあつという間に終わってしまった。

「一緒に寝るのは初めてだよな? 千鶴ちゃん。」

「そうだね…戦争が終わつた時に別れて以来だし、一緒に寝た事もなかったしね。」

千鶴と千姫は同じ部屋で眠る事になった。本来なら沖田が千鶴を離さないのだが、今夜だけは特別だと沖田から許可を貰った。

「ねえ…千鶴ちゃん…」

千姫が布団を被り、千鶴の隣に寝ころんだ。

「私達…お互い歳をとつて…子供も大きくなつたね。」

「うん…。信じられないよね。出会つたときはお互い若くて…結婚するなんて考えなかった。」

「でも千鶴ちゃん私達が新選組の屯所に迎えに行った時も沖田さんが好きだつてはつきり言つたじゃない。」

「総司さんの事は…本当に好きだったから。でも私の場合 好きだ

から屯所にいたいとかじゃなかったな……」

「どういうこと？」

「私は、新選組に保護されて、色々な体験をしたの。尊王攘夷派の浪士たちや、偉い方の事……風間さんに告げられた私の正体……鬼。風間さんに狙われていたからお千ちゃんたちは来てくれた。でもね。私考えたら新選組と出会わなければこんな事も全部無かったんだよ。ね。気付いた時から……私は彼等と時代を見ていたかった。だから残ったんだよ。」

「じゃあ……好きな人と離れても平気だった……？」

「多分ね。総司さんは私の事には無関心だったから。だから私が居ても居なくてもどっちでもよかったと思う。」

そういう彼女の顔がやけに悲しく見えた。

「千鶴ちゃんは強いね……私は、風間と結婚して子供を産んだけど、不安でならなかった。鬼の里は平和だけど……私は人と干渉していたかったから。私は風間に愛を求めてない……今は昔よりは彼の事をわかったし……愛してる。愛しているからこそ、私はもう離れられないよ。」

「私もそう。子供たちも大事……総司さんからも離れたくない。」

「そういえば、あの雪江さんと雅楽ちゃんって、千鶴ちゃんの子じゃないわよね？」

「うん。雪江くんは瀧香がまだ小さかった頃に拾った来た子なの。親が居なくて山暮らしで……だけど彼は自分で会社立ち上げるほどの子なんだよ。剣も強いし。少し変わってるけど。雅楽ちゃんは……あんまりいい過去を持ってないけど今ではすっかり打ち解けてるし、仕事も真面目で出来る子だよ。」

と千鶴は彼等の事を自慢気に話していた。

「なんかすごいなあ。血のつながってない子を育てるなんて……」

「すごいかどうかはわからないけど……私は自分の子供だと思ってるよ。少なくとも私は……」

「千鶴ちゃんは変わったよ。」

「えっ？」

「やっぱり敵わないかも。」

意味深な言葉を残し、千姫は眠りについた。

千姫が寝てしまったら自分は何もする事が無い…。

そういえば、沖田たちは酒を飲むと言っていた…。あんまり飲みすぎないといいんだけど…。

そう考えているうちに千鶴の目は閉じられた。

二人は何も言わず盃を交わす。話す事はある筈だった。

でもお互いが話そうとしない。酒は無くなるばかりだ。

「このままでは埒があかな…。」

「君が飲もうって誘ったんじゃない。風間さん？何か話してよ。」

「…俺は貴様が嫌いだ。」

「だから、知ってるって。」

「でも俺は千鶴の事は好きだ。ずっと守ってやりたいと思っていた。お前が帰って来なかったら千鶴を妻にしていたかもしれん。」

「うわっ。最低。千姫の事考えてるの？」

「千は少々荒い性格なのでな。彼奴の事を理解するのに時間がいったのだ…それより。」

「…。」

「千鶴はお前の事を待っていた。いつも玄関から出ては掃除するふりをして遠くの方をずっと見つめていた。お前が帰ってきたとき、千鶴は本当に喜んでいた。」

「まあ。戦争に行く前に婚約したしね。千鶴が僕の事待っていてくれるのは知ってた。土方さんたちが亡くなった事を告げたら大泣きしてあのときは困ったけど。」

沖田は思い出して苦笑する。

「俺は千鶴が笑って嬉しかった。お前と結ばれると俺に告げた時も幸せそうで俺も幸せになった。だからお前が千鶴を幸せにしてくれて、感謝している。」

「何それ。気持ち悪いなあ。風間君の頭の中は千鶴だけなんですかー？」

「煩い。黙れ。だからお前の事は嫌いなのだ。」

ふいつと風間は顔をそむけてしまった。

それがおかしいし面白くて沖田は笑う。

「僕も君が嫌いだけど感謝してる。千鶴を護ってくれていたのももちろん。千鶴を好きでいてくれて。千鶴が好きなのは僕だけで十分かもしれないけど他の誰かに好かれるのも悪く無いから。僕は誰にも好かれない人殺しだから千鶴だけでいいと思うけど…今は我儘な僕だから 家族に愛されたいと思う。」

「お前らしいな…。」

「風間さん…明治政府の事、どうも思わないかもしれないけど…幕府は変わったよ。だから僕もその移り変わったものに身を任せる。僕の手で何かを護る。昔のようじゃない違う思いで。」

「貴様は、何でもやり遂げるだろう。そういう奴だ。」

「…ありがとう。」

何があるがとうなのか。よくわからなかったが、風間は思っていた。もしかしたら友人同士の会話というのはこんなものかもしれない…と。

番外編 愛されたいと願うのは罪か（後書き）

後でやり直します。

番外編 何の為に（前書き）

お久しぶりです。

今回は、雪江を拾って一年たった頃ぐらいのお話です。
わからない場合は少し読み返してください。

番外編 何の為に

「総司…。」

時々、貴方の愛しい声に目が覚めます。

貴方はいつも僕を優しく撫でてくれました。それは僕にとって凄く嬉しい事でした。

もう、僕を撫でてはくれませんか。夢の中でももう名を呼ぶだけで話してはくれませんか。

意地悪しないで、答えてくださいよ……。

はっと気づくと、其処はいつも見る家の天井だった。起き上がると、外が朝だという事がわかった。

「先生……起きてくれよ……！もう！千鶴さんも、瀧香も出掛けちまったぞ！」

と雪江が大声で僕に言ってくる。それだけで僕は物凄く不快な気持ちになって怒りを彼にぶつけた。

「うるさいなあ。耳元で騒がないでよ。鬱陶しい。」

と舌打ちしながら立ち上がると雪江を睨んだ。

「…今日はよく眠ったな。」

「本当だよ！！朝稽古してくれるかと思ったら、全然起きないんだもん、俺一人でするしかなくてさー。」

こんなに眠ったのは久しぶりだ。夢からさめたくなかったのかもしれない。

「…本当にやったのか？その割には元気そうだけど。」

雪江はぎくりとしたように目を剥いた。全く、わかりやすい奴だ。

「ち、千鶴さん。飯用意してくれてるから。しかし、こんな朝早くから何処に行ったんだ？聞いても答えてくれねえし。」

千鶴は雪江には言っていなかったんだ。今日は瀧香を連れて千鶴は墓参りに行った。昨日、突然行くと言ったんだ。僕は来ないで欲しいって言われてしまったけど。

何で…よく知りもしない人の墓参りなんか突然行くと言いだしたんだろう。

墓参りと言っても、墓がちゃんとなない人数の方が多いのに。新選組の隊士の墓は…。

「…雪江。昼から稽古してあげるから準備しておきなさい。」

僕はそう言い残し襖を閉め、着替えをした。

何故か、イライラして、それが稽古にも出てしまったようで雪江はいつも以上にへとへとだった。

「もう限界…はあ…はあ…」

僕は全然疲れていないんだけど、雪江は汗がびっしょりでもう立てないくらいに疲れ切ってしまったようだ。

井戸へ行つて冷たい水を汲んできて雪江に渡してやった。雪江はそれを飲み顔も洗う。

「ふうー・・・生き返ったあ。」

「若いのに、体力ないね。」

「先生が超人なのー！俺はいたって普通！全く、今日は死にかけたぜ。」

と雪江はまだ苦しいようだ。

自分が超人・・・そんな風に思ったことは一度もないが、少しの事でくたばるのは嫌だから鍛えただけだ。

「なあ。先生・・・」

雪江がいきなり結構真面目な顔をするので僕は彼の顔を凝視してしまった。

「先生はどうしていつも一人なんだ？」

「えっ？」

不意にそんな事言われて答えられるものか。僕はどういう意味？と聞き返した。

「だっていつも目が悲しそうだ。なんていうの？誰にも自分は触られないみたいな感じ。千鶴さんや瀧香という時はマシになるけど先生一人にいる時、どこか遠く見てるしさ。」

僕の孤独がこんな餓鬼に見破られるとは夢にも思っていなかった。

「雪江・・・案外鋭いんだね。」

「鋭いつーか。同じなんだよねー先生と俺。俺も友達も家族もいなかったからずっと一人でさあ。そりゃ寂しくって・・・でさ。何でまだ生きてんのって感じだよ。誰にも必要とされてもないのにさ。さっさと死ねば楽なのに。」

雪江の言う全てが、僕と重なってしまう。僕もいつも思ってた。どうして自分はまだ・・・生きているんだろうって。

「でも、俺は夢や希望を捨てられなかった。死ねばそれは失うけど生きてる限りは失わない。だから無駄でも生きてたんだろうなあ。毎日、食いもん盗んで迷惑かけて。」

雪江は僕と同じなのか。それなら納得できる。何故僕がこの子を拾ったのか。

この子はもしかしたら痛みを知っていて僕の痛みも全てわかってくれるんじゃないか。

大人気ないけどあんな夢を見たから…言ってしまったんだ。

「本音を言つとさ…死にたい。」

僕は続ける。

「僕は、最愛の師を失って、志も無くして、剣の腕も…僕が出来る唯一の事もろくにできなくなって…生きているの面倒だし嫌なんだよね。死んだら近藤さんに会えるかなとか思ったりするし。」

あははと笑うと、雪江は胸倉をいきなり掴んで僕を押し倒した。汗一杯の雪江の顔は幼い子供だ。

「本気でいつてんのか？今でもそう思ってる??」

「……。」

僕は答えられなかった。普通はすぐに答えられるんだろうけど。

「先生の言う事わかるよ。でもそれって自分の事しか言っていないじゃん？千鶴さんや瀧香…俺の事少しは考えてる？」

雪江の言いたい事はわかる。けれど僕は……。

「わかってても…それでもどうしようもなく自分が憎くて…近藤さんのことを思うと後悔だけが残って…こんな思いするなら…苦しくて辛いなら死んでしまった方がいいなって思ってしまうんだ。」

でもね。いざ、死ねるかかって言ったらそうじゃないんだ。…千鶴や瀧香やお前の事を思うとね…。誰も僕を許さなくても生きたくなくなってしまふんだ。」

たくさん命を奪って、捨てて…恨まないほうがおかしい。呪われてるっていえばわかりやすいか、感じるものがあるんだ。

「千鶴が僕を生かしてくれる鎖…瀧香もお前も…。それが一時でもなくなったら僕は簡単にあっちに行ける。」

断言する。僕が生きているのは家族の為。自分の為に生きた事は一度も無い。

雪江は安心したように体をどけた。

「……先生。あんまりそういう風に考えんなよ。先生の先生だって、先生に笑って長生きしてほしいって思ってるさ。」

「……うん。そういう人だと思う。」

いくら僕が死にたいって思っても、貴方は許さないんだろう。

僕の事をずっと見守ってくれてますか？見てくれなくてもいいです。そちらに行ったときに僕は人生を胸張って誇れるようになりたいです。

初めてこんな僕を愛していると言ってくれた女性と、

その女性との間の子供。

同じ孤独を知りながらたった一人で闘っていた少年。

そして僕を憎む人たち。

大事なものを護れるように僕はまた努力する。

ごめんね。近藤さん。僕はずっと貴方を護りたかったんだ。

それだけでよかったのにね。僕が間違った。

ずっとそれを……謝りたかったんだ。

でもね。とつくの前に貴方はそんな僕を……。

僕は間違っていたのに、そんな僕を傷つけない為に貴方は見守ってくれてた。

僕は新しい大切なものが出来ました。かけがえのないものです。

僕は一度、死んだかもしれませんが。

貴方を失った日から。

近藤さんは優しいから許してくれるって信じてる。

僕がまた、命をかけて守ってもいいって。

ずっとずっと前から……そう言ってくれてたんですね。

辛くて苦しくても僕はあの時と同じ気持ちで、守ってみせる。

貴方が守ってくれたこの命をつかって。

番外編 何の為に（後書き）

いつもながら誤字すみません

孤独と刀（前編）（前書き）

千鶴が語っているお話です。少し鬱です。

カットを大幅にしていますし間違っているかもしれませんが。

あくまでも二人が無事に結婚するお話ですから史実、ゲームとは大幅に異なりますのでご了承ください。

孤独と刀（前編）

時々、思うのです。

私はきっと、総司さんより長生きしてしまうでしょう。

それは鬼故の宿命なのでしょう…そう思えてならないのです。

鬼という事に私は、絶望した事はありません。むしろ、誇れる事だ
と思っております。

しかし、私は彼無しで生きる事は出来ません。

いつから、私はこんなにも弱くなってしまったのでしょうか…。

彼と初めて会った日は忘れもしません。

父様を捜すために京に初めてやって来た日。私は不運にも浪士たち
にからまれてしまいました。

必死に逃げました。怖くて恐くて仕方がなくとも逃げるしかありま
せんでした。

しかし、この選択が私の人生を大きく変えました。

私が偶然にも出会った人は人ではありませんでした。人間には出せ
ない声を叫んで、浪士たちを殺していました。

白髪の色を斬り殺したのは、浅葱色の羽織を羽織った男でした。
同じ羽織を羽織った男はその男のほかに三人いました。その中の一
人が、総司さんです。

総司さんは私に優しく微笑みましたが、その微笑みは偽りのもので
した。

彼は私をいつでも殺せるよう十分な警戒をしていました。

その日、私が一番印象に残ったのは、私に刀を突きつけた、まるで狂い咲く桜のような土方さんでしたが、彼との出会いは忘れる事は出来ません。

私はあの化け物の存在を知ってしまったので、彼等の住处（と言ったら可笑しいですが）に連れていかれました。

気が付けば見知らぬ場所に軟禁されていました。

彼等の事情を聴き、あれは見てはいけないものだったのだと理解しました。

総司さんは微笑みながら殺せばいいと仰ったので、私は悲しかったというよりは焦りました。

私の男装も見破られてしまったので、父様を捜しに京までやってきた事を正直に話すと。

これは偶然なのでしょうか。皆さんは父様を捜していました。

彼等：新選組は無知な私も知っている人斬り集団です。まあ、結局は彼等の仕事などわかっていなかったたので無知だった訳ですが…。

私は結局、土方さんの小姓として父様捜しに遣えるかもしれないという理由で新選組に保護されました。

こうして、女の私が男装をして新選組の屯所に住む事になりました。

私は初めは部屋から出る事も許されませんでした。

訪れた来客と言えば総司さんです。総司さんは私が独り言でしゃべっている事をからかってきました。とても楽しそうに笑うので私は

何とも言えません。

その後、平助君がやってきて気さくに話し掛けてくださり、更には御飯も一緒に食べようと言ってくれました。斎藤さんはあんまりよくは思わなかったようですが、総司さんが膳を運んでいくので止められなかったようです。

永倉さんや原田さんたちは私を当初は警戒していましたが、次第に話してくれるようになりました。

私は皆さんが人斬り集団と思えません。とてもいい人たちだから。けれども、池田屋事件の時は、皆、血を浴びながらも闘っていました。私と歳が近い平助君もです。

あの太陽のような近藤さんでさえ…人を殺していました。

総司さんは池田屋事件で負傷し、他にも怪我をした人、亡くなった人もいました。

あの夜は地獄のように長かった事を覚えています。総司さんと風間さんの斬り合いをこの目で見たあの時間は…できれば思い出したいのですが忘れてしまっただけならいいものだと思います。

風間さんが度々、屯所を襲撃しました。どうやら私を狙った事です。

私は人間ではありません。鬼です。

風間さんは強い鬼の族の方です。私もどうやら強い血を持っているらしく、鬼の一族の為には強い血の女との子供が欲しいという事でした。

風間さんは鬼がどのような存在であるか、人間との差を見せつける様に嘲笑い、人を斬っていました。

私は、新選組の隊士さんの命を奪った彼が憎い筈でしたが、嫌いにはなれない不思議な存在でした。

これも同じ血が混ざっているからでしょうか。

その頃、度々の襲撃で屯所が変わってしまったり皆さんに迷惑をかけました。仮にも世話になってる身で迷惑をかけるなんてこんな事がありえるでしょうか。

私が罪悪感でいっぱいになっているとき、街で偶然出会った女の子、お千ちゃんが屯所に訪ねてきました。

彼女は自分を鬼だと名乗り、私を護りたいと言ってくれました。屯所から私を連れ出すって言いました。

当然、行かなくてはならなかったでしょう。けれども私はそれを拒みました。

自分でも馬鹿だと思いました。彼が振り返ってくれる訳でもないのに。

彼は、不器用だと思います。優しい癖に、意地悪をしてしまったり……孤独を受け入れているいたり。

人を殺すと笑顔で言うけれど本当に人を殺した時、すごく気にしていたり。

彼の瞳はそこら辺を映していません。理想の未来をずっと夢見ているのです。

それを私は凄く綺麗だと思いました。

彼が私を好きでなくてもいいのです。私は彼の寂しい心をそっと救いたい。

それだけが願いでした。

新選組は幕末という時代の流れに次第に呑み込まれていきます。近藤さんが襲撃を受け、戦も始まりました。俗にいう鳥羽伏見の戦いです。

この戦は、幕府軍の方が圧倒的に有利でしたが、新政府軍の武器に勝てず、敗北。

その後の戦で、井上さんや山崎さんが亡くなってしまいました。

死を、斬り殺されている人を何度も見ました。その度に怯え、泣けてきます。

これからもこんな事が続くのです。わかっていたことでしたが、私はわかっていませんでした。

総司さんも、仲間の死を受け止めていたのでしょうか。けれど弱音は絶対に吐きませんでした。

新選組は將軍の後を追って江戸に行く事になります。京にはもう二度と戻る事はありません。

江戸では不自由な生活が待っていました。大政奉還が成立し、長州や薩摩の方々は幕府軍を次々に殺していました。

私達は隠れるようになっていたと思います。勿論、戦は続いていましたし將軍がまだ幕府を治めている世間体ですので、簡単に近藤さん達はやられたりはしません。もう時代は変わってしまったのだと思わざるおえませんでした。

父様の行方は、風間さんが言っていた通り、新政府軍に味方しているのでしょうか。

羅刹…私は総司さんがあの力に頼らないか気がかりでした。

私の勘が…後にあたってしまう事になります。

新選組は北に向かうように命じられます。それは裏で色々あったみたいですが…。

近藤さんが言うのです。皆、行くしかありません。

其処でも酷い戦がありました。新政府軍の武器にやられてしまう人たち…。

土方さんは仰っていました。もう刀や槍の時代ではないと…。

近藤さんと筋違ってしまい、永倉さんと原田さんは離隊する事になります。

あの時は、本当に寂しくて…泣きついてしまった記憶があります。

あれが原田さんとの最後の会話でした。

そして…最悪の事態が起こります。

下総国流山にて隊士を募っていた処、新政府軍に包囲されてしまいます。

絶望的な状況でした。早く逃げなければと土方さんが必死に叫んでいました。

しかし近藤さんは動こうとしませんでした。土方さんが残り、時間稼ぎをするから…と言つと。

「俺が残る。」

そう聞いた時の総司さんの顔は今でも忘れられません。

孤独と刀（後編）

総司さんは目を見開いて近藤さんを見つめ、震える声で言いました。
「どうして…ですか？何で近藤さんが残らなきゃならないんですか！？」

「俺が残ればいい時間稼ぎになるだろう。俺は新政府軍でも簡単に殺せないだろうしな。」

「そんなっ…！！」

総司さんは言葉に詰まった後、近藤さんに詰め寄りました。

「そんな事…どうしてわかるんです！？殺されない保障なんてありませんよ！！今はっ…一刻も早く逃げないと…。」

総司さんが叫ぶと、近藤さんは総司さんの肩を優しく持ちました。

近藤さんは悲しそうな顔をしていました。

「総司…もう決めた事だ。」

「な、何がですか…？何を…。」

総司さんはわかっていたと思います。近藤さんがもう、残る決意をしていたこと。だからどんなに言った処で彼の意志を変えることは出来ないって。

でも総司さんが言わない訳がないのです。近藤さんを護る為に…刀を振るっているって仰っていた総司さんでしたから。

「何をそんな顔してるんだ？勇ましくしてないとやられてしまっぞ。総司。いいか？これが最後じゃない。後でお前たちと必ず合流するよ。だからここは俺に任せろ。」

すると総司さんは黙り込んでしまいました。土方さんはずっと何か言いたげに近藤さんを見つめていました。やがて。

「近藤さん…本気なんだよな…。」

「ああ。俺は新選組局長だからな…。最後まで俺はそう思ってる。」

トシ。隊士たちの事を頼んだぞ。」

近藤さんが優しく言うと、総司さんは近藤さんに抱き着きました。力強く…そして切なそうに。

そして叫びました。

「御願いです！近藤さん、逃げてください！一生のお願いですから…！捕まったら…捕まってしまったらっ…！」

近藤さんは総司さんの頭を優しく撫で言いました。

「総司…。何を泣いているんだ。何も心配することなんかないだろう？ほら、早く行け。」

「いやだ！近藤さんの傍を離れたくない…！」

総司さんはまるで子供のように近藤さんの胸で泣いていました。しかし近藤さんは許しませんでした。

「いい加減にしろ！総司！お前はもう子供じゃない！新選組一番組組長、沖田総司だ！組長が局長の命令を聞かないとはどういうことだ！」

あれほど怒鳴っている近藤さんは初めてでした。けれど私は見ていました。近藤さんが一筋の涙を出して怒鳴っていた事に。

すると総司さんは動揺して声も出せないようでした。きっと何をすればいいのかわからないのでしょうか。

「でもっ…！！」

「…武士が泣くんじゃない。総司。大きくなった…もう弱くないだろうっ？」

これが、近藤さんと私達の最後の別れでした。

総司さんが声を上げて顔をぐしゃぐしゃにして泣いたのは生涯でこの時だけでした。

近藤さんの為に全てを犠牲にしてきた総司さんの苦しみは想像を絶するものだったでしょう。

今でも私が理解出来ないほどの痛みだと思います。

近藤さんは新政府軍に捕縛され、自分は近藤勇ではないと最後まで言い張りましたがあちらは聞き入れませんでした。

土方さんがいくら言ってもただ黙死。そうしてまもなく近藤さんは斬首されてしまいます。

武士で切腹出来ないというのはとても辛いものだと言います。斬首は武士の恥だと言われるほどです。

土方さんの苦しみも…大きいものだったと思います。近藤さんが託した新選組を導いてならないという重圧が彼を苦しめていたのではないのでしょうか。

近藤さんの斬首の姿は誰も見ていません。否、見れなかったのです。暫く、土方さんは総司さんや私には黙っていました。それを知ったのは亡くなって五日後の事でした。白河口の戦いの際です。

総司さんは毎日毎日、放っておけば何をしでかすかわからない勢いで土方さんを問い詰めていました。

何故、止めなかったのか。何故、まだ助けられないのだと。毎日怒鳴っていました。

しかしそれは自分に言い聞かせているものにも聞こえました。

土方さんは酷く困り果てついに仰ったのです。

「近藤さんは死んだ。」

「え？」

「助けられなかったんだ…斬首刑だ。」

「嘘でしょう…？」

「嘘じゃない。斎藤がこの目で見てきた。」

部屋の片隅にいた斎藤さんが目を伏せていました。

「そんな馬鹿な…ありえない。僕は信じない。」

総司さんは変な笑みを浮かべていました。

「総司……」

「だって可笑しいでしょう！？近藤さんが死んだ！？死んだ！？何で近藤さんが死ななきゃなんないんです！？何も悪い事なんかしてないのに！！僕が死ぬ筈だったのに！！何で……？なん……で、あんたは……あんたは何もしなかったんだ！！」

総司さんが土方さんに掴みかかりました。すでに土方さんは戦で怪我をしていました。近藤さんを助けたくても……いけなかった。新選組は戦に出ねばなりませんでしたから。

土方さんは頑張っていました。身を粉にして働いていました。だから私は……。

「沖田さん！土方さんを攻めるのは可笑しいです！！土方さんは近藤さんを助けようと必死に働いていました！でも沖田さんは……！沖田さんは何もしていないじゃないですか！ただ、ただ狂ったように人を斬っていただけじゃないですか！」

私は必死に叫びました。すると総司さんは奥歯を嚙んで私を睨みました。あれほど怖い顔を見た事がありません。

「君に何がわかる！？君こそ、僕らがいなければ何も出来ない癖に……！」

それは否定できぬ事でした。総司さんは土方さんの胸倉を掴んだ後、言いました。

「あんたにしか、近藤さんを助ける事は出来なかった！あんたは近藤さんを見捨てたんだ！」

「俺は見捨ててなんかいねえ……お前はあんなに長く一緒にいて近藤さんの気持ちを理解できてねえんだよ！！いい加減目を覚ましやがれ！！お前は、試衛館にいた頃の生意気な餓鬼じゃねえんだぞ！？何人もの人を斬った新選組の組長なんだぞ！？近藤さんはな、お前に誇りを持ってほしくてああ言っただ！お前は近藤さんが認めた唯一の弟子だ。近藤さんはどんな時も……お前を傷つけるような人じゃない。お前をずっと助けていただろうが！」

土方さんは声を枯らしながらもそう言いました。痛いほど近藤さんの気持ちが伝わってきました。

近藤さんはどんな時も、自分の死よりも総司さんの死を恐れていたんだと思います。

自分が傷つくより、総司さんが傷つくほうがずっといやだって…。

近藤さんは総司さんの事を本当に愛していました。それは絶対です。「近藤さん…。」

そう呟いた後、総司さんは部屋から出て行きました。

私は彼が心配になってすぐに探しに行きました。土方さんも私に頼んだぞと言って見送ってくれました。流石に土方さんも落ち込んでいる様子でした。

総司さんを見つけるのに時間はかかりませんでした。縁側で俯きながら座っています。

いつか、壬生の屯所でも見た光景でした。その姿は…私であつたことに気が付きました。

「沖田さん。」

総司さんは反応を見せませんでした。ただ俯いているだけです。傍に寄って、隣に座り、彼の顔を覗き込みました。

「離れてくれない？邪魔なんだ。」

小さな聞こえないような声で総司さんは言いました。

「離れません…お節介だっわかっていますけど…今の沖田さんを独りにしておくことは出来ません。」

「やめてよ。殺すよ。」

冷めた声でした。いつものからかいではありませんでした。

「…それでもいいです。私は…。死んでもいいです。でも沖田さんは…。」

その時、総司さんは立ち上がりました。数歩前へ歩き、刀を抜きました。

じつと見ていると総司さんは刀を自分の喉元へ…。

「駄目！」

私は急いで駆け寄って刀を掴みました。手からは血が溢れ痛みましたがそんな事にしません。

「離してよ！！何やってるの！！？」

総司さんは私に怒鳴りましたが、私は泣きながら訴えました。

「何をしようとしていたんですか！？自分に刀を突きつけて！！！」

「もう意味なんてないんだよ！？僕が闘う理由はもう無くなったんだ！生きていたって仕方ないよ！！！」

いつもの総司さんではありませんでした。もう生きる事に意味はなくなつたということですか？

そんなこと…許される訳ありません。

私は思い切り平手打ちをお見舞いしました。総司さんの頬は赤く腫れます。私も左手の手のひらが血が流れ痛みましたが、総司さんに叫びました。

「近藤さんと土方さんが仰っていた事、何もわかってないじゃないですか！？お二人は沖田さんが死ぬ事なんて望んでいません！！そんな事もわからないんですか！？」

「でも！！近藤さんはもうこの世にいないんだ！！どうして僕が生きてなくちゃなんないの！！？」

「まだわからないんですか！！近藤さんは…近藤さんは全部沖田さんに託したんですよ！？土方さんに新選組を託して、沖田さんには…沖田さんには武士として、自分の弟子として誇りを持って生きて欲しいって！！近藤さんは沖田さんを大切に思っていたから…生き

て欲しかったからあそこで残ったんです！！何でそんな簡単な事をわかってくれないんですか！！」

すると総司さんは目を見開いて私の目を見つめてきました。その時、総司さんがどんなことを思っていたかわかりません。私は引き寄せられ、抱きしめられていました。強く…。

総司さんは涙を見せていませんでした。

戦は続き…どうにもこうにも私がいれる隙間は無くなっていききました。総司さんの事が気がかりだったので私は離れたくはありませんでしたが、新選組は会津に行く事になった時、私は江戸に戻るよう命じられました。その頃は風間さんは戦に現れていましたが、私の事は追いませんでした。私が彼に刀を向けたからでしょうか？それとも、人を殺してしまったからでしょうか…。

父様は敵方にくだり…恐ろしい計画を立てていました。父様は父様でなくなっていました。再会が怖くなりました。もし次に再会したならば…殺さなくてはならないと土方さんが仰っていたからです。総司さんと私の距離はこのころから縮んでいたように思います。

「千鶴ちゃん…」

こうやって抱きしめられることも、口づけられる事も増えました。彼は寂しさをまだ拭いきれていないのです。いいえ、一生かかるでしょう。

「もう江戸に戻らなきゃならないんでしょう？土方さんが言った。」

「ええ…命令ですから…松本先生の処でしたら大丈夫だと思いますし…。」

「そうだね…。それがいいよ。」

微妙な会話かもしれませんが、ここまで彼が話してくれるのは凄い事でした。私には全く話さなかった彼。自分の弱さや悩みを話す様な人ではありません。それは結婚しても…ですが。

「本当はまだ皆さんといたいです。でも…。」

「僕たちは北に向かう。蝦夷で…軍を立て直すんだって。今のままじゃ…勝てないから。」

「そうですか…。」

北…蝦夷なんて江戸と凄い距離があります。しばらくは会えないでしょう。戦が終わるまでは。

「負ける訳にはいかない…。千鶴。江戸で待ってて。僕は必ず帰ってくるよ。そうしたら…僕の奥さんになってくれる？」

総司さんはそう言っただけに口づけしました。これが最後の口づけになるかもしれません。長く…その時でしょうか。私は彼をずっと好きでいて、愛しているのだと本当に気付いたのは。

こうして、私と総司さん達はしばしの別れを告げました。

土方さん…これが最後になるとは思いませんでしたよ…。

明治二年、五月十八日。旧幕府軍は降伏し、戊辰戦争は終結しました。

毎日、家の前を掃除しては彼の帰りを待っていました。時々、風間さんが訪れてお話を聞いてくれたりしていました。風間さんは私ともう結婚する気はないようでしたけれど。風間さんが話し相手にな

つてくれて精神的に助かっていました。もう待つのは辛いです。

こうやって日が昇るのを沈むのを見るのも飽きました。

それが永遠に続くかと思っていた頃…綺麗な夕日が昇っていた日です。

人影が、見慣れた人影が見えました。遠くの方で…微笑んでいるように見えました。

「総司さん…。」

総司さんでした。あの時の嬉しさは今でも忘れません。彼に抱き着いて、温もりを感じて…。

その時、大泣きして総司さんが困った顔をしていた事が印象に残っています。

まもなく結婚し、二人で生活を始めました。総司さんは新政府軍には嫌われる存在でしたから国からのお金は求められません。

家は松本先生がなんとかしてくれてとてもいい家に住む事が出来ました。

総司さんは…戦で疲れている筈なのに道場を始めると言いました。

明治に入ると、もう剣術はあまり流行らなくなっていました…。

総司さんが道場を初めてまもなく私は瀧香を妊娠しました。それを聞いた時の総司さんの喜びは凄いもので、とても嬉しかった記憶があります。

瀧香が生まれた時、総司さんは泣いていました。泣くことがない総司さんが泣いて喜ぶ…それほど珍しい事もないでしょう。

まもなく雪江君を拾い、家は賑やかになっていきます。これが私の求めていた幸せでした。

総司さんの幸せはもしかしたら死ぬ事だったかもしれません。私は所詮、死んでほしくなかったからあの時止めたのでしょうか。

しかし今の彼が幸せだと笑ってくれるから大丈夫だと思えるのです。私や瀧香がいても時々、総司さんは此処に居ない時が在ります。寂しそうに……。やはりまだ総司さんは孤独なのでしょうか。孤独と闘い続けているのでしょうか。

私は救えないのでしょうか。彼はまだ死にたがっているように見えます。それほど近藤さんの死は彼を未だに苦しめているのです。

何が悪かったのか、誰も悪く無いといえは嘘になります。新政府軍が斬首刑に処したのですから。

総司さんは変わりました。私達の事を一番に考えてくれる良き父です。

ですから居なくなってしまうたら、私は生きられなくなってしまうです。同じ…苦しみを味わうのでしょうか。

あの時、総司さんに言った言葉は違う形で帰ってくるのでしょうか。

人は生き続けなければなりません。

孤独と闘わなくてはならなくても、辛くとも。

生きなければ何も生まれませんから。

総司さん。私は貴方より長生きするでしょう。ごめんなさい。出来ればあなたと一緒に死にたい。

けれど私は逃げたくありません。

貴方を独りにしてしまうかもしれません。でもお互い闘いましょう。貴方という強い刀を持って、私は戦います。

それが貴方にもらった、全ての愛情と私は思います。

孤独と刀（後編）（後書き）

すみません。変な終わり方になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795o/>

新選組～武士たち～

2011年9月14日19時55分発行